〔神皇正統記神武〕此御代より代ごとに宮所を遷されしかば、其所を名づけて御名とす、（御號トスト云フ意ナリ）此天皇をば橿原の宮と申なり、

○按ズルニ、代ゴトニ宮所ヲ遷スト云フコト誤ナリ（下文代ごとに都を改めト云フ、亦同ジ、）事ハ本居宣長ノ古事記傳二十ニ見ユ、

〔神皇正統記元明〕三年庚戌に、始めて大倭の平城の宮に都を定められる、古は代ごとに都を改め、則其みかどの御名によび奉りき、

〔古事記傳十八〕すべて古の御代を、古は或は近江大津宮御宇天皇（ノレクシロシメシ）○天智或は飛鳥淨御原朝○天武などゝこそ申せるを、後世人はたゞ後の漢謚をのみ知て、返て本の眞の御稱をば更にえらず、古書に記せるを見ても、何れの御代の稱とも、え辨へぬ人のみ多し、甚しき者は漢謚を當昔の眞の御名と心得て、上代を疑ふ者もあるをや、古を尚む人はよく思ふべき事なりかし、

〔日本書紀持統三十〕三年五月甲戌、命二土師宿禰根麻呂一、詔二新羅弔使級飡金道那等一曰、○中略遣二田中朝臣法麻呂等一、相二告大行一天皇上。○天武崩下

〔史記十一孝景〕中六年四月、大行爲二行人一、服虔曰、天子死未有謚、稱二大行一、晉灼曰、禮有二大行小行一、主謚官、故以此名之、如淳曰、不反之辭也、

〔文獻通考百二十二國恤〕帝○漢高祖初登遐、朝臣稱曰二大行皇帝一、魏孫毓曰、大行之稱、起二於漢氏一、漢書曰、大行在二前殿一、又曰、大行無遺詔、謚法大行受二大名一、小行受二小名一、初崩未謚而嗣帝已立、臣下所稱、辭宜有異、故謂之大行、言其有二大德行一、必受二大名一、若稱謚也、

〔好古小錄上〕伊福吉部德足比賣臣墓誌

藤原大宮御宇大行天皇○文武御世、慶雲四年歳次丁未春二月二十五日、從七位下被賜仕奉矣、○略下

〔東大寺獻物帳〕獻盧舍那佛

御袈裟合玖領○略中

右件厨子○略中天皇統○持傳賜藤原宮御宇大行天皇○文武

〔萬葉集一雜歌〕藤原宮御宇天皇○文武代

大行天皇○文武幸二于難波宮一時歌、○略下

〔日本後紀十三平城〕大同元年三月丙戌、上謂二公卿一曰、○略中報曰、大行天皇○桓聖德弘茂、海内清平、○略下

〔文德實錄一清和〕嘉祥三年四月己酉、公卿上啓曰、○略中大行聖帝○仁明齊二日月一、道括二乾坤一、○略下

〔三代實錄一清和〕天安二年九月三日辛酉、是日大行皇帝○文德崩、晏駕之後、始盈七日、遣二使於近陵諸寺一、各修二功德一、

〔日本紀略一醍醐〕延長八年十月十日庚子、奉レ葬二大行皇帝一○醍醐於山城國宇治郡山科陵一、

〔日本紀略四村上〕康保四年六月四日辛酉、奉レ葬二大行皇帝一○村上於村上山陵一、

〔百練抄十五後嵯峨〕仁治三年正月廿日、踐祚、○略中諸卿群參二大行皇帝一○四條御在所、閑院率二三種寶物一、被參二新帝御所一、

〔弘化諒闇記〕弘化三丙午歳二月六日、先帝○仁孝追而被奉二御謚號一、迄、被稱二大行天皇之旨一被仰出、

〔嘉永明治年間錄十六〕慶應三年正月、周防守殿○老中松平康直渡書付、先帝○孝明御謚號迄、奉稱二大行天皇一候事、

〔革命勘文〕一高野天皇○稱德改二天平寶字九年一爲二天平神護元年一之例

謹案國史、○略中遠履二太祖一、神武之遺蹤、近襲中宗天智之基業、當創二此更始一、期二彼中興一、建二元號於鳳曆一、施二作解於雷散一、○下略

〔神皇正統記仲哀〕太祖神武より第十二代景行までは、代のまゝに繼體したまふ、

〔神皇正統記天智〕此天皇、中興の祖にましまします、

〔菅家文草七記〕崇福寺綵錦實幢記

勅近江崇福寺者、天智天皇之創建也、〇略　本願天皇、朕〇多　宇之遠祖大〇廟也、予末小子何不ㇾ祗承、〇略　寛平二年歳次庚戌十二月四日、散位正五位下菅原〇道　真奉ㇾ勅記、

〇按ズルニ、江家次第抄國忌條ニハ、天智天皇ヲ太祖トシ、光仁天皇ヲ中祖トセシコトアリ、山陵篇荷前條ニ引載セリ、參看スベシ、

國風諡號

〔日本書紀二神代〕一書曰、狹野尊〇神武ㇾ亦號ㇾ神日本磐余彦尊ㇾ、所ㇾ稱狹野者、是年少時之號也、後撥ㇾ平天下ㇾ、奄ㇾ有八洲ㇾ、故復加ㇾ號、曰ㇾ神日本磐余彦尊ㇾ、

〔日本書紀三神武〕辛酉年正月庚辰朔、天皇即ㇾ帝位於橿原宮ㇾ、〇略　古語稱之曰、於ㇾ畝傍之橿原ㇾ也、太立宮柱於底磐之根ㇾ、峻ㇾ峙搏風於高天之原ㇾ而始馭天下之天皇ㇾ、曰ㇾ神日本磐余彦火火出見天皇ㇾ焉、

〔日本書紀二十五孝德〕大化三年四月壬午、詔曰、〇略　自ㇾ始治國皇祖〇神武之時、天下大同、都無ㇾ彼此者也、

〔日本書紀四安寧〕三年正月壬午、立ㇾ渟名底仲媛命ㇾ爲ㇾ皇后ㇾ、先ㇾ是后生ㇾ二皇子ㇾ、〇略　第二曰ㇾ大日本彦耜友天皇、〇德

〔日本書紀四孝昭〕二十九年正月丙午、立ㇾ世襲足媛ㇾ爲ㇾ皇后ㇾ、后生〇略　日本足彦國押人天皇、〇安

〔日本書紀四孝安〕二十六年二月壬寅、立ㇾ姪押媛ㇾ爲ㇾ皇后ㇾ、后生ㇾ大日本根子彦太瓊天皇、〇孝

〔古事記傳二十一〕根子は尊稱にて、景行天皇の御子にも、倭根子命と申すあり、凡人にも、記中に難波根子、書紀神功卷に、山背根子なぞ云名見えたり、天皇は大倭國をろしめすを以て、倭根子とは申し奉るなり、〇略　すべて御代々々の天皇と申し奉ることなり、

〔日本書紀四孝靈〕二年二月丙寅、立ㇾ細媛命ㇾ爲ㇾ皇后ㇾ、后生ㇾ大日本根子彦國牽天皇、〇孝元　三十六年正月己亥朔、立ㇾ彦國牽尊ㇾ爲ㇾ皇太子ㇾ、

〔續日本後紀十仁明〕承和九年十二月癸酉、右京人參議從三位兼越中守勳六等朝野宿禰鹿取、男女總十九人、改ㇾ宿禰ㇾ賜ㇾ朝臣ㇾ、國牽天皇三世孫、武內宿禰第六男、葛木襲津彦之後、

〔日本書紀四孝元〕七年二月丁卯、立ㇾ欝色謎命ㇾ爲ㇾ皇后ㇾ、后生二男一女、〇略　第二曰ㇾ稚日本根子彦大日日天皇、〇開化

〔古事記傳二十一〕大御父天皇〇孝元の御名の、大倭根子に對へて、若倭根子とは稱へ奉れるなり、

〔日本書紀五崇神〕十二年九月己丑、始校ㇾ人民ㇾ、更科ㇾ調役ㇾ、此謂ㇾ男之弭調ㇾ、女之手末調也、是以天神地祇共和享、而風雨順ㇾ時、百穀用成、家給人足、天下太平矣、故稱謂ㇾ御肇國天皇ㇾ也、

〔古事記崇神〕爾天下太平、人民富榮、於是初分ㇾ貢男弓端之調、女手末之調、故稱ㇾ其御世ㇾ、謂ㇾ所知初國之御眞木天皇ㇾ也、

〔古事記傳二十三〕所知初國は、波都久邇斯羅志斯と訓り、此稱辭は、後の御世に至て申せし言なるべし、其御世と云、又大御名をも申せるなど、當御世に申せる物とは聞えざればなり、〇略　中さて此は師〇加茂眞淵　の神武天皇を如此稱申して、〇事上文見ㇾ更に又此にも如此申せる故は、是より先にはいまだ服はざりし遙の國々まで、初て皇化のゆきたらはして、天下悉く大平ぬる御世なればなりといはれしが如し、

〔日本書紀十雄略〕四〕元年三月壬子、〇略　是月立ㇾ三妃ㇾ、元妃葛城圓大臣女曰ㇾ韓媛ㇾ、生ㇾ白髮武廣國押稚日本根子天皇、〇清寧

〔日本書紀十清寧〕五〕白髮武廣國押稚日本根子天皇、大泊瀬幼武天皇〇雄略　第三子也、〇略　中天皇生而白髮

〔古事記下雄略〕天皇、〇中略　娶ㇾ都夫良意富美之女韓比賣ㇾ生御子白髮命、〇清寧

〔古事記下清寧〕白髮大倭根子命、〇中略　此天皇無ㇾ皇后ㇾ、亦無ㇾ御子ㇾ、故御名代定ㇾ白髮部ㇾ、

〔日本書紀十七繼體〕元年、三月癸酉、納ㇾ八妃ㇾ、元妃尾張連草香女曰ㇾ目子媛ㇾ、生ㇾ二子ㇾ、皆有ㇾ天下ㇾ、其一曰ㇾ勾大兄皇子ㇾ、是爲ㇾ廣國排武金日尊ㇾ、〇安閑　七年十二月戊子、詔曰、〇中略　懿哉摩呂古示ㇾ朕心於八方ㇾ、盛哉勾大

兄光吾風於萬國、〇略下

〔皇年代略記〕安閑天皇國諱勾大兄、又廣

〔古事記下安閑〕廣國押建金日命坐二勾之金箸宮一治二天下一也、

〔日本書紀通證二十二〕摩呂古安閑別號

〔古事記傳四十四〕勾は、大和國廣瀬郡なるべきか、〇中略此天皇〇安閑の御名、書紀に勾大兄皇子とあれば、本より此地に住居坐りしなり、

〔日本書紀十七繼體〕元年三月癸酉、納二八妃一、元妃尾張連草香女曰二目子媛一、生二二子一、皆有二天下一、〇中略其二曰二檜隈高田皇子一、是爲二武小廣國排盾尊一、〇宣化

〔皇年代略記〕宣化天皇諱高田、又武小廣國排楯、

〔古事記下宣化〕建小廣國押楯命、坐二檜坰之廬一入野宮一治二天下一也、

〔古事記下欽明〕天皇、娶二檜坰天皇〇宣化之御子石比賣命、

〔日本書紀十七繼體〕元年三月甲子、立皇后手白香皇女、脩敎于內、遂生二一男一、是爲二天國排開廣庭尊一、是嫡子而幼年、於二二兄〇宣化、治後一有二其天下一、

〔古事記下繼體〕天皇、〇中略娶二意富祁天皇〇仁賢之御子、手白髮命一是大后也生御子、天國押波流岐廣庭命、波流岐三字以レ音

〔上宮聖德法王帝說〕斯歸斯麻宮治二天下一天皇、

〔日本書紀十欽明〕二年三月、納二五妃一、〇中次蘇我大臣稻目宿禰女、曰二堅鹽姬一、生二七男六女一、其一曰二大兄皇子一、是爲二橘豐日尊一、〇用明

〔日本往生極樂記〕聖德太子者、豐日天皇〇用明第二子也、

〔日本書紀二十推古〕豐御食炊屋姬天皇、天國排開廣庭天皇〇欽中女也、〇中略幼曰二額田部皇女一、

〔皇年代略記〕推古天皇豐諱額田部、又號二豐御食炊屋姬一、

〔日本書紀二十推古〕三十六年三月壬子、天皇病甚、不レ可レ諱、則召二田村皇子一、〇舒明

〔日本書紀二十推古〕三、息長足日廣額天皇、淳中倉太珠敷天皇女、

〔古事記下敏達〕此天皇之御子等、幷十七王之中、日子人太子、娶二庶妹田村王一、亦名糠手比賣命一、生御子、坐二岡本宮一、治二天下一之天皇、〇舒明

〔書紀集解二十舒明〕三、按、息長近江地名、皇祖母所レ號、〇彥人大兄皇子母、息長眞手王女廣姬、足日美稱、廣額蓋表二天容一也、

〔大安寺伽藍緣起〕初飛鳥岡基御宇天皇〇舒明之、未レ登二極位一、號二曰田村皇子一、

〔皇年代略記〕舒明天皇諱田村、號二息長足日廣額天皇一、

〔日本書紀二十舒明〕三、二年正月戊寅、立二寶皇女〇皇極一爲二皇后一、

〔日本書紀二十皇極〕四、天豐財重日足姬天皇、淳中倉太珠敷天皇〇敏達曾孫、押坂彥人大兄皇子孫、茅渟王女也、

〔書紀集解二十皇極〕四、財即寶、〇略徐皆美號、

〔皇年代略記〕皇極天皇諱寶、又天豐財重日足姬天皇、

〔日本書紀二十皇極〕四年六月庚戌、讓二位於輕皇子一、〇孝德

〔日本書紀二十皇極〕四、四年六月庚戌、讓二位於輕皇子一、〇孝德

〔日本書紀二十孝德〕五、天萬豐日天皇、天豐財重日足姬天皇同母弟也、

〔皇年代略記〕孝德天皇諱輕、又號二天萬豐日天皇一、

〔日本書紀二十舒明〕三、十三年十月丁酉、天皇崩于百濟宮、〇略中是時東宮開別皇子、〇天智年十六而誄之、

〔大安寺伽藍緣起〕天皇〇齊明行二幸筑紫朝倉宮一、將レ崩賜二時、甚痛憂勅久、此寺授誰參來止、先帝〇舒明待問賜者、如何答申止憂賜、爾時近江宮御宇天皇〇天智奏久、開伊波禮墓、刺二肩負鋸一、腰刺レ斧、奉爲奏レ支、

漢風尊號

〔日本書紀二十七天智〕天命開別天皇、息長足日廣額天皇○舒明太子也、

〔日本書紀通證二十七天智〕天命開別天皇　諡ニ入鹿ニ定ニ日位ニ命美稱ニ

〔書紀集解二十七天智〕天命開別天皇（按天智恭遜、待ニ時而登ニ天位ニ、如ニ有ニ命所ニ開、故以爲ニ諡也ニ、

〔皇年代略記〕天智天皇　諱葛城、又號ニ天命開別天皇ニ、

〔日本書紀二十三舒明〕二年正月戊寅、立ニ寶皇女○皇極爲ニ皇后ニ、后生ニ二男一女ニ、一曰ニ葛城皇子（カツラギ）、近江大津宮御宇天皇、

〔日本書紀二十八天武〕天淳中原瀛眞人（アメヌナハラオキノマヒト）天皇、天命開別天皇○天智同母弟也、幼曰ニ大海人（オホシアマ）皇子ニ、

〔皇年代略記〕天武天皇　諱大海人、又名ニ天淳中原瀛眞人ニ、

〔續日本紀二十淳仁〕天平寶字二年八月庚子朔、上表、上ニ上臺中臺尊號ニ、其百官表曰、臣仲麻呂等言、臣聞、星廻日薄、懸象著明之謂ニ天、出震發乾、乘時首出之謂ニ聖、天以不言爲ニ德、非言無以暢ニ其神、聖以無名體道、非名安可ニ詮其用、冬穴夏巢之世、猶昧ニ典章、雲官火紀之君、方崇ニ徽號、寔乃發揮功業、闡ニ揚尊名、名之爲ニ義、其來尚矣、伏惟皇帝○孝謙陛下、臨ニ馭天下ニ、十有餘年、海內清平、朝廷無事、祥瑞頻至、寶字荐臻、乃聖乃神、允文允武、諒無ニ得而稱ニ焉、曁ニ乎國絕ニ皇嗣ニ、人懷ニ彼此ニ、降ニ天尊於人願ニ、鳴謙克光、損ニ乾德於坤儀ニ、鴻基遂固、展ニ誠敬而追ニ遠、攀慕惟深、勤ニ溫清以承ニ顏、因心懇至、故有ニ九服宅心、咸荷ニ望雲之慶ニ、萬方傾首、俱承ニ就日之輝ニ、○中略臣等入參ニ帷扆ニ、出廁ニ周行ニ、鳴ニ珮曳ニ綸綿ニ、積年祀ニ覩ニ斯盛德ニ、戴ニ斯昌化ニ、臣子之義、何無ニ稱贊ニ、人欲而天必從、狂言而聖尚擇、謹據ニ典策ニ、敢上ニ尊號ニ、伏乞奉ニ稱ニ上臺寶字稱德孝謙皇帝ニ、奉ニ稱ニ中臺天平應眞仁正皇太后ニ、上協ニ天休ニ、傳ニ鴻名於萬歲ニ、下從ニ人望ニ、揚ニ稱於千秋ニ、不ニ勝ニ至懇踊躍之甚ニ、謹詣ニ朝堂ニ、奉表以聞、僧綱表曰、沙門菩提等言、菩提聞、乾坤高大、覆載以之、顯功、日月貞明、照臨由其、甄用、至ニ於混群ニ、有而饒益、撫ニ萬物ニ而曲成、獨標ニ十號之尊ニ、式崇ニ四大之極ニ、故徽猷歷ニ前古ニ、以不ニ朽、妙迹流ニ後葉ニ、而恒新、然則表ニ德稱ニ功、莫ニ不由ニ於名號ニ、伏惟皇帝陛下、乃聖繼ニ聖、括ニ六合ニ而承ニ其○其疑脫基ニ、乃神襲ニ神、環ニ四溟ニ而光宅、期ニ政道於刑措ニ、駈ニ懷生於仁宣ニ、追遠之孝尤重、

錫類之德彌厚、不ニ以逸遊爲ニ念、俯以謙卑在ニ懷、瑞蠶藻文、薦ニ聖壽之遐祉ニ、寶字結象、開ニ皇基之永昌ニ、○中略陛下謙讓、推而不ニ居、菩提等竊疑焉、菩提等逖察ニ前徽、緬鏡ニ遐載ニ、隨ニ時立ニ制、權ニ代適ニ宜、王皇雖ニ殊、其揆一也、菩提等不ニ勝ニ丹欵之誠ニ、謹上ニ尊號ニ、陛下稱曰ニ寶字稱德孝謙皇帝ニ、皇太后稱曰ニ天平應眞仁正皇太后ニ、伏願陛下皇太后抑ニ謙光之小節ニ、從ニ梵侶之讜言ニ、庶使ニ蟠木之鄉、獨龍之地ニ、聞ニ號仰澤ニ、聽ニ聲傾ニ光ニ、凡厥在ニ生ニ、誰不ニ幸甚ニ、沙門菩提等、不ニ任ニ下情ニ、謹奉ニ表以聞ニ、詔報曰、朕覽ニ卿等所ニ請、鴻業良峻、祇畏允深、忝以ニ寡薄ニ、何當ニ休名ニ、而上天降ニ祐、帳宇開ニ平ニ、原地薦ニ祥、蠶文表ニ德、竊惟此事、天意難ニ違、俯從ニ衆願ニ、敬膺ニ典禮ニ、號曰ニ寶字稱德孝謙皇帝ニ、

〔續日本紀十孝謙〕寶字稱德孝謙皇帝　出家歸佛、更不ニ奉ニ讖、因取ニ寶字二年百官所ニ上尊號一稱ニ之ニ、

○按ズルニ、扶桑略記稱德天皇重祚ノ下ニ、四十九代高野天皇是也、前謂ニ孝謙天皇ト云ヒ、前ト云ヒ、即前位ヲ謂フ、又愚管抄ニモ、重祚して位にかへりたまひにけり、○中略孝謙を此度は稱德天皇と申けりトアリ、孝謙稱德ノ追號ハ、此尊號ヲ分稱スル所ナリ、

古事類苑

帝王部十七

山陵上

名稱　九六六
陵制　九六八
遺詔不起山陵　九六九
陵地　九七一
兆域　一〇一七
陵隍　一〇二四
陵樹　一〇二五
陵前鳥居　同
陵塔石卒都婆　一〇二六
火葬所　一〇二七
分骨所　一〇二八
髮塔　一〇二九
灰塚　同
后妃陵　一〇三〇

追尊天皇陵　一〇三二
皇親墓稱陵　一〇三三
陵戸　一〇三五
陵戸定額　一〇三六
假陵戸　一〇三七
守戸定額　一〇三八
陵戸守戸並充　一〇三九
皇后及追尊天皇陵戸守戸　同
陵守長　同
陵預　一〇四〇
御陵守　同

古事類苑

帝王部十七

山陵上

山陵トハ帝皇ノ冢墓ヲ云フ、蓋シ其高大ナルコト、山ノ如ク陵ノ如クナルヲ以テ名ヅクル所ニシテ、或ハ古昔陵ニ因リテ之ヲ爲シ、ニ起ルト云フ、其之ヲミハカト云フハ、普通ノ稱ニ敬語ヲ加ヘタルモノニテ、ミサヾキト云フハ、帝皇ニ限レル特稱ナリ、原來山陵ノ稱ハ、斯ク至尊ニノミ用キルコトナレド、有功ノ皇子等モ、其墓ヲ陵ト稱スルヲ得ルハ往時ノ制ナリ、其後孝謙天皇ノ朝ニ、特ニ勅アリテ、母后藤原安宿媛、及ビ聖武天皇ノ母后藤原宮子娘ノ墓ヲ陵ト稱セシメ給ヒシヨリ、皇后ノ墓ハ總テ陵ト稱スル事ト爲レリ、然レドモ從前ノ皇后ニハ及ボサズ、且ツ此時ハ有功ノ皇子等モ、陵トハ稱セザル事トナリテ、日本武尊、飯豐青皇女ノ如キハ、原ハ陵ト稱セシガ、延喜式ニハ降シテ墓ト爲セリ、蓋シ延喜ヨリ前ノ制ナラン、是レ陵墓ノ稱ノ一變ナリ、獨リ神功皇后ハ、久シク朝ニ臨ミ政ヲ攝シ、殆ド至尊ト均シキヲ以テ、日本書紀ニハ其墓ヲ陵ト稱シ、延喜式ニモ磐余稚櫻宮御宇神功皇后ト書シテ、亦陵ト云ヘリ、當時又陵墓ニ近陵遠陵ノ稱アリ、血屬ノ親疎ニ隨ヒテ之ヲ別ツナリ、上古ノ山陵ハ皆高大ニシテ、兆域甚ダ廣ク、四面ニ池ヲ環ラシ、羨道アリテ出入スベク、其棺ハ石造ナリ、中ニ就キテ特ニ偉觀ナルヲ仁德天皇ノ陵トス、其周圍ハ十町ニ過ギ、高サハ十七間ニ近シ、是ヨリ藤原奈良ノ二朝ヲ歷テ、平安ノ初ニ至リテハ、漸ク古ノ如ク壯大ナラズ、

當時火葬盛ニ行ハレ、且ツ薄葬ヲ以テ主ト爲シヽカバ、遺詔ニ依リテ山陵ヲ起サヾル事モアリテ、其極ヤ陵ノ所在ヲモ詳ニセザルニ至ル、蓋シ至尊ノ火葬ハ、持統天皇ニ起リシ事ニテ、其遺骨ハ天武天皇ノ陵ニ合葬セシヲ以テ、其地ハ明ニ知ラレタレドモ、嵯峨淳和ノ二天皇ハ、山陵ヲ置カザルニ由リ、荷前ノ例幣ニモ預リタマハズ、清和天皇ノ御骨ヲ水尾山上ニ置キ、宇多天皇ヲ大内山ニ瘞ミ奉リシガ如キ、均シク此類ナリ、是ヨリ後ハ多ク寺院ニ葬リテ、古ノ山陵ノ如キモノ益〻尠ク、後白河天皇ヲ法華堂ニ收メ奉リシヨリ、法華堂ニ於テスルモノ亦多シ、後深草天皇ノ如キハ、安樂行院ノ佛壇ノ下ニ收メ奉レリ、亦法華堂ノ類ナリ、而シテ四條天皇ヲ泉涌寺ニ瘞ミ奉リシヨリ、此寺ニ收メ奉ルコトモ數世ナリシガ、後陽成天皇ヨリ後ハ、此ヲ以テ例ト爲シ、泉涌寺ハ殆ド御菩提所ノ如クナレリ、然ルニ孝明天皇ノ崩ジタマヒシ後ニ、壯大ナル山陵ヲ起シタマヒシハ、聖上ノ孝思ニ本ヅキシモノニテ、從前ノ陋習ヲ一洗スルモノナリ、

每年ノ終ニ、使者ヲ諸陵及ビ外戚ノ墓等ニ分遣シ、幣ヲ進ラシムル事アリ、是ヲ荷前（ニノサキ）ト云フ、荷前トハ、先ヅ諸國ノ貢物ヲ抽キテ、之ヲ薦ムルノ謂ナリ、清和天皇ノ卽位ノ初ニ、十陵四墓ノ制ヲ立ツ、十陵ハ、天智、光仁、桓武、平城（亦平城御母ナリ）、仁明、文德ノ六天皇及ビ田原（平城ノ母ナリ）、崇道ノ追尊天皇、幷ニ桓武天皇ノ母后、嵯峨天皇ノ母后（亦平城御母ナリ）、天智、平城、崇道ノ外ハ、當時ノ本系ノ親ナリ、蓋シ天智天皇ハ制度改革ノ功ヲ以テシ、崇道天皇ハ怨魂ヲ慰スルニ出デシナラン、並ニ歷世替ラズ、平城天皇ハ其故ヲ詳ニセザレドモ、或ハ嵯峨天皇ヲ祭ラザリシニ由リテ之ニ代フルモノカ、是ヨリ二回ノ改定ヲ歷テ朱雀天皇ノ朝ニハ、天智、光仁、桓武、仁明、光孝、醍醐ノ六天皇及ビ崇道天皇、幷ニ嵯峨天皇ノ母后、光孝天皇ノ母后、醍醐天皇ノ母后ヲ十陵トス、是ニ於テ傍系ナルモノハ獨リ崇道天皇ノミ、抑モ荷前ノ幣ヲ獻ズルニハ、十陵ヲ首ト爲シ、天皇、建

禮門ニ親臨シテ御拜アリ、其使ニハ納言以下ヲ以テ之ニ充ツ、此餘ノ陵墓ノ使ハ、陵墓ノ預人等ヲ以テ之ニ充テ、大藏省ニテ幣物ヲ授ケテ發セシム、爾ルニ其後、荷前ノ儀モ漸ク衰ヘテ、後三條天皇ノ頃ニハ、僅ニ故事ヲ存スルノミナリシガ、幾モナクシテ終ニ廢絕セリ、

荷前ハ恒例ノ事ナレド、臨時ニモ告祭スル事每ニアリテ、卽位ノ如キ、改元ノ如キ、外國人ノ朝貢ノ如キ、之ニ告ゲザルハナク、天皇ノ疾病ノ如キ、災異ノ如キ、亦多ク之ニ祈レリ、斯ル事モ後ニハ漸ク其數ヲ減ジ、殆ド絕無ノ姿ニナリシガ、孝明天皇ノ朝ニ、四海ノ騷擾ニ際シ、祈禳ヲ行ハセ給ヒシハ、廢典ヲ興シタマヒシナリ、

山陵ノ事ハ、治部省ノ諸陵寮ニテ掌ルコトニテ、其下ニ陵戸アリ、陵戸ハ雜戸ノ類ニテ、良民ニ齒スルヲ得ズ、調庸及ビ雜徭ヲ蠲カレテ、世々山陵ヲ守ルモノナリ、原來五戸ニテ一帝ノ山陵ヲ守ルベキ制ナレド、或ハ六戸ナルアリ、乃至一戸ナルアリ、陵戸ナキモアリテ一ナラズ、而シテ陵戸少クシテ、其陵ニ充ツルニ足ラザル地ハ、陵ニ近キ百姓ヲ點ジ、年ヲ限リ庸徭ヲ除キ、守戸ト爲シテ之ヲ補ヒ、全ク陵戸ナキ地ハ、守戸ノミヲ以テ之ヲ守ラシムルナリ、守戸ハ良民ニテ、其陵戸ニ於ケルガ如シ、

山陵ハ律令ニ明文アリテ、兆域門內ニ闌入シ、及ビ寸草尺木ヲ攀折スルモ罪アルノミナラズ、其意中ニ之ヲ毀タントスルトキハ、未ダ之ヲ實行セズト雖モ、證跡明白ナルトキハ、是ヲ謀大逆ト爲シ、首從ノ別ナク皆之ヲ斬ニ處スルナリ、然ルニ其法ノ斯ク嚴ナルニ拘ハラズ、樹木ヲ伐リ、及ビ汙穢ヲ蒙ラシメ、兆域ノ內ニ佛堂ヲ建ツル等ノ事アリテ、朝廷ヨリ鎭祭シタヒシ事屢アリ、朝威漸ク衰ヘ、武人權ヲ弄シ、四海鼎沸スルニ及テハ、所在ノ山陵ハ、大ニ頹圮シテ、其狀況ハ、恐民ノ一抔ノ土ヲ取ルノミナラズシテ、凡ソ臣子タル者ノ、痛哭流涕シ、言ハント欲シテ言フニ忍ビズ、筆セントシテ筆スルコト能ハザルモノアリ、是ニ於テ修築

ノ議起ル、抑モ此議ヤ、鎌倉幕府ヨリ足利氏ヲ歴テ、當時ノ人ノ曾テ耳朶ニモ觸レザリシ所ニシテ、之ヲ發スルハ德川幕府ノ時ノ儒生細井知慎ニシテ、將軍綱吉ハ、此議ニ本ヅキテ大ニ修造ヲ加ヘタリ、實ニ曠世ノ盛事ナリ、當時ハ實ニ闇黑ヲ脫シ、開明ニ趨ケルモノニテ、文物儀興シケレバ、王室ノ衰替ヲ歎キ、山陵ノ事ニ感ジ、之ガ爲ニ書ヲ著シ、モノモ少カラズ、松下見林ガ前王廟陵記ノ如キ其一ナリ、蒲生秀實ハ、天保ノ比ノ人ナリ、一ノ窮措大ヲ以テ、山川ヲ跋涉シ、辛苦經營シテ、以テ山陵志ヲ著シ、以テ勤王ノ志氣ヲ鼓舞セシハ、止ニ攷索ニ供スベキノミナラズシテ、其功誠ニ偉ナリトス、是ヨリ後、孝明天皇ノ朝ニ、戸田越前守忠恕ノ建議ニ依リ、將軍家茂ハ忠恕ノ家臣、間瀨和三郎忠至（後ニ戸田大和守ト稱ス）ヲシテ大ニ力ヲ修陵ノ事ニ用キシメシガ、維新ノ初ニハ、特ニ諸陵寮ヲ興シタマヒシカバ、漸次ニ舊觀ニ復スルニ至レリ、

〔新撰字鏡下〕陵大阜也、平加、又豆不禮、又彌佐々木、

〔倭名類聚抄十四調度〕山陵　日本紀私記云、山陵、美佐岐、

〔伊呂波字類抄九見〕山陵ミサヽキ

〔令義解九喪葬〕凡先皇陵墳（謂先代以來、帝王山陵皆是也、帝王。）墓（如山陵、故謂之山陵、○下略）

〔令集解四十喪葬〕釋云、帝皇葬因陵、如陵、故云陵也、見名例、古記云、陵謂墓一種、以貴賤爲別名耳、

○按ズルニ、令集解ニ見名例トアレド、今ノ律ニ此文ナシ、恐クハ古律ナルベシ、而シテ唐律名例謀大逆ノ疏議ニ、山陵者、古先帝王因山而葬、黃帝葬橋山、即其事也、或云、帝王之葬、如山、如陵、故曰山陵トアルハ、此文ノ原ヅク所ナリ、

〔枕草子〕みさゝきは　鷲のみさゝき、かしは原の陵、あめのみさゝき、

〔幹軒小錄〕山陵の事

奈良の若草山と云ふは、仁德帝の后の陵にて、其上に標ありと云ふ、其奥に鷲の谷と云ふ處あり、

〔大日本史禮樂四〕孝德大坂磯長陵、在石川郡、（按（中略）枕草紙有鷲陵、今山田嶺曰鷲闕、闕西五町、即陵地、據此鷲陵蓋謂此也、）

〔蜻蛉日記下〕五月（康保四年）にもなりぬ、（中略）十よ日のほどにかくれさせ給ひぬ、（中略）みさゝきや何やときくにときめき給へる人々いかにと思ひやり聞ゆるわはれなり、やう〳〵日頃になりて、貞觀殿御方（尚侍藤原登子）にいかになどや聞えけるついでに、

世の中をはかなきものとみさゝきのうもるゝやまになげくらんやそ、御かへりごといとかなしげにて、

おくれじとうきみさゝきに思ひいる心はしでのやまにやあるらん

〔源氏物語十二須磨〕院（桐壺帝）の御はかをがみ奉りたまふとて、北山へまうでたまふ、（中略）御山に參り侍るを、御ことづてやときこえ給、（中略）御山にまうで給て、おはしましゝ御有さま、唯目の前のやうにおぼし出らる、（中略）御はかは道の草しげくなりて、わけ入給ほどいとゞ露けきに、月も雲がくれて森の木だちこぶかく心すごし、

〔和訓栞三十美〕みさゝき　日本紀に、陵又山陵をよめり、御狹々城の義なるべし、

〔古事記傳十七〕御陵は美波加と訓べし、萬葉二（二十四丁）に、八隅知之、和期大王之、恐也、御陵奉仕流、山科乃、鏡山爾云々、師（加茂眞淵）の考に、古は天皇の山陵をも、御墓とぞ云つらむ、此も御陵とは書たれど、みさゝきとは訓がたく、必みはかと訓べければなりとあり、書紀仁德卷推古卷などに、難波荒陵（アラハカ）と云地名もあり、源氏物語須磨卷に、院の御はかとあり、（又御山ともあり、古書にも、御陵を築くを山作ともいへり、）又美佐邪紀と云も古き稱なり、和名抄に山陵美佐々岐、また諸陵寮美佐々岐乃豆加佐とあり、但

陵制

し某天皇の御陵なぞ云ときは、美波加と云べく、其御陵を指ては、美佐邪紀とも云べし、たさへの美佐々紀は、某天皇の美佐々紀なぞ云むが如し、某天皇の美佐々紀なぞ云ざりけむ、凡て同物も、指さすによりて名のかはる類多し、後世になりては、陵なれば、すべて美佐邪紀と申して、墓と別こと〳〵なれり、

〔令義解七公式〕大社　陵號　乘輿○中略右如此之類並闕字

〔令義解九喪葬〕凡先皇陵、○中略兆域内、謂兆域也亦不得葬埋及耕牧樵採、

〔律疏名例〕八虐

二曰謀大逆、謂謀毀山陵及宮闕、將圖不軌、窓起悪心、謀毀山陵及宮闕、

〔律疏賊盜〕凡謀反及大逆者皆斬、

〔政事要略二十九〕衛禁律云、闌入山陵兆域門者笞五十、謂周兆放營域者越垣者杖一百、陵戸不覺減二等、謂專當者主帥又減一等、謂親監當者故縱者、各與同罪、集解云、附釋云、三秦記云、秦謂天子墳爲山、漢云陵、亦通言山陵、

〔律疏賊盜〕凡盜山陵内木者杖一百、草者減三等、謂帝皇山陵、草木不合斧刈而有盜者、

〔延喜式二十諸陵一〕凡陵墓側近有原野者、寮仰守戸并移所在國司、其相知燒除、

○按ズルニ、此守戸ハ、陵戸墓戸、及陵墓ノ守戸ヲ云フナルベシ、

〔山陵志〕上古大朴、山陵之制未備、瓊杵氏、炎見氏、彦波瀲武氏邈矣、三陵皆在日向國自太祖至乎孝元、猶就丘隴而起墳焉、自開化其後蓋寢有制、及垂仁始備、下至于敏達凡二十有三陵、制略同焉、凡其營陵因山、從其形勢、所向無方、大小高卑長短無定、其爲制也、必象宮室、而使前方後圓爲壇三成、且環以溝、延曆十一年、以廢太子早良爲崇、勅謝之、其冢下置守冢、勿使濫穢、因知諸陵之溝、亦其故然也、壇不必三成、擧其率言之、夫其圓而高者、如張蓋也、頂爲一封、即其所葬、方而平者、如置衡也、其上隆起、如梁輔也、前後相接、其間稍卑、而左右有圓丘倚其下墳、如兩輪也、及至後世、民賭之而莫能識焉、猶號曰車塚、蓋亦以是也、凡陵側之地、必有三五丘冢、乃視之陵、頗小而班列其前後左右、此

遺詔不起山陵

蓋當時所陪葬者也、其狀率皆圓、則人臣墓制、亦從可知、然其象宮車、不必爲帝陵也、何者其類間有之、而以其非史及諸陵式之所載、莫審爲何物、疑是皇后皇子、若重臣別勅所許、或帝王改葬、而其故陵尚存也、自用明至于文武凡十陵、特變是則但圓造之、穿治玄室於其内、而築之以壁、覆之以巨石、石棺在其内南面、故其戸南向、而累石爲之羨道、其制嚴密、既已如是、是以不復環之以溝也、班鳩太子○聖徳治壽藏于河内磯長、即是制也、當時太子自負聰明、有才藝、居作者之聖、於舊章多所變替、乃若山陵蓋亦然歟、○中略于南都、更復舊制、惟其所仍、正南面而已矣、

〔高畠敬筆記〕泉涌寺御代々陵ノ作樣ハ、地ヲ堀ルコト二間四方、松板一尺二寸厚サノ木ヲ以テ、一丈四方ノ船ヲ作リ、其中ニ納メ、其内ヲ厚一尺ノ作リ石ニテ築堅ムキ作石トハ、石灰タヽキ土ノコトナリ、其内ヘ六尺四方ノ石ノ御棺ヲ納ム、白川石其内ヘ御棺ヲ納ム、御棺ハ檜ノ厚一尺ノ木ヲ以テ作ル、其上ハ厚八寸ノ板ヲ以ヲ天秤指ニ作リ、其上箱ハ八寸ノ板ヲ以テ造リ、チヤン流シ、厚五寸以上、御棺三重ナリ、目方凡三百貫目餘、御石棺ノ嚴重ニナリシハ、桃園院ヨリ始ルトイフ、

〔日本書紀二十推古〕三十六年九月戊午、先是天皇遣詔於群臣曰、比年五穀不登、百姓大飢、其爲朕與陵以勿厚葬、便宜葬于竹田皇子之陵、

〔日本書紀二十天智〕六年二月戊午、皇太子○天智謂群臣曰、我奉皇太后天皇○皇極之所勅、憂恤萬民之故、不起石槨之役、所冀永代以爲鏡誡焉、

〔續日本後紀十仁明〕承和九年七月丁未、太上天皇○嵯峨崩于嵯峨院、春秋五十七、遺詔曰、○中略擇山北幽僻不毛地、葬限不過三日、無信卜筮、無拘俗事、○中略穿阬淺深縱横、可容棺矣、棺既已下了、不封不樹、土與地平、使草生、上長絶祭祀、但子中長者私置守冢、三年之後停之、戊申、擇山北幽僻之地、定山陵、以商布二千段錢一千貫文奉充御葬料、即日御葬畢、

〔三代實錄三十陽成五〕元慶三年三月廿三日癸丑、淳和太皇太后崩、○中略太后寢疾綿篤、命左右曰、天長天子、○淳和願命火葬、不置山陵、無園廟之可陪、○下略

〔續日本後紀九仁明〕承和七年五月辛巳、後太上天皇〇淳和顧命皇太子〇恒曰、〇中略予聞人歿精魂歸天、而空存冢墓鬼物憑焉終乃爲祟長貽後累今宜碎骨爲粉散之山中於是中納言藤原朝臣吉野奏言、昔宇治稚彦皇子者我朝之賢明也此皇子遺教自使散骨後世效之然是親王之事而非帝王之迹我國自上古不起山陵所未聞也山陵猶宗廟也縱無宗廟者臣子何處仰於是更報命曰予氣力綿惙不能論決卿等奏聞嵯峨聖皇以蒙裁耳　癸未後太上天皇崩于淳和院　戊子此夕奉葬後太上天皇於山城國乙訓郡物集村御骨碎粉奉散大原野西山嶺上　丁酉勅後太上天皇崩後國忌荷前陵戸等事宜遵遺制以停奉行焉、

○按ズルニ嵯峨淳和二天皇ノ山陵ヲ置カセ給ハザリシ事ハ延喜ノ諸陵式ニ之ヲ掲ゲザルニテ知ルベシ、

〔三代實錄三十陽成八〕元慶四年十二月四日癸未、是日申二刻太上天皇〇清和崩于圓覺寺時春秋三十一、〇中略遺詔火葬於中野不起山陵、七日丙戌是夜酉四刻奉葬太上天皇於山城國愛宕郡上粟田山奉置御骸於水尾山上、

〔扶桑略記二十朱雀〕承平元年七月十九日、太上法皇崩年六十五、八月五日火葬山城國葛野郡大内山、依遺詔不造山陵不入國忌、

〔仁和寺御傳〕宇多法皇　承平元辛卯年七月十九日甲辰崩仁和寺御年六十五　亥時奉移大内山魂殿依遺詔不置陵

〔扶桑略記二十村上五〕天曆六年八月十五日、朱雀太上法皇春秋三十崩葬愛宕郡山置御骨於醍醐山陵傍依遺詔不建山陵不入國忌、

〔日本紀略九一條〕正曆二年二月十二日癸丑、今日圓融寺法皇〇圓融崩、十九日庚申、〇中略依遺詔停素服擧哀國忌山陵、

陵地

〔權記〕寛弘五年二月九日庚子、去夜亥時許、院〇花山崩給云々、十一日壬寅、令別當兼業朝臣告遺詔於外記、〇中略遺詔云、擧哀素服國忌山陵等可停止之由可令奏、每事不異凡人云々、

〔日本紀略一條〕寛弘八年六月廿二日甲子、午刻太上皇〇一條崩于一條院中殿、七月八日己卯、院司内藏頭公信朝臣參陣外付大外記敦頼奏遺詔、可止山陵國忌素服擧哀者、

〔日本紀略十四後一條〕長元九年四月十七日乙丑、戊刻天皇落飾、崩于清涼殿、五月十九日丙申、奉火葬淨土寺西原、遺詔停素服擧哀、不任喪司、不置國忌山陵、

〔大外記師茂勘例眞治三年七月師夏記所引〕延久五年五月七日、太上天皇後三條院崩給、十七日、權中納言隆俊卿參入、被奏太上天皇遺詔事、素服擧哀山陵荷前等可停止、

〔百練抄十五後嵯峨〕仁治三年七月八日戊子、被立山陵使、隱岐法皇、改顯德院爲後鳥羽院、依御遺誡、不被置山陵國忌之由被申畢、

〔日本書紀二神代〕天津彦彦火瓊瓊杵尊崩因葬筑紫日向可愛可愛此云埃之山陵、

〔延喜式二十諸陵一〕日向埃山陵天津彦彦火瓊々杵尊在日向國無陵戸、

〔日本書紀二神代〕彦火火出見尊崩葬日向高屋山上陵、

〔古事記上〕日子穗々手見命者坐高千穗宮伍佰捌拾歲御陵者即在其高千穗山之西也、

〔延喜式二十諸陵一〕日向高屋山上陵彦火々出見尊無陵戸、在日向國、

〔日本書紀二神代〕彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊崩於西州之宮因葬日向吾平山上陵、

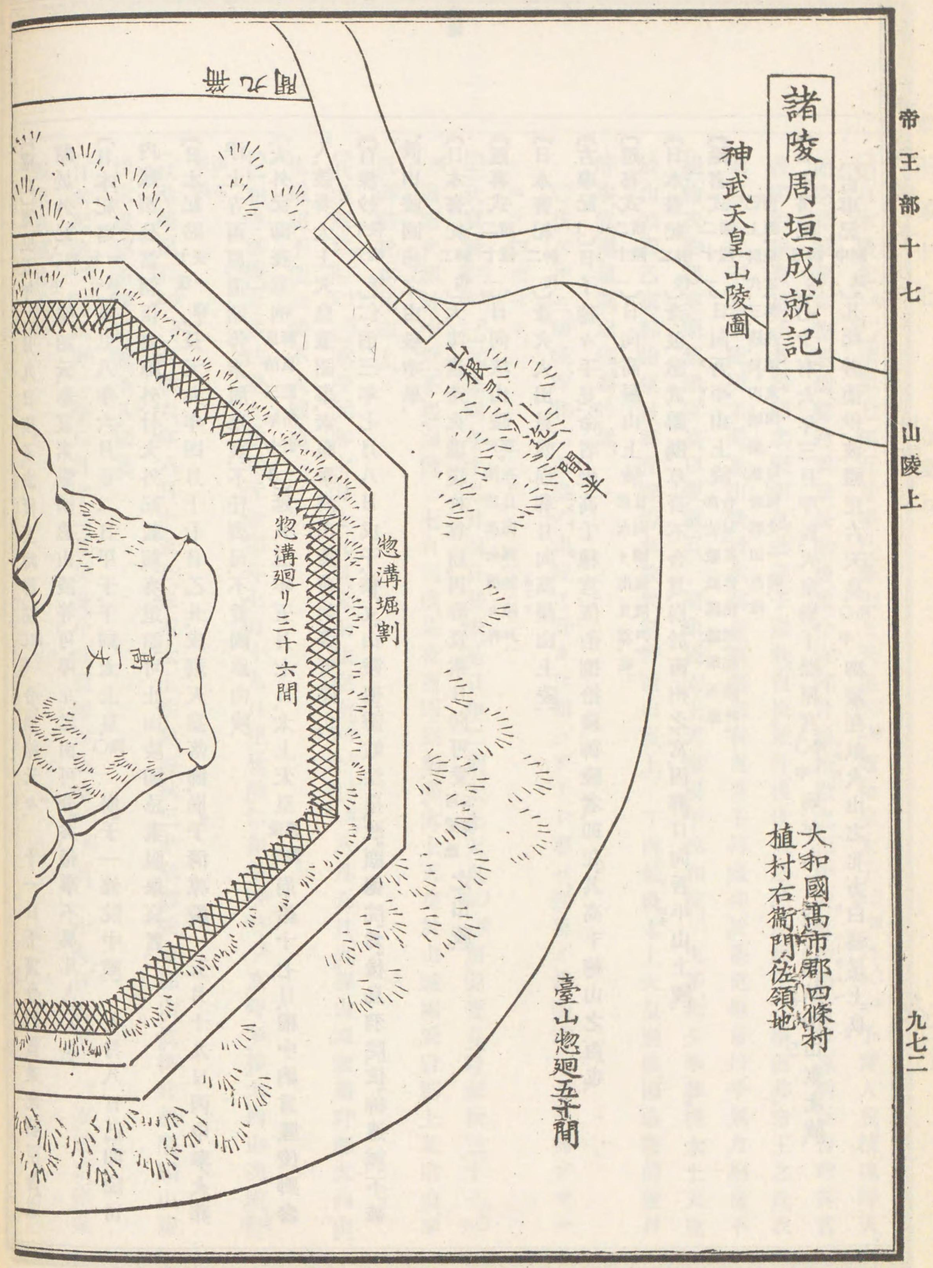
〔延喜式二十諸陵一〕日向吾平山上陵彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊在日向國無陵戸、

〔日本書紀三神武〕七十有六年三月甲辰、天皇崩于橿原宮、〇略明年九月丙寅、葬畝傍山東北陵、已上神代三陵、於山城國葛野郡田邑陵、祭之其兆域東西一町、南北一町、

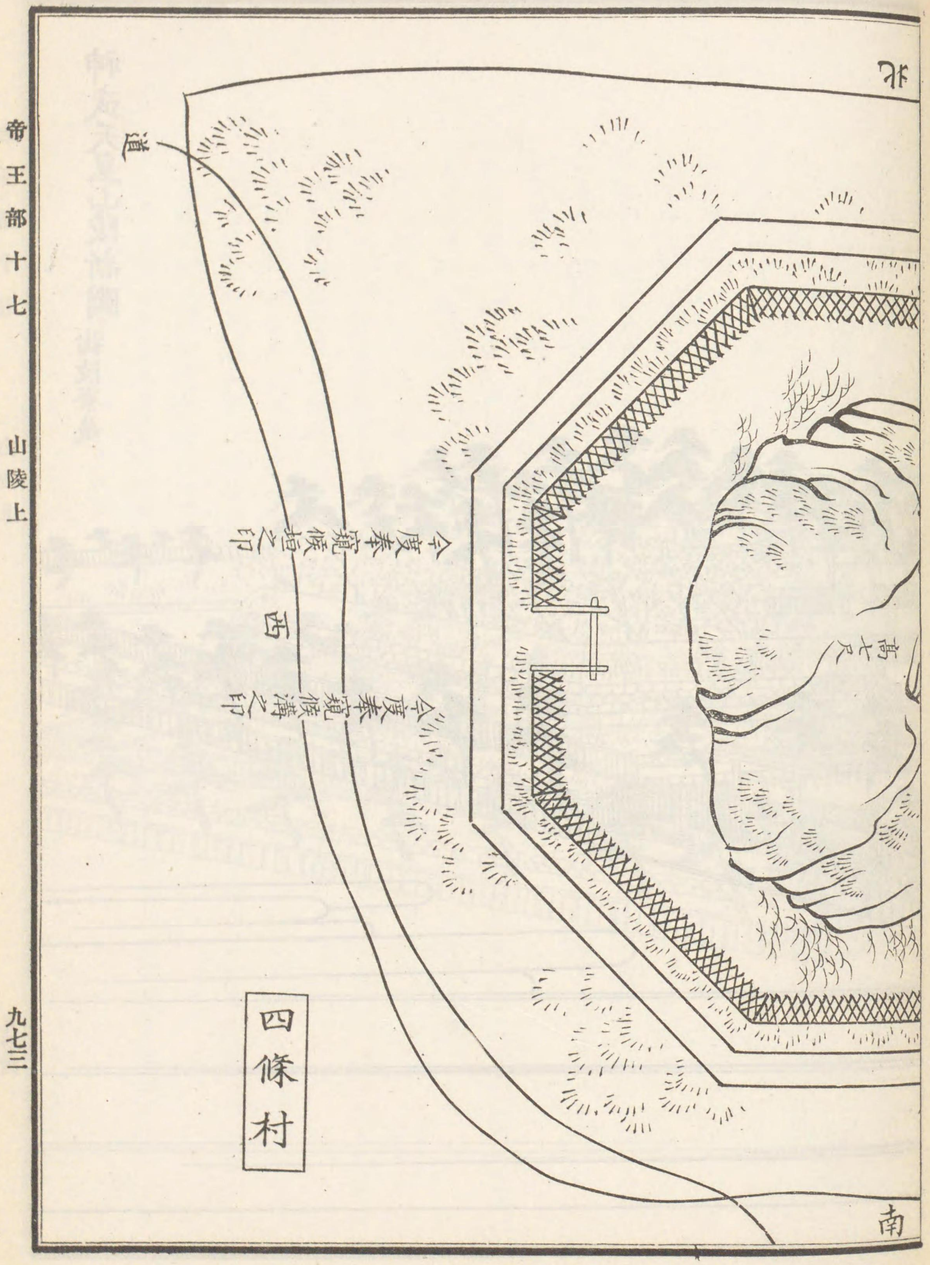
〔古事記中神武〕凡此神倭伊波禮毘古天皇、〇中略御陵在畝火山之北方白檮尾上也、

諸陵周垣成就記

神武天皇山陵圖

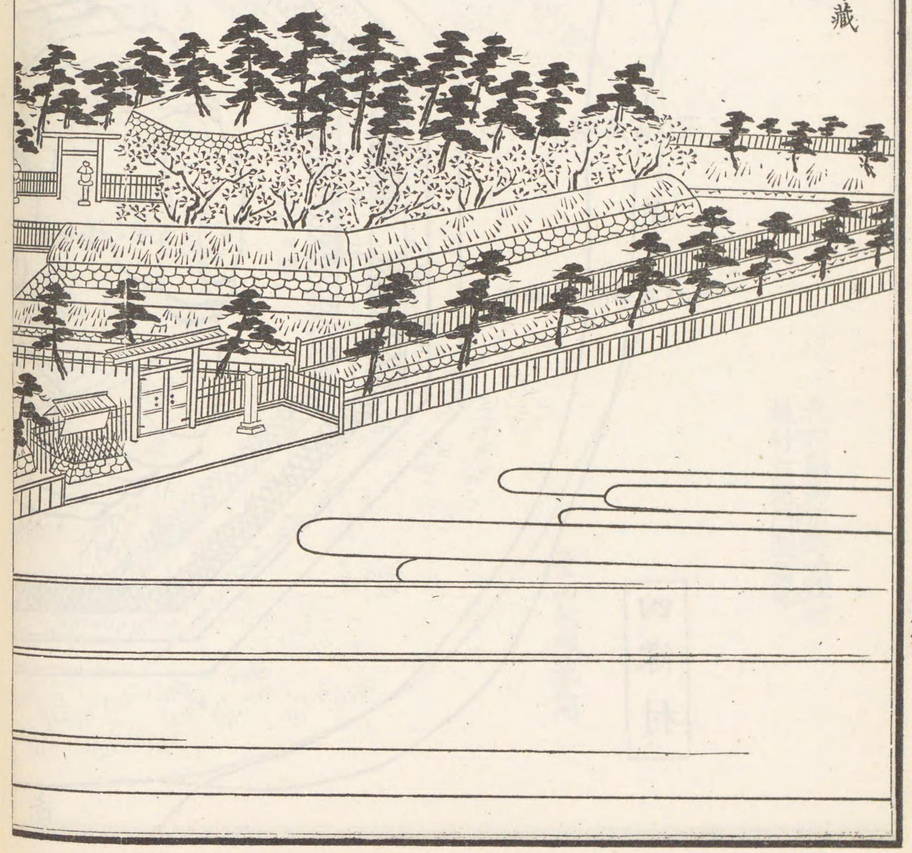


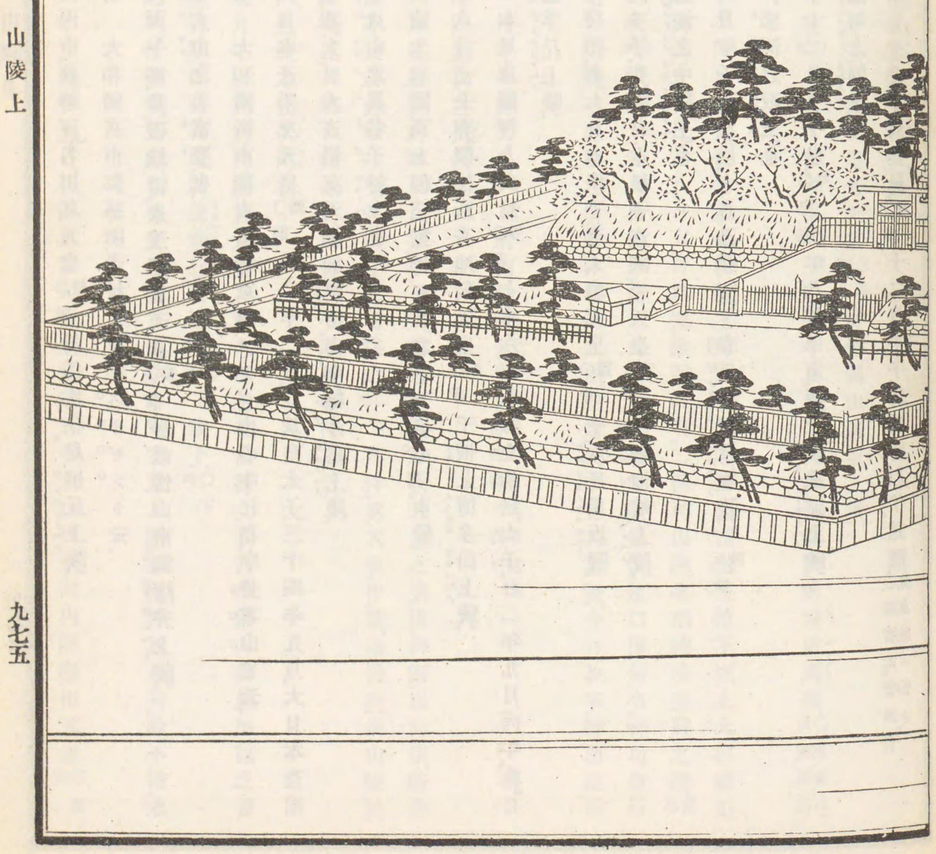
大和國高市郡四條村
植村右衛門佐領地



四條村

神武天皇山陵新圖　諸陵寮藏





〔日本書紀安寧元年十月丙申、葬二神渟名川耳天皇一于〇綏靖、於倭桃花鳥田丘上陵一、

〔享保年間山陵誌〕綏靖　大和國高市郡慈明寺村に在、字スキゼント云、

〔日本書紀懿德元年八月丙午朔、葬二磯城津彦玉手看天皇一于〇安寧、於畝傍山南御陰井上陵一、

〔古事記中安寧〕御陵在二畝火山之美富登一也、

〔享保年間山陵誌〕安寧　大和國高市郡吉田村東南、マナゴ山の中に在、字安寧山と云、

〔日本書紀孝昭天皇以二大日本彦耜友天皇一〇懿德廿二年二月、立爲二皇太子一、三十四年九月、大日本彦耜友天皇崩、明年十月庚午、葬二大日本彦耜友天皇一於畝傍山南纖沙谿上陵一、

〔古事記中懿德〕御陵在二畝火山之眞名子谷上一也

〔皇陵志上〕孝昭〇中略此陵大和國葛上郡三室村ニ在レ之、字天皇山ト申候、

〔日本書紀孝安三十八年八月己丑、葬二觀松彦香殖稻天皇一〇孝昭于掖上博多山上陵一、

〔日本書紀孝靈天皇以二日本足彦國押人天皇一〇孝安七十六年正月、立爲二皇太子一、百二年九月丙午、葬二日本足彦國押人天皇于玉手丘上陵一、

〔日本書紀孝元六年九月癸卯、葬二大日本根子彦太瓊天皇一〇孝靈于片丘馬坂陵一、

〔日本書紀開化五年二月壬子、葬二大日本根子彦國牽天皇一〇孝元于劒池嶋上陵一、

〔古事記中孝元〕御陵在二劒池之中岡上一也

〔日本書紀開化六十年四月甲子、天皇崩、十月乙卯、葬于春日率川坂本陵一、一云、坂上陵一、

〔古事記中開化〕御陵在二伊邪河之坂上一也

〔日本書紀崇神六十八年十二月壬子崩、〇中略明年八月甲寅、葬于山邊道上陵一、

〔古事記中崇神〕在二山邊道勾之岡上一也

〔日本書紀垂仁九十九年七月戊午、天皇崩、〇中略十二月壬子、葬二於菅原伏見陵一、〇延喜式、菅原伏見東陵ニ作ル、

〔古事記中垂仁〕御陵在二菅原之御立野中一也

〔日本書紀七成務〕二年十一月壬午、葬二大足彦天皇一〇景行於倭國山邊道上陵一、

〔日本書紀八仲哀〕稚足彦天皇〇成務　六十年天皇〇成務崩、明年九月丁酉、葬于倭國狹城盾列陵一、〇延喜式、狹城盾列池後陵ニ作ル、

〔續日本後紀仁明〕十三承和十年四月己卯、使二參議從四位上藤原朝臣助一、掃二部頭從五位下坂上大宿禰正野等一、奉二謝山陵一、依レ去三月十八日有二奇異一、搜二撿圖錄一、有二二楯列山陵一、北則神功皇后之陵、倭名大足姫命皇后南則成務天皇之陵、倭名稚足彦天皇ト世人相傳、以二南陵一爲二神功皇后之陵一、偏依二是口傳一、每レ有二神功皇后之祟一、空謝二成務天皇陵一、先年緣二神功皇后之祟所一レ作弓劒之類、誤進二於成務天皇陵一、今日改奉二神功皇后陵一

〔日本書紀九神功〕二年十一月甲午、葬二天皇〇仲哀於河内國長野陵一、〇延喜式、惠我長野西陵ニ作ル、

〔古事記中哀〕御陵在二河内惠我之長江一也

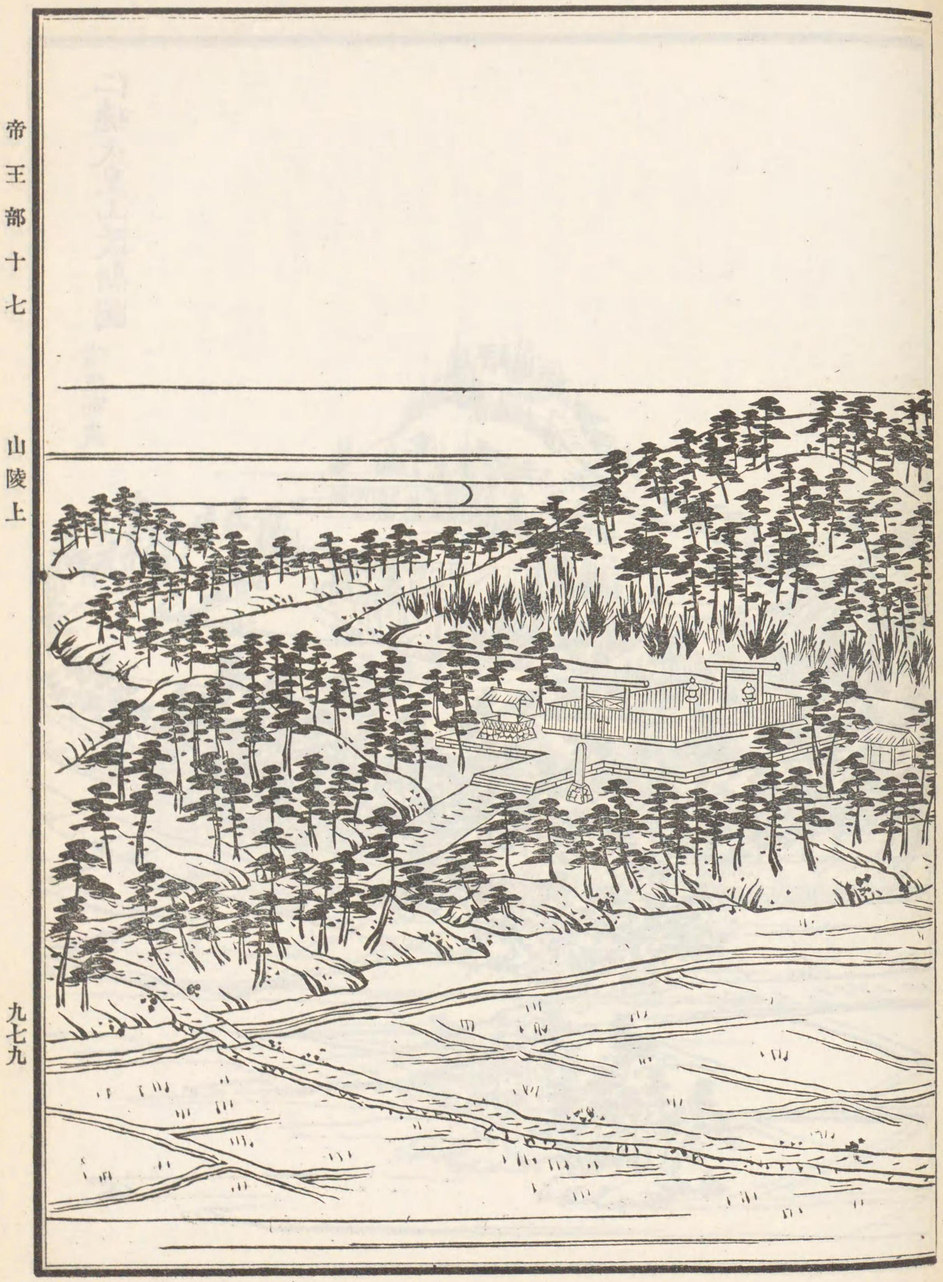
〔日本書紀九神功〕元年二月、皇后領二群卿及百寮一、移二于穴門豐浦宮一、即收二天皇之喪一、從二海路一以向レ京、時齋坂王、忍熊王、聞二天皇崩一、亦皇后西征幷皇子新生而密謀之、〇略中乃佯爲二天皇作一レ陵、詣二播磨一、興二山陵於赤石一、仍編レ船絚二于淡路嶋一、運二其嶋石一而造之、則每二人令一レ取レ兵、而待二皇后一、

〔古事記中應神〕御陵在二川内惠賀之裳伏岡一也

〔日本書紀十雄略〕九年七月壬辰朔、河内國言、飛鳥戸郡人田邊史伯孫女者、古市郡人書首加龍之妻也、伯孫聞二女產一レ兒、往賀二智家一、而月夜還二於蓬蘽丘譽田〇應神御名陵下一、〇略、山陵志〕應神陵東北之隅、營築未レ了處、名甲斐坂、土人傳、是當時甲斐人所レ當レ役、會二其邦有一レ故、不レ得レ來焉、而後遂不二復治一也、

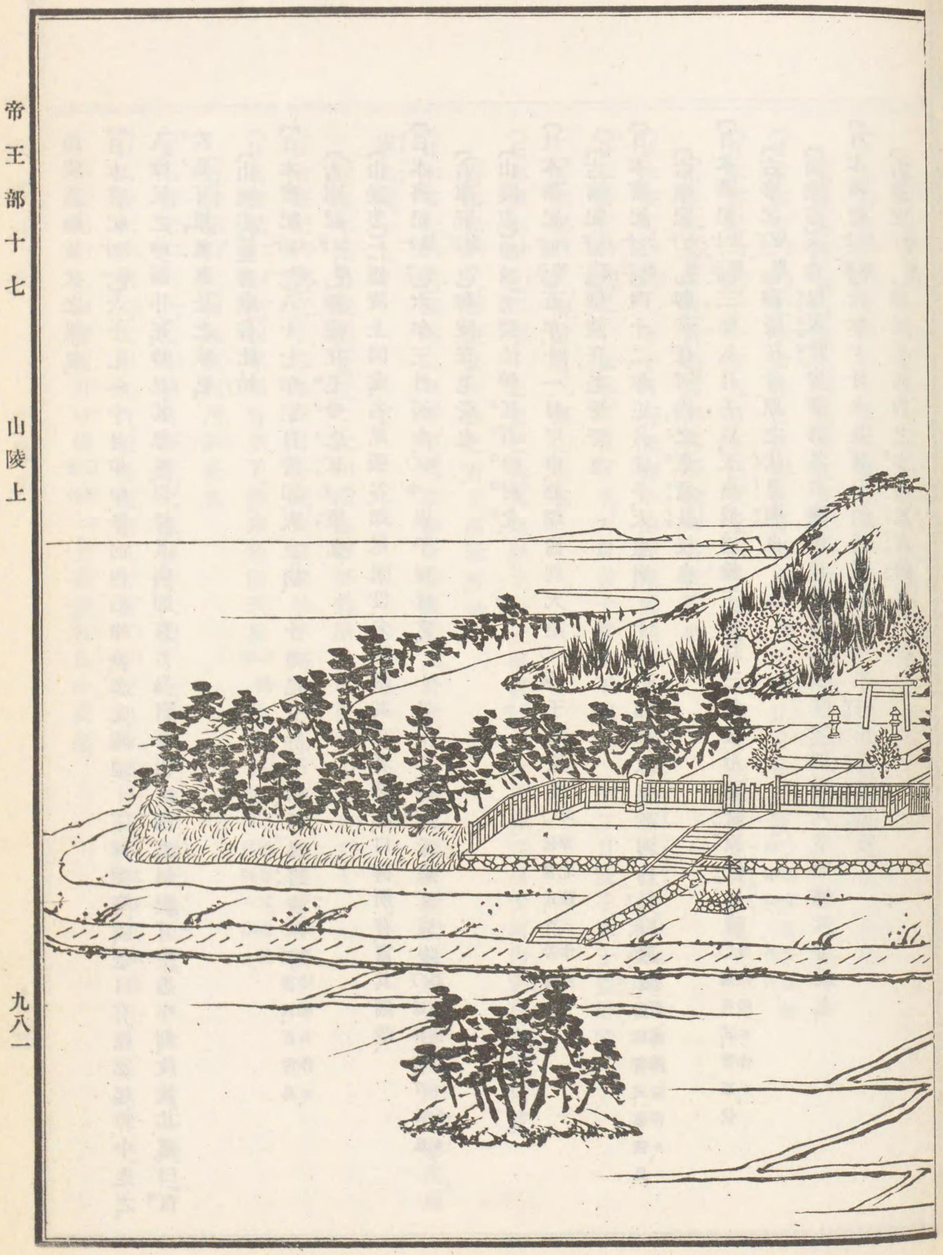
〔扶桑略記二十九後冷泉〕治曆二年五月廿五日、石清水宮司言、上去三月廿八日戌刻、河内國譽田天皇〇應神

應神天皇山陵新圖　諸陵寮藏



仁德天皇山陵新圖

諸陵寮藏



山陵震動放火之異也、

〔日本書紀十一〕〔六十七年十月甲申、幸河内石津原、以定陵地、丁酉、始築陵、是日有鹿忽起野中走之、入役民之中而仆死、時異其忽死、以探其痍、即百舌鳥自耳出之飛去、因視耳中悉咋剝、故號其處曰百舌鳥耳原者、其是之緣也、

〔山陵志〕蓋壽藏自此始

〔日本書紀十仁德〕〔八十七年正月癸卯、天皇崩、十月己丑、葬于百舌鳥野陵、〇延喜式、百舌鳥耳原中陵ニ作ル、

〔古事記下仁德〕〔御陵在毛受之耳上原也

〔山陵志〕仁德陵上四處、名尾張谷、即尾張役夫不畢其功者然也、口碑所存、實其爾哉、

〔日本書紀十履中〕〔二年三月丙申、〇申略崩于稚櫻宮、十月壬子、葬百舌鳥耳原陵、〇延喜式、百舌鳥耳原南陵ニ作ル、

〔古事記下履中〕〔御陵在毛受也

〔山陵志〕呼爲美賛佐伊在石津村北、

〔日本書紀十允恭〕〔三年十一月甲申、葬瑞齒別天皇〇反正于耳原陵、〇延喜式、百舌鳥耳原北陵ニ作ル、

〔古事記下允恭〕〔御陵在毛受野也

〔日本書紀十允恭〕〔四十二年正月戊子、天皇崩、十月己卯、葬天皇於河内長野原陵、〇延喜式、惠我長野北陵ニ作ル、

〔古事記下允恭〕〔御陵在河内之惠賀長枝也

〔日本書紀十安康〕〔三年八月壬辰、天皇爲眉輪王見殺、三年後、乃葬菅原伏見陵、〇延喜式、菅原伏見西陵ニ作ル、

〔古事記下安康〕〔御陵在菅原之伏見岡也

〔山陵志〕呼爲保天堂、安康御名穴穗、穗音保、省穴字呼之、則保天堂、即穗天皇訛也、

〔日本書紀十清寧〕〔元年十月辛丑、葬大泊瀨天皇〇雄略于丹比高鷲原陵、

〔古事記下雄略〕〔御陵在河内之多治比高鵤也

〔大日本史禮樂四〕陵南有佛寺、號高鷲山、即古名之遺也、

〔日本書紀清寧〕〔五年正月己丑、天皇崩于宮、十一月戊寅、葬于河内坂門原陵、

〔山陵志〕呼爲白髮山、仍其御名也、〇天皇御名白髮武廣國押稚日本根子天皇

〔日本書紀十仁賢〕〔元年十月己酉、葬弘計天皇〇顯宗于傍丘磐杯丘陵、〇延喜式、傍丘磐杯南陵ニ作ル、

〔日本書紀十仁賢〕〔十一年八月丁巳、天皇崩于正寢、十月癸丑、葬埴生坂本陵、

〔山陵志〕今呼牡計山、其御名所訛、御名於許也、

〔日本書紀十繼體〕〔二年十月癸丑、葬小泊瀨稚鷦鷯天皇〇武烈傍丘磐杯丘陵、〇延喜式、傍丘磐杯丘北陵ニ作ル、

〔日本書紀十繼體〕〔二十五年二月丁未、天皇崩于磐余玉穗宮、十二月庚子、葬于藍野陵、

〔古事記下繼體〕〔御陵者三島之藍也

〔日本書紀十安閑〕〔二年十二月己丑、天皇崩于勾金橋宮、〇中略是月、葬天皇于河内舊市高屋丘陵、

〔古事記下安閑〕〔御陵在河内之古市高屋村也

〔日本書紀十宣化〕〔四年二月甲午、天皇崩于檜隈廬入野宮、十一月丙寅、葬天皇於大倭國身狹桃花鳥坂上陵、

〔享保年間山陵誌宣化〕　大和國高市郡鳥屋村に在、字ミサンザイ、

〔日本書紀十欽明〕〔三十二年四月壬辰、天皇遂崩于內寢、九月、葬于檜隈坂合陵、

〔日本書紀二十崇峻〕〔一年四月甲子、葬譯語田天皇〇敏達於磯長陵、〇延喜式、磯長尾陵ニ作ル、

〔古事記下敏達〕〔御陵在川內科長也

〔日本書紀二十用明〕〔二年四月癸丑、天皇崩于大殿、七月甲午、葬于磐余池上陵、

〔日本書紀二十推古〕〔二十二年九月、改葬橘豐日天皇〇用明於河內磯長陵、〇延喜式、磯長原陵ニ作ル、

〔古事記下用明〕〔御陵在石寸掖〇掖恐誤池上、後遷科長中陵也、

〔日本書紀二十崇峻〕五年十一月乙巳、馬子宿禰、〇略中乃使東漢直駒殺于天皇、是日葬天皇于倉梯岡陵、

〔日本書紀二十推古〕三十六年三月癸丑、天皇崩、九月戊午、〇略中先是天皇遣詔於群臣曰、比年五穀不登、百姓大飢、其爲朕與陵、以勿厚葬、便宜葬于竹田皇子之陵、壬辰、葬竹田皇子之陵、

〔古事記下推古〕御陵在大野岡上、後遷科長大陵也、〇延喜式、磯長山田陵ニ作ル、

〇按ズルニ、竹田皇子ノ墓ヲ陵ト云フハ、推古天皇ヲ葬ルニ就テ言ヘルナラン、

〔日本書紀二十皇極〕四年十二月壬寅、葬息長足日廣額天皇〇舒明于滑谷岡、二年九月壬午、葬息長足日廣額、〇延喜式、押坂ニ作ル、皇于押坂陵、〇内

〔日本書紀二十天智〕六年二月戊午、合葬天豐財重日足姫天皇〇齊明與間人皇女〇孝徳后於小市岡上陵、〇中略皇太子〇天智之所勅、憂恤萬民之故、不起石槨之役、所冀永代以爲鏡誡焉、

〔山陵志〕越智村西、則車木村也、〇略中其東岡崇數十仞、呼爲天皇山、是蓋山陵也、

〔日本書紀二十孝徳〕五白雉五年十月壬子、天皇崩于正寢、十二月己酉、葬于大坂磯長陵、〇略中山陵山城國宇治郡山科鄉北山、〇延喜式、山科陵ニ作ル、

〔扶桑略記五天智〕十年十二月三日、天皇崩、〇略中

〔日本書紀二十天武〕元年五月、〇略中是月朴井連雄君奏天皇曰、臣以有私事、獨至美濃、時朝廷〇文弘宣美濃尾張兩國司曰、爲造山陵、〇天豫差定人夫、則人別令執兵、臣以爲非爲山陵、必有事矣、〇略中天皇惡之、因令問察、以知事已實、〇略下

〔萬葉集二挽歌〕從山科御陵、〇天智退散之時、額田王作歌一首、

八隅知之和期大王之、恐也御陵奉仕流、山科乃鏡山爾夜者毛夜之盡晝者母日之盡哭耳呼泣乍在而哉、百磯城乃大宮人者去別南、

〔黒川道祐石山紀行〕十三日、〇天和三年五月昧爽白雲村ヲ出テ、三條ノ橋ヲ渡リ、〇略中日岡ニ到リ、御廟

野ニ到リ、天智天皇ノ廟社ヲ拜ス、石ノ華表ニ額アリ、天智天皇ノ四字分明ナリ、毎年十二月、天皇崩日祭アリトナム、社ノ後ニ陵アリ、陵ナン正シク奉葬所ト見ユ、陵山ノ上、古木森蔚トシテ、草茅繁茂ス、古ハ四方ニ池廻レリト見エテ其跡殘レリ、

〔日本書紀二十天武〕元年七月辛亥、男依等到瀨田、〇略中則大友皇子、〇弘文於是大友皇子、走無所入、乃還隱山前以自縊焉、

〔前王廟陵記下〕山前長等山之山前也、

〔日本書紀三十持統〕元年十月壬子、皇太子〇草壁率公卿百寮人等、幷諸國司國造、及百姓男女、始築大内陵、

二年十一月乙丑、葬于大内陵、〇延喜式、檜隈ニ作ル、

〔續日本紀三文武〕大寶三年十二月癸酉、從四位上當麻眞人智德、率諸王諸臣、奉誄太上天皇、〇持統誄曰、

大倭根子天之廣野日女尊、是日火葬於飛鳥岡、壬午、合葬於大内山陵、〇天武

〔續日本紀四元明〕慶雲四年十一月甲寅、葬倭根子豐祖父天皇〇文武于安古山陵、〇延喜式、檜隈安古岡上陵ニ作ル、

〔山陵志〕文武陵、〇略中按以陵上孤松茂翳、今呼高松山、一名美貴佐伊、

〔續日本紀八元正〕養老五年十月丁亥、太上天皇〇元明崩、召入右大臣從二位長屋王、參議從三位藤原朝臣房前詔曰、〇略中朕崩之後、宜以大和國添上郡藏寶山雍良岑、造竈火葬、莫改他處、謚號稱某國某郡朝庭馭宇天皇、流傳後世、庚寅、太上天皇又詔曰、〇略中就山作竈、茨棘開場、即爲喪所、又其地者、皆殖常葉之樹、即立刻字之碑、十二月乙酉、太上天皇〇元明葬於大和國添上郡椎山陵、〇延喜式、奈保山東陵ニ作ル、不用葬儀、由遺詔也、

〔前王廟陵記上〕今按據延喜式觀之、則椎猶字之誤、猶訓奈保、

〔大日本史禮樂四〕新撰字鏡、椎訓奈良乃木、椎山即奈良山也、

〔今昔物語三十一〕元明天皇陵點定惠和尚語第三十五

今昔、元明天皇ノ失給ヘリケル時、陵取ラムガ爲ニ、大織冠ノ御一男、定惠和尚ト申ケル人ヲ差シテ、大和國ヘ遣シケリ、然レバ吉野郡藏橋山ノ峯、多武峯ノ岸重レルガ後ニ峯有リ、前ヘニ七ノ谷向テ有リ、定惠和尚此レヲ見給テ、哀レ微妙カルベキ止事无キ地カナ、但シ天皇ノ御墓所ニテハ左右ハ下レリ、□□ノ人不有ジ、前々モ狹キニ依テ不取ザリケル也ケリトテ不取ナリヌ、然テ其麓ニ戌亥ノ方廣キ所有リ、其ヲ取ツ、輕寺ノ南也、此レ元明天皇ノ檜前ノ陵也、石ノ鬼形共ヲ廻ノ池邊陵ノ基様ニ立テ、微妙ク造レル石ナド外ニハ勝レタリ、

〔東大寺要錄八裏卷〕奈保山太上天皇〇元明山陵碑文

馬腦石鏤之

大	倭	國	御	谷	郡	平	城
之	宮	馭	宇	八	洲		
太	上	天	皇	之	陵	高	其
所	也						
養	老	五	年	歲	次	辛	酉
冬	十	二	月	癸	酉	撥	十
三	日	乙	酉	葬			

碑高三尺許
廣二尺許
厚一尺許

〔好古小錄〕此碑何レノ時ニカ土中ニ埋レテ後、御陵ノ南ノ崩ルヽ所ヨリ出タルヲ、奈良坂ノ春日社ノ庭中ニ移シ立、

〔續日本紀十聖武〕天平二十年四月丁卯、是日火葬太上天皇〇正元於佐保山陵、

〔續日本紀十孝謚〕天平勝寶二年十月癸酉、太上天皇〇正元改葬於奈保山陵、〇延喜式、奈保山西陵ニ作ル、

〔續日本紀十孝謚〕天平勝寶八歲五月壬申、奉葬太上天皇〇聖武於佐保山陵、〇延喜式、佐保山南陵ニ作ル、

〔續日本紀三十光仁〕神護景雲四年〇寶龜元年八月癸巳、興左右京四畿內伊賀近江丹波播磨紀伊等國役夫六千三百人、以供山陵、〇稱戊戌、授正五位上、以其父故式部卿從二位鈴鹿王舊宅、爲山陵故也、丙午、葬高野天皇〇稱德於大和國添下郡佐貴鄉高野山陵、

〔西大寺文書〕神護景雲三年九月四日、崩于西宮寢殿、春秋五十三、即築山陵於西大寺之東北、

〇按ズルニ、三年九月ハ四年八月ノ誤リナリ、

〔皇胤紹運錄〕稱德天皇、〇中略葬大和國高野陵（タカノ）、西大寺北也、

〔西大寺資財流記〕夫西大寺者、平城宮御宇寶字稱德孝謙皇帝、去天平寶字八年九月十一日誓願、〇中略居地參拾壹町、在右京一條三四坊、東限佐貴路、除東北角儀寮、南限一條南路、西限京極、除山陵北限京極路、

〔帝王編年記十淳仁〕天平神護元年乙巳十月崩、御年三十二、奉葬淡路國三原郡、

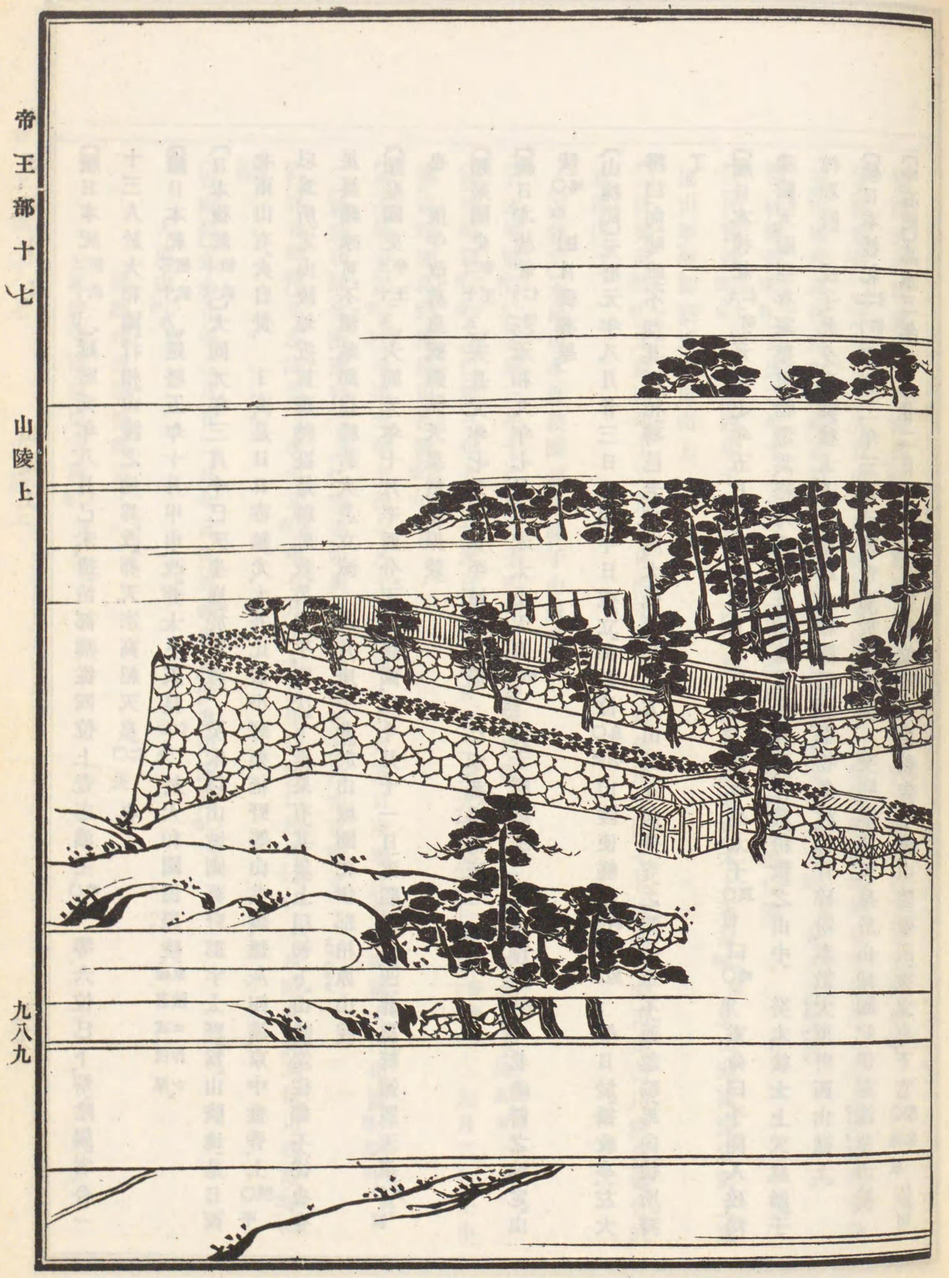
〔續日本紀三十光仁〕二寶龜三年八月丙辰、遣從五位下三方王、外從五位下士師宿禰和麻呂、及六位已下三人、改葬廢帝〇淳仁於淡路、

〔續日本紀三十光仁〕五寶龜九年三月己巳、勅淡路親王〇淳仁墓宜稱山陵、〇中略充隨近百姓一戶守之、

〔續日本紀三十光仁〕六天應元年十二月丁未、太上天皇〇光仁崩、庚申、葬於廣岡（ヒロカ）山陵、

桓武天皇山陵新圖

諸陵寮藏



〔續日本紀桓武三十七〕延曆元年八月己未、遣治部卿從四位上壹志濃王、〇中略等六位已下、解陰陽者、合一十三人、於大和國、行相山陵之地、爲改葬天宗高紹天皇〇光仁也、

〔續日本紀桓武三十九〕延曆五年十月甲申、改葬太上天皇〇光仁於大和國田原陵、延喜式、田原東陵ニ作ル、

〔日本後紀桓武十三〕大同元年三月辛巳、天皇崩於正寢、癸未、以山城國葛野郡宇太野爲山陵地、是日西北兩山有火自焚、丁亥、是日日赤無光、大井比叡小野栗栖野等山共燒、煙灰四滿、京中晝昏、上城〇平以爲所定山陵地近賀茂神、疑是神社致災火乎、即決卜筮、果有其祟、上曰、初卜山陵、筮從龜不從也、今災異頻來、可不愼歟、即自禱祈、火災立滅、四月庚子、葬於山城國紀伊郡柏原山陵、

〔類聚國史帝王三十五〕大同元年十月辛酉、令天下諸國、以今月十一日、素服擧哀、改葬皇統彌照天皇〇桓武也、庚午、改葬皇統彌照天皇於柏原陵、

〔類聚國史帝王三十五〕天長元年七月甲寅、平城天皇崩、己未、葬楊梅陵、

〔續日本後紀仁明二〕承和九年七月丁未、太上天皇〇峨嵯崩于嵯峨院、戊申、擇山〇峨嵯北幽僻之地、定山陵、〇略中即日御葬畢、

〔山槐記〕元暦元年八月廿三日己卯、今日被立御卽位〇後鳥羽山陵使嵯峨參議左大辨經房、翌日於攝政亭、左大辨曰、向嵯峨不知其所、相尋邑老之處、大覺寺內北方山云々、向件寺之間、余車不通、忽騎馬向彼所拜了、

〔續日本後紀仁明九〕承和七年五月辛巳、後太上天皇〇淳和顧命皇太子〇恒貞曰、〇略中重命曰、予聞人歿精魂歸天、而空存冢墓、鬼物憑焉、終乃爲祟、長貽後累、今宜碎骨爲粉散之山中、癸未、後太上天皇崩于淳和院、戊子、此夕奉葬後太上天皇於山城國乙訓郡物集村、御骨碎粉、奉散大原野西山嶺上、

〔續日本後紀仁明二十〕嘉祥三年三月己亥、帝崩於清涼殿、癸卯、奉葬天皇於山城國紀伊郡深草山陵、

〔中右記〕嘉承三年二月廿二日癸卯、今日御卽位〇鳥羽由、被告申諸山陵使所被立也、下官〇藤原宗忠依可勤深草山陵使、未刻許參內、〇略中向嘉祥寺從西大門南行、更頗東行、下居山陵前、〇略下

〔文德實錄〕天安二年九月庚申、大納言安倍朝臣安仁、率陰陽權助滋岳朝臣川人、助筮朝臣名高等、至山城國葛野郡田邑鄉眞原岳點定山陵、甲子、夜葬大行皇帝〇文德於田邑山陵、

〔三代實錄清和〕天安二年十二月十日丁酉、詔改眞原山陵爲田邑山陵、

〔三代實錄陽成八〕元慶四年十二月七日丙戌、是夜酉四刻、奉葬太上天皇〇清和於山城國愛宕郡上粟田山、奉置御骸於水尾山上、

〔一代要記清和〕元慶四年十二月四日、崩于圓覺寺、時年卅一、同七日、火葬於粟田山白川陵、置御骨於水尾山、

〔山陵志〕水尾山、本丹波國地、今隸于山城葛野、

〔日本紀略村上〕天曆三年十月三日壬申、今夜奉葬陽成院太上天皇於神樂岡東北、〇鏡裏書又見大

〔扶桑略記光孝二十〕仁和三年八月廿六日丁卯、是日巳二刻、天皇崩於仁壽殿、春秋五十八　九月二日壬申、葬山城國葛野郡後田邑陵、一云、小松山陵、

〔帝王編年記宇多四〕承平元年辛卯七月十九日崩、八月五日庚申、火葬葛野郡大內山陵、仁和寺奥、池尾山、

〔勅撰和歌名所要抄十九〕仁和寺の奥、池尾の山を大內山と號す、

〔仁和寺御傳〕宇多法皇　承平元辛卯年七月十九日甲辰、崩仁和寺、御年六十五　亥時、奉移大內山魂殿、依遺詔不置陵

〔吉續記〕文永五年六月廿二日、今日依異國事、被發遣山陵使、〇略中

大內山〇宇多

參議藤原朝臣高定

紀伊守橘朝臣兼朝〇略中

入夜堀川宰相歸參內、依無陵所也、於仁和寺中雖相尋、更無御所、參御室尋申之處、遺詔不置陵云々、其上無才學之由被仰之間空歸參、

〔大日本史禮樂四〕文永中、不能識其處者可疑矣、意帝遺詔不置山陵、故仁和寺僧徒、拘泥遺詔、而不之告乎、

〔日本紀略一醍醐〕延長八年十月十日庚子、奉葬大行皇帝○醍醐於山城國宇治郡山科陵、醍醐寺北、笠取山西、小野寺下、

〔扶桑略記二十朱雀〕延長八年九月廿九日、太上天皇崩、醍醐、四十六、十月十日、葬後山科山陵、

〔江家次第十一月荷前事○略〕

後山階　頭書、路或自北山階車、或踰阿彌陀嶺乘馬、曼荼羅寺艮角也、

〔皇年代略記朱雀〕天曆六年八月十五日崩、葬山城國來定寺北野陵、置御骨於醍醐山陵、

〔帝王編年記十五朱雀〕天曆六年八月十五日崩、御年三十、同廿日癸卯、葬來定寺、或記云、葬法性寺東中尾南原陵、置御骨於醍醐山陵傍、

〔日本紀略五冷泉〕康保四年六月四日辛酉、今夕奉土葬先皇○村上於山城國舊野郡田邑鄉北中尾、

〔山槐記〕治承四年七月廿一日辛未、於福原被立山陵使、○略中村上仁和寺長尾八條三位宗清

〔日本紀略一條〕寬弘八年十一月十六日乙酉、今夜奉火葬太上天皇○冷泉於櫻本寺前野、○略中木工頭雅通朝臣奉持御骨、奉安置件山傍、奉埋御骨了、

〔帝王編年記十六冷泉〕寬弘八年十月廿四日崩、御年六十二、同十一月十六日乙酉、葬櫻本寺乾原、

〔法成寺攝政記〕寬弘八年十月廿四日癸亥、入夜則隆來云、院○冷泉御惱極重不覺給云々、仍馳參、口時崩給、十一月十三日壬午、參入冷泉院、以惟貞朝臣幷吉平等、令見御葬所幷御陵所、還來申云、櫻本寺北方在平地、件處御葬所幷、御陵吉由、吉平定申者、

〔皇陵志一〕冷泉○略中此火葬所山城國葛野郡小野之鄉下村ニ有之、陵ハ同郡同鄉上村ニ有之候、

〔日本紀略一條〕正曆二年二月十九日庚申、葬太上法皇○圓融於圓融寺北原、置御骨於村上山陵傍、

〔小右記〕長德五年○長保元年七月廿三日癸卯、山陵使立云々、○略中後邑上○圓融參議懷平、

〔三僧記〕保壽院御幸事、保延三年九月十四日癸酉、自今夜於永嚴僧都房、院○鳥羽御祈、○略中件房圓融院山陵隔壁也、代々御骨及于堀川院、皆御坐此所、仍臨幸尤可有憚云々、

〔日本紀略一條〕寬弘五年二月十七日戊申、今夜奉葬花山法皇於紙屋川上法音寺北、

〔法成寺攝政記〕寬弘五年二月十七日戊申、花山院御葬送、大和寺東邊云々、

〔榮花物語九陵〕寬弘八年六月廿二日のひるつかた、あさましうならせ給ひぬ、○中略、一條、かくて八日○七のゆふべ、いはかげといふ處へおましまします、

〔日本紀略一條〕寬弘八年六月廿二日甲子、午刻太上皇○一條院中殿、春秋三十二、七月八日己卯、○略中今日奉葬先皇於北山長坂野、左大臣以下參集、正光卿持御骨、暫奉安置於圓成寺、

〔大鏡裏書〕寬弘八年七月八日、奉葬于北山長坂野、安置御骨於圓成寺、

〔皇年代私記一條〕寬弘八年七月八日己卯、葬石陰、暫安置、九日、奉渡御骨圓成寺、

〔權記〕寬弘八年七月廿日酉刻歸參院、權律師懷壽尋圓云、圓融院法皇御陵邊可奉收○一條之由、御存生有天氣、去九日早旦、於山作所丞相云、土葬井法皇御陵側可奉置之由、御存所仰也、日者總不覺、只今思出也、然而言而無益事已定也云云、

〔小右記〕寬弘八年七月廿日辛卯、傳聞故院○一條御骸骨、深○益納御骨壺、作如倉代物、方二尺、一面有戶、一納辛櫃、辛櫃上造小屋居寶形、安置戶內、三箇年後、又更可奉移御存生之時御本意處云々、○圓融御本意處、是圓融院御陵邊也、

〔左經記〕寬仁四年六月十六日丙申、故一條院御骨、爲避方忌、年來奉置圓成寺、而依方開、主計頭吉平朝臣奉仰、可奉置御骨之處、卜鎭圓融寺邊、今日奉渡、○略中以戌刻奉遷御骨於圓融寺北方、圓融院御陵邊也、

〔日本紀略十三後一條〕寛仁元年五月十二日己酉、今夜奉ㇾ葬ニ三條院於石垣、

〔帝王編年記十七後一條〕寛仁元年五月十二日戊戌、葬ニ船岡西邊ニ奉ㇾ埋ニ御骨於北山小寺中ニ、

〔類聚雜例〕長元九年四月十七日乙丑、主上一〇後一條自去三月之比不例御、〇中略遂崩ニ於清涼殿ニ、十三日庚寅、被ㇾ定ニ雜事ニ、〇中略及ニ晩景ニ資業朝臣時親等歸參申云、巡ニ檢神樂岡東邊ニ、自ニ一條ㇾ以南ニ、自ニ上東門ㇾ以北ニ、自ニ御在所ㇾ申方有ニ便所ㇾ、以ニ其地ㇾ可ㇾ爲ニ山作所ㇾ也、

〔日本紀略十四後一條〕長元九年四月十七日乙丑、戌刻天皇落飾、崩ニ于清涼殿ニ、五月十九日丙申、奉ㇾ火ニ葬淨土寺西原〔神樂岡東面也〕〇中略從ニ今日ㇾ立ニ伽藍於神樂岡東ニ、名曰ニ菩提樹院ニ、御葬之間長家以下拾ニ御骨ㇾ、經ニ輔懸ニ御骨ㇾ、安ニ置淨土寺ニ畢、

〔百練抄四後朱雀〕長曆元年六月二日、上東門院〇後一條母后彰子供ニ養菩提樹院〔後一條院御墓所、號ニ櫻下ニ〕

〔扶桑略記二十一後一條〕寛德二年正月十八日、太上天皇〇後朱雀春秋卅七、於ニ東三條第ニ崩、二月廿一日戊申、葬ニ高隆寺乾原ニ、置ニ御骨於圓敎寺ニ、

〔百練抄四後冷泉〕天喜三年十月廿五日、供ニ養圓敎寺新堂ニ、題號ニ圓乘寺ニ、是先皇〇後朱雀御願未ㇾ遂也、

〔玉海〕安元三年五月三日壬寅、頭書、二東記云、〇略圓乘寺後朱雀之由、賴業所ㇾ申也、

〔扶桑略記二十九後冷泉〕治曆四年四月十九日庚申、寅刻天皇於ニ高陽院中殿ニ崩、五月五日丙子、葬ニ船岳西野ニ、安ニ御骨於圓敎寺ニ、

〔皇年代略記後三條〕延久五年五月七日崩、十七日、葬ニ神樂岡南原ニ、安ニ置御骨於禪林寺ニ、

〔扶桑略記三十白河〕延久五年五月七日庚戌、太上天皇三〇後三條春秋四十崩、十七日庚申、葬ニ神樂岳東原ニ、六月廿二日甲午、於ニ圓宗寺ニ、被ㇾ修ニ七々御法事ニ、

〔吉記〕壽永二年六月廿一日甲寅、被ㇾ立ニ山陵使ニ、圓宗寺後三條院、

〔中右記〕大治四年七月十五日辛卯、今夕太上法皇〇白河御葬送也、〇中至ニ御墓所ニ、香隆寺乾野、堀河院御墓所近邊云々、御墓所衣笠岳之東下、諸寺參仕十六日壬辰、山陵事辰刻也、仁和寺宮二人以下、奉ニ拾御骨ニ、藤宰相長實奉ㇾ懸ニ御骨ㇾ、奉ニ送香隆寺ニ、

〔百練抄六崇德〕天承元年七月九日、白河院御骨、自ニ香隆寺ニ奉ㇾ渡ニ鳥羽殿三重塔ニ、是御平生叡慮也、

〔吉記〕壽永二年六月廿一日甲寅、被ㇾ立ニ山陵使ニ、成菩提院〔白河院〕

〔中右記〕嘉承二年七月廿四日戊申、今夕御喪送也〇堀河云々、〇中略至ニ高隆寺坤方野ニ云々、奉ニ荼毘ニ、〇中略奉ニ拾御骨ㇾ、奉ニ納ニ荼埦ニ、源中納言國信卿奉ニ懸頸ニ、奉ニ置香隆寺僧房ニ、〇中略雖ㇾ可ㇾ奉ニ置圓融院山陵ニ、從ニ今年大將軍方在ニ西、仍三箇年可ㇾ御ニ此寺ニ也、

〔百練抄五鳥羽〕天永四年三月廿二日、先朝〇堀河御骨、從ニ香隆寺ニ奉ニ移圓融院ニ、

〔本朝世紀〕久安五年十二月廿五日癸酉、今日御元服由被ニ告ニ山陵ニ、仍山陵使、各可ㇾ向ニ安ニ置御骨之所ニ也、〇中略香隆寺被ニ安ニ置堀河院御骨ニ、而號ニ後圓敎寺ニ也、

〔帝王編年記二十後白河〕保元元年七月二日、申時法皇崩ニ御於鳥羽殿ニ、御年五十四、即夜奉ㇾ渡ニ安樂壽院御塔ニ、擬ニ山陵ニ也、號ニ鳥羽院ニ、

〔百練抄七後白河〕保元元年七月二日、禪定仙院〇鳥羽崩于鳥羽安樂壽院、五十四、葬同ニ御塔ニ、擬ニ山陵ニ也、

〔保元物語三〕新院御經沈附崩事

御年四十六ニテ、志度ト云所ニテ隱サセ給ヒケルヲ、白峯ト云所ニテ烟ニナシ奉ル、〇中略治承元年六月廿九日、追號有テ崇德院トゾ申ケル、

〔源平盛衰記八〕讃岐院事

長寛二年八月廿四日、御年四十六ニテ、支度ト云所ニテ遂ニ隱レサセ給ニケリ、〇崇德讃岐御下向ノ後九年ニゾ成給ケル、白峯ト云山寺ニ送奉リ燒上奉ケルガ、〇中略御骨ヲバ必高野へ送レトノ御遺言アリケルトカヤ、

〔百峯寺緣起〕長寬二年八月廿六日に、御年四十六と申に崩御ならせまします、○中略、崇徳、同九月十八日戌のときに、當寺の西北の石巖にて茶毘し奉る、これも御遺詔の故なり、

〔愚昧記〕安元三年五月十七日丙辰、讃岐院○崇徳御事、一以彼御墓所、勅稱山陵、

〔吾妻鏡四〕元暦二年四月廿九日壬午、今日以備中國妖尾郷、被付崇徳院法華堂、是爲沒官領、武衛所令拜領給也、

〔吳範記〕久壽二年七月廿三日戊辰、午刻天皇○近衛崩於近衛殿、○中略、八月一日丙子、今日近衛院御葬送也、寅刻陰陽助賀茂在憲、鎮山作所地、○船岡西北、

〔一代要記九近衛〕久壽二年七月廿三日、於近衛内裏崩、○中略、八月一日、火葬船岡西野、御骨暫置知足院常行堂、

〔百練抄七二條〕長寬元年十一月廿八日、奉渡近衛院御骨於鳥羽東殿、美福門院御堵、

〔大外記師茂勘例外記所引〕建久三年三月十三日、太上法皇後白川院崩給、十五日、法皇御葬送也、以平生之儀、奉渡蓮華王院法花堂、

〔百練抄十後鳥羽〕建久三年三月十五日丁亥、法皇○後白河凶禮也、以御平生之儀、奉渡蓮華王院東法華堂、

〔吾妻鏡十二〕建久三年三月十六日戊子、未刻京都飛脚參著、去十三日寅刻、太上法皇○後白河於六條殿崩御、廿六日戊戌、彼崩御事、今日具披露于關東、○中略、十五日、奉葬法住寺法華堂、

〔山陵志〕蓮華王院、舊是法住寺地、法住寺爲木曾義仲所火、就其墟而所創也、

〔顯廣王記〕永萬元年七月廿九日丙子、去曉新院○二條御葬送也、高隆寺原

〔一代要記二十條〕永萬元年八月七日、葬香隆寺艮野、

〔長門本平家物語一〕永萬元年の春頃より、主上○二條不豫のことおはしまし、六月廿七日、新帝○

○條御即位のこと有しに、同七月廿八日、御とし廿三にて新院うせさせ給ひにき、新院とは二條院の御事なり、八月七日、かうりう寺にあからさまにやどしまゐらせて、のち彼寺のうしとらにあんだい野といふ所にをさめたてまつる、

〔百練抄八高倉〕嘉應二年五月十七日、二條院御骨、自香隆寺本堂渡三昧堂、件堂以二條皇居崩御殿、左大臣渡造之、

〔一代要記十六條〕安元二年七月十七日崩、○中略、葬栖霞寺堂、

〔山槐記〕治承五年正月十四日、新院○高倉巳崩御云云、今夜渡御邦綱卿清閑寺小堂、抑是六條院御墓所堂云々、

〔長門本平家物語十二〕養和元年正月十四日、六はらの池殿にてつひに崩御なりぬ、新院○高倉おはせおかせ給ひけるとて、今夜やがて東山のふもと、清閑寺といふ山寺へおくり奉る、

〔山槐記〕治承五年正月十四日辛酉、新院○高倉巳崩御、○中略、今夜渡御邦綱卿清閑寺小堂、抑是六條院御墓所堂云々、

〔玉海〕建久六年九月三日甲申、資實申、高倉院法華堂三昧僧供田事、六口各二町、可充賜交坂大墓兩御領之由仰畢、

〔玉海〕元暦二年四月四日丁巳、去三月廿四日午刻、於長門國團浦合戰、○中略、但舊主○安徳御事不分明云々、建久二年閏十二月十四日戊午、未刻參院、以資實入見參、崇徳院、幷安徳天皇等崩御之所建一堂、可資彼菩提幷亡命之士卒滅罪之勝因事、可申沙汰之由仰泰經了、廿八日壬申、今日以宗頼被仰條々事等、又長門國可建一堂之由可宣下者、皆任御定可宣下之由仰了、

○按ズルニ、安徳天皇ノ陵地、此文ニテハ明ナラズ、尚下ニ掲ゲタル表ニ就キテ見ルベシ、

〔一代要記十一後鳥羽〕延應元年二月廿二日、於隱岐國崩、○中略、同四月十二日、依有順風、御骨令渡出雲國

給、同五月二日、立出雲國、同十四日、著御水成瀨殿、同十五日、入御大原西林院御堂、但過宮城奉入大原、安置之、○略中仁治二年二月八日、御骨自西林院御堂奉渡法華堂、

〔平戸記〕仁治三年四月十六日戊辰、清範入道送消息問云、大原法華堂（順徳院御墓所（後鳥羽院）○下略）

〔增鏡三藤衣〕延應元年といふ二月廿二日、六そぢにてかくれさせ給ぬ、○後鳥羽中略、ちかき山にてれいのさほふになし奉るも、むげに人ずくなに心ぼそき御ありさまいとあはれになむ、御骨をば能茂といひし北面の、入道して御ともにさぶらひしぞ、くびにかけ奉りて宮こにのぼりける、さて大原の法華堂とて、いまもむかしの御莊の所々、三昧料によせられたるにてつとめたえず、

〔一代要記十一土御門〕寛喜三年十月十一日崩、三十七、月日、納御骨於西山金原（カネガハラ）御堂、

〔明月記〕天福元年十二月十一日辛巳、承明門院○土御門后源在子月來御經營金原御堂、纔被終功、依明日供養、今曉渡御件所、被奉安故院○土御門御骨、被立此堂御遺誡云々、

〔百練抄十五後嵯峨〕寛元元年四月廿八日甲戌、佐渡院○順徳御骨、康光法師奉懸首、渡御大原云々、五月十三日、佐渡院御骨、今日奉納大原御墓所、

〔佐渡年代記〕覺

高八斗七升九合七勺　佐州雜太郡竹田村之內

七斗五升九合七勺　本途

內

壹斗貳升　屋敷地子

右高八斗七升九合七勺に、屋敷間數緊五拾間、横五拾間、

右は順德院御廟所、今度被遊御寄附候間、從當未年物成、眞野村眞輪寺へ引渡申候以上、

延寶七年未九月

御勘定所

曾根五郎兵衛○佐渡奉行

喜右衛門○勘定奉行甲斐莊

五兵衛○同德山

内藏允○同杉浦正照

備中守○同岡部駿河勝重初名歟

能登井○老中土利房

加賀久○老中大保忠朝

美濃葉○老中稻正則

表書之通、佐州雜太郡竹田村之內、高八斗七升九合七勺之所、從當年物成、眞輪寺へ可被相渡候斷は本文に有之候、

〔一代要記十二後堀河〕文曆元年八月六日崩、○略中同十一日、葬東山觀音寺傍、

〔皇代記後堀河〕天福二年○文曆元年八月六日、亥刻崩、○略中十三日、葬觀音寺北邊、

〔後中記〕仁治三年正月九日壬辰、自丑刻許大略御絕入、○條四廿五日戊申、今夜四條院御葬禮、○略中入御泉涌寺畢、

〔增鏡四神山〕ひ月の五日○仁治三年より、丙の上○條四例ならぬ御事にて、九日の曉かくれさせ給ぬ、○略中廿五日に、東山の泉涌寺とかやいふほとりにをさめたてまつる、

〔五代帝王物語〕十七日○文永九年二月卯の時に、法皇○後嵯峨つひに御事きれさせ給ふ、○略中御骨は帥中納言經任掛まゐらせて、法華堂建立のほどまづ淨金剛院へ入せ給ふ、

〔帝王編年記二十六龜山〕文永十年二月十一日、嵯峨殿法華堂供養、大宮院御遺誉御導師天台座主、上皇○龜山御幸、

〔吉讀記〕文永十年六月廿一日辛未、今日先院御骨、○後嵯峨遷御法華堂也、

〔入道左府記〕嘉元二年七月十七日、今夜後深草院御葬送也、○中略御骨被納安樂行院佛壇下、

〔玉葉和歌集十七雜〕遊義門院○後宇多后　姈子内親王　かくれさせ給て後、後深草院の御忌日に、法華堂へ御幸ありてよませ給ける、

院○伏見御製

こゝをこそではわけこし友もつゆときえてひとりしをるゝふかくさの野べ

〔增鏡十一今日の日陰〕としかへりぬれは、嘉元も三とせになりぬ、萬里小路殿の法皇、○龜山又御なやみとて龜山殿へうつらせ給ふ、○略中九月十五日の明ぼのに、つひにかくれさせ給ひぬ、○略中おなじ十七日に、御わざの事せさせ給ふ、○略中御骨もこの院に法華堂をたてさせ給へば、龜山院とぞ申べかめる、

〔文應皇帝外記〕嘉元三年秋、上皇○龜山病龜山宮、召圓○僧祖圓館壽量院、時々侍看養、○略中圓馳使告予、○僧師錬予便陪壽量、九月望、上皇崩、予陪之四日也、閣毘後藏仙骨於三所、淨金剛院、南禪寺、金剛峰寺、且順願命也、黄門侍郎藤賴藤圭喪事、於淨金剛院、分仙骨納五青瓷、三瓷留淨金剛院、南禪金剛峰各一、圓令予承仙瓷、予擎歸龍山、○南禪寺共圓國寶塔、

〔皇代記後宇多〕元亨四年六月廿五日、寅刻崩大覺寺、同廿八日、葬蓮華峯寺傍山、

〔伏見上皇御中陰記〕文保元年九月三日、寅刻法皇○伏見有御事、四日、今日御葬禮事、山作所深草也○中略丑刻奉入深草殿、五日、今曉前大納言經親卿、舊執權也於深草出家、即直參御茶毘所、午刻事了之間、以御骨」

〔皇代記後宇多〕元亨四年六月廿五日、寅刻崩大覺寺、同廿八日、葬蓮華峯寺傍山、

〔伏見上皇御中陰記〕文保元年九月三日、寅刻法皇○伏見有御事、四日、今日御葬禮事、山作所深草也○中略丑刻奉入深草殿、五日、今曉前大納言經親卿、舊執權也於深草出家、即直參御茶毘所、午刻事了之間、以御骨」

刻奉入深草殿、五日、今曉前大納言經親卿、舊執權也於深草出家、即直參御茶毘所、午刻事了之間、以御骨」

奉懸頸、奉納後深草院法華堂、

〔皇年代略記後伏見〕延元元年四月六日、崩於持明院殿、四十九號後伏見院、依遺詔也同八日、葬於嵯峨野、安仙骨於後深草院法華堂、

〔風雅和歌集十七雜〕後伏見院かくれ給ひてのち、仙骨を從三位守子の墓所にならべて置奉るべきよし、御遺誡にまかせて納奉るとて、

おく露もひとつはちすにむすべとやけぶりもおなじ野べにきゆらん

〔皇代記後二條〕德治三年八月廿六日、崩二條高倉皇居、同廿八日、奉葬北白河殿、

〔慈嚴僧正記〕貞和四年十一月十一日、午刻太上天皇、○花園於仁和寺荻原仙居薨、十三日、御葬禮、○略於十樂院上山搆山作所奉葬之、

〔太平記二十一〕先帝崩御事

南朝ノ年號、延元三年八月九日ヨリ、吉野ノ主上○後醍醐御不豫ノ御事有ケルガ、次第ニ重ラセ給、○略八月十六日丑刻ニ、遂ニ崩御ナリニケリ、○中葬禮ノ御事、兼テ遺勅有シカバ、御終焉ノ御形ヲ改メズ、棺槨ヲ厚シ、御座ヲ正シテ、吉野山ノ麓、藏王堂ノ艮ナル林ノ奥ニ、圓丘ヲ高ク築テ、北向ニ奉葬、

〔參考太平記二十一〕後醍醐天皇崩御事

毛利家、天正本云、○中略藏王堂ノ艮ノ林ノ奥ニト云、天正本云、塔尾云所云々、葬奉ル云々、

〔吉野拾遺〕十五日○延元四年八月の夜、○略中いざよひの月と共に雲がくれさせ給ひけるに、つきせたがひ奉りし人々は、だゞやみぢになよふ心ちなんし給ひける、御すがたを改奉らで、如意輪寺の御堂のうしろのかたにをさめ奉り、○略下

〔新葉和歌集十六雜〕正平七年きさらぎの十日餘り、吉野にまうでゝ、塔尾の御陵○後醍醐など見奉りけるに花はなだざかぬ頃にて、よろづものあはれにおぼえければ、思ひつゞけ侍ける、

祥子内親王

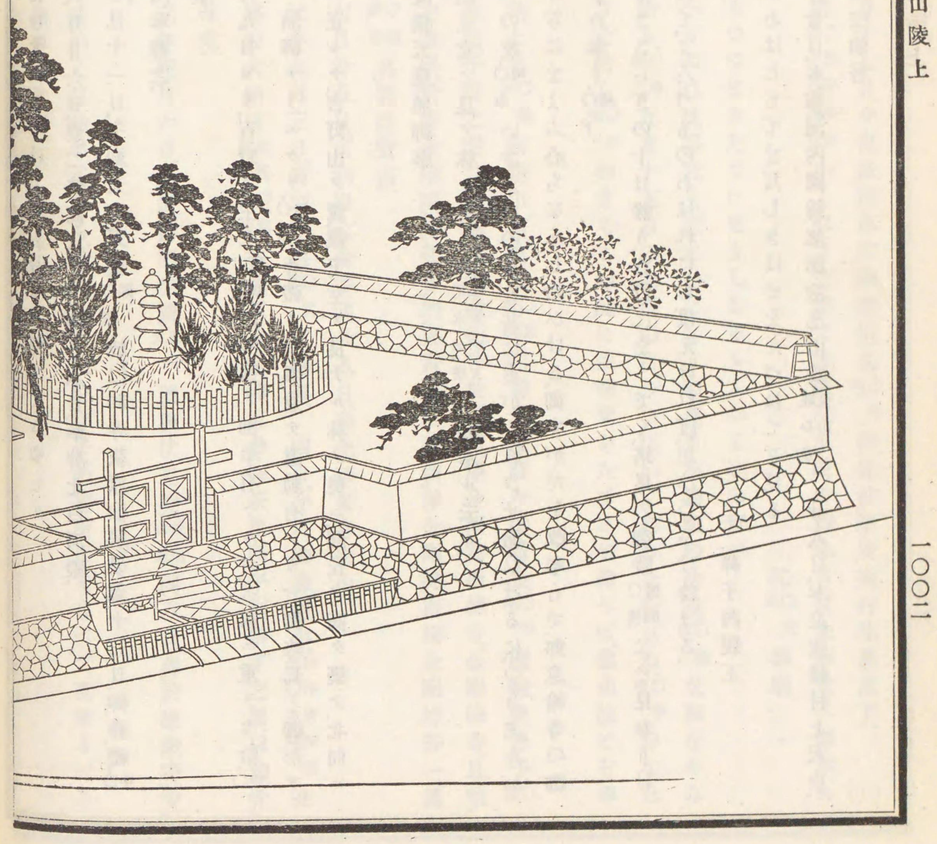
さく花のちるわかれにはあはじとてなだしきはぢをたづねてぞ見る

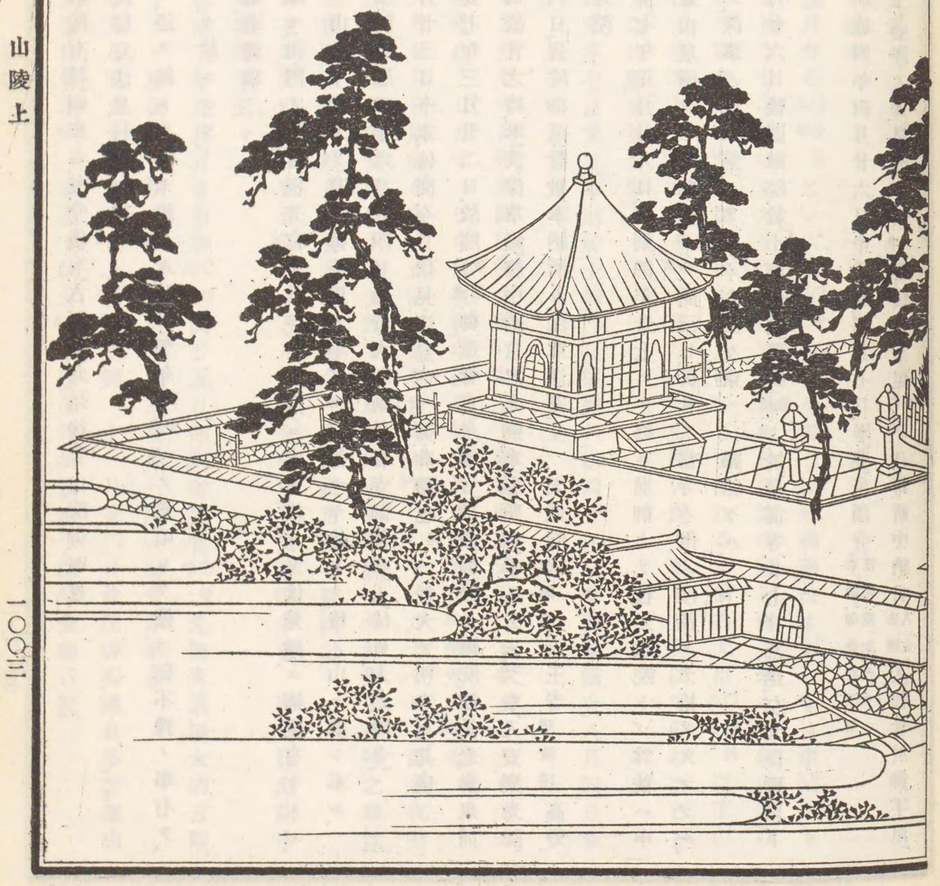
〔觀心寺記〕正平廿三年四月廿日、奉葬河内國錦部郡槍尾山陵、○觀心寺後山

〔山城名勝志九葛野郡〕後龜山院仙居　廿八日、奉追號後村上天皇、

深草法華堂御陵圖　諸陵寮藏

後深草天皇
伏見天皇
後伏見天皇
後光嚴天皇
後圓融天皇
後小松天皇
稱光天皇
後土御門天皇
後柏原天皇
後奈良天皇
正親町天皇
後陽成天皇





土人云、愛宕山一鳥居傍有二稱福田寺一、其堂後有二古石塔一、此塔後龜山院御廟也、

〔太平記三十九〕光嚴院禪定法皇行脚御事

丹波國山國ト云所ヘ、迹ヲ銷シテ移セ給ケル、○中翌年○貞治ノ三年ノ夏頃ヨリ俄ニ御不豫ノ事有テ、遂ニ七月七日ニ隱サセ給ニケリ、

〔太平記三十九〕法皇御葬禮事

此時ノ新院光明院殿モ、山門ノ貫首梶井宮モ、其ニ皆禪僧ニ成セ給ヒテ、伏見殿ニ御坐有ケレバ、急ギ彼ノ遷化○光嚴ノ山陰ヘ御下リ有テ、御茶毘ノ事ドモ取營マセ給ヒテ、後ノ山ニ葬シ奉ル、

〔尾張本神皇系圖〕光明院康曆二年六月廿四日、崩二於大和國長谷寺一、御骨奉レ入二伏見大光明寺一、

〔迎陽記〕應永五年正月廿三日辛未、傳聞今日伏見法皇○光崇御葬禮也、○中於二大光明寺一有二其儀一、

〔外記中原師夏記〕應安七年三月廿二日、故院○後光嚴御遺骨自二泉涌寺一被レ渡二嵯峨金剛院一、彼長老參二泉涌寺一奉レ迎取云云、此外御拾骨之時、奉レ渡二深草殿一、藤中納言忠光卿奉レ懸レ頸被レ奉レ入云云、又奉レ入二安樂光院一之由承及者也、廿六日、舊院御遺骨被レ奉二納所々一、深草法華堂　天龍寺金剛院　天王寺難波浦　高野山　泉涌寺　安樂光院

〔後光嚴院崩御記〕應安七年正月廿九日、寅刻御年卅七ニテ終ニ崩御ナリ、後光嚴院トゾ尊號ハ申セル、○中略二月二日、東山泉涌寺ヘ御葬禮、○中略同三日、御骨ヲ當寺ノ僧ノ沙汰ニテ拾タテマツル、藤中納言顯ニカケテ、深草ノ法華堂ニヲサメテ、泣々京ヘゾ歸給ケル、

〔常樂記〕明德四年四月廿六日、後圓融院於二小河仙洞一薨御、廿六歲、於二泉涌寺一廿七日荼毘、左大臣殿以下公卿殿上人供奉、

〔皇年代略記後圓融〕明德四年四月廿六日辛丑崩、同廿七日、奉レ葬二泉涌寺一、奉レ納二御骨於深草法花堂一如二代々一、

〔後小松院御葬禮記〕子刻許入二御泉涌寺一、○中略此後御荼毘、○中略日野新中納言由緒人也入二仙骨於御手匣一奉レ懸之、納二深草法花堂一云々、

○本書、此文年月ヲ缺ク、

〔後小松院崩御記〕神無月廿日○永享五年といふに、○中略なし、○中略かくておなじき廿七日のまだよひのほどより、泉涌寺といふ所へ御幸なし奉る、御車はあじろのいとなれたるに、前右大臣○藤原公冬以下の上達部うへ人かちにて供奉したてまつる、○中略おこなはれ侍りて、つひに烟となし奉る、

〔皇年代略記後圓融〕正長元年七月廿日、卯刻於二土御門皇居黑戸一崩、同廿九日、奉レ葬二泉涌寺一、八月四日、奉レ納二御骨於深草法華堂一、

〔親長卿記〕文明二年十二月廿六日、卯刻許已御命終、○後花園上下愁傷悲歎云云、三年正月九日、先早旦詣二悲田院一、今日御拾骨也、二月十一日、今日被レ移二申仙骨於大原法華堂一、○少々先日被レ分二散山國常照寺一、所レ殘也、

〔和長卿記〕明應九年九月廿八日庚辰、今夜戌刻許、有二御北首事一、○後土御門十一月十一日辛酉、今夜御葬禮也、十二日壬戌、今朝即御收骨儀也、上卿廿露寺中納言、即有二分散儀一、一分如レ例、上卿持レ之奉レ籠二深草法華堂一、又一分雲龍院、又一分般舟院、皆寺僧賜レ之、又一分山國常照寺被レ籠レ之、

〔二水記〕大永六年四月七日、卯刻遂以崩御、○後柏原五月三日、今夜可レ有二喪禮御幸一也、四日、巳刻源宰相中將懸二御骨於肩一、奉レ收二深草一云々、

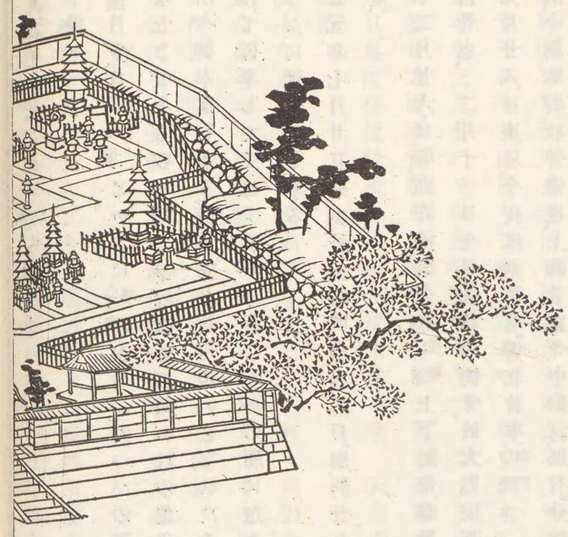
〔後奈良院御拾骨記〕弘治三年九月五日崩御、○略中即直ニ深草安樂行院ニ御骨奉レ納也、

長一尺四寸之板、絹ヲナニ結二御肩ニ一掛テ、○略中

〔弘治三年記〕弘治三年九月五日、今曉寅刻、主上○後奈良院崩御、十一月廿二日、故院御葬禮也、奉レ葬二東山泉涌寺一、廿五日、卯刻御拾骨也、○略中廣橋大納言國光卿懸二御骨於頸一、納二于深草安樂行院一、

泉涌寺月輪御陵圖　諸陵寮藏

四條天皇
後水尾天皇
明正天皇
後光明天皇
後西院天皇
靈元天皇
東山天皇
中御門天皇
櫻町天皇
桃園天皇
後櫻町天皇
後桃園天皇



〔時慶卿記〕文祿二年正月五日、院御所○正脱御心チ急ノ義ニ早參、少焉崩御、六日、過シ曉院ヲバ盜出シ奉リ、泉涌寺ヘ成シマヰラセ候、二月廿三日、正親町院御葬禮戌刻ニアリ、○中略泉涌寺ノ構ノ口ニ奉侍也、○中略其後下火、則各歸洛ナリ、

○按ズルニ、本文御葬所ノ事見エザレドモ宮內省ノ陵墓一覽ニ、正親町院天皇陵、京都府山城國紀伊郡深草村トアリ即チ所謂深草法華堂是ナリ、

〔皇年代略記後陽成〕元和三年八月廿六日崩於洞宮、同九月廿日壬申、奉葬泉涌寺、翌朝奉納御骨於深草法華堂、

〔後方朝臣記後水尾院御記所引〕延寶八年八月十九日乙亥、今朝寅上刻、太上法皇○後水尾圓淨御俗名政仁終崩御也、○中略申刻般舟院陽空長老來駕、口狀書一通持參、前例多候間、此度仙洞御火葬ニ願候、深草安樂行院ニ於御骨、骨堂モ、後陽成院崩御之時分出來、其以後破損ニテ、雨露モ掛リ候體如何ニ候間、此度之事願之由、御灰ヲ泉涌寺ニ治申也、

〔近代帝王系譜〕明正院　元祿九年十一月十日崩、同月廿五日、葬于泉涌寺、

〔近代帝王系譜〕後光明院　承應三年九月廿日、依疱瘡於仙洞崩、同年十月十五日、葬于泉涌寺、

〔近代帝王系譜〕後西院　貞享二年二月廿二日崩、同年三月七日、葬于泉涌寺、

〔近代帝王系譜〕靈元院　享保十七年八月六日崩、同月廿九日、葬泉涌寺、

〔近代帝王系譜〕東山院　寶永六年十二月十七日申刻依疱瘡崩、○中略同七年正月十日、葬泉涌寺、

〔近代帝王系譜〕中御門院　元文二年四月十一日、依御急症崩、同年五月八日、葬于泉涌寺、

〔近代帝王系譜〕櫻町院　寬延三年四月廿三日崩、同年五月十八日、葬泉涌寺、

〔公卿補任桃園〕寶曆十二年七月廿一日、天皇崩、八月廿二日、奉葬泉涌寺、

〔公卿補任後櫻町院遺詔奏、○中略同夜奉葬于泉涌寺、

〔公卿補任光格〕文化十年十二月十六日、後櫻町院崩、

〔公卿補任後桃園〕安永八年十一月九日、天皇崩、奉葬泉涌寺、

〔公卿補任仁孝〕天保十一年十二月二十日、○中略太上天皇○光格奉葬于泉涌寺、

〔近代御系譜〕天保十二年閏正月廿七日、以御石塔擬山陵、號後月輪陵、○光格ノ

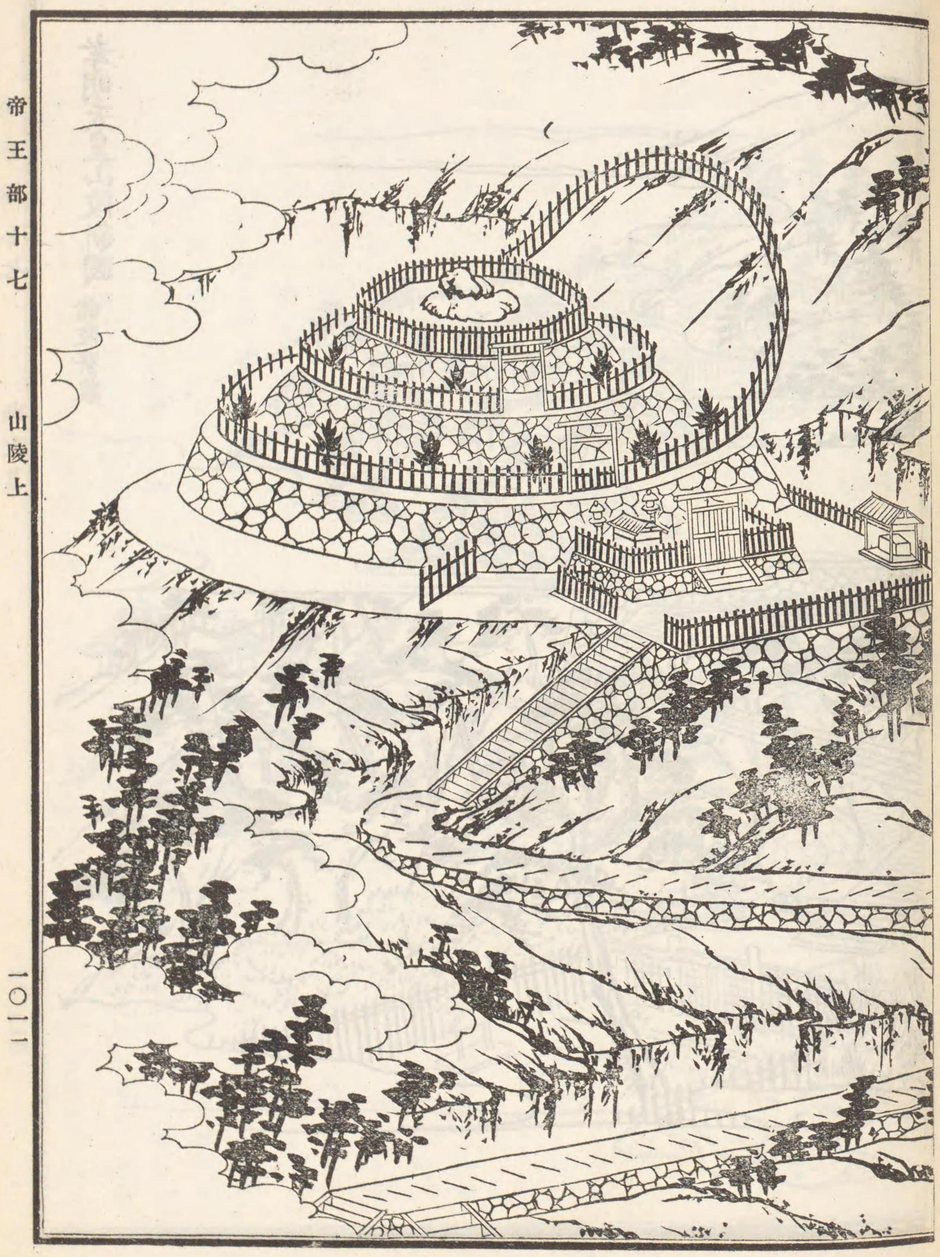
〔近代御系譜〕弘化三年二月六日、崩御內裏、○仁孝三月朔日、以御塔號弘化廟、同月四日、○中略同夜葬于泉涌寺、

〔言成卿記〕慶應三年正月一日、右大將觸書廻文到來、御葬送是迄御茶毘之分ニ而、自山頭御密行ト被稱候得共、以來表向御埋葬、山陵御築造可被爲在旨ニ付、現任一同所存可申上、殿下被命之旨、廣橋大納言被申渡候、○中略戶田大和守建言寫、

今度御陵○明孝御製造之儀取調進達仕候樣、廣橋大納言殿被仰出奉畏候、中古佛法渡來以後、御製造之形樣モ變革仕、遂ニ淳朴之風、刻薄殘忍ト相化シ、奉始持統天皇、御茶毘之事、世々御常例ト相成、乍恐萬乘之玉體ヲ一旦灰燼ニ奉委、九輪石之御塔御表ト仕候儀、數百年來之御定例ト相成、遷延今日ニ至リ候段、恐懼悲歎之至、有志輩同一揆ニ御座候處、後光明天皇御新喪之御時ヨリ、御火葬被爲廢候ヘ共、其後御代々樣御葬送、御龕前堂ヘ入御、御式被爲濟、夫ヨリ山頭堂ニ而、御茶毘之御作法有之、其所ヨリ御廟所迄、寺門僧侶共御密行ト奉稱、御表向御火葬、御內實ハ御埋葬ト申御儀奉存候、元來卑賤之凡夫ニ而モ、生者始、死者終、始終臣子忠孝之道ニオイテ、最重大之事ニ奉存候故、其身分ニ應ジ禮節ヲ重候儀御座候處、無勿體モ一天萬乘之大君ヲシテ、表裏不合之御禮節有之候御儀ニ而ハ、四海臨御之御體裁ニオイテ、乍恐御瑕瑾ニモ可被爲涉ト奉痛哭候、且御先代樣ヨリ、尊號ニ被爲復、諸國御陵モ御復古ニ相成候御時節ニ相成候得者、何卒泉涌寺是迄之御廟所甚狹隘ニ而、可然御地所無之候付、同寺地中ニ而清淨之御地所被爲ト、御陵築造御成候樣仕度奉存候、尤數百年來、御薄葬御因循之御儀ニ御座候得者、一時ニ山陵

戸田忠至山陵圖

孝明天皇山陵



孝明天皇山陵新圖　諸陵寮藏

御築造ト申候而者、定而御議論モ相生ジ可申候得共、是迄龍前堂山頭堂ナドト申、贅所之冗費ヲ相省候時者、是亦容易ニ御築造成功可仕奉存候、乍然無據御差支之御次第柄モ被爲在、前文之御儀御採用不相成、是迄之御圍内ニ葬御被爲在候御儀ニ御座候ハヽ、斷然内外一致、御埋葬之御禮儀ニ被爲復、御茶毘無實之御規式、一切御廢止ニ相成候樣仕度奉存候、將又名分國體者、天下人心之向背ニ關係仕候儀ニ付、右早々御英斷有之、臣子忠孝之標準御敎諭無御座候而者、御陵之儀取調出來兼候ニ付、微衷申上候、此段奉伺候以上、

十二月　　戸田大和守

四日、大行天皇（孝明）○山陵、今度依舊蹤御再興、尤被營泉山（○泉涌寺）候事、右按察卿被示傳了、廿七日、酉刻御出棺云々（是迄御茶毘御作法之間、移御枕火於御前人、殿上人取之、今度御埋葬之間不及其儀、龍前堂稱御車寄百味食供進在之云々）、山陵東山頭云々（供奉各奉隨子刻比著御、泉山御式濟未天曙云々）葬場使左少將公允朝臣參向、丑半刻許歸參、其後攝政殿御退出云云、

○按ズルニ、山陵ノ地ハ、古來其所在ヲ知ラザルモノ多カリシガ、諸陵寮ニテ多年精査シテ之ヲ定メタリ、今之ヲ節略シテ左ニ擧ゲ、以テ參照ニ便ニス、

神武天皇畝傍山東北陵（大和國高市郡山本村）
安寧天皇畝傍山西南御陰井上陵（大和國高市郡吉田村）
孝昭天皇掖上博多山上陵（大和國葛上郡三室村）
孝靈天皇片丘馬坂陵（大和國葛下郡王子村）
開化天皇春日率川坂上陵（大和國添上郡平城油坂町）
垂仁天皇菅原伏見東陵（大和國添下郡鼜音寺村）
成務天皇狹城盾列池後陵（大和國添下郡山陵村）
綏靖天皇桃花鳥田丘上陵（大和國高市郡四條村）
懿德天皇畝傍山南纖沙谿上陵（大和國高市郡池尻村）
孝安天皇玉手丘上陵（大和國葛上郡玉手村）
孝元天皇劒池嶋上陵（大和國高市郡石川村）
崇神天皇山邊道上陵（大和國城上郡柳本村）
景行天皇山邊道上陵（大和國城上郡遊谷村）
仲哀天皇惠我長野西陵（河内國丹南郡岡村）

應神天皇惠我藻伏崗陵（河内國古市郡譽田村）
履中天皇百舌鳥耳原南陵（和泉國大島郡上石津村）
允恭天皇惠我長野北陵（河内國志紀郡國府村）
雄略天皇丹比高鷲原陵（河内國丹北郡島泉村丹南郡南島泉村界）
顯宗天皇傍丘磐杯丘南陵（大和國葛下郡下田村）
武烈天皇傍丘磐杯丘北陵（大和國葛下郡志都美村）
安閑天皇古市高屋丘陵（河内國古市郡古市村）
欽明天皇檜隈坂合陵（大和國高市郡平田村）
用明天皇河内磯長原陵（河内國石川郡春日村）
推古天皇磯長山田陵（河内國石川郡山田村）
皇極齊明天皇越智崗上陵（大和國高市郡車木村）
天智天皇山科陵（山城國宇治郡御陵村）
天武天皇檜隈大内陵（大和國高市郡野口村）
文武天皇檜前安古岡上陵（大和國高市郡栗原村）
元正天皇奈保山西陵（大和國添上郡奈良坂村）
孝謙稱德天皇高野陵（大和國添下郡山陵村）
光仁天皇田原東陵（大和國添上郡日笠村）
平城天皇楊梅陵（大和國添下郡佐紀村）
淳和天皇大原野西嶺上陵（山城國乙訓郡大原野村）
文德天皇田邑陵（山城國葛野郡仲野村）
仁德天皇百舌鳥耳原中陵（和泉國大島郡舳松村）
反正天皇百舌鳥耳原北陵（和泉國大島郡中筋村）
安康天皇菅原伏見西陵（大和國添下郡寶來村）
弘文天皇長等山前陵（近江國滋賀郡別所村）
持統天皇檜隈大内陵（大和國高市郡野口村）
元明天皇奈保山東陵（大和國添上郡奈良坂村）
聖武天皇佐保山南陵（大和國添上郡法蓮村）
淳仁天皇淡路陵（淡路國三原郡加集村）
桓武天皇柏原陵（山城國紀伊郡堀内村）
嵯峨天皇嵯峨山上陵（山城國葛野郡上嵯峨村）
仁明天皇深草陵（山城國紀伊郡深草村）
清和天皇水尾山陵（山城國葛野郡水尾村）

陽成天皇神樂岡東陵（山城國愛宕郡淨土寺村）
宇多天皇大內山陵（山城國葛野郡宇多野村）
醍醐天皇後山科陵（山城國醍醐村字治）
朱雀天皇醍醐陵（山城國醍醐村）
村上天皇村上陵（山城國葛野郡花園村）
冷泉天皇櫻本陵（京都市上京區鹿谷町）
圓融天皇後村上陵（山城國葛野郡花園村）
花山天皇紙屋上陵（山城國葛野郡大北山村）
一條天皇北山陵（山城國葛野郡衣笠村）
三條天皇圓乘寺陵（山城國葛野郡谷口村）
後朱雀天皇圓乘寺陵（山城國葛野郡谷口村）
後三條天皇圓宗寺陵（山城國葛野郡谷口村）
堀河天皇後圓敎寺陵（山城國葛野郡谷口村）
崇德天皇白峰陵（讃岐國阿野郡青海村）
後白河天皇法住寺法華堂（山城國愛宕郡三十三間堂前）
六條天皇清閑寺陵（山城國葛野郡清閑寺村）
安德天皇阿彌陀寺陵（長門國赤間關市）
土御門天皇金原陵（山城國乙訓郡金ヶ原村）
仲恭天皇九條陵（山城國紀伊郡深草村）
四條天皇月輪陵（山城國愛宕郡今熊野村）
後深草天皇深草法華堂（山城國紀伊郡深草村）
後宇多天皇蓮華峯寺陵（山城國葛野郡上嵯峨村）
後伏見天皇深草法華堂（山城國紀伊郡深草村）
花園天皇十樂院上陵（山城國愛宕郡栗田口村）

光孝天皇後田邑陵（山城國葛野郡花園村）
醍醐天皇後山科陵（山城國葛野郡醍醐村字治）
村上天皇村上陵（山城國葛野郡花園村）
圓融天皇後村上陵（山城國葛野郡花園村）
一條天皇圓融寺北陵（山城國葛野郡谷口村）
後一條天皇菩提樹院陵（京都市上京區淨土寺町）
後冷泉天皇圓敎寺陵（山城國葛野郡谷口村）
白河天皇成菩提院陵（山城國紀伊郡竹田村）
鳥羽天皇安樂壽院陵（山城國紀伊郡竹田村）
近衛天皇安樂壽院南陵（山城國紀伊郡竹田村）
二條天皇香隆寺陵（山城國葛野郡衣笠村）
高倉天皇清閑寺法華堂（山城國愛宕郡清閑寺村）
後鳥羽天皇大原法華堂（山城國愛宕郡勝林院村）
順德天皇大原陵（山城國愛宕郡大原村）
後堀河天皇觀音寺陵（山城國愛宕郡今熊野村）
後嵯峨天皇嵯峨殿法華堂（山城國葛野郡天龍寺村）
龜山天皇龜山殿法華堂（山城國葛野郡天龍寺村）
伏見天皇深草法華堂（山城國紀伊郡深草村）
後二條天皇北白河陵（山城國愛宕郡白川村）
後醍醐天皇塔尾陵（大和國吉野郡吉野山）

後村上天皇檜尾陵（河內國錦部郡寺元村）
光嚴天皇山國陵（丹波國桑田郡井戸村）
崇光天皇大光明寺陵（山城國紀伊郡堀內村）
後圓融天皇深草法華堂（同上）
稱光天皇深草法華堂（同上）
後土御門天皇深草法華堂（山城國紀伊郡深草村）
後奈良天皇深草法華堂（同上）
後陽成天皇深草法華堂（同上）
明正天皇月輪陵（同上）
後西院天皇月輪陵（同上）
東山天皇月輪陵（同上）
櫻町天皇月輪陵（同上）
後櫻町天皇月輪陵（同上）
光格天皇後月輪陵（同上）
孝明天皇後月輪東山陵（同上）
〔延喜式（二十一諸陵）〕畝傍山東北陵（畝傍橿原宮御宇神武天皇（中略）兆域東西一町、南北二町）
桃花鳥田丘上陵（葛城高丘宮御宇綏靖天皇（中略）兆域東西一町、南北一町）
畝傍山西南御陰井上陵（片鹽浮穴宮御宇安寧天皇（中略）兆域東西三町、南北二町）
畝傍山南纖沙溪上陵（輕曲峽宮御宇懿德天皇（中略）兆域東西一町、南北一町）
掖上博多山上陵（掖上池心宮御宇孝昭天皇（中略）兆域東西六町、南北六町）

後龜山天皇嵯峨小倉陵（山城國葛野郡上嵯峨村）
光明天皇大光明寺陵（山城國紀伊郡堀內村）
後光嚴天皇深草法華堂（山城國紀伊郡深草村）
後小松天皇深草法華堂（同上）
後花園天皇後山國陵（丹波國桑田郡井戸村）
後柏原天皇深草法華堂（同上）
正親町天皇深草法華堂（同上）
後水尾天皇月輪陵（山城國愛宕郡今熊野村）
後光明天皇月輪陵（同上）
靈元天皇月輪陵（同上）
中御門天皇月輪陵（同上）
桃園天皇月輪陵（同上）
後桃園天皇月輪陵（同上）
仁孝天皇後月輪陵（同上）

玉手丘上陵（略）兆域東西六町、南北六町、（中
片丘馬坂陵（略）兆域東西五町、南北五町、（中
劒池嶋上陵（輕境原宮御宇孝元天皇（中略）兆域東西二町、南北一町、
春日率川坂上陵（春日率川宮御宇開化天皇（中略）兆域東西五段、南北五段、（中
山邊道上陵（磯城瑞籬宮御宇崇神天皇（中略）兆域東西二町、南北二町、（中
菅原伏見東陵（纒向珠城宮御宇垂仁天皇（中略）兆域東西二町、南北二町、（中
山邊道上陵（纒向日代宮御宇景行天皇（中略）兆域東西二町、南北二町、
狹城盾列池後陵（志賀高穴穗宮御宇成務天皇（中略）兆域東西一町、南北三町、
惠我長野西陵（穴門豐浦宮御宇仲哀天皇（中略）兆域東西二町、南北二町、（中
惠我藻伏崗陵（輕島明宮御宇應神天皇（中略）兆域東西五町、南北五町、（中

〔扶桑略記二應神〕四十一年二月十五日、天皇春秋百十一歲崩、葬于河內國志紀郡惠我藻伏陵、高五丈、方五町、

〔輶軒小錄〕山陵の事

應神天皇の陵は河州にあり、大仙陵○仁德陵見下の如し、山少く小く、周回の池なし、譽田八幡と云ふ社あり、社領二百石にて、社家社僧あり、東一院、西一院、大滿院なと云ふ寺十軒許あり、予癸丑の夏拜見す、

〔延喜式二十諸陵〕一〕百舌鳥耳原中陵（難波高津宮御宇仁德天皇（中略）兆域東西八町、南北八町、

〔扶桑略記二仁德〕八十七年己亥正月十六日、天皇一百十歲崩、一云、百廿三歲、同年十月、葬于和泉國大鳥郡百舌鳥耳原中陵、五丈、八町、

〔堺鑑〕百舌鳥耳原中陵、仁德天皇此陵ハ泉河攝ノ堺、大小路（オホヒヂ）ノ東ノ町外（ハヅレ）ヨリ八町許離タリ、世人大仙陵ト云リ、天皇己亥ノ歲ニ崩ズ宮廟ハ難波ノ邊高津ニ平野明神ト號ズ、○中略山ノ間數ノ事、總

山ノ根廻七百二十間、山ノ南ノ高十四間、北ノ高十六間四尺、中ノ高十間五尺、中島摠ジテ此陵ヨリ方角ヲ取テ、餘ノ陵所記ス、秀吉公度々此陵ニテ獵シ玉フニ、假ニ居ヲ構玉ヒケレバ、其墟ヲ今ニ茶屋山ト所ノ人云リ、

〔泉州志〕仁德天皇陵、號大山陵、在舳松（ヘマツ）領、兆域今所存、外堤千二百八十三間、中堤九百五十五間、山根七百六十三間、南峰高十四間、北峰高十六間四尺、四畔小塚九箇、

〔輶軒小錄〕山陵の事

仁德帝の陵は、泉州堺の東廿町許にあり、周回十丁餘ありて、まはりに堀あり、はゞ三四間あり、小舟一艘ありて往來す、上に登れば谷々ありて小山の如し、予兩回まで拜覽す、土人此を大仙陵と云ふ、

〔北窓瑣談中〕泉州堺の東、六七町ばかりに、仁德天王の陵あり、俗に大仙陵といふ、はなはだ大にして南北に長し、その長三四五町ばかりもあり、回迫に池あり、みさゝきは北の方高く、南の方ひくし、樹木おびたゞしく生茂げり、その大なること天造の岡山の如く、人作のやうにはみえず、今も樹木をきり下くさをかることを官より禁じ、雜人の入ことをゆるさず、天下の陵の大いなるものは、此陵を第一とすべし、

〔延喜式二十諸陵〕一〕百舌鳥耳原南陵（磐余稚櫻宮御宇履中天皇（中略）兆域東西五町、南北五町、

〔扶桑略記二履中〕六年三月十五日、天皇春秋六十七崩、十月四日、葬于和泉國大鳥郡百舌鳥耳原南陵、五丈、五町、

〔延喜式二十諸陵〕一〕百舌鳥耳原北陵（丹比柴籬宮御宇反正天皇（中略）兆域東西三町、南北二町、

〔扶桑略記二反正〕六年正月、天皇六十崩、葬和泉國大鳥郡百舌鳥耳原北陵、高五丈、廣三町、

〔延喜式二十諸陵〕一〕惠我長野北陵（遠飛鳥宮御宇允恭天皇（中略）兆域東西三町、南北二町、

〔扶桑略記二允恭〕卅二年癸巳正月十四日、天皇春秋八十崩、十月、葬二河内國志紀郡惠我長野北原陵一、高四丈、方三町、

〔河内國陵墓圖〕允恭天皇御陵、岡村ヨリ十二町東、澤田村志紀郡、土岐ノ山城守領、ノ東南ニツヾケリ、四面、有池、處々水存ス、堤周千四百五十歩、池幅四十歩、或七十歩、山高百二十歩餘、陵上處々ノ石イヅレモ長一寸、或五六分、俗ニマガ玉トイフ、青石、尤堅シ、馬腦水晶等ニテ作ル、山形如圖、〇圖略

〔延喜式二十諸陵〕一〕菅原伏見西陵〔石上穴穂宮御宇安康天皇、中略〕兆域東西二町、南北三町、

〔扶桑略記二安康〕三年八月壬辰日、〇中略〕天皇春秋五十六崩、葬二大和國添下郡菅原伏見西陵一、高三丈、方二町、

〔延喜式二十諸陵〕一〕丹比高鷲原陵〔泊瀬朝倉宮御宇雄略天皇、中略〕兆域東西三町、南北三町、

〔扶桑略記二雄略〕廿三年己未八月、天皇年九十三崩、葬二于河内國丹遅郡北高鷲原陵一、高二丈、方二町、

〔延喜式二十諸陵〕一〕河内坂門原陵〔磐余甕栗宮御宇清寧天皇、中略〕兆域東西二町、南北二町、

〔扶桑略記二清寧〕五年甲子正月、天皇春秋卅九崩、葬二于河内國古市郡坂門原陵一、高二丈、方二町、

〔延喜式二十諸陵〕一〕傍丘磐抔丘南陵〔近飛鳥八釣宮御宇顯宗天皇、中略〕兆域東西二町、南北三町、

〔扶桑略記二顯宗〕三年四月、天皇四十八歳崩、葬二于大和國葛下郡傍丘磐抔丘南陵一、高三丈、東西二町、南北三町、

〔延喜式二十諸陵〕一〕埴生坂本陵〔石上廣高宮御宇仁賢天皇、中略〕兆域東西二町、南北二町、

〔扶桑略記二仁賢〕十一年戊寅八月、天皇春秋五十歳崩、葬二于河内國丹遅郡埴生坂本陵一、高二丈、方二町、

〔延喜式二十諸陵〕一〕傍丘磐抔丘北陵〔泊瀬列城宮御宇武烈天皇、中略〕兆域東西二町、南北三町、

〔扶桑略記二武烈〕八年十二月、天皇春秋十八歳崩、葬二于大和國葛下郡傍丘磐抔丘北陵一、高二丈、方二町、

〔延喜式二十諸陵〕一〕三嶋藍野陵〔磐余玉穂宮御宇繼體天皇、中略〕兆域東西三町、南北三町、

〔扶桑略記三繼體〕廿五年辛亥二月、天皇春秋八十二崩、同年十二月、葬二于攝津國嶋上郡三嶋藍野陵一、高三丈、方三町、

〔延喜式二十諸陵〕一〕古市高屋丘陵〔勾金橋宮御宇安閑天皇、中略〕兆域東西一町、南北一町五段、

〔扶桑略記三安閑〕二年十二月十七日、天皇七十崩、葬二于河内國古市郡古市高屋丘陵一、高三丈、方二町、

〔延喜式二十諸陵〕一〕身狹桃花鳥坂上陵〔檜隈廬入野宮御宇宣化天皇、中略〕兆域東西二町、南北二町、

〔扶桑略記三宣化〕四年己未二月十日、天皇春秋七十二崩、葬二于大倭國高市郡身狹桃花鳥坂上陵一、高三丈、方三町、

〔延喜式二十諸陵〕一〕檜隈坂合陵〔磯城島金刺宮御宇欽明天皇、中略〕兆域東西四町、南北四町、

〔扶桑略記三欽明〕三十二年四月十五日、天皇崩、葬二于大和國高市郡檜隈坂合陵一、高四丈、方四町、

〔日本書紀二十推古〕二〕廿八年十月、以二砂礫一葺二檜隈陵上一、〇欽明則域外積土成山、仍毎氏科之、建二大柱於土山上一、時倭漢坂上直樹柱勝之大高、時人號之曰二大柱直一、

〔播磨國風土記揖保郡〕日下部里立野、所以號二立野一者、昔土師努美宿禰往來於出雲國一、宿於日下部野一、乃得病死、爾時出雲國人來到連二立人衆一、運傳上川礫一作墓山一、故號二立野一、即號二其墓屋一、爲出雲墓屋、

〔陵墓志〕檜隈坂合陵　欽明天皇、在二大和國高市郡下平田村一、字梅山、大和志曰、高市郡欽明天皇陵在二平田村一、俗呼二梅山一、推古天皇廿八年十月、以二砂礫一葺陵上一、即是傍有二翁仲二軀一、御陵所考曰、高市郡檜隈村近邊陵二ヶ所アリ、然ドモ欽明天武持統文武ノ際一決シ難シ、尚重按、大和志說得正矣、御陵所考說未決、然今此山陵、各以二砂石一葺之一、與二日本書紀一合、況近世此陵前周池之側堀出於檜木大柱一、其地字池田、其傍有二稱机ノ地名一、是宣命場乎、大柱者近隣越村醫服部宗堅秘藏而納二宮、希代之柱木一、今細礫其屑而已、以二此等事一考ルニ、梅山陵是即坂合陵的當ス、山陵ノ域内小冢多、曰二經塚一、曰二金冢有一之一、此陵或曰二石山一、其二砂石一之故乎、御陵所考、字鐘子山、今尋込之、圖亦似レ差、今俗號二猿山一、以二翁仲二軀形一呼レ猿訛之、廟陵記云フ、檜隈寺ハ、今在二檜隈村中道與寺側一、十三層石浮屠存之、甚古物也、往古

檜隈寺者、奉爲欽明天皇、所創建大伽藍也、北邊礎石所ノ存在故、

〔波夫理和射乃考〕砂礫を以て陵上を葺くといふは、何の料にしたるにかいまだ考へず、されど前王廟陵記云、山科陵〔天智天皇〕在鏡山麓、陵四面野名御廟野、陵狀有八角石壇、上在六角丘、皆以礫礪築之、壇周廻亦敷礫礪、樹木叢生、とあるも同じ造狀なるべければ、此御世の頃はなべて然せるも何の用なるかしらず、〔字典に、釋氏は家上立レ柱といふはなりこれ平田篤胤の古史と云を按ふに、古へは山陵を神靈の坐所としつるものと通ゆれば、大きなる柱を建て、卽神祭の料とせるにやあらむ、何にも由ありげなり、

制度なりけむと思はる、犬柱を建るも何ほれず、又陵土の崩頽ヌ爲にものせるかともおもへどあらず、信濃國諏訪神社〔上諏訪〕に拜殿は有れど宮作はなく、社地に大なる石窟あるを神の坐所と申して、其四隅に大なる柱を立て、此を御柱と云て宮に擬へたり、此柱を七年に一度づゝ立替あり、其祭を御柱祭といふ、木は杉檜椹樫何にても大木を用ふる例

〔延喜式諸陵二十〕一、河内磯長中尾陵〔譯語田宮御宇敏達天皇、中略、兆域東西三町、南北三町、〕

〔扶桑略記三敏達〕十四年八月十五日、天皇春秋廿四歳崩、山陵河内國石川郡磯長中尾、高三丈、方二町、

〔延喜式諸陵二十〕一、河内磯長原陵〔用明天皇、中略、兆域東西二町、南北三町、〕

〔扶桑略記三用明〕二年四月九日、天皇崩、〇中略推古天皇元年九月、改葬河内國石河郡磯長原山陵、高三丈、方三町、

〔延喜式諸陵二十〕一、磯長山田陵〔推古天皇、中略、兆域東西二町、南北二町、〕

〔扶桑略記四推古〕三十六年三月、天皇春秋七十三崩、〇中略山陵河内國石川郡科長山田、或本云、山陵大和國高市郡、高二丈、方二町、

〔延喜式諸陵二十〕一、押坂内陵〔高市崗本宮御宇舒明天皇、中略、兆域東西九町、南北六町、〕

〔扶桑略記四舒明〕十三年十月九日、天皇於百濟宮崩、〇中略皇極天皇三年九月、改葬大和國城上郡押坂

山陵、〔一云、河内國石川郡、高四丈、方九町、〕

〔延喜式諸陵二十〕一、越智崗上陵〔飛鳥川原宮御宇斉明天皇、中略、兆域東西五町、南北五町、〕

〔扶桑略記四齊明〕七年七月廿四日、天皇崩、山陵朝倉山、〔陵高三丈、方五町、〕改葬大和國高市郡越智大堀〇堀一本作レ掘

間山陵、〔十一月改之〕

〔延喜式諸陵二十〕一、大坂磯長陵〔難波長柄豐碕宮御宇孝徳天皇、中略、兆域東西五町、南北五町、〕

〔扶桑略記四孝徳〕白雉五年十月、天皇崩、山陵河内國石川郡大坂磯長、〔十二月、葬二磯長山陵一、高二丈、方五町、〕

〔延喜式諸陵二十〕一、山科陵〔近江大津宮御宇天智天皇、中略、南北十四町、〕

〔扶桑略記五天智〕十年十二月三日、天皇崩、〇中略山陵山城國宇治郡山科鄉北山、高二丈、方十四町、

〔延喜式諸陵二十〕一、檜隈大内陵〔飛鳥淨御原宮御宇天武天皇、中略、兆域東西五町、南北四町、〕

〔扶桑略記五天武〕十五年九月四日、天皇崩、山陵大和國高市郡檜隈大内、高五丈、方五町、

〔延喜式諸陵二十〕一、檜前安古岡上陵〔藤原宮御宇文武天皇、中略、兆域東西三町、南北三町、〕

〔扶桑略記五文武〕慶雲四年六月十五日、天皇春秋廿五崩、山陵大和國高市郡檜前安古岡上、高三丈、方一町、

〔延喜式諸陵二十〕一、奈保山東陵〔平城宮御宇元明天皇、中略、兆域東西三町、南北五町、〕

〔扶桑略記六元正〕養老五年十二月四日、太上天皇崩、〔年六十一、元明天皇也、〕火葬于椎山陵、依遺詔不具喪禮、〔陵高三丈、方三町、自此以後不作高陵、〕

〔延喜式諸陵二十〕一、奈保山西陵〔平城宮御宇淨足姫天皇、中略、兆域東西三町、南北五町、〕

佐保山南陵〔平城宮御宇勝寶感神聖武天皇、中略、兆域東西四段、西七町、南北七町、〕

高野陵〔平城宮御宇天皇、孝謙、中略、兆域東西五町、南北三町、〕

淡路陵〔廢帝、淳仁、中略、兆域東西六町、南北六町、〕

田原東陵〔平城宮御宇天宗高紹天皇、光仁、中略、兆域東西八町、南北九町、〕

陵墐

〔類聚國史三十六〕大同二年八月己巳、大和山城二國定八嶋、〔桓武廢太子崇道天皇〕河上、〔平城后藤原帯子〕柏原山陵兆域、陵之四至各有其限、其百姓田并地、在八嶋、河上二陵界内者、以乘田賜之、但地者准估賜直、

〔延喜式二十諸陵〕〔一〕柏原陵〔平安宮御宇桓武天皇、中略、兆域東八町、西三町、南五町、北六町、加丑寅角二岑一谷、〕

〔三代實錄十清和四〕貞觀九年十二月十八日癸未、庶人伴善男建立道場、在山城國紀伊郡柏原山陵兆域之内、勅令移却、

〔延喜式二十諸陵〕〔一〕楊梅陵〔平安宮御宇日本根子高彦尊天皇、中略、兆域東西二町、南北四町、〕

〔三代實錄五清和〕貞觀三年六月十七日庚申、詔定仁明天皇深草山陵四至、東西限一町五段、南限純子内親王家地、北限峯、

〔三代實錄十清和二〕貞觀八年十二月廿二日癸巳、勅改定深草山陵〔仁明天皇、中略、兆域〕四至、東至大墓南至純子内親王家北垣、西至貞觀寺東垣、北至谷、

〔延喜式二十諸陵〕〔一〕深草陵〔平安宮御宇仁明天皇、中略、兆域東西一町五段、南北七段、北二町、〕

〔延喜式二十諸陵〕〔一〕田邑陵〔平安宮御宇文德天皇、中略、兆域東西四町、南北四町、〕

後田邑陵〔光孝天皇、中略、四至西限雲原岳岑、南限大道、東限清水寺東北限大岑、〕

〔醍醐雜事記〕醍醐天皇崩事

延長八年從七月中旬不豫、九月廿七日丁亥、亥三刻先皇御車、遷御於右近衛府大將曹司、廿九日、上皇受於山座主三歸三聚淨戒等、未刻崩於右近府、〔春秋四十六〕十月十日庚子、亥四刻奉葬於醍醐寺北笠取山西方、四面八町、南北十町、穴深九尺、廣三丈、校倉高四尺三寸、縱橫各一丈、十一日、天漸明、辰四刻到醍醐寺北山陵、諸寺八十六所、夾路設幕、擊鐘念佛、十二日、山作所於山陵、立卒都婆三基、

〔類聚符宣抄四〕左衛門權少尉源添

陵樹

陵前鳥居

右中納言從三位左衛門督藤原朝臣恒佐宣、奉勅件人堀畢後山科山陵塋之間、宜免陣直者、

承平元年十一月廿七日

少外記嶋田公鑒奉

同日、召仰大志高志常直了、

〔愚昧記〕安元三年五月十七日丙辰、讃岐院〔崇德〕御事、一以彼御墓所、勅稱山陵、其邊堀隍不令汙穢、

〔兵範記〕久壽二年七月廿三日戊辰、午刻天皇〔近衛〕崩于近衛殿、八月二日丁丑、巳刻大納言歸向御葬所、築陵植樹堀隍、

〔續日本紀八元正〕養老五年十月丁亥、太上天皇〔元明〕召入右大臣從二位長屋王、參議從三位藤原朝臣房前、詔曰、〔中略〕朕崩之後、宜於大和國添上郡藏寶山雍良岑、造竈火葬、〔中略〕庚寅、太上天皇又詔曰、〔中略〕就山作竈、芟棘開場、即爲喪所、又其地者、皆殖常葉之樹、即立刻字之碑、

〔日本紀略嵯峨〕弘仁五年五月、是月有虫、食柏原山陵〔桓武〕樹、東北方六十丈許皆枯焉、

〔文德實錄一〕嘉祥三年四月辛酉、遣左近衛將曹粟田眞持於深草陵、〔仁明〕列栽樹木、間以一丈、相襲成行、

〔三代實錄十五清和〕貞觀十年二月十八日壬午、野火燒損田邑山陵〔文德〕兆域中之樹木、

〔日本紀略四村上〕康保四年六月九日丙寅、村上御陵可殖樹之由、被仰左右衛門、

〔二水記〕享祿四年四月七日、聖忌〔後柏原〕請一僧了、午前參泉涌寺、於法塔密々著直垂、拜御廟了、先年已後始詣事、今更拭愁涙了、後土御門院御廟椿、先皇御廟松也、法塔〔東樒、西松、〕

○按ズルニ、後土御門、後柏原ノ二天皇陵ハ、並ニ深草法花堂ニ在リ、然レバ本文御廟ト稱スルモノハ、宮内省撰定ノ陵墓一覽ニ所謂、灰塚ノ事ナランカ、

〔小右記〕永觀二年十月廿七日癸卯、辰時許參院、〔圓融〕令修諷誦於七箇日、〔寺家〕巳時參御邑上山陵、〔中略〕留御車於鳥居。外。即下御、余候御劒、前行之置御座、〔鳥居。中五六段許、有二御在所一、立二幔幄一、其上張レ幄、〕公卿侍臣幄在鳥。居。外、〔下略〕

陵塔
石卒都婆

〔中右記〕永久二年十二月廿一日、荷前也、予共人五人、撿非違使資清相具、於深草山陵鳥居前下従事、入鳥居洗手、山陵守令燒幣物、此間解劒持笏、兩段再拜、了歸洛、

〔中右記〕永久五年十二月廿四日、荷前也、○中騎馬相具共人五六人、此間秉燭、從粟田口到山科之山陵○天智南鳥居前、陵守出來敷疊、令洗手、進陵前兩段再拜、

〔愚昧記〕仁安三年四月卅日、今日卽位○高倉由可被告山陵也、○中卽參向山階山陵、○天智令尋陵預頃之出來、予問云、參御山歟、將候此鳥居歟、答云、此鳥居下令候也、

〔類聚雜例〕長元九年五月十九日丙申、○略式部大輔資業朝臣等向御葬所、○後條採鋤覆土、其後人夫等從此役、御墓上立石卒都婆、藏陁羅尼、其廻立釘貫、又右衛門尉季任令人夫堀壇、其廻令殖樹云云、

卒都婆、納陁羅尼、立釘貫、

〔中右記〕嘉承二年七月廿四日戊申、今夕御喪送也、○堀河廿五日、丙大臣獨留御墓所、令作山陵、墓上立石

〔前王廟陵記下〕或曰、二條院御墓、在舟岡北麓、所謂香隆寺艮野者是耶、上有五重石塔、近世嗜茶千利休、取九輪爲己塔、立聚光院、又塔穿窟處爲手水鉢、不幾利休逢禍、

〔建內記〕正長二年七月四日、稱光院殿去年崩御、御殿黒戸渡殿御路出御之門也、北面上大門也、今日被撤却之、新中納言親光奉行之、運渡泉涌寺雲龍院也、稱光院殿御塔以在彼院之故也、今更催餘意者也、五日、黒戸渡殿門等、今日悉壞渡雲龍院云云、十四日、著狩衣、參泉涌寺雲龍院、是則兩代後光後圓融院、塔幷稱光院御塔也、

〔續史愚抄後光明〕承應三年十一月廿一日丁未、被供養後光明院御石塔於泉涌寺、先有御塔開眼事、已下五人參仕、奉行藏人頭左中將宗良朝臣、

〔淳房卿記〕延寶八年十月廿三日戊申、巳刻相伴右宰相中將右衛門督行豐朝臣、策諮泉涌寺舊院後

火葬所

水尾御石塔供養也、人々濟々參詣、

〔後拾遺和歌集十哀傷〕圓融院法皇うせ給て紫野に御葬送侍けるに、一とせ此所にて、子日せさせたまひし事など思ひ出てよみ侍ける、

紫の雲のかけても思ひきや春の霞になして見んとは

左大將朝光

おくれじと常のみゆきはいそぎしをけぶりにそはぬたびのかなしさ

大納言行成

〔榮花物語九石蕗〕寛弘八年六月廿二日のひるつ方、あさましうならせ給ぬ、○中略、一條かくて八日○七月のゆふべ、いはかげといふ所へおはしまさすぎしきあり、○中略おはしまししつきては、いみじき御有様と申つれど、はかなき雲霧とならせたまひぬるは、いかゞはあはれならぬ長き夜といへどもかなうあけぬれば、曉がたには御骨など、そちの殿○藤原伊周なごとらせ給て事はてぬれば、大藏卿正光朝臣おひ奉りて、歸らせ給ほどなどいみじうかなし、

〔類聚雜例〕長元九年四月十七日乙丑、主上○後一條自去三月之比不例御、○中略漸及戌刻之間、遂崩於清涼殿、五月十三日庚寅、及晩景、資業朝臣時觀等歸參申云、巡撿神樂岡東邊、自一條以南、自上東門末以北、自御在所申方有便所、以其地可爲山作所也、十九日丙申、令向山作所給、○中略及辰刻奉舉茶毘、○下略

〔皇年代略記後冷泉〕治曆四年四月十九日庚申、崩於賀陽院、四十四、五月五日丙子、火葬船岡乾原、御骨安置仁和寺、

〔長秋記〕大治四年七月十五日辛卯、法皇○白河御葬送、○略中至高隆寺西北御墓所、于時清庭御所安御棺、次奉移所竈所也次開御棺蓋、積御體廻折松薪等、上置藁、又不覆蓋、次取前火付薪、

〔中右記〕嘉承二年七月十九日癸卯、主上○堀河辰刻許、御氣色斷給也、廿四日戊申、今夕御葬送也、○中略至高隆寺坤方野、○中略奉茶毘、

分骨所

〔一代要記九近衛〕久壽二年七月廿三日、於近衛内裏崩、八月一日、火葬船岡西野、

〔増鏡三藤ノ衣〕此浦〇曙岐にすゑ給て、十九年ばかりにや有けん、延應元年といふ二月廿二日、六そぢにてかくれさせ給ぬ、〇後鳥羽中略近き山にて例のさほうになし奉るも、むげに人ずくなに心細き御有さまいとあはれになん、御骨をば能茂といひし北面の入道して、御ともにさぶらひしぞくびにかけて奉りて都にのぼりける、

〔増鏡十一今日の日蔭〕嘉元も三年になりぬ、萬里小路殿の法皇、〇亀山又御なやみとて龜山殿へうつらせ給、〇中略九月十五日のあけぼのに、終にかくれさせ給ぬ、〇中略十七日に御わざの事せさせ給、〇中略よそほしかりつる御ありさまも、いとはかなく、只時のなの烟にてのぼり給ぬ、

〔後光嚴院崩御記〕應安七年正月廿九日、寅刻御年卅七ニテ終ニ崩御ナリ、〇中略二月二日、東山泉涌寺へ御葬禮、〇中略スグニ穴ニ御棺ヲ入奉テ、御輿ヲバ取除、長老ヨリテ又燒香シテ、薪ニ火ヲタイ松ニテツケラレ給、〇中略同三日、御骨ヲ當寺ノ僧ノ沙汰ニテ拾奉ル、

〔山の雲〕文明二の年十二月廿六日、夜半ばかりより、法皇〇後花園御中風の御所勞いできなし〳〵て、終に辰の刻ばかりに崩御ならせ給ふ、〇中略三日〇文明三年正月申の刻に、悲田院にて御葬送の儀あり、〇中略はてなく烟となり給へるを見參らせけるに、白樂天が石火光中寄此身とつくれりしも眼前におぼえて、

立のぼる後のけぶりとなるまでに雲ゐに高き名をのこすかな

〔長秋記〕天永四年三月廿二日、堀河院御骨、自香隆寺令渡仁和寺御、〇中略及酉時奉突埋、此後立石塔、三重其内安置法花經四卷經、種々要文陁羅尼等、

〔文應皇帝外紀〕嘉元三年秋、上皇〇龜山病龜山宮、〇中略九月望、上皇崩、〇中略閣毘後、藏仙骨於三所、淨金剛院、南禪寺、金剛峯寺、且順顧命也、

髪塔

灰塚

〔中原師夏記〕應安七年正月廿八日、酉下刻新院光嚴院御葬禮御幸也、奉送泉涌寺、廿六日、舊院御遺骨、被奉納所々、深草法華堂　天王寺雞波浦　高野山　泉涌寺　安樂光院

〔神事雜類抄〕舊院〇後花園仙骨、伏見大光明寺、地藏殿之築山、先年奉納由云、明後日十日般舟三昧院之石塔可奉渡之、如此一身燒灰、仙骨一箱入歟、被置之事候、既可堀起申之上者、可爲卅ケ日穢限存候、御所存可爲如何哉、具以可被注申旨被仰出候也、恐々謹言、

長享二
七月八日　　忠富

舊院玉骨、先年被安置大光明寺築山、然來十日、可被遷申般舟三昧院之石塔云云、此條可被守故葬法歟、爲全分御灰者、卅箇日穢、勿論候乎、

〔和長卿記〕明應九年九月廿八日庚辰、今夜戌刻、有御北首事、〇後土御門　十一月十一日辛酉、今夜御葬禮也、十二日壬戌、今朝卽御收骨儀也、上卿廿納言、爲凶事傳奏　卽有分散儀、一分如例、上卿持之、廿一日露、深草法花堂、又一分雲龍院、又一分般舟院、皆寺僧賜之、又山國常照寺被籠之、然寺僧不參之間無其沙汰、比丘尼御所々々、於火屋面々取給之、雖非先規、不及制之云々、

〔顯廣王記〕永萬元年十月十五日辛卯、右大臣被參高野、廟、是二條院御髮爲奉收彼山云云、堀川院例也、

〔後方朝臣記後水尾院御記所引〕延寶八年八月十九日乙亥、今朝寅上刻、太上法皇〇後水尾圓淨御俗名政仁終崩御也、〇中略申刻般舟院陽空長老來奠、口狀書一通持參、前例多候間、此度仙洞御火葬爾願候、深草安樂行院ニ、治御骨骨堂モ、後陽成院崩御之時分出來、其以後破損ニテ、雨露モ掛り候體如何に候間、此度之事願之由、御灰ヲ泉涌寺ニ治申也、

口上書

后妃陵

後土御門院　嘉樂門院〇母後土御門信子　後柏原院　後奈良院　豐樂門院〇母後奈良后藤子　正親町院　後陽成院　中和門院〇母後水尾前子　如此御代々御火葬連綿相續仕候、

〔古事記中巻仁〕大后比婆須比賣命之時、定石祝作、又定土師部、此后者葬狹木之寺間陵也、

〔日本書紀六垂仁〕三十二年七月己卯、皇后日葉酢媛命薨、〇中略土物始立于日葉酢媛命之墓、

〇按ズルニ、日葉酢媛皇后ノ墓ヲ、古事記ニハ陵ト爲シ、日本書紀ニハ墓ト爲セリ、當時其稱ノ一ナラザリシナラン、然レドモ皇后ハ普通ニハ墓ト稱セシコト、此文ニ據リテ見ルベシ、

〔延喜式二十諸陵〕一狹城盾列池上陵〔磐余稚櫻宮御宇神功皇后、在大和國添下郡、兆域東西二町、南北二町、守戸五烟、〕

〔日本書紀九神功〕六十九年四月丁丑、皇太后崩於稚櫻宮、　十月壬申、葬狹城盾列陵、〇神功

〔轉軒小錄〕山陵の事

神功皇后の陵は、奈良より西三十町許にあり、近付かず、其脇に二斗許入る壺多くあり、大様一間四方に一つ程のわりにて、地に埋め有りと云ふ、

〔續日本紀二十淳仁〕三天平寶字四年十二月戊辰、勅、太皇太后宮、〇文武后藤原宮子姨、中略、御墓者、自今以後、並稱山陵、

〔延喜式二十諸陵〕一佐保山西陵〔平城朝太皇太后藤原氏、文武后宮子姨、在大和國添上郡、兆域東西十二町、南北十二町、守戸五烟、〕

〔續日本紀二十淳仁〕三天平寶字四年十二月戊辰、勅、〇中略　皇太后〇聖武后安宿媛　藤原　御墓者、自今以後、並稱山陵、

〔延喜式二十諸陵〕一佐保山東陵〔平城朝皇太后藤原氏、聖武后安宿媛、在大和國添上郡、兆域東西四町、南北四町、守戸五烟、〕

〔續日本紀三十光仁〕一寶龜二年十二月丁卯、勅、先妣紀氏未追尊號、自今以後、宜奉稱皇太后、御墓者、稱山陵、其忌日者亦入國忌例、設齋如式、

〔延喜式二十諸陵〕一吉隱陵〔皇太后紀氏、光仁母后、檨姬、在大和國城上郡、兆域東西四町、南北四町、守戸五烟、〕

〔類聚國史帝王三十六〕延暦十九年七月己未詔曰、朕有所思、〇中略故廢皇后井上内親王、追復稱皇后、其墓並稱山陵、

〔延喜式二十諸陵〕一宇智陵〔皇后井上内親王、在大和國宇智郡、兆域東西十町、南北七町、守戸一烟、〕

〔延喜式二十諸陵〕一大枝陵〔太皇太后高野氏、光仁后、新笠、在山城國乙訓郡、兆域東一町、西九段、南二町、北三町、守戸五烟、〕

〔續日本紀四十桓武〕延暦九年閏三月丙子、是日皇后乙牟漏〔藤原〕崩、甲午、是日葬於長岡山陵、

〔延喜式二十諸陵〕一高畠田陵〔皇太后藤原氏、桓武后乙牟漏、在山城國乙訓郡、兆域東三町、西五町、南三町、北六町、守戸五烟、郡、〕

〔大日本史禮樂四〕按延喜諸陵式作高畠、而中務式作長岡、蓋互稱也、

〔延喜式二十諸陵〕一宇波多陵〔贈皇太后藤原氏、桓武后旅子、在山城國乙訓郡、兆域東西四町、南北一町、守戸五烟、〕

〔延喜式二十諸陵〕一高白田陵〔皇太后藤原氏、桓武后乙牟漏、在山城國乙訓郡、兆域東三町、西五町、南三町、北六町、守戸五烟、郡、〕

〔延喜式二十諸陵〕一石作陵〔贈皇后、淳和后高志内親王、在山城國乙訓郡、兆域東西三町、南三町、北六町、守戸五烟、郡、〕

〔延喜式二十諸陵〕一後山科陵〔太皇太后藤原氏、仁明后順子、在山城國宇治郡、假陵戸五烟、〕

〔三代實錄四十光孝〕十六元慶八年十二月壬寅、定贈皇太后、〇仁明后藤原澤子　山城國愛宕郡中尾山陵四至之堺、東限谷、南田、西隍、北谷、有田四町五段、

〔三代實錄四十光孝〕八仁和元年十月八日己未、是日勅、皇妣贈皇太后、〇仁明后藤原澤子　山陵置守冢五戸、

〔延喜式二十諸陵〕一中尾陵〔贈皇太后藤原氏、仁明后澤子、在山城國愛宕郡鳥部鄉、陵戸五烟、山四町五段、四至東限谷、南限田、西限隍、北限谷、〕

〔延喜式二十諸陵〕一白河陵〔太皇太后藤原氏、文德后明子、在山城國愛宕郡上粟田鄉、陵戸三烟、四至東限勝隆寺東谷、南限自御在所南去十一丈、西限贈正一位源氏墓北、北限白河、〕

〔延喜式二十諸陵〕一後深草陵〔中宮藤原氏、字多后溫子、在山城國紀伊郡深草鄉、守戸三烟、東限禪定寺、南限大墓、西限極樂寺、北限佐能谷、〕

追尊天皇陵

〔延喜式二十諸陵一〕小野陵贈皇太后藤原氏、宇多后胤子、在二山城國宇治郡小野郷一、陵戸五烟、四至東限二百姓口分一、南限二小栗栖寺山并道一、西限二禮尾山岑一、北限二松尾山尾一、并百

〔江家次第十二〕荷前事

宇治三所參議以上一人、兼二三所之例太多一、

太后　朱雀村上母后　中后　冷泉園融母后　太后穏子（醍醐后）　中宇治　今宇治

院母后〇院（白河）母后茂子　後三條后

〔拾芥抄下本十〕陵〇中略

中宇治贈皇太后宮藤安子、宇治三所於二木幡大門前一、使以二官等一兩段云云、

後宇治贈皇太后藤原氏〇　後宇治贈皇太后宮茂子

〔百練抄十五後嵯峨〕仁治三年七月十一日辛卯、母儀源氏〇土御門后通子贈皇后、被レ定二山陵國忌一云云

〔延喜式二十諸陵一〕田原西陵春日宮御宇天皇（天智皇子、光仁父、施基親王）在二大和國添上郡一、兆域東西二町、南北二町、陵戸六烟、

〔續日本紀二十稱德一〕天平神護元年十月辛未、行二幸紀伊國一、是日到二大和國高市郡小治田宮一、壬申、車駕巡二歷大原長岡一、臨二明日香川一而還、癸酉、過二檀山陵一、〇岡宮天皇草壁皇子、文武父、草壁、在二大和國高市郡一、兆域東西二町、南北二町、陵戸六烟、

〔延喜式二十諸陵一〕眞弓丘陵岡宮御宇天皇（天武皇子、文武父、草壁、在二大和國高市郡一、兆域東西二町、南北二町、陵戸六烟、

〔續日本紀二十稱德一〕天平神護元年十月辛未、行二幸紀伊國一、是日到二大和國高市郡小治田宮一、壬申、車駕巡二歷大原長岡一、臨二明日香川一而還、癸酉、過二檀山陵一、〇岡宮天皇草壁皇子、文武父、草壁、在二大和國高市郡一、兆域東西二町、南北二町、陵戸六烟、

〔帝王編年記十二桓武一〕延暦十九年七月、遣二勅使於淡路國一、取二故早良親王骨一、奉二納大和國八嶋寺一、添上郡崇二

皇親墓稱陵

重崇道天皇、

〔延喜式二十諸陵一〕八嶋陵崇道天皇、光仁皇子、桓武廢太子早良、在二大和國添上郡一、兆域東西五町、南北四町、守戸二烟、

〔古事記中神武一〕於レ是與二登美毘古一戰之時、五瀬命於二御手一負二登美毘古之痛矢一、〇中略到二紀國男之水門一而詔、負二賤奴之手一乎死、爲二男建一而崩、〇中略陵即在二紀國之竈山一也、

〔日本書紀六垂仁〕二十八年十月庚午、天皇母弟倭彦命薨、十一月丁酉、葬二倭彦命于身狹桃花鳥坂於是集二近習者一、悉生而埋立於陵域一、

〔日本書紀七景行〕四十年十月癸丑、日本武尊發路之〇中略、逮二于能褒野一、而痛甚之、〇中略既而崩二于能褒野一、時年三十、天皇聞之、寢不レ安レ席、食不レ甘レ味、〇中略、即詔二群卿一、命二百寮一、仍葬二於伊勢國能褒野陵一、時日本武尊化二白鳥一、從レ陵出之、指二倭國一而飛之、〇中略於是遣使者、追二尋白鳥一、則停二於倭琴彈原一、仍於二其處一造レ陵焉、白鳥更飛至二河内一、留二舊市邑一、亦其處作レ陵、故時人號二是三陵一、曰二白鳥陵一、

〔古事記中景行〕於レ是坐二倭后等一、及御子等諸下到、而作二御陵一、〇中略於是化二八尋白智鳥一、翔レ天、而向濱飛行、

〇中略故自二其國一飛翔、行留二河内國之志幾一、故於二其地一作二御陵一鎭坐也、即號二其御陵一、謂二白鳥御陵一也、

〔日本書紀八仲哀〕哀元年十一月乙酉朔、詔二群臣一曰、朕未レ逮二于弱冠一、而父王〇日本武尊既崩之、乃神靈化二白鳥一、上レ天、仰望之情、一日勿レ息、是以冀獲二白鳥一養之於二陵域之池一、因以覩二其鳥一、欲レ慰二顧情一、則令二諸國一俾貢二白鳥一、

〔日本書紀十仁德〕六十年十月、差二白鳥陵守等一、充二役丁一、時天皇臨二于役所一、爰陵守目杵、忽化二白鹿一、以走、於是天皇詔之曰、是陵自本空、故欲レ除二其陵守一、而甫差二役丁一、今視是惟者甚懼之、無レ動二陵守一者、則且授二土師連等一、

〔續日本紀二文武〕大寶二年八月癸卯、震二倭建命墓一、遣二使祭之一、

〔延喜式二十一諸陵一〕能褒野墓日本武尊、在二伊勢國鈴鹿郡一、兆域東西二町、守戸三烟、

〔日本書紀十顯宗〕元年二月壬寅、詔曰、先王〇履中皇子市邊押磐、即天皇父、遭二離多難一、殞二命荒郊一、〇中略廣求二御骨一、莫レ能知

耆、○略中是日召聚耆宿、天皇親歷問、有一老嫗進曰、置目○嫗名知御骨埋處、請以奉示、於是天皇與皇太子億計、○仁賢將老嫗婦幸于近江國來田綿蚊屋野中、掘出而見、果如婦語、○略中仲子○市邊押磐皇子帳內之尸交横御骨、莫能別者、○略中由是仍於蚊屋野中造起雙陵、相似如一、葬儀無異、五月、狹狹城山君韓帒宿禰事連謀殺皇子押磐、臨誅叩頭、言詞極哀、天皇不忍加戮、充陵戶、兼守山、削除籍帳、隸山部連、

〔古事記下顯宗〕此天皇、求其父王市邊王之御骨時、○略中爾起民堀地、求其御骨、即獲其御骨、而於其蚊屋野之東山作御陵葬、以韓帒之子等、令守其御陵、

〔日本書紀十五顯宗〕白髮天皇○清寧三年四月、立億計王○賢崩、是月皇太子億計王、與天皇讓位久而不處、由是天皇姉飯豐青尊、十一月、飯豐青尊崩葬葛城埴口丘陵、

〔延喜式二十諸陵〕埴口墓飯豐皇女、在大和國葛下郡、兆域東西一町、南北一町、守戶三烟、

〔續日本紀一文武〕四年八月戊申、宇尼備、○神賀久山、○不詳及吉野宮邊樹木、無故凋枯、

〔延喜式二十諸陵〕成相墓押坂彦人大兄皇子、在大和國廣瀨郡、兆域東西十五町、南北廿町、守戶五烟、

〔日本書紀二十推古〕元年四月己卯、立厩戶豐聰耳皇子爲皇太子、仍錄攝政、以萬機悉委焉、橘豐日天皇○用明第二子也、二十九年二月癸巳、半夜厩戶豐聰耳皇子命薨于斑鳩宮、○略中是月、葬上宮太子○厩戶於磯長陵、

〔延喜式二十諸陵〕磯長墓橘豐日天皇之皇太子、名云聖德、〔厩戶〕在河內國石川郡、兆域東西三町、南北二町、守戶三烟、

〔日本書紀二十皇極〕元年、是歲蘇我大臣蝦夷、立己祖廟於葛城高宮、○略中又盡發舉國之民、幷百八十部曲、預造雙墓、今來、一曰大陵、爲大臣、夷○蝦墓、一曰小陵、爲入鹿○蝦子臣墓、

○按ズルニ、陵墓ノ稱、當時其制極メテ嚴ナリシコトハ、同書孝德天皇大化二年ノ詔ニ、王以上之墓トアリテ、有功ノ外ハ、皇子モ陵ト稱スルヲ得ザリシヲ以テ知ルベシ、故ニ蘇我父子ノ、大陵小陵ト稱セシハ僭越ノ至ナリ、

〔令義解職員〕諸陵司

正一人掌祭陵靈○略中及陵戶名籍事、

〔唐六典十四大常寺〕諸陵署○略中陵戶

〔令義解九喪葬〕凡先皇陵、謂先代以來、帝王山置陵戶、令守、非陵戶令守者、十年一替、

〔令義解二戶〕凡造計帳、每年六月三十日以前、京國官司、責所部手實、謂手實者、戶頭所造之帳、其戶籍亦責手實也、具注家口年紀、謂年紀猶云年歲也、○中略收訖依式造帳、謂造計帳樣也、連署、八月三十日以前、申送太政官、謂雜戶陵戶計帳亦同申送也、

〔延喜式二十諸陵〕凡陵戶及守戶計帳者、寮差專當人、注名申省、分遣本鄉、與國司共相知、勘造其戶籍、亦差遣專當官人勘造、

〔令義解戶〕凡戶籍、六年一造、起十一月上旬、依式勘造、里別爲卷、總寫三通、○略中二通申送太政官、一通留國、其雜戶陵戶籍、則更寫一通、各送本司、○下略

凡陵戶、官戶、家人、公私奴婢、皆當色爲婚、謂凡此五色、相當爲婚、即異色相娶者、律無罪名、並當遙合、既乖本色、亦合正之、若異色相娶、所生男女、即知情者、自合從重、

凡官戶、陵戶、家人、公私奴婢、與良人爲夫妻、謂夫妻者、與他家人奴合所生者、即須從母、所生男女、不知情者從良、皆離之、其逃亡所生男女皆從賤、

〔令義解賦役〕凡陵戶免課役、○略節

〔延喜式二十五主計下〕凡勘大帳者、○略中其依符所免爲符損、入位階子、○中略陵戶、○中略並爲不課、

〔律疏賊盜〕凡緣坐、○略中僧尼及婦人若官戶、陵戶、家人、公私奴婢、犯反逆者、止坐其身、

〔古事記傳二十〕陵戶と云は、永く其陵々に屬たる戶なり、非陵戶令守と云は、持統紀に以百姓充

と云るにて、是は其陵戸無きか、或はたらざれば、其陵の近き民戸を差充て守らしむるをいふ、

諸陵式各陵の下に、守戸とあるは是なり、

〔日本書紀三十持統〕五年十月乙巳、詔曰、凡先皇陵戸者置五戸以上、自餘王等有功者、置三戸、若陵戸不足、以百姓充、免其徭役、三年一替、

〔延喜式二十一諸陵〕凡山陵者、置陵戸五烟、令守之、有功臣墓者、置墓戸三烟、其非陵墓戸差點令守者、先取近陵墓戸充之、

陵戸定額

〔延喜式二十一諸陵〕日向埃山陵　天津彦彦火瓊瓊杵尊、在日向國、無陵戸、
日向高屋山上陵　彦火火出見尊、在日向國、無陵戸、
日向吾平山上陵　彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊、在日向國、無陵戸、
〔延喜式二十一諸陵〕眉原伏見東陵　大和國添下郡、（中略）陵戸二烟、
○按ズルニ、此他應神天皇陵ニ陵戸二烟アリ、今之ヲ略ス、
〔延喜式二十一諸陵〕山邊道上陵　纒向日代宮御宇景行天皇、在大和國城上郡、（中略）陵戸一烟、
○按ズルニ、此他、仲哀、允恭、顯宗、安閑、推古ノ五天皇陵ニ、陵戸各一烟アリ、今並ニ之ヲ略ス、
〔延喜式二十一諸陵〕百舌鳥耳原中陵　和泉國大鳥郡、（中略）陵戸四烟、
○按ズルニ、此他、履中、反正、欽明、皇極、天武、文武ノ六天皇陵ニ、陵戸各五烟アリ、今並ニ之ヲ略ス、
〔延喜式二十一諸陵〕丹比高鷲原陵　河内國丹比郡、（中略）陵戸四烟、
○按ズルニ、此他清寧、光孝ノ二天皇陵ニ、陵戸各四烟アリ、今並ニ之ヲ略ス、
〔延喜式二十一諸陵〕倉梯岡陵　倉梯宮御宇崇峻天皇、在大和國十市郡、無陵地、井陵戸、
押坂内陵　高市岡本宮御宇舒明天皇、在大和國城上郡、（中略）陵戸三烟、
山科陵　近江大津宮御宇天智天皇、在山城國宇治郡、（中略）陵戸六烟、

〔黒川道祐石山紀行〕十三日、○天和三年五月　天智天皇ノ廟社ヲ拜ス、○中略　此前村ヲ陵村ト號ス、斯一村中、十六家ノ人、斯陵ヲ守レリ、古ヘ守陵戸ノ末裔カ、到今免課役、右ノ十六家ノ内、竹鼻氏ノ者ア
リ、是ハ古ノ沙汰人ノ内ニテ、綸旨幷御敕書等ハ此家ニ殘レリ、

〔延喜式二十一諸陵〕檜隈大内陵　藤原宮御宇持統天皇、合葬檜隈大内陵、（天武陵戸更不重充、）

〔續日本紀三十光仁〕寶龜九年三月己巳、勅、淡路親王○淳仁墓、宜稱山陵、其先妣當麻氏墓、稱御墓、充陵戸百姓一戸守之、

〔類聚國史三十帝王〕天長元年十月丙戌、陵戸五烟、奉宛先太上天皇○平城山陵、

〔續日本後紀九仁明〕承和七年五月丁酉、勅、後太上天皇○淳和崩後、國忌荷前陵戸等事、宜遵遺制以停奉行焉、

〔三代實錄一清和〕天安二年十二月十四日辛丑、奉充田邑山陵○文徳陵戸四烟、

〔醍醐雜事記〕御陵付寺家宣旨

右大辨紀朝臣淑光傳宣、中納言藤原朝臣□□宣、山階新陵○醍醐陵戸五烟、雜丁貳拾伍人、暫停諸陵寮□□醍醐寺令守御陵者、

承平四年七月十三日　　左大史坂上在判奉

假陵戸

〔日本紀略五冷泉〕康保四年六月九日丙寅、村上御陵、○中略可充陵戸伍烟官符、

〔延喜式二十一諸陵〕後山科陵　太皇太后藤原氏、（仁明后順子、）在山城國宇治郡、假陵戸五烟、

〔政事要略二十九荷前事〕

太政官符山城國司

應充假陵戸伍烟事

右宇治新陵料所仰如件、國宜承知、依件行之、但隔十箇年、依例相替、符到奉行、

左少辨紀朝臣

康保元年十二月四日

○按ズルニ、村上天皇ノ皇后藤原安子、康保元年四月崩ズ、而シテ江家次第荷前ノ下ニ、陵ヲ今宇治ト稱ス、本文所謂宇治新陵ハ、即チ今宇治陵ノ事ナルベシ、

〔延喜式二十諸陵一〕畝傍山東北陵　畝傍橿原宮御宇神武天皇、在二大和國高市郡一、（中略）守戸五烟、

〔山陵志〕神武陵、在二畝旁山東北嶋一、○中略其下曰二洞村一、今屠者之聚也、相傳其民故神武陵守戸、凡守陵守戸皆賤種、本以二罪隷一沒入者、不レ齒二鄉人一也、以レ故其守戸定額

守戸之子孫、遂轉二業屠者一、稱二穢多一、亦勢也、

○按ズルニ、延喜式ニ此他絞靖、安寧、懿德、孝昭、孝安、孝靈、孝元、成務、仁賢、武烈、繼體、宣化、敏達、元明、聖武、孝謙、光仁、桓武、平城、仁明、文德ノ二十一天皇陵ニ、守戸各五烟アリ、今並ニ之ヲ略ス、

〔延喜式二十諸陵一〕山邊道上陵　磯城瑞籬宮御宇崇神天皇、在二大和國城上郡一、（中略）守戸一烟、

○按ズルニ、此他景行淳仁ノ二天皇陵ニ、守戸各一烟アリ、景行天皇ハ今之ヲ略ス、

〔延喜式二十諸陵一〕菅原伏見東陵　纒向珠城宮御宇垂仁天皇、在二大和國添下郡一、（中略）守戸三烟、

〔續日本紀六元明〕靈龜元年四月庚申、檜見山陵、生目入日子伊佐知天皇（垂仁）之陵也　宛二守陵三戸一、

〔續日本紀考證三〕此云二檜見山陵一、與二諸書一不同、本居氏曰、伏檜邦訓近、元融案、檜一本作レ節、節見即伏見、

○按ズルニ、延喜式ニ、此他應神、安康、元明天皇ノ靈龜中、守陵四戸ヲ置ク、乃チ下文ニ見ユ、顯宗、用明、孝德ノ五天皇陵ニ、守戸各三烟アリ、今並ニ之ヲ略ス、

〔續日本紀六元明〕靈龜元年四月庚申、檜見山陵、生目入日子伊佐知天皇（垂仁）之陵也　宛二守陵三戸一、伏見山陵穴穗天皇（安康）之陵也

〔延喜式二十諸陵二〕惠我長野西陵　穴門豐浦宮御宇仲哀天皇、在二河內國志紀郡一、（中略）守戸四烟、

陵戸守戸並充

皇后及追尊天皇陵戸守戸

○按ズルニ、此他允恭、推古、元正ノ三天皇陵ニ、守戸各四烟アリ、今並ニ之ヲ略ス、

〔延喜式二十諸陵一〕古市高屋丘陵　勾金橋宮御宇安閑天皇、在二河內國古市郡一、（中略）守戸二烟、

〔愚昧記〕安元三年五月十七日丙辰、讚岐院〇崇德御事、一以二御墓所勅稱一山陵一、〇中略割二分民烟一兩一令レ守二御陵一、

〔延喜式二十諸陵一〕春日率川坂上陵　春日率川宮御宇開化天皇、在二大和國添上郡一、（中略）以二在京戸十烟一、每年差充令レ守、

〔延喜式二十諸陵一〕菅原伏見東陵　纒向珠城宮御宇垂仁天皇、在二大和國添下郡一、（中略）守戸二烟、

惠我長野西陵　穴門豐浦宮御宇仲哀天皇、四烟、

惠我藻伏崗陵　輕島明宮御宇應神天皇、三烟、

惠我長野北陵　遠飛鳥宮御宇允恭天皇、四烟、

傍丘磐杯丘南陵　近飛鳥八釣宮御宇顯宗天皇、三烟、

古市高屋丘陵　勾金橋宮御宇安閑天皇、二烟、

磯長山田陵　小治田宮御宇推古天皇、

磯長中尾陵　橿原宮御宇神武天皇、

〔延喜式二十諸陵一〕狹城盾列池上陵　磐余稚櫻宮御宇神功皇后、大和國添下郡、（中略）守戸五烟、

〔續日本後紀十仁明〕承和十年五月癸卯、盾列山陵〇神功守丁、聽隨二闕差一、京戸幷浪人、以二當土無一人一差課也、

○按ズルニ、此他延喜式ニ、文武天皇皇后藤原宮子娘ノ佐保西陵、聖武天皇皇后藤原光明子ノ佐保東陵、光仁天皇母后紀橡姬ノ吉隱陵、光仁天皇皇后高野新笠ノ大枝陵、桓武天皇皇后藤原乙牟漏ノ高畠陵、藤原旅子ノ宇波多陵、平城天皇皇后藤原帶子ノ河上陵、淳和天皇皇后高志內親王ノ石作陵等ニ、守戸各五烟アリ、今並ニ之ヲ略ス、

〔延喜式二十諸陵一〕眞弓丘陵　在二大和國高市郡一、（中略）陵戸六烟、

田原西陵　春日宮御宇天皇（光仁）皇考施基親王在二大和國添上郡一、（中略）守戸五烟、

陵守長

陵預

御陵守

〔類聚國史三十帝王六〕延暦十九年七月壬戌、分淡路國津名郡戸二烟、以奉守崇道天皇陵、大和國宇智郡戸一烟、奉守皇后○光仁后井上陵、

〔延喜式二十諸陵一〕宇智陵　皇后（光仁）井上内親王、在大和國宇智郡（中略）守戸一烟、

八嶋陵　崇道天皇、桓武廢太子早良）在同、守戸二烟、

崎峨陵　太皇太后橘氏（嵯峨后嘉智子）在同山城國葛野郡（中略）守戸三烟、

○按ズルニ、此他清和天皇皇后藤原高子ノ後深草陵ニ、守戸三烟アリ、今之ヲ略ス、

〔延喜式二十諸陵一〕中尾陵　贈皇太后藤原氏（仁明后澤子）在山城國愛宕郡鳥部郷、陵戸五烟、

白河陵　太皇太后藤原氏（文徳后明子）在山城國愛宕郡上粟田郷、陵戸三烟、

〔續日本後紀十仁明〕承和十年四月己未朔、楯列陵守等言、去月十八日食時、山陵鳴二度、其聲如雷、即赤氣如飄風、指離飛去、申時亦鳴、其氣如初、指兌飛亘、遣參議正躬王加檢察、伐陵木七十七株、至楛木等、不可勝計、便即勘當陵守長百濟春繼、上奏矣、

〔延喜式二十諸陵一〕凡毎年十二月、奉幣諸陵及墓、○中略頒幣日、差各陵墓預人奉、（但神功皇后陵、差使奉察主典已上奉、）

〔愚昧記〕仁安三年四月三十日、今日即位由可被告山陵也、○中略即參向山階山陵、○天智尋陵預頃之出來、

〔戸田忠友家記〕文久二年十二月十日伺書

一御陵守リ、一ケ所ニ付、三竈位ヅヽハ、被差置候様可仕候哉ノ事、

書面ノ通

右ケ條ノ趣一應奉伺候間、御取極次第、關東へ可申立候以上、

十二月十日

戸田和三郎

帝王部十八

山陵下

荷前名稱　一〇四一
儀式　同
定陵墓數　一〇四六
發使　一〇四九
幣物　一〇五三
謁陵　一〇五五
告祥瑞　一〇五六
告事變　同
告外蕃來朝　一〇五七
告火災　同
祭陵　同
祈疾　一〇五八
祈災異　同
祈國家平安　一〇六〇

山陵鳴動　一〇六一
伐木　同
掘損　一〇六四
火災　一〇七二
蒙汙衊　同
建佛堂　一〇七三
荒廢　一〇七四
修築　一〇八一
雜載　一〇九九

古事類苑

帝王部十八

山陵下

荷前名稱

〔伊呂波字類抄 五能〕荷前（ノザキ）

〔政事要略 二十九〕基案、義解（令職員義解）所謂荷前者、四方國進御調荷前取奉、故云荷前、〔見式〕

〔延喜式 四伊勢大神宮〕九月神嘗祭（略）中

調荷前絹一百十三疋一丈二尺、（略）下

〔延喜式 八祝詞〕祈年祭（略）中

辭別伊勢爾坐天照大御神能大前爾白久、（中略）荷前者、皇大御神能大前爾如二横山一打積置氏、殘平波平

儀式

〔令義解 一職員〕諸陵司

正一人、掌二祭一陵靈、（謂十二月奉二荷前幣一是也）喪葬、凶禮、諸陵及陵戸名籍事、

〔萬葉集 二相聞〕久米禪師娉二石川郎女一時歌

東人之荷向篋乃荷之緒爾毛妹情爾乘爾家留香聞

〔萬葉集略解 二〕荷向は、いづれの國にても、年毎に始に奉る調物を荷前と云、

〔續日本後紀 九仁明〕承和七年五月辛巳、後太上天皇、（淳和）顧二命皇太子一（仁明）曰、（略）中又歲竟分二絁、號曰二荷前一、見二儀式一

〔儀式十〕奉山陵幣儀

十二月上旬、諸陵寮錄幣物數并應擇日之狀、申送治部省、省申官行下、中務省仰陰陽寮擇日（用立春後吉日、前大神）、前十日、中務省差定使次侍從以上內舍人大舍人、總錄名簿進太政官、式部點非侍從五位十人進之（補侍從非常闕）、同月十三日、大臣定參議以上使、分少納言就內侍奏、定元會侍從之次、同定伴使、其次侍從以上五位以上使、同共奏之、其使山階、此一陵、中納言以上、柏原深草田邑後山階五陵、參議以上、若非參議三位以上各一人、四位若五位一人、內舍人一人、大舍人一人、楊梅一陵、四位一人、五位一人、大舍人一人、田原後田原八島三陵、宇治後宇治愛宕三墓、四位若五位二人、大舍人一人、別貢物、內藏寮預前具錄色目申省、省即申官、官下符所司、請受練染、前一日、大藏木工等省寮、建禮門外、橫立五丈斑幄二宇、北一宇（其下備輕幄設御座、其東三許丈縱立七丈幄一宇、北頭與陳幣幄相當、北二間爲陳幣物之所、不置御所、幣上之所、南五間設大臣以下五位以上座、）其東縱立五丈幄一宇、設外記史以下座、先是縫殿寮南庭、立五丈幄一宇、懸幔、設內侍已下裏別貢物座、大藏省官人、率藏部等、裏備幣物（幣料納當年調日、別設正倉、）、又內藏寮差史生四人、分賚幣物於縫殿寮南庭候之、內侍以下從內裏退出、通夜裁成、逮曉裏畢、所別盛楊筥一合、裏以纐纈表淺綠裏、結以標帶二條、更以標帶著木、納漆櫃、安漆高案、靶以紫綾表緋裏、其雜給料所筥一合、裏以黃表帛裏、結以標帶二條、更以標帶著木、但多武峰料者、裏以葉鷰半枚著木、陵別以駕輿丁三人充擔夫（二人幣物、一人雜給、但多武峰一人、）、其擔夫皆著橡衫布袴（彩事了返上）、其日平旦、大臣以下就座、時刻乘輿御輕幄、訖使、公卿以下進執幣（若帶劒者、暫解供事、）、入置物所復本座、隨內侍宣進執幣物退出、授大舍人、但多武峰宇治後宇治愛宕四墓幣物、不置御所、便執退出、同時治部輔丞錄各一人率諸陵寮屬以上及使者集大藏省、參議以上一人幷辨外記史各一人、率史生官掌等各就幄座、大藏省錄進就版、申陳幣物訖（預裏幣物事、別率庭中、）、即參議以上喚召使、稱唯就版、參議宣喚治部省、召使稱唯趨出喚之、稱唯丞代進就版、參議宣、率使者等參來、丞稱唯趨出、治部大藏兩輔、率諸陵寮屬以上進就座、省掌率使者等（一人自餘各陵寮屬以上陵墓預）、列于庭中、西面北上、先是大藏丞錄各一人、進就座、省掌率使者、歷名札授輔、輔以次唱諸陵號（始唱陵號、群官下座）、及唱使名、大藏丞取幣（近陵丞取之、自餘錄取之、）、授使者、即受退、事畢群官俱退、其頒幣之時申詞、貴所種獻出、凡所稱奉出、墓稱申出、

〔皇年代略記 持統〕首書　荷前事、初此代云々、

〔延喜式十一 太政官〕凡季冬獻幣於諸山陵及墓、皆用當年調物、中務省預擇大神祭後、立春前之吉日、十二月五日以前申送、進太政官、又式部點散位已上進其交名（爲補侍從不參之闕）、當日參議已上、少納言辨外記史等著別供幣所幄行事、其幣者內藏寮供擬（色數見內藏寮式）、至時刻天皇御建禮門前幄、禮拜奉班、但常幣者、參議已上一人、辨外記史等向大藏省奉班、其使者中務式部差定移送治部（事見儀式）、

〔延喜式十六 陰陽〕凡獻荷前日者、預擇定大神祭後、立春以前、十二月五日申省、（○中務）

〔延喜式二十 諸陵〕嵯峨陵（太皇太后橘氏、嵯峨后、嘉智子、）在山城國葛野郡、兆域東西六町、南二町、北五町、守戶三烟、不入頒幣之例、

〔大日本史 禮樂 四〕按皇后遺令不營山陵、故不預頒幣乎、

〔延喜式二十 諸陵〕凡每年十二月奉幣諸陵及墓、其陵別五色帛各三尺、庸布一段一丈四尺、倭文三尺、木綿四兩、麻一斤、近陵別五色帛各一丈、絁一疋、絲一絢、調布一端、倭文一丈、木綿十三兩、麻三斤五兩、裹料薦五尺、黑葛三兩、遠墓及近墓幣、各同遠陵例（○中略）同月上旬、錄幣物數并伊勢近江紀伊淡路等國使名及鈴數申省（國別二刻驛鈴一、省申官、不限位高下、）、頒幣日、差各陵墓預人奉（但神功皇后陵、差主典已上奉、）、其日依時刻省大藏（式）、即參議已上令召使喚治部省、如常、丞進就版位、即宣曰、率使者等參來、兩省輔、寮屬已上、進共就座、省掌率使者等列於庭中（西面北上）、先是大藏丞錄各一人、就頒幣之座、治部輔先就稱陵號之座、然後寮允取使人名札授輔、以次舉諸陵號（始舉陵號、群官下座、）、及唱使名、大藏授幣、使人受退、事畢群官共退、其頒幣之

時申詞、陵稱二獻出一、墓稱二申出一、

〔延喜式（三大藏）十二月供二諸陵幣一（其物納レ調之日、別收二正幣一、供レ數見二諸陵式一）其儀隨レ符到、前一日、與二諸陵寮一依レ例裹備、又設二御座於建禮門外一、立二五丈紺幄二宇一、次立二七丈五丈紺幄各一宇一、幷懸幔、又於二正倉院一立二七丈紺幄一宇一、（列二置幣物一、立二五丈紺幄二宇一、（一宇東面、懸レ幔、設二參議以上座一、一宇北面、設二辨官以下座一、）當日早朝、掃部寮設二幄下座及所司座一、又鋪二積幣物一薦於幄前一、訖即與二諸陵寮共積二幣物一、參議以上及辨官就レ座、丞進就二版位一（治部預置二版位一）申二積畢狀一、治部輔就レ座、省輔一人進就レ座、丞錄各一人共進就レ座、諸陵寮亦就レ座、訖治部輔唱二使人名一、省丞錄二人、取二幣物一付二使人一、

凡荷前物裹備之日、縫殿寮南庭、立二五丈紺幄一宇一、懸レ幔、

〔延喜式（三十掃部）八〕奉二山陵幣御座一、設二於建禮門前幄下一、大臣已下及辨官已上座、設二於東幄下一、設二幣帛下一敷二葉薦三枚一、帖四枚一、

凡辨備山陵幣之座、設二縫殿寮南院一、幷大藏省正倉院一、

〔政事要略二十九〕荷前事

清涼記、荷前事、當日早旦、供二御浴一、御二南殿一、御二腰輿一、行二幸建禮門前幄一、（著二御帛御衣一、諸衛不レ稱レ警蹕一、）

〔北山抄十二月〕荷前事

天曆八年勘申、諒闇年例、元慶四年不出御、承和九年出御、延喜十五年御記、見二不出御之例一、又可レ令二勘申一者、（御記云、當二物忌之中一、諒闇年不二出御一、仍承和出御、然則不レ御失禮也、）

安和二年、令レ勘二申幼主御時例一、承平元、二、三、五年不二出御一、四年六七年無レ日記者、依二承平例一不二出御一、當御物忌時、不レ向二神社山陵一之由、見二九條記一、

〔江家次第十一月〕荷前事（近代無二御出一、亦不レ行二晴儀一、）

裏書云、荷前、天皇行二幸建禮門前幄一有二此事一、雨儀大臣以下向二承明門外一行事、天皇出二御宜陽殿西廂一、近代又無二此出御一云々、

〔年中行事秘抄十二月〕荷前事（立春以前大神祭以後云々）

弘仁式云、天皇御二便殿一、禮拜奉レ班、

國史云、天安二年十二月、詔定二十陵四墓一、獻二年終荷前幣使一、使不レ憚二念誦一、小浴可レ宜云々、雖レ似二神事一、頗涉二不淨一、仍不レ行二他神事一、

〔類聚符宣抄四〕荷前

大納言正三位兼行右近衛大將良岑朝臣（世○安）宣、擇定二獻山陵荷前日時解文一、所司理須二預定早進一、而期促、年中不レ便二行事一、自今而後、宜レ仰二辨官幷中務省等一、雖レ定二遠日一、十二月五日以前、爲レ例令レ進者、（即日宣二（史高丘宿禰繩繁、門、中務大輔安倍吉人、朝臣一）訖、

天長六年十二月十三日

〔類聚符宣抄四〕荷前

被二右大臣（○源多）宣一云、中務省擇申、奉二荷前一事、今月廿三日可レ行者、而彼日當二國忌一、（○光仁）因レ茲更令二陰陽寮勘申一、自餘吉日、寮勘申云、除レ件日一之外、皆有レ可二忌避一、無レ可二用之一日、宜下雖レ當二國忌之日一、依二陰陽寮擇定一、廿三日行上之、（卽仰二左大史丸部百世一了）

元慶七年十二月十八日

大外記島田朝臣清田奉

〔建武年中行事〕荷前は、つかひ〳〵を兼て定られて、おの〳〵御陵に奉らる、使は公卿也、次官そひたり、

少外記大藏善行奉

〔江家次第十二月〕荷前事

荷前彩帛、廿日以前省（○治部）受取、預錄一人、（史生一人、）諸陵率二陵戶一（辨官裏辨一人、）授レ省（令レ納二省掌一人、）藏部一人、

〔江家次第十二月〕荷前事

定陵墓數

頭書　勅使役之人當日早旦、先遣使令催陵戶、可令敷帖儲手水、

〔園太曆〕觀應元年十二月廿九日庚戌、欲行荷前次官無之、奉行職事季定不催具云々、外記又懈怠歟、寅刻許、頭辨仲房朝臣入來、無次官可被行歟、將又停止歟、可爲何樣哉可計旨示之、予申云、荷前停止曾不承及事也、又無次官被行其儀之條難計申、本儀可向件陵々也、依略儀不向、爲如泥事之處、猶又被略者、如形昇立之儀不爲之哉、事恐尤多、仍彼是難計申、可在時宜之旨申了、但今夜內侍所御神樂云々、然者定有參仕陪從歟、以彼御神樂以後、可被用次官哉之旨申之、後聞次官遂不出來、御神樂陪從無之上、擬侍從荷前文書不具、俄難召寄之旨、參仕權少外記利顯申之、仍遂以不被行云々、

〔三代實錄清和一〕天安二年十二月九日丙申、詔定十陵四墓、獻年終荷前之幣、天智天皇山階山陵、在山城國宇治郡、春日宮御宇天皇〇光仁父施基田原山陵、在大和國添上郡、天宗高紹天皇〇光仁後田原山陵、在大和國添上郡、桓武母大枝山陵、在山城國乙訓郡、桓武天皇柏原山陵、在山城國紀伊郡、贈太皇太后藤原氏〇桓武母新笠大枝山陵、加太皇太后藤原氏〇文德母后順子後山階山陵、在山城國乙訓郡、崇道天皇〇桓武廢太子早良長岡山陵、在山城國乙訓郡、長岡山陵、在山城國乙訓郡、崇道天皇〇桓武廢太子早良八島山陵、在大和國添上郡、先太上天皇〇平城楊梅山陵、在大和國添上郡、仁明天皇深草山陵、在山城國紀伊郡、文德天皇田邑山陵、在山城國葛野郡、〇略四墓

〔三代實錄清和二十二〕貞觀十四年十二月十三日己酉、先是天安二年十二月九日、定十陵四墓、獻年終荷前幣、是日十陵除贈太皇太后高野氏〇桓武母新笠大枝山陵、加太皇太后藤原氏〇文德母后順子後山階山陵、以足其數、在山城國宇治郡、〇略下

〔三代實錄光孝十六〕元慶八年十二月廿日丙午、定每年獻荷前幣、十陵五墓、近江宮御宇天皇〇天智山階山陵、在山城國宇治郡、御宇天皇〇光仁後田原山陵、在大和國添上郡、桓武天皇柏原山陵、在山城國紀伊郡、贈太皇太后藤原氏〇桓武母乙牟漏長岡山陵、在山城國乙訓郡、崇道天皇〇桓武廢太子早良八島山陵、在大和國添上郡、平城太上天皇楊梅山陵、在大和國添上郡、仁明天皇深草山陵、在山城國紀伊郡、

文德天皇田邑山陵、在山城國葛野郡、太皇太后藤原氏〇文德母后順子後山階山陵、在山城國宇治郡、贈皇太后藤原氏〇光孝母后澤子鳥戶山陵、在山城國愛宕郡、

〔政事要略二十九〕太政官符中務省

應每年荷前山陵幷墓事〇應下恐有脫字

一山陵十所

山階山陵近江宮御宇天智天皇、在山城國宇治郡、

後田原山陵平城宮御宇天宗高紹天皇、光仁、在大和國添上郡、

柏原山陵平安宮御宇桓武天皇、在山城國紀伊郡、

長岡山陵贈太皇太后藤原氏〔平城嵯峨母后乙牟漏〕在山城國乙訓郡、

八嶋山陵崇道天皇〔桓武廢太子早良〕在大和國添上郡、

深草山陵仁明天皇、在山城國紀伊郡、

鳥戶山陵贈皇太后藤原氏、光孝母后澤子、在山城國愛宕郡、

後田邑山陵光孝天皇、在山城國葛野郡、

小野山陵贈皇太后藤原氏〔醍醐母后胤子〕在山城國宇治郡、

後山階山陵後太上天皇〔醍醐〕在山城國宇治郡、〇中略

右左大臣〇藤原忠平宣、奉勅依件定之、自餘停止者、省宜承知依件行之、符到奉行、

延長八年十二月九日

〔江家次第抄三〕國忌

今案、天子七廟、或有九廟之說、故陽成天皇以前、或八廟、或七廟、其數不定、然光孝以來定爲九廟、其中以天智爲太祖廟、蓋天武天智皆舒明之子、然文武至廢帝、〇淳天武之裔即位、天智之流如絕、爰光仁

天皇爲田原〇光仁父施基之皇子、而因群臣推戴、得登帝祚、於是天智之流物興、加之天智天皇始制法令、謂之近江朝廷之令、天下百世因准之、爾來至今皆天智之一流、而爲太祖不遷之廟、豈不可乎、亦光仁已爲中興之主、故爲第二世、桓武創平安京、故爲三世、光仁桓武比周之七廟、文世室武世室、所謂劉子駿九廟之說也、其餘隨世互有廢置、然而仁明光孝醍醐、其德蓋天下、不忍毀去、是以後世聖君、遺詔不立山陵國忌、其意者不可過七廟故也、但三女主猶可得毀之、鳥羽苡子〇鳥羽母后藤原氏毀穩子〇朱雀村上母后藤原氏之國忌者也、又案履脫爲上皇、則不置國忌、隨亦有遺詔、崇道天皇、國史云、延曆廿四年四月甲辰、令諸國奉爲崇道天皇建小舍納正稅四十束、并預國忌及奉幣之例、謝怨靈也、今案崇道天皇、爲謝其怨靈准國忌、非廢務之例、故公家固不知之也、

〔古事記傳二十〕近陵遠陵近墓遠墓とは、路程の近遠を以云に非ず、近陵墓はいはゆる十陵八墓にて、其餘を凡て遠陵墓とす、近とは、當代に親しく近き意を以云なり、故近陵の幣物は、こよなく多く、なほ又別貢の幣物も多くありて、其は別に內藏寮より供ることにて、其色目は內藏式に見え、又中務式に、凡十二月奉諸陵幣者云々、其別貢幣者、臨幸便所奉送、其使參議已上、及非參議三位、太政官定之、自餘省點之云々なども見えたる如く、近と遠とは甚く差別あるなり、抑此近遠の定まりしは、三代實錄に、天安二年十二月九日、詔定十陵四墓、獻年終荷前之幣、とあるや始ならむ、其十陵は、天智天皇、田原天皇、光仁天皇、桓武天皇、平城天皇、仁明天皇、文德天皇と七代、是當代の皇祖等なり、平城は然らざれども、近き故に加られたりと見ゆ、嵯峨淳和は近けれども、遺詔にて山陵を置れざる故に入ず、如此七代をしも定められしは、漢國の七廟の制をまねばれたるなるべし、さて餘の三陵は、桓武の御母后と皇后と、崇道天皇は延曆の廢太子にて、そのころ厲給へりしより殊に祭らるゝなり、〇略さて又元慶八年十二月廿日、定、每年獻荷前幣、十陵五墓云々、この時さきに定まれる內を廢かれたるとあ

り、其後御代々々に廢置ありて、延喜式のころは、十陵八墓なり、かくて後々には、たゞ此近陵墓の御祭のみの如くになりて、遠陵の奉幣のことは隱れゆきて、をさ〳〵物にも見えず、いと心うきことなりかし、抑近陵墓は、當代に近きを殊に厚く祭り坐なれば然もあるべきことなるを、其中に天智天皇をば永く廢かれぬることになりぬるは、此も彼漢國の制に、太祖の廟をば、百世といへども廢ずと云にならひ賜へるなるべし、されど始清和の御代に、此天皇を第一に置れたるは、當代の大御父尊より、上七世なる故にこそありつらめ、必しも太祖とし賜ひしにはあらざるべし、然るを其より後々の御代に至ても、猶此天皇を殊に祭坐は何の由にかおぼつかなし、續紀御代々々の宣命に、近江大津宮御宇、大倭根子天皇乃、與天地共長、與日月共遠不改、常典止立賜敷賜覇留法乎云々、などゝありて、殊なる由もありげなれども、此天皇は皇太子に坐しゝほどより、藤原大臣〇鎌足と共に謀給て、蘇我入鹿を滅し給し御功と、又天下の御制度を漢樣に革め給へることゝこそあれ、其他に殊なることも坐ざず、凡孝德の御世に、萬の御制の古より有來ぬるを廢て、多く漢樣にしもなれるは、此天智天皇と、藤原大臣との御心より出づとぞ見えたる、後世に此天皇をしも、中興の主なぞ申すめるは、此漢樣の事を多く創坐る故なるべし、かくて此天皇の御陵をしも、永く殊に祭坐とならば、神武天皇の御陵をこそ、第一に厚く祭り賜ふべく、猶又餘にも有べきをや、

〔延喜式十二〕凡十二月奉諸陵幣者、令陰陽寮擇日、訖即申官、其別貢幣者、臨幸便所奉送、其使參議已上及非參議三位、太政官定之、自餘省點之、山階柏原長岡深草田邑鳥戸後田邑小野八陵、參議已上若非參議三位一人、四位若五位一人、內舍人內豎大舍人各一人、後田原八嶋二陵、〇略〇中四位若五位二人、內舍人內豎大舍人各一人、〇略〇中其使侍從四位已下差文、以十二月五日入太政官、當日平旦、丞錄率史生省掌等、候御在所幔外、史生微聲計列內舍人幷大舍人等、丞率內舍人等入就幔內座、即遙

發使

點五位已上、訖使人進執『獻物、若帶『叙者、暫解『從『事、入置『御所、出候『御幔外、隨『闇司告『進執『幣物、退出、授『内豎大舍人等、

凡供『諸陵幣使大舍人者、依『治部移、令『本寮差定移送歷名、

凡荷前使次侍從已上、若有『闕怠者、移『式部省、不『預正月七日節、兼從『解却、

凡後田原八嶋二陵荷前使侍從次侍從往還定『五箇日、若此内當『元會者、雖『身不參、猶預『見參、

凡荷前使内舍人有『闕怠者、奪『一年季錄、大舍人奪『夏冬衣服、

〔延喜式十八部〕凡點『散位五位已上十人、補『荷前使『之侍從、及次侍從者、侍中務移『無預正月七日節、非侍從者奪『位錄、亦無預同節、

凡闕『荷前使之侍從、及次侍從者、侍中務移『無預正月七日節、非侍從者奪『位錄、亦無預同節、

〔西宮記臨時五〕諸社使、帶劒人不『解劒、詣賀茂御祖者可『解放、○中略山陵使向『陵拜禮、同解之把笏、

〔類聚三代格七〕太政官符

應『停『土師宿禰等預凶儀事

右太政官今月十四日論奏稱、○中略緬尋『古風、野見宿禰獻『策往帝、弘『仁政於昔年、停『殉陵次、垂『遺愛於後世、傳曰、善『善及『子孫、惡『惡止『其身、然則野見宿禰苗裔、應『蒙『延賞之澤、而濫掌『凶儀、不『預『吉禮、夫喪葬之事、人情所『惡、專定『一氏、爲『其職掌、於『事論之、實爲『不穩、臣等伏望、永從『停止、縱有『吉凶、同『於諸氏、其殯宮御膳誄人長及年終奉幣諸陵使者、普擇『所司及左右大舍人雜色人等『充之、伏聽『天裁、謹以申聞者、畫聞既訖、省宜『承知、年終幣使者、依『治部省移、差『蔭子孫散位子等『充之、自今以後、永爲『恒例、

延暦十六年四月廿三日

〔類聚符宣抄四〕荷前

左大辨秋篠朝臣安人宣、内裏獻『山陵物使、五位已上不『參者、自今以後不『得『預節會、縱使會『山陵、不『參奉『班庭、亦同者、自今以後宜『預『擧申簡點、應必參者、

弘仁四年正月七日

參議秋篠朝臣安人宣、承前之例、供『奉荷前使『五位已上、外記所定、今被『右大臣○藤原園人宣、自今以後、中務省點定、爲『恒例者、但三位以上、外記申上可『點者、

弘仁四年十二月十五日

右大臣○藤原園人宣、荷前使參『近處『者、當日奏『返事、自今以後、爲『常例者、

少外記船連湊守奉

弘仁七年十二月十七日

右大臣○藤原冬嗣宣、奉『勅山階○天智後田原○光仁大枝○桓武母后高野新笠柏原○桓武長岡○平城皇母后藤原乙牟漏後大枝○淳和母后藤原旅子楊梅○平城○淳和后高志内親王石作○淳和后高志内親王等山陵獻『荷前使、宜『差參議以上若非參議用『三位以上、立爲『恒例、

少外記上毛野朝臣歛人奉

天長元年十二月十六日

右大臣○藤原冬嗣宣、獻『荷前物山陵使、五位已上六位已下、自今以後、定『辰一點、參『供於殿庭、以爲『永例、

大外記宮原宿禰村繼奉

天長元年十二月廿三日

應『勘『責侍從非侍從闕『荷前使『事

少外記島田朝臣清田奉

右去弘仁十三年二月五日、右大臣○清原夏野宣、奉『勅荷前使五位已上侍從次侍從闕『怠件使、自今以後、解『侍從『任『非侍從者、宜『奪『位祿者、今被『右大臣宣『偁、宣旨之興、其責已重、而頃年之間、猶致『違闕、奉公之義豈合『如此、宜『自今以後、闕『事之輩、不『論『侍從非侍從、一切莫『預『正月七日節會『共引『前後之宣、以令『懲將來者、

承和二年十二月九日

從五位上源朝臣氏

右人依『闕『今月十五日荷前使、解『次侍從任、而今右大臣○藤原冬嗣宣、奉『勅殊免『此度者、

貞觀二年十二月卅日　大輔清原眞人澄雄奉

被中納言兼右大將從三位行春宮大夫藤原時平卿宣偁奉勅雖在放免雜役一人宜差奉荷前幣使者、

寬平五年十二月十日　少外記安倍安直奉

從五位下平朝臣忠則　源朝臣公輔　藤原朝臣滋茂

右被左大臣〇藤原忠平宣偁件等人闕去年荷前儲使仍不可預今年位祿幷來十一月大嘗會祿者、

延長九年〇承平元年二月六日　大外記伴宿禰久永奉

應依式科責闕荷前使侍從次侍從散位等事

右〇略今被右大臣〇藤原師輔宣偁奉勅闕使侍從次侍從從解却幷不可預節會之由式條已存非侍從事同在彼式而近年之間人情懈怠不守法式不參者多事煩尤甚侍從等稱病輩參待賢門之時遣官掌加實撿爰其病雖非顯著依人數已多殊成優容未必解任但爲將來或抑節祿非侍從等雖不預節會未及奪位祿爰積習成常彌致懈怠至于當日依人數不足召求近邊諸司五位已上之間刻限自移物煩彌甚國家大事豈合如此宜仰所司重張嚴制侍從等參待賢門之後令使者加實撿之時自先日有其聞之中彼病顯然者依實可免俄稱本病發動之由事涉虛誕者依式即從解却又令中務移式部不可預七日節至于非侍從解其科法總如式條會不寬宥者召仰中務大錄縣犬養眞宗了

天曆元年十二月十三日　大外記三統宿禰公忠奉

大納言正三位源朝臣高明宣奉勅山城介藤原朝臣季方依闕去年荷前使召勘之日進過狀先了然則返給彼過狀當年位祿官符不得捺印者、

天曆十年七月七日　大外記安倍衆與奉

播朝臣敏通　小槻宿禰糸平　藤原朝臣時柏〇柏恐誤　藤原朝臣遠量

右權大納言正三位兼行右近衛大將春宮大夫藤原朝臣師尹宣奉勅件等侍從闕去年十二月廿一日荷前使須依式條宣從解却者、

應和二年正月十九日　大外記主稅權助周防介御船宿禰傅說奉

〔帥記〕治曆四年十二月廿七日今日荷前也〇略中僕向後田邑〇光孝次官信國令申乘馬〇馬下一本有密由二字密密留了其人三人向仁和寺西山松下再拜之後令燒幣了、

幣物

日荷前使須依式條宣從解却者、

應和二年正月十九日

〔帥記〕治曆四年十二月廿七日今日荷前也〇略中僕向後田邑〇光孝次官信國令申乘馬〇馬下一本有密由二字密密留了其人三人向仁和寺西山松下再拜之後令燒幣了、

〔延喜式〕十四内藏奉諸陵幣

錦綾各二丈八尺別各二尺八寸兩面二丈別二尺夾纈簡纈帛各二疋二丈別各一丈四尺中絲淺絲帛各一疋四丈別各一丈白絹五丈五尺別五尺生絹三疋二丈別二丈絁五丈別五尺蘇芳緂紫緂支子緂紅花緂白橡緂帛各一疋五丈別各一丈一尺綠緂紅花緂蘇芳緂紫緂絲白絲各四絢二兩別各五兩橡絲皂絲生絲各一絢八兩別各二兩蘇芳緂紫緂紅緂支子緂縹緂綿各三屯四兩別各四兩雜色緂木綿大三斤二兩別五兩細屯綿十屯別一屯三嶋木綿卅枚別四枚鴨頭草木綿卅枚別二枚色紙百五十枚別十枚細布二端二丈五尺別一丈五寸曝布二端二丈五尺別一丈

已上陵十所雜給料〇略中

緋縹黃皂白等帛各一疋五丈別各一丈一尺綠緋縹黃等絲各二絢六兩別各三兩橡絲生絲皂絲各十兩別各一兩練絲白絲各三絢四兩別四兩苧麻各大三斤二兩別五兩安藝木綿大十五兩別一兩二分紙百五十張別十五張

已上陵十所雜給料〇略中

已上陵墓幣料預前支料具錄色目十二月上旬申省即待官符請受依件練染又小刀廿柄燈臺廿基儲之自木工寮受用前一日晚差史生四人色別備賚於縫殿寮南院候之內侍已下從內裏退出通夜裁成達曉裹畢所別盛柳筥一合裹以夾纈表淺綠裏結以縹帶二條更納漆櫃安漆高案帀以紫綾表緋裏其雜給料所別筥一合裹以黃表帛裏結以縹帶二條更以縹帶著木〇略中陵別以駕輿丁三人充

擔夫二人幣物、二人雜給、

〔朝野群載六太政官〕官切下文

五色絹六疋〔下二大藏一〕糸七十絢　兩面二疋　帛一疋三丈　綾一疋　苧十斤　白木唐櫃六合
紅花大十七斤九兩　黄蘗大四十三斤　茜大廿三斤　錢四貫六百文　紫草大百四十斤　白紙
二百六十枚〔下二中務一〕油二斗五升六合〔下二宮内一〕

右奉二山陵幷所々一荷前料内藏寮所レ請如レ件

寛弘元年十二月十二日　　左少史私

左大臣宣旨充之　　右少辨藤原朝臣

〔朝野群載二十雜文一〕荷前幣物請文

諸陵寮解申二請　荷前幣物事

合陵墓佰貳拾參處

山陵七十七處　黒染絹五尺
墓三十六處　麻布一端
近陵十處　倭文一丈
一處料　黒葛六兩
生絹一丈五尺
糸一兩
麻一斤
木綿十三兩
裏料薦五尺

生絹參拾陸疋參丈五尺
黒染絹拾疋
糸參拾絢參兩
麻布佰貳拾參端
麻佰貳拾參斤
倭文拾伍端伍疋
黒葛參拾陸斤
木綿參拾捌斤捌兩
黒薦肆拾伍枚壹丈陸尺

中取一具〔高二尺、弘各三尺、〕

右件幣料依レ例所レ請如レ件謹解

天治二年十二月日　　宗信法眼

頭兼算博士越後介三善朝臣

〔年中行事歌合〕三十四番

右　荷前使〔十二月廿三日〕

かしこしなのざきの箱をになひもて年にかはらずたつる使は〇中略

荷前とは、先皇の御陵へ、年の終に幣帛を奉らせたまふなり、

〔天書二神武一〕十二年六月、行幸于日州、拜二皇祖皇考等陵一、令二守護之一、

〇按ズルニ、神武天皇ノ、日向ニ行幸アリテ、祖陵ヲ拜シ給フコト、日本書紀古事記、古語拾遺等ニ見エズ、疑フ可シ、姑ク記シテ後考ニ備フ、

告祥瑞

〔日本書紀二十天武九〕八年三月丁亥、天皇幸於越智、拜後岡本天皇〇齊明陵、

〔小右記〕永觀二年十月廿七日癸卯、辰時許參院、〇圓融令修諷誦於七箇日、寺家巳時參御邑上山陵、〇中略留御車於鳥居外、即下御、余候御劒前行之置御座、〇略下

〔文德實錄二〕嘉祥三年十月己酉、遣中納言正三位源朝臣定、左京大夫從四位上正行王、向山科山陵、〇天智散位從五位下春原朝臣末繼、內舍人從六位下安陪朝臣弘行、向前田原山陵、〇天皇施基右京大夫從四位下藤原朝臣諸成、向後田原山陵、〇仁光參議正四位下滋野朝臣貞主、掃部頭從五位下滋野朝臣善蔭、向柏原山陵、〇桓武中納言從三位源朝臣弘、禪正大弼從四位上藤原朝臣衞、向楊梅山陵、〇平城中納言正三位安倍朝臣安仁、從四位下宮內大輔房世王、向嵯峨山陵、〇嵯峨從三位大藏卿平朝臣高棟、散位從四位下藤原朝臣輔嗣、向大原山陵、〇淳和參議從四位上伴宿禰善男、侍從從五位下藤原朝臣諸葛、向深草山陵、〇仁明告以賀瑞之由、策文曰、天皇恐見毛掛畏支山陵爾申賜倍止申久、維嘉祥三年八月十七日爾公卿等奏世眞久、攝津國美作國備前國幷獻白龜利、石見國獻甘露禮眞久乎進止奏世利、如此支希世留大瑞波、是薄德乃可冷感致支物爾波非須、掛畏支山陵乃慈賜比示賜倍留物奈利爲天奈毛、貴喜比受賜利畏萬留狀乎進出、恐見毛申賜波久申、

告事變

〔類聚國史三十帝王六〕大同五年九月丁未、遣使告于柏原大朝庭爾申賜止申久、內侍尙侍正三位藤原朝臣藥子者、初太上天皇乃平城〇東宮止坐之時爾、東宮宣旨止爲天仕賜比支、其爲性乃不能所乎知食氏退賜比去賜氏支、然物乎百方趁逐氏、太上天皇爾近支奉氏、非御言事乎御言止云都都、褒貶任意氏莫所恐憚、又萬代宮止定賜之平安京乎棄賜比、停賜氏之平城古京爾遷左平奉勸氏、天下乎擾亂百姓乎亡弊、又其兄仲成侍己妹勢氏、以虛詐事親王夫人乎凌侮氏、棄家乘路氏東西辛苦世平之如此罪惡不可數盡因、玆藥子者官位解氏自宮中、退賜、仲成者佐渡國權守退賜比都、又續日本紀所載乃崇道天皇、〇早良爾與贈太政大臣藤原朝臣〇種繼藤原不好之事、皆悉破却賜氏支

告外蕃來朝

而更依人告氏破却之事、如本記成、此毛亦無禮之事利、今如前改正之狀、差參議正四位下藤原朝臣緒嗣、畏縮毛申賜久止奏、是日宮中戒嚴、

〔續日本紀十孝謙八〕天平勝寶四年閏三月乙亥、遣使於大內、〇天武山科、〇天智惠我、〇延喜諸陵式、仲哀應神天皇陵、並稱惠我、直山、〇延喜諸陵式、元明元正天皇陵、並稱奈保山、等陵、以告新羅王子來朝之狀、

〔玉海〕壽永二年五月十五日戊寅、今日被立佐保山陵〇聖武使、被謝申東大寺大佛燒損、幷近日修補事云々、

告火災

○按ズルニ、山陵ニ告グルハ、其事多端ニシテ、各部各篇ニ散見セリ、卽位、皇太子ノ冊及ヒ政治部ノ改元篇、禮式部ノ元服篇等ニ、各告祭ノ事アルガ如シ、

祭陵

〔延喜式十中務〕凡臨時遣山陵使侍從次侍從、若致闕怠、一准闕荷前使之例、

〔日本書紀二十天武八〕元年七月壬子、先是軍金網井之時、高市郡大領高市縣主許梅、儻忽口閉而不能言也、三日之後、方著神以言、吾者高市社所居名事代主神、又牟狹社所居名生雷神者也、乃顯之曰、於神社日本磐余彥天皇之陵奉馬及種々兵器、〇中略言訖則醒矣、故是以便遣許梅而祭拜御陵、因以奉馬及兵器、

〔續日本紀一文武〕二年正月庚辰、遣直廣參土師宿禰馬手、獻新羅貢物于大內山陵、〇天武

〔續日本紀四文武〕慶雲四年七月庚子、有事于大內山陵、〇天武

〔續日本紀十聖武〕天平二年九月丙子、遣使以渤海郡信物、令獻山陵六所、

〔續日本紀十聖武四〕天平十四年五月庚申、遣內藏頭外從五位下路眞人宮守等、賫種々獻物、奉山陵、

〔續日本紀十六聖武〕天平十七年五月戊辰、奉幣帛於諸陵、

〔續日本紀十七聖武〕天平二十年十二月甲寅、遣使鎭祭佐保山陵、〇文武后藤原宮子娘、度僧尼各一千、

〔續日本紀十九孝謙〕天平勝寶六年三月丙午、遣使奉唐國信物於山科陵、

〔續日本後紀八仁明〕承和六年十二月辛酉、天皇御建禮門、分遣使者、奉唐物於後田原、〇光八嶋、〇崇道眞楊梅、〇平城柏原、〇桓武等山陵、庚午、天皇御建禮門、奉唐物於長岡山陵、〇桓武后藤原乙牟漏爲遣先日之頒幣也、

〔三代實錄一清和〕天安二年十月廿三日庚戌、遣外從五位下行陰陽助兼陰陽權博士笠朝臣名高、鎭謝眞原山陵、〇文德

〔言成卿記〕文久三年二月廿四日、今日未刻、神武帝山陵使、奉向陵前、誦宣命、刻限主上〇孝明著帛御服下御東庭、被准四方拜云云、仍向于大和畝火山方、給御拜云云、

〔續日本紀十聖武〕神龜五年八月丙戌、天皇御東宮、緣皇太子病、遣使奉幣帛於諸陵、

〔續日本紀十孝謙〕天平勝寶七年十月丙午、勅曰、頃日之間、太上天皇〇聖武枕席不安、寢膳乖宜、〇中略遣使於山科、〇天智大內東西、〇天武持統、安古、〇文武眞弓、〇岡宮天皇草壁奈保山東西、〇元明元正、等山陵、及太政大臣〇藤原不比等墓、奉幣帛以祈請焉、

新災異

〔類聚國史三十帝王〕天長五年八月辛未、爲有天地災變、奉幣帛柏原先陵、〇桓武祈請之、其詞曰、天皇〇淳和恐美恐美申賜止申久、頃間天地變異有爾依天、左右爾念爾、掛畏支天皇我朝廷乃護賜比矜賜波平依天之、平介久無事久有倍止念賜天奈大納言正三位良岑朝臣安世、左京大夫正四位上石川朝臣河主等差使天、護賜比矜賜布倍狀乎恐美恐美申賜波久申、

〔續日本後紀九仁明〕承和七年六月己酉、物恠見于內裏、柏原山陵〇桓武爲祟、遣中納言正三位藤原朝臣愛發等於山陵祈禱焉、

〔續日本後紀十仁明〕承和八年五月壬申、詔曰、天皇我詔旨爾坐、掛畏支神功皇后乃御陵爾申賜止申久、頃者在肥後國阿蘇郡神靈池無故涸滅、井丈、又伊豆國有地震之變、乍驚問求禮波旱疫之災、及兵事可有止申、自此之外爾物恠亦多、依此左右爾念行爾、掛畏支神功皇后乃護賜比助賜牟依天、無事久

可有止思食天、參議大和守從四位下正躬王乎差使氏奉出狀乎聞食天、天皇朝廷乎無動久大坐來、國家乎平久護賜比助賜倍止恐美恐已申賜久止申須、是日遣官命使於山科、〇天智柏原、〇桓武兩山陵賽祟焉、

〔三代實錄十清和〕貞觀七年二月十七日己巳、勅遣參議從四位下守右大辨大枝朝臣音人、從四位下行中務大輔忠範王等向山階山陵、〇天智告以神靈池水沸騰預防災害、告文云、天皇我詔旨爾坐、掛畏支山階御陵爾申賜倍止申久、自去年至于今月、天變地災不止、加以肥後國阿蘇郡爾在流神靈池無故沸溢利、乍驚卜求波禮兵疫乃事可有止申利、自此之外爾物恠亦多、依此天左右爾念行爾、掛畏岐御陵護賜牟爾依天、無事久可有止思食天、去去月爾差使天奉出元止之支、然乎忽爾依有穢天奉出止不得奈利支爾、今吉日良辰乎撰定天、參議從四位下守右大辨大枝朝臣音人、從四位下行中務大輔忠範王等乎差使天、奉出須、此狀乎聞食天、天下平久群臣忠心乎懷岐、上下有序利、兵疫不發之天實祚無動久護賜比、堅磐常磐爾矜幸倍賜止恐美恐美申賜波久申、參議正四位下行右衞門督兼讃岐守藤原朝臣良繩、從五位上行兵部少輔源朝臣直等向柏原山陵、〇桓武從三位守權大納言兼右近衞大將藤原朝臣氏宗、從五位上行民部少輔源朝臣嶺等向嵯峨山陵、〇嵯峨大納言正三位兼行民部卿太皇太后宮大夫伴宿禰善男、散位從四位上茂世王等向深草山陵、〇仁明參議正四位下行左大辨兼勘解由長官南淵朝臣年名、從四位上行侍從利基王等向田邑山陵、〇文德告文一同山階山陵、

〔三代實錄二十清和〕貞觀十六年九月五日庚寅、遣參議從四位上行左兵衞督源朝臣能有、從四位上行伊勢守基棟王向柏原山陵申謝風水災、

〔園太曆〕康永四年八月八日、傳聞、今日爲彗星御祈、發遣山陵使、〇中略深草、後深草、後伏見、御同所、侍從三位實益卿也、御書在成卿草之、宸筆御清書、上皇御束帶有御拜、御書自寢殿東面妻戶被出之、

〔康富記〕文安元年三月十一日辛酉、是日被立山陵使者也、去年九月內裏炎上以後、今年甲子也、旁被

新國家平安

〔獻御書也、依〻代々例、御侍讀左大辨菅原益長卿被〻作〻進御書御清書宸筆也、舊例如〻此、今度三箇所也、後白川院山陵（法住寺）使四條宰相隆遠卿、次官右少將藤原成任、後深草院（深草法華堂）使正親町宰相中將持季卿、次官左衛門權佐藤原親長、後小松院（泉涌寺）使左大辨益長卿、次官左少將藤原季春等也、藏人權右中辨俊季奉〻行之、自〻禁中〻使被〻進發〻云々、

〔吉續記〕文永五年六月廿二日、今日依〻異國事、（○寇元）被〻發〻遣山陵使、頭中將奉行也、上卿內府被〻參陣、御陵七ヶ所告文、右少辨經業草、使皆參之後、內府著〻仗座、頭中將參〻進軾、可〻定〻申日時幷使事之由仰之、次召〻辨（賴親）被〻仰〻日時事、主上（○龜山）內々有〻出〻御中門〻被〻御覽、（○中略）使著〻仗座〻賜〻告文、（○中略）

山陵使次第

山階（○智天）
權中納言藤原朝臣長雅
前能登守高階朝臣泰遠
圓宗寺（○後三條）
參議源朝臣雅言
散位源朝臣雅範
大原（○後鳥羽）
參議藤原朝臣公孝
左近將監源朝臣賴基
椙列池上（○神功）
權中納言源朝臣通賴
皇后宮少進橘長宣
大內山（○宇多）
參議藤原朝臣高定
紀伊守橘朝臣兼朝
法住寺（○後白河）
參議源朝臣具氏
散位源朝臣則有
金原（○土御門）
宮內卿藤原朝臣重氏
散位源朝臣則雅

山陵鳴動

〔實麗卿記〕文久三年三月廿一日丁卯、今日神武帝幷神功皇后等山陵使發遣日時定、上卿新大納言（資）、辨博房、奉行豐房朝臣、宣命使菊亭中納言（實）、攘夷御祈請云云、

〔扶桑略記二十九〕（後冷泉）康平六年五月廿九日、軒廊御卜、深草山陵（○仁明）鳴之異也、

〔中右記〕天仁元年八月十五日、晩頭參內、是依〻可〻行〻軒廊御卜〻也、近曾八幡宮言上、大和國池後池上（○成務）山陵鳴動事可〻卜申者、予於〻仗座〻行〻御卜〻、如〻常、官卜申云、神事不信、公家御愼、尋又大略同意也、付〻頭爲房〻令〻奏、仰云、早可〻被〻立〻山陵使〻也、件日時等可〻定申者、則仰〻權辨爲隆〻令〻勘〻日時、來廿日者則置〻勘文〻召〻外記〻召〻例文、令〻權辨書〻使定文、使宰相俊忠、次官內藏助政仲、

〔葉黃記〕寬元四年八月十七日癸卯、天智天皇（○後鳥羽）陵鳴動事、被〻立〻山陵使〻云云、

〔百練抄十六〕建久五年七月廿三日壬午、被〻立〻後白河院御廟山陵使、彼御廟去月廿日依〻鳴動事、

〔百練抄十六（後深草）〕寶治元年六月廿三日甲辰、大宮大納言（公相）參仕、被〻發〻遣山陵使、先〻被〻行〻定、使二位中納言、（真教）辨親賴朝臣也、去頃天智天皇御陵依〻鳴動也云々、

〔類聚國史三十（帝王）六〕弘仁七年六月壬戌、神祇官言、伐高畠山陵（○桓武后藤原乙牟漏）樹、祟見〻龜兆〻者、勅、朕（○嵯峨）情所〻敬、唯在〻山陵〻而有司不〻勤〻督察、致〻斯咎徵〻、求〻之國典、其刑非〻輕、自〻今以後、嚴加〻禁斷〻、

伐木

〔類聚國史三十（帝王）六〕天長四年十一月癸未、告〻柏原山陵（○桓武）詞云、天皇（○淳和）敬〻白、（多利）申（爾）依〻氏、（捕）却（介）淨奉（牟我）爲（爾）、參議正四位下直世王、左（禮）切（留）事、檢見使等申（久）、御在所上（爾）木生（多利）止申（爾）、

京大夫正四位上石川朝臣河主等（乎）差使（天）、奉出（須）止申（賜布）狀（乎）、畏（毛）畏（毛）申（賜）波（久）止申、

〔續日本後紀十（仁明）〕承和八年十月乙未、詔曰、天皇（我）詔旨（止）掛〻畏（支）柏原（乃）御陵（爾）申（賜）倍（止）申（久）、頃者御病發（天）惱苦（比）大坐、依〻此（天下求（禮）波）、掛〻畏（支）御陵（乃）木伐幷犯穢（流）祟有利、讀經奉〻仕（波）無〻咎（久）可〻有（乎）、卜申（止）、乍〻驚恐〻畏（流）狀（乎）、差使參議從四位下大和守正躬王、右近衛中將從四位上藤原朝臣助等（天）奉出、卜申（我已止久）讀經（毛）令奉仕、又巡見檢（天）犯狀（乃）隨（爾）山陵守等（乎波）勘賜牟、此狀（乎）平久聞食天、護賜（比）矜

賜牟爾依天之所苦平癒天、國家無事久可有止恐美毛申賜久止申、

〔續日本後紀十仁明〕承和十年四月己未朔、楯列陵守等言、去月十八日食時、山陵鳴二度、其聲如雷、即赤氣如飄風、指離飛去、申時亦鳴、其氣如初、指兌飛亘、遣參議正躬王加檢察、伐陵木七十七株、至楮木等、不可勝計、便即勘當陵守長百濟春繼上奏矣、己卯、使參議從四位上藤原朝臣助、掃部頭從五位下坂上大宿禰正野等、奉謝楯列北南二山陵、依去三月十八日有奇異、搜檢圖錄有二楯列山陵、北則神功皇后之陵、倭名雜足姫命皇后南則成務天皇之陵、倭名稚足彦天皇世人相傳、以南陵爲神功皇后之陵、偏依是口傳、每有神功皇后之祟、空謝成務天皇陵、先年緣神功皇后之祟、所作弓劒之類、誤進於成務天皇陵、今日改奉神功皇后陵、

〔續日本後紀十仁明〕承和九年十二月庚辰、獻楯列山陵神寶、曰、天皇我詔旨掛畏支神功皇后御陵爾申給閇申久、御心爾念行須事有爾依天、御寶弓劒等設備天、吉日良辰乎擇天、參議從四位上式部大輔兼讃岐守滋野朝臣貞主乎差使賜天奉出此狀乎聞食天、御心爾念行如久國家乎平久護比矜賜閇恐美恐美申賜久止申、

〔續日本後紀仁明〕嘉祥三年三月壬辰、卜食申、柏原山陵武桓○告祟、仍遣使奉宣命曰、天皇我大命掛畏岐柏原乃御陵爾申賜倍止申久、頃間物恠在爾依天下卜求波禮掛畏岐御陵爲祟賜倍止申利、因茲恐畏已止无波○波恐極誤若久波御陵內爾犯穢世毛也在止令巡察无止爲天、奈參議從四位上行左兵衛督藤原朝臣助、從四位下行宮內大輔房世王等乎差使天奉出須此狀乎聞食天、御體平安爾、寶祚无動久護賜比矜賜倍恐美申賜久止申、甲午、復奉宣命曰、天皇我大命止掛畏岐柏原乃御陵爾申賜倍止申久、頃間御占申爾爲祟賜倍留依天、使臣乎奉出天令巡察留爾、御陵內爾斫樹留事在氣利、此乎乍聞食恐畏萬利天、御陵司等乎波法隨爾勘賜比、御陵守等乎波替退賜已止訖奴、是以參議從四位上行左兵衛督藤原朝臣助、民部大輔從四位下基兄王等乎差使天、申謝奉出此狀乎聞食天、天皇朝廷乎御體平安爾、寶祚无動

久護賜比矜賜倍止恐美恐美申賜久止申、

〔三代實錄清和〕貞觀八年六月廿九日壬寅晦、先是大和國言、楯列山陵○神功守等多伐樹木、神祇官卜云、炎旱之災、實因伐木、是日遣使申謝、告文云、天皇掛畏岐御陵爾恐美毛申賜部止申久、比來涉旬天不雨之、農業失利、是有何祟咎天所致乃災奈眞止牟止左右爾憂歎岐賜布間爾、大和國司上須耳掛畏岐御陵乃木乎陵守等數多久伐損利、依此天旱災波所致奈留部申世利、此爾驚畏利御卜爾令問求爾此事實奈止利卜申世是以謹恐懼已止限量毛之、奈犯過留陵守幷能不巡撿留諸陵司等乎波今任法爾勘倍賜比罪奈倍賜波止須、此狀乎參議正四位下行右衛門督兼讃岐守藤原朝臣良繩、散位從四位下秀世王等乎差使天謝申天畏申爾奉出須、掛畏岐御陵平久聞食天、時毛換佐須甘雨令零女賜比、國家無事久、農稼無妨久矜惠比助波止恐美毛申賜波久申、十月十四日乙酉、遣使於山階○天智田邑○文德等山陵、申謝陵中樹木多被伐損之狀、告文曰、天皇我掛畏岐山階乃御陵爾恐美恐美毛申賜止申久、掛畏岐御陵乃木乎陵守數多伐損世利、依此天犯過留陵守幷能不巡撿留諸陵司等乎任法爾勘賜比罪奈倍賜岐狀乎去六月七日爾、從三位守權大納言兼右近衛大將藤原朝臣氏宗等乎差使天謝申天畏美申爾奉出賜倍利而今勘賜爾諸陵戶等或畏罪天逃退、或依病不參、仍其身侍留限波且任法爾勘賜比罪奈賜部、但被病及逃退輩波相續勘賜牟此狀乎、同前使氏宗乎差天聞申爾奉出賜布、掛畏岐御陵平久聞食天、天皇朝廷乎護幸倍賜比、天下無事久矜賜倍止恐美恐美毛申賜止申、掛畏岐御陵乃木乎陵守等數多伐損世利、依此天犯過留陵守幷能不巡撿留諸陵司等乎任法爾勘賜比罪奈倍賜岐狀乎六月廿一日爾、正三位行中納言兼陸奧出羽按察使源朝臣融乎差使天謝申之畏利申爾奉出賜倍利、而今勘賜爾陵戶等或畏罪天逃退多利、仍其身侍留限波且任法爾勘賜部、但逃退輩波相續勘賜牟此狀乎、參議正四位下行左大辨兼勘解由長官南淵朝臣年名乎差使天聞申爾奉出賜布、掛畏岐御陵平氣久聞食天、天皇朝廷乎護幸倍賜比、天下無事久矜賜倍止恐

掘損

美恐美毛申賜波久止申、

〔三代實錄二十七清和〕貞觀十七年七月三日癸未、遣從四位上行民部大輔潔世王、散位從五位下有能王、向楯列山陵〇功神申謝百姓伐陵中樹、兼祈甘雨、

〔扶桑略記二十九後三條〕延久二年庚戌正月十三日、成務天皇神功皇后等、山陵兆域內狩獵、幷伐損樹木之輩、會赦否由被問法家、其後件犯人等、令檢非違使尋捕、

〔中右記〕大治五年五月九日庚戌、今日被立天智天皇山陵使、大納言能俊卿、〇略中去年十二月比、備前守忠盛朝臣郎等、切彼山陵樹木也、度々被尋問之處、依不承伏、沙汰之間、自及數月也、但一日令忠盛朝臣召進彼下手人也、仍此使也、可被行罪之由被申云云、

〔扶桑略記二十後冷泉〕康平三年六月二日、河內國司言、上盜人撥推古天皇山陵之由、

〔扶桑略記二十九後冷泉〕康平六年五月十三日、發遣山陵使、是依去三月盜人撥池後〇成務山陵掠奪寶物也、

九月廿六日、被定山陵寶物等如舊可返納之狀、紀傳明經等諸道勘文、幷犯人罪名被勘法家、十月十七日、興福寺僧靜範、坐山陵事配流伊豆國、緣坐者十六人、僧俗共配流安房常陸佐渡隱岐土佐等國、此日立興福寺使、參議左大辨藤原經家卿、少納言源師賢等爲遣流寺家僧被告其由也、

〔百練抄四後冷泉〕康平六年九月廿六日、諸卿定申諸道勘申、山陵寶物等可返置議法、十二月十五日盾列山陵〇成務修覆、幷返納盜人所取出之寶物、

〔中右記〕長治三年〇嘉承元年二月十九日、小松山陵〇光孝使可被立、日時使右大將被定申、來廿八日是仁和寺法親王、去年被造房舍之間、西築垣入山陵四至內、頗被堀破了、其後彼山陵頻鳴云云、又入滅、近日公家玉體不豫之間、祖廟成祟之由見御卜、遣右衞門權佐實光實撿之處、事已實也、爲被申件事可被立山陵使云云、予入其使、次官保隆者、廿八日、午時參內、是爲勤仕小松山陵使所參入也、予給告文、出陽明門、行向後田邑山陵〇小松陵也先二拜讀告文、又二拜了令燒幣帛、爰仁和寺別當權大僧都覺意來、是依天氣、此次聊被破件山陵邊事、依有可廻見之由仰也、雖然已臨夜陰、不知東西、空居綠樹之下、只尋破損之趣許也、覺意僧都申云、故覺行法親王、被作北院僧房之時、山陵與彼房面築垣、相攝之間、下人頗犯其土、人々見付天制止了、但如延喜式者、件山陵四至又不分明也、仍前日遣右衞門權佐實光令實撿之處、四至不分明由注申了者、以此旨可奏聞者、今日告文之趣、雖有破損之疑、未有一定、由仍且被謝申也、及深更歸來、且奏此旨了、〇略中

實撿後田邑幷村上二陵破損事

後田邑陵〇光孝

新堀損陵東邊三箇所

一所南北十五丈五尺廣所一丈八尺、深所八尺餘、

狹所八尺餘、淺所三四尺許、

一所南北八丈五尺廣所一丈三尺、深所六尺、

狹所七八尺許、淺所三四尺許、

一所南北二丈二尺廣所一丈、深所五尺、

狹所六尺許、淺所二尺、

一喜多院丑寅築垣外北小路東西十五丈五尺、廣一丈二尺、

但四至不分明之由、寺家所申也、

邑上陵〇村上

加實撿之處、全無破損、四至不分明之由寺家同所申也、

右依宣旨實撿如件

長治三年二月十三日

諸陵寮官人代山末吉

件文書等下給〔天〕相尋之處、彼清水寺近代全無二其跡一、又立屋里在二廣隆寺邊之由寺僧等所一レ申上一也、仍不レ可レ有二一定事一歟、但喜多院造作之間、小松山陵、時々鳴動之由僧都所一レ被レ語也、今案件山陵四至强不レ可レ被レ尋、只今度彼喜多院造作之間、爲二面築垣一、小松山陵之東邊、爲二下人一頗被二堀破一也、被二修一補件所者可レ宜歟、其由見參之次奏聞了、

〔百練抄五堀河〕嘉承元年二月廿八日、發二遣參議宗忠卿於後田邑陵一、〔○光孝〕謝二申堀損之由一、去十三日、令二左衞門權佐實光實撿之一覺行親王修二造喜多院之間、誤堀損云云、任二式文一可二修固之由宣下一、

〔本朝世紀〕久安五年十月卅日戊寅、今日右少史惟宗時重下向南都、是爲レ實二撿聖武天皇山陵一也、去十日、東大寺所司等訴申云、件山陵去七月、爲二興福寺上座信實一被二撥堀一之由云云、

左辨官下二大和國一

應レ遣二使實撿言上東大寺所司等言上堀二穎本願聖武天皇山陵一運取數多大石等一事

使右少史惟宗時重　從伍人

左史生　從參人

右史生　從參人

使部貳人　從各壹人

副下東大寺解狀幷山陵給面延喜式文等、

右左大臣宣、奉レ勅堀二穎彼山陵一、運二取大石等之事一、爲レ令二實撿言上一、差二件人等一、宛二使發遣一、如レ件者、國宜承知、使者經二彼之間一、依レ例勤二供給一、官符追下、

久安五年十月卅日

右少辨平朝臣範家

使右衞門權佐藤原朝臣實光

大史小槻宿禰師經

十一月廿五日癸卯、今日實二撿山陵一之使、右少史時重歸洛、信實陳申云、信實弟子權上座玄實、爲二造一持佛堂一、奈保山石少々所二引也一、聖武天皇山陵者在二佐保山一之外也者、東大寺諸司申云、佐保山奈保山是一所異名也者、難二一決一、子細見二于問註記一了、

〔山陵志〕聖武陵、〔○中略〕按今爲二眉間寺地一、爲二之所一レ殘削一無レ完也、然猶撿二其跡一、則後溝圓而前溝方、所レ象二宮車一尚有レ存焉、

〔山陵考略〕式〔○延喜〕佐保山南陵、聖武天皇、在二大和國添上郡奈良の北、法蓮村眉間寺の山上に在、久安年中に、當寺を建て後、陵地を削れる事は山陵志に委し、但今も猶後面には環池の跡みえたり、此陵は東大寺より守護して、祭祀懈怠なし、陵地の全くして、事實の分明ならぬには猶勝れりと云べし、按に、此地戰國の時、松永氏城を築くと云傳ふ、損壞も蓋當時の所爲にも有べきなり、

〔百練抄十四條〕天福元年三月七日辛亥、今夜群盜亂二入鳥羽安樂壽院法華堂一、〔○鳥羽〕捜取二銀御塔幷種々寶物一云々、

〔百練抄十四條〕嘉禎元年四月八日庚午、或人云、去月廿日、盜捜取重寶云云、多是金銀之類云云、二年四月十五日辛丑、爲レ實二撿天武天皇御陵一被レ遣二勅使一、參議左大辨爲經、諸陵頭惟宗盛能、率二寮下部一參內、稱二康平之例一、不レ及二穢氣沙汰一歟、曆仁元年二月七日癸未、中大夫判官友景、相二具犯人一〔天武山陵盜人也〕參二大理門前一、見物之車塞二路壯觀也、

〔帝王編年記二十四條〕嘉禎元年四月十一日、大和國高市山陵、去比爲二盜人被一レ穿破一、近邊南都幷京中諸人、多入二陵中一、奉二拜御骨等一、天武天皇山陵也、

〔明月記〕文曆二年〔○嘉禎元年〕四月廿二日甲申、發二山陵一盜事、天武天皇大內山陵云云、只白骨相連、又御白髮猶殘云云、六月六日、暐尋入來之次、談奉レ見二山陵一者傳々說、每レ聞增二哀慟之思一、於二御陵一者又奉二固由有一レ其聞一、定簡略歟、於二女帝御骨一者、爲レ犯二用銀筥一、奉レ弃二路頭一了、雖二塵灰一猶可レ被二尋收一歟、等閑沙汰可レ恐事歟

〔實躬卿記〕正應六年四月十二日、抑彼卿〇俊定相語曰、先日官人章文、於河東邊行廣法師ヲ召取、其故者天武天皇堀御廟、取彼御頭、臨下取之由風聞、仍召取云云、件御頭納櫃持之取之、奉置法勝寺阿彌陀堂云云、此事實彼御頭歟、彼實否未決、件等事俊定可申沙汰之由、先日關白被仰、凡無才學事也、嘉禎堀彼御廟有盜人、官人召取之渡大路、自彼手傳取又所相傳也、白狀云云、此事爲頼藤勅使被問諸人云云、先阿彌陀堂之御不穩便、實否落居以前奉堀、彌宜口佛由人々申之由所相語云云、件頭大過普通之由章文申入云云、

〔阿不幾乃山陵記高山寺文書〕　艮號二野口一

盜人亂入事文曆二年三月廿日、廿□□兩夜入云云、

伴陵形八角、石壇一通一町許歟、五重也、此五重ノ峯有森十餘株、南面有石門、門前ニ有石橋、此石門ヲ盜人等、纔人一身通許切開、御陵ノ内ニ有内外陣、先外陣方丈間許歟、皆馬腦也、天井高七尺許、此モ馬腦無縫目一枚ヲ打覆云、内陣ノ廣南北一丈四五尺、東西一丈許、内陣有金銅ノ妻戸、廣左右扉各三尺五寸、七尺扉厚一寸五分、高六尺五寸、左右ノ腋柱、廣四寸五分、厚四寸、マクサ三寸、鼠走リ三寸、冠木、廣四寸五分、厚四寸、已上金銅扉ノ金物六、内小四寸五分許大二、四寸許已上形如蓮花古不ノ形師子也、内陣三方上下皆馬腦歟、朱塗也、御棺張物也、以布張之入角也、朱塗、長七尺、廣二尺五寸許、深二尺五寸許也、御棺ノ蓋ハ木也、朱塗、御棺ノ床ノ金銅厚五分、互上ヲ彫透、左右ニ八、尻頭ニ四、クリカタ四、尻二、頭二、御骨首ハ普通ヨリスコシ大也其色赤黑也、御脛骨長一尺六寸、肘長一尺四寸、御棺内ニ紅御衣ノ朽タル少々在之、盜人取殘物等被移橘寺内、石御帶一筋、其形ハ以銀兵庫クサリニシテ、以種々玉飾之、石二アリ、形如連錢、表手石長三寸、石色如水精、似玉帶、御枕以金銀珠玉飾之、似唐物、依難及言語不注之、假令其形如鼓、金銅桶一納一斗許歟ハ居床、其形如禮盤、鑷少々クリカタ一在之、又此外御念珠一連在之、三匝ノ琥珀御念珠ヲ以銅ノ糸貫之、而多武峯法師取了、又彼御棺中ニ、銅カケカケ二在之已上記如此、

〇按ズルニ諸陵雜事注文ニ、大和青木御陵天武天皇御陵トアリ、又西大寺三寶料田畠目錄ニモ、御廟東邊二段字青木トアリ、阿不幾ハ即チ青木ナルベシ、

〔仁部記〕文永十二年二月十七日戊午、柏原山陵堀穿事、舊年窮臘被實檢了、件覆奏文、今日可奏聞也、

〇中略

實檢言上柏原山陵被堀發事

御在所嶺東西一丈三尺許、南北一丈六尺、餘所堀發也、以土假以塞之、

右依宣旨實檢言上如件、抑件山陵登十許丈、壇廻八十餘丈、但於陵中者不及實檢、仍注在狀謹解、

文永十一年十二月廿九日　　諸陵寮

頭賀茂朝臣在爲

使

左大史小槻宿禰秀氏

〔山陵志〕按柏原名久廢、其地難認、廟陵記引山槐記指南云、稻荷山南、則極樂寺趾、今是爲寶塔寺、其南則霞谷、是仁明帝陵所也、又其南伏見之山、有柏原焉、是桓武帝陵所也、據式條兆域、及山槐記所載、閱當時地圖、即今之伏見城山、古御香、大龜谷等地、總是皆柏原、則陵之所在、想當在城之中央、蓋築城時、爲所毀壞、又按仁部記、文永十一年以盜發柏原山陵、諸陵寮上言、其狀曰、御所之巽、東西一丈三尺、南北一丈六尺發堀、上似塞以石、又云、件陵登十丈、壇圍八十丈、明是全體必不卑小、而今問其所終于難認、則云壞於築城果然也、噫其城亦已墟、桑海之感又奚耐焉、

〔寺井菊居筆記〕柏原陵、いろ〳〵近世說ありて、今の所には有べからず、桃山の内なぞ申說もあり、予明和九辰年三月、至りて御陵へも上り見しに、文永中、盜人御陵をあばきし事、名勝志にく

はしくあり、其跡とみえ、頂上大に凹にして、いかにも盜人の所爲の跡と覺ゆる、天子の陵なれ
ど、西面にして谷の細川南を流れ、池などの跡とも覺えず、然ども祟にて上賀茂近きとて、柏原
へうつされし程の所なれば、今少入念あらんか、甚窮窟の地なり、大龜谷谷口町の北側、水茶屋
の庭より入、うらの山麓にあり、此茶店陵戸と覺ゆる、天明大火後、大火の事、禁裏の女中などよ
り何か俗事申なし、九條殿の御領にて、深草の莊屋長谷川太郎兵衞此陵の木をきりし故、九條
殿御相續の障りなどゝ異說も出で、此御陵へ度々御內々の御使あり、千年御忌にも御內使立
し故、此陵上の凹を平均して陵のかたちを失ひ、茶店のうらより至る所を分道に直し、天子の
御陵を東面にしたり、猶糺すべし、

〔公衡公記〕弘安十一年二月廿五日、官人章貞來、召取山陵犯人〔繼體天皇、攝津國島上陵、勘賞事申入云云、付長官〔鏡下〕持來之、然而明後日伊勢幣家君御神事也、仍不取入返給、

〔高國記〕柳本高屋合戰之事

其時分河內國ノ守護ハ畠山稙長ナリ、父尙慶十八歲ニテ入道シト山ト云、高屋ノ城ヲトリ立テ
テ子息ニユヅリ、紀州廣ト云所エ隱居シケル、此高屋ノ城、昔安閑天皇ノ御廟ナリ、然レバ要害ヨ
ケレバトテ城ニ築立ラレケレドモ、本城ニハ恐レテ畠山殿モ二ノ丸ニ住シケル、柳本此時勢ヲ
分テ、二千餘人高屋城エ馳向ヒ、其マヽ押寄責ケレバ、稙長難儀シ、已ニ被責落ト見ユル事度々也、
〇中略此城ニ一ノ不思議アリ、安閑天皇ノ御廟ヲ城ニ用ラレシ故ニヤ、大和路ノ水越ト云道ヨリ、
城エ入ル者生テ歸ル事ナシトテ、水越路ヲムカシヨリ明道ニテ、手向ノサタモナカリケル、
〔前王廟陵記上〕古市高屋丘陵、〇安閑或曰、今高屋村城山是也、明應中、畠山尙慶築城、或曰、近年土民發陵得古代器物等、

〔章武朝臣記〕嘉永五年四月十三日、傳奏三條家ヲ招ニ應ジ爲名代章甫出頭之處、直接御尋之筋ニ
付、可相成者後刻ニ而も直參候樣被命、依之申刻出頭、大納言實萬卿面會、近來風說有之候、南都ニ
而撥山陵候犯人一條ニ付、內々武邊ヨリ役邊ヲ以テ打合之儀有之、乍內々殿下政通公も及言上
之處、官外記之外ニ東坊城聰長卿、幷ニ章武等學者之邊ヲ以テ、勘例幷所存等可勘進旨被命候間、
篤と勘考、不日可申上旨被命、左之書附被渡、

於奈良奉行所召捕候盜人、成務天皇陵內ヲ取出候物、幷一旦堀穿候跡、取計方等之事、

但堀穿候所如元埋置有之趣之事

〔奈良奉行調書〕嘉永五年十二月、和州添下郡橫領村百姓嘉兵衞外四人、
成務天皇御陵堀穿、曲玉朱管石等盜取候犯罪ヲ以テ磔ニ處セラル、尤同人判決前死亡ニ付、鹽詰
ニテ奈良町引廻シ候ナリ、

〔前王廟陵記上〕高野陵〇德稱今按御陵山西北陵若是乎、往年有人、發此陵、奪陵中財之黨、身腫苦死、觀
者恐還財于本處云、

〔日本書紀十五顯宗〕二年八月己未朔、天皇謂皇太子億計〇仁賢曰、吾父〇市邊押磐皇子先王無罪、而大泊瀨天
皇〇雄略射殺、棄骨郊野、至今未獲、憤歎盈懷、臥泣行號、志雪讐恥、〇中略況吾立爲天子、二年于今矣、願
壞其陵、摧骨投散、今以此報不亦孝乎、皇太子億計猶欷不能答、乃諫曰、不可、大泊瀨天皇正統萬機、
臨照天下、華夷欣仰、天皇之身也、吾父先王、雖是天皇〇履中之子、遭遇迍邅、不登天位、以此觀之、尊卑
惟別、而忍壞陵墓、誰人主以奉天之靈、其不可毀一也、又天皇與億計、曾不蒙遇白髮天皇〇清寧寵
殊恩、豈臨寶位、大泊瀨天皇、白髮天皇之父也、億計聞諸老賢曰、無言不讎、無德不報、有恩不報、敗俗
之深者也、陛下饗國、德行廣聞於天下、而毀陵釁見於華裔、億計恐其不可以莅國子民也、其不可毀
二也、天皇曰、善哉、令罷役、

火災

〔三代實錄清和〕貞觀十年二月十八日壬午、野火燒損田邑山陵〇文德兆域中之樹木、廿五日己丑、詔下公卿及諸儒、博議山陵火災並爲禮制、從四位下行博士兼伊豫權守大春日朝臣雄繼議曰、禮記曰、有焚其先人之室、則三日哭、然則當據禮而行之、文章博士從五位下兼備後介巨勢朝臣文雄議曰、漢書曰、武帝建元六年四月、高園便殿火、帝素服五日、昭帝元鳳四年五月、孝文廟正殿火、帝及群臣皆素服、山陵失火未見故實、至于宗廟前聞如此、公卿本乎漢家之故事、酌酌禮度之所宜、取文雄議而奏、於是帝避正殿、服錫紵、撤去常膳、進御蔬菲、輟朝五日、公卿及諸近臣皆失彩飾、一准凶儀、遣使於山陵、告以事由、告文曰、天皇掛畏岐田邑御陵爾恐美恐美毛奏賜倍止奏久、去十八日、不慮之外爾野火進引天御陵乎燒損介利、聞食那加瓦驚怪懼畏已止無限量志、此驚畏留狀、奇怪比悉津比、令奉仕之事乎、大納言正三位兼行左近衛大將藤原朝臣氏宗、從四位下行大學頭潔世王等乎差使天聞申爾奉出、但不愼護奉、天致怠留御陵守等波令勘罪那倍賜波牟、掛畏岐御陵乎久聞食天、天皇朝廷乎護幸比、國家無事久、矜助賜倍恐美毛奏賜波久奏、

蒙汙幟

〔新記錄東大寺要所引〕延喜十年七月十二日己酉、古京佐保、仁正皇后〇聖武光明子聖武天皇兩山陵有火災、仍奉遣參議藤原朝臣宣方、左衛門佐平朝臣惟世等、令祈禱之、

〔扶桑略記三十白河〕永保二年五月廿日庚子、奉幣石清水宮、被告神功皇后山陵樹木燒失之由也、

〔三代實錄清和〕貞觀八年八月十八日庚寅、分遣使者於諸山陵、告應天門、及東西樓爾有火災天皆悉燒失天皇掛畏岐御陵爾恐美恐美毛奏賜倍止奏之、去閏三月十日夜、應天門火也、田邑山陵〇文德告文云、奴、其咎乎卜求禮波掛畏岐御陵乎犯穢世留事在、又猶火事可有、又疾事毛可有止卜申利、因茲恐畏利天申奉出給牟止須留間爾、頻有穢事天至、今延怠禮利、因以去十四日巡檢留爾、御陵乃木數多久伐事止阿利檢申世利、今御陵守等乎波隨法爾罪那倍賜牟止須、爲申此狀、中納言正三位兼行陸奧出羽按察使源朝臣融、少納言從五位上良峯朝臣繼世等乎差使天奉出給布此狀乎聞食天、平久安久護幸賜止恐美毛奏賜波久奏、

建佛堂

自餘山陵告文准此、

〔文德實錄十〕天安二年三月癸酉宣命曰、天皇恐美恐美毛掛畏支深草山陵仁明〇奏賜倍止奏久、頃年惟異屢示、其由乎卜求爾、掛畏岐山陵乃御在所乃近地爾汗穢事觸行已止、不止之所致止卜申世利、因茲參議左大辨從四位上藤原朝臣氏宗、右大辨從四位下藤原朝臣良繼等乎差使天奉出須此狀乎且聞食天、無咎祟志女賜倍波、使等乃申爾隨天、汗穢事可令祓潔支狀乎恐見恐見毛奏、

〔三代實錄三十陽成〕元慶元年七月三日壬寅、比月炎旱、神功皇后楯列山陵成祟、遣使巡檢守護義倉者、於倉下解鹿喫肉、百姓伐取南〇成北〇功二陵樹木三百卅二株、守倉人及諸陵官人科罪、十日己酉、遣使於楯列山陵、申謝伐木解鹿之祟、

〔長秋記〕長承二年九月五日丙辰、禮部云、〇中略或人云、支天下之臣四人也、〇中略此中誰人先可死哉、余答云、忠宗卿死期近云々、〇中略抑忠宗卿下居於山階朝暮往反、件所近天智天皇山陵、定經廻彼莊之間、自然致無禮歟、偏依此祟薨由所令存也、愚思件人、與彼山階論田畠云々、不可然由所聞也、小野齊尊僧都住醍醐山陵傍、依其祟死者、仁和寺覺行法親王、掘小松山陵有祟薨逝、彼時故民部卿俊明卿夢有行幸、怪問人、答云、小松帝依被破山陵、參大神宮被訟申、蒙裁許所還御、其執人可處死刑者、薨後不經幾程薨給云云、如此於山陵邊令致無禮、自今以後可懲止事也、

〔三代實錄十三清和〕貞觀八年九月廿二日甲子、是日大納言伴宿禰善男、〇中略坐燒應天門、當斬、詔降死一等、並處遠流、善男配伊豆國、廿五日丁卯、是日遣使於柏原〇桓武深草〇仁明山陵、告以配流善男等、深草御陵告文曰、〇中略善男、掛畏岐山陵爾平生爾奉仕禮留舊功、又每年爾八講會乎設天、山陵飾奉留勞等在爾依天、一等減天遠流賜布、又御陵乃前頭爾嘉祥寺乃食堂乎作天、汗穢事等在介利、因茲令破棄天潔久掃奉仕志牟、此狀乎從三位守權大納言兼右近衛大將藤原朝臣氏宗乎差使天聞奉出賜布、掛畏岐山陵平聞食天、天皇朝廷乎平安爾矜賜止恐美恐美毛奏賜波久奏、柏原御陵告文曰、〇中略善男、

荒廢

掛畏岐山陵乃兆域乃内爾佛堂乎建天、死屍乎埋世在止申事在、仍今令所司委曲勘定、若事有實者、即破堂撥屍天、淨掃比奉仕志米此狀乎、參議正四位下行右大辨兼播磨權守大枝朝臣音人乎差使天聞奉出賜布、掛畏岐山陵平聞食天、天皇朝廷乎平安爾矜賜止恐美恐美申賜波久申、

〔前王廟陵記上〕今按畝傍山、今奈良西南六里、久米寺北、俗云慈明寺山是也、東北陵可百年以來、壞爲糞田民呼其田字神武田、暴汗之所爲可痛哭也、餘數畝爲一封、農夫登之、恬不爲怪、及觀之寒心、夫神武天皇繼神代草昧之蹤、東征平中州、闢四門朝八方、王道之興、治敎之美、實創於此、我國君臣億兆、當致尊信之廟陵也、澆季至於此、噫哀哉、

〔大和廻〕畝傍山　今井八木の南道の四五町西にあり、里人は持明寺山と云、〇略中神武の陵は、うねび山の艮に在、今はわづかに殘れり、田の中に有、里人は神武田と云、

〔和州舊跡幽考〕佐紀山に陵三四基あり、それが中に、神功皇后の陵といふものあり、外はいづれの御代の陵にやありけむわかちがたし、又云、今この神功皇后陵を見るに、年ふりにければにや、石棺土を出、埴輪草むらのかげにのこりたり、

〔山陵志〕安康陵、〇略中又有呼爲西蓬萊山、今已犂爲田、惟其溝未埋處、環殘陵若半月然、蓋方其未毀、與東陵屹乎相望也、

〔山陵志〕花山陵、在石影、〇略中三條陵乃列其側焉、按二陵並皆壞、難得其所、

〔撰集抄上〕新院御墓白峯事

過にし仁安の比、西國はるゝ〳〵修行つかうまつり侍りし次に、讃州みを坂の林と云所にしばらく住侍り、深山べの樒の葉にていほりむすびて、つま木こりたく山中のけしき、花の木末によわる風、誰とへとてかよぶこ鳥、蓬の本の鶉、日終に哀ならずといふ事なし、長夜の曉、さびたる猿の聲を聞に、そゞろに腸を斷侍り、かゝる栖家は後の世の爲としも侍らね共、心そゞろに澄ておぼ

ゆるにこそ、かくても侍べかりしに、浮世の中には思をとゞめじとおもひ侍しかば、立離なんとし侍しほどに、新院〇崇徳の御墓所ををがみ奉らんとて、白嶺と云所に尋參侍りしに、松の一むらしげれるほとりにくぎぬきしなはしたり、是ならん御墓にやと、今更かきくらされて物も覺えず、まのあたりみ奉りし事ぞかし、清涼紫宸の間にやすみし給て、百官にいつかれさせ、後宮後房のうてなには、三千の翡翠のかんざしあざやかにて、御まなじりにかゝらんとのみしおはせ給ひしぞかし、萬機の政をたなごゝろにぎらせ給のみにあらず、春は花の宴を專にし、秋は月の前の興盡せず侍き、わに思きや今かゝるべしとは、かけてもはかりきや他國邊土の山中のおぞろの下にくち給べしとは、貝鐘の聲もせず法花三昧つとむる僧一人もなき所に、只嶺の松風の烈きのみにて、鳥だにもかけらぬありさま、見奉るにすゞろに泪をおとし侍き、始ある物は終ありとは聞侍しか共、いなだかゝる例をば承侍らず、されば思をとむまじきは此世也、一天の君萬乘の主も、しかの如くの苦みを離れざし〳〵侍らねば、せつりもしゆだもかはらず、宮もわらやも共に果しなき物なれば、高位もねがはしきに非、我等も幾度か彼の國主ともなり給ひけんなれ共、隔生即忘して、すべて覺侍らず、只行て留り果べき、佛果圓滿の位のみぞゆかしく侍る、とにもかくにも思ひつゞくるまゝに泪のもれ出侍しかば、

よしや君昔の玉のゆかとてもかゝらん後は何にかはせん、と打詠られて侍き、盛衰は今に始ぬわざなれ共、殊更心のおぞろかれぬるに侍り、

〔薮原北麓隱岐國紀行〕隱岐國嶋前海士村葛田山源福寺、眞宗二百石、後鳥羽天皇御堂ノ高一丈九尺ニ、四方ハ二間ニ二間半、丸木柱、白木造、カツヲ木柿ブキ、高欄キダ橋アリテ、外ハ丸木ノ矢來ナリ、御屋根ハ皆朽果テ、雨露尊容ヲケガシ奉レリ、軒ニハ蓬シノブ心ノマヽニ生茂リテ、尊體ハ大キナル瓶棺ニ納奉リテ、上ニハツヤアルサヾレ石ヲカキ上テ、下民ノ眸ニカヽラセ玉フニゾ、オ

ホヤケニモノシ奉ルモ勿體ナク、スベロニ涙コボルヽバカリ也、御廟ハ萬治元年、松平出羽守、此嶋ヲ預リ玉ヘル時新ニ建立也、ソレマデハ御廟モ石バカリナリシトゾ、此嶋寛永十四年ヨリ、松平出羽守アヅカリ玉フ、元祿元年ヨリ御代官、又享保四年ヨリ、出羽守アヅカリ玉フ、亦今ハ修覆モナクテアレハテタリ、

〔金ケ原地藏院過去帳〕夫地藏院ハ、金原寺の別院にして、開山聖覺法師より、數百年の星霜を經たり、然に當山堅空泰峯上人、深く金原寺の諸堂滅亡せしことを歎き、再建の志願ありといへども時至らず、猶亦兩帝の法華堂も燒失して其跡ばかりなれば、每月十一日と、十七日に、御陵前に誦經念佛せり、ある夜の夢に、或人異相を感見せしとかや、則法華堂は土御門院、後嵯峨院、兩帝の御骨を此堂に納め奉る、卽金原寺の北に當り、一町餘の道法、土〇（土恐大誤）石の塚あり、これ法華堂のあとなり、時に泰峯上人、慶長十九年七月廿七日入寂せり、其のち太空說全上人、前代の如く每月御陵前に回向せられける、說全上人、寬永十二年八月廿九日遷化せり、金原寺は其名計なれば、當山より兼つとめたり、今西谷の佛石は金原寺のあとなり、當山も度々陣火にあへども、再建ありて存在せりと云、爾寬永十三年二月、地藏院主專空玄智記、

〔嵯峨覽勝志〕蓮華峯寺陵、後宇多法皇、正中元年六月廿五日、大覺寺殿にて崩ず、此山に葬奉る、昔時陵園營搆美を盡せりと、此邊麓の圃までも、廻廊の礎石古瓦、土に埋れて猶存せり、陵門廻垣は皆田圃にすたれ、御塔の砌までも、樵夫の往來となれるぞ最かなしき、近き比まで八角の小堂もて御塔を塵ひしと見え侍りて、俗みな八角堂と呼べり、近世わづかに松の屋を搆て、數步の內をかこへり、

〔後水尾院崩御記〕延寶八年八月十九日乙亥、今朝寅上剋、太上法皇崩御也、（寶齡八十五才）申剋般舟院陽空長老來臨、口狀書一通持參、前例多候間、此度仙洞御火葬ニ願候、深草安樂行院ニ治御骨、骨堂も後

陽成院崩御之時分出來、其以後破損にて、雨露も掛り候體如何ニ候間、此度之事願之由、御灰ヲ泉涌寺ニ治申也、

〔朝野群載八別卷〕諸陵寮

請特蒙天裁、被下宣旨於五箇國且停止國司收公且給官使任官省符條里坪附入口要劇陵戶田作人等募權勢遁避地子狀

陵基所在

山城國卅四所　大和國五十七所　河內國十五所　和泉國四所　攝津國一所（要劇田廿町五反二百八十分）

紀伊國一所　近江國一所

右謹撿案內、被始置陵墓之後、年代尙、兆域東西南北陵戶、幷要劇等田具見格式、而近代之吏背制令、悉收公、陵戶田之丁地、已以減少、只隨國司之所行、不辨陵戶之地利、因之兆域垣溝無久修造、牛馬狐狼有日夜棲、抑五箇國之中、和泉國四箇所陵墓者、是履中仁德反正三帝山陵、垂仁天皇第三皇子墳墓也、而件陵戶田、前代以往全無收公、有信良兼二代之吏、忽以收公、論之政途理可然乎、但至于山陵兆域陵戶、幷要劇田者、神社佛事、權門勢家、不可成妨之由、度々之官符嚴制稠疊、作人縱雖愚暗、國宰何乖憲法、倩案事情、刈伐山陵草木、闌入兆域內之輩、尙有其罪、況置陵戶田、令守陵墓、損破之時、令守戶修理、專當官人、每月一度、可加巡撿之由、式條炳焉、是則制令設而不行、人心口而無愼、爲愁之甚最在此事、望請天裁、被下宣旨於五箇國、裁許件條、將令知陵墓之嚴重、仍注事狀謹解、

正六位上權助藤原朝臣資懷

正六位上行助　源朝臣伊實

從五位下行頭藤原朝臣清俊

康和二年七月十七日

〔陵墓一隅抄〕上官長論山陵牋

洛西野人津久井某謹獻書官長閣下〇略中某少小最耽典籍特注心皇朝史乘偶閱山陵志中言帝陵頹壞之狀未嘗不掩卷而泣下也竊自謂方今聖上撫運百廢興發獨山陵一議未足饜人情也饒敎官家不暇修之苟食其土者何不盡尊崇焉乎哉欲試以此于諸侯願職非其人加以吏道之倥傯未公語人矣居諸往苒空抱素志某昔以廕補蚤慶吏曹末而於材無可取於德無可議況亦天與疲弱不欲永孌賢者之路屢移病乞休退職以來周流畿甸歷拜累聖山陵因記其模制以備異日之采要越壬子春山陵點撿之命下不圖以賤息充奉役某喜出望外私於使者曰凡墳陵事蹤躅紛棼范亡確據者不特爲少矣參稽咨謀不積以日月未輒易決定古今論者騁說互出彼此牴牾大都雖傳故家之筆札藉父老之口實要之不過臆度偏見之二今覩元祿享保之論定似少有粗漏試言其一夫寬平幽宮奉于仁和寺大內山蓋下火所在于其山後宇多野衆之所仰瞻和州適有同名以故至遂謂大和國宇多陵所在不知夫審決正僞必無遺憾也識者猶艱之而況其他哉宜召學問淵博通曉今古者以揷撿之行問天兩府故事凡審實機密悲田院垣外屬例任之今亦踵襲舊制以至尊陵墓付之乎捕廣賤人恐非所以副國家恭順之意也爾曹其心之庶依學士柴野氏採訪和州故事分差使臣於四方撿討陵地嘗薦其說祭酒林君時以儒官無堪其任者弗錄用某甚失望然守志彌堅專尋扳援之路矩意閣下誤聽不以某駑下訪以當世某喜懼交荷具陳帝陵頹敗之狀閣下每言稱善嘗是之時某心竊誇寵榮以爲帝陵事必成於閣下之手亡幾果有撿陵之令躬親巡視近郊特簡僚屬中縝密純良者贊協其議包容不舍於是好古篤志之倫爭獻所見僉願爲閣下用某領命以來感戴罔鄂刮目以望事成仄承大朝重發令曰當今以國用叢脞庶績蝟毛姑因循元享之舊制補理從前之垣柵又開坂府奉令既就祇役若然者山陵志已降諸家所述作當眞不問是狀某之所大望乎今日也恭以聖子神孫臨御宇內奕葉累世宰制生民河山之固六服來同帶礪之誓九州奔走可謂皇統億載天下一家者而山陵之典饗未備具某竊爲明時惜之比年蠻夷並進民情不靖朝廷大有事于群神於斯時也決行撿陵垂禁禦之法於將來實

足答上帝之眷相清邊陲之稷氛愚民之貪利帝陵后墓不識那物有盜土石斬樹木暴露歛具至甚者起亭榭窮宴佚於其上某偶覩之不覺汗洒透衣今舉狀其近以仰遠方之思察切祈閣下少垂鑒念伏惟近京如深草木幡諸地桓武以下中葉妃嬪勳戚之壟壞相望郊野歷年之久遺址存者無幾耳近時陶冶多取材此或往々墾闢田圃林藪山丘漸作平野封隧奄爲稻麥嗟取陵上一抔之土貧民間棲息之屋巨罪章々竄粉其軀何以足慰神威謹按畝火山之神武陵柏原之桓武陵此帝陵之尤者宜超他顯異崇禮今此二陵實滅厥所國家之闕典莫甚之某不量其分先以撿尋柏陵爲己務或勞力履歷或覃思舊志其事雖細微勤苦不敢讓故人概昔之論者皆依準僞陵費喙辨此即所以不得其眞也一云今伏見城山古御香大龜谷總柏原之地也然而陵之所在爲城中央築城時陵壞必矣一云小栗栖管內一丘稱大兜者即是也一云谷口人家之東左傍俗呼山伏冢即陵也帝潛龍時稱山部山伏蓋山部之轉叱也以上紛拏不決其徒殆倦搜索遂泥執於山槐記中柏原者伏見山松原中也又入伏見柏原內等之章句雷同於松〇松見林下蒲〇蒲生二氏者有之按城山古之木幡山巨幡墓及門址今現存焉陵壞之說乃不取也仍憶雄略紀載深草埴器脩曰山脊國內俯見古者深草都稱伏見三峰稻荷社今稱伏見稻荷此其類也然則山槐記之伏見山恐非城山矣以愚見論之山伏冢此爲初葬之陵冢畔有溪流一帶常史載大同元年十月御改葬事註云是歲大水或山陵壞損以故有遷築之擧者此邪又其東南有稱龍前堂原地豐公居伏見時穿其丘後通道山階自是遂失其位置惟南面存巍巍之狀恰與延曆年間之制合又其東方有小丘呼曰御輿冢以有此等人之指斯地爲葬所不亦宜哉是爲其一證陵本名柏原今偏稱擬陵不唱他以故世俗莫知谷口之爲柏原者而其邊總稱御草山廣袤東西六百十六弓南北千九十八弓中有深草管地之犬牙焉東踵于向原頂上西踵于大龜谷內大谷町此所上古和州之官道南踵于小栗栖道右北踵于瓦町東北峰四疆俱十一町乃合於兆域之古法而陵固倚西被置域內亦以有山谷經界不整正故或云東八町西三町又云加丑寅角二岑一谷今其北方有谷呼

一之谷、其爲域內可知也、又古記載、柏原陵從東邊二町許、入在稻荷山南野、今之御草山、古之爲柏原、是爲其證、大島武好山城名勝志云、大谷口山有向原者、是恐柏原舊跡也、又並河永山城志云、柏原野、在大龜谷北、土人呼乞丐原、類聚國史曰、延曆十四年八月、遊獵于柏原野、又僧白慧山州名跡志云、柏原地名曰谷口同所、但此號今不稱、中比轉云癩病原、其故地在御陵、土人不知之、登穢者間爲癩病、依而號也、谷口之爲柏原、此丘之爲眞陵、是爲其證、其佗參證數柄、今不煩條陳、別欲具一書鳴痛哉、聖王之山陵、名實兩廢、至雖父老田竪、朝夕來往者、不認辨之、所以然者何、請姑授他辨之、隆治以還、帝陵頹圮、相踵如上演、而大和國帝陵無之、元祿頃、京兆尹松平源公謂曰、前年寧樂以何術隱伏其難隱伏者、有司猶如此、下情奚足怪、往昔喪亂不失魏々之姿、却失於昇代撿陵之日者亡他、撿吏之所臨視、驅役下民、推究口狀、來往繹騷、不一而定、士人不堪勞擾、相爭匿眞、欲以免其苛督也、草山志有云、深草山者、東西十町餘、南北十八町餘、舊爲深草住士秦氏之私德、慶長頃、其家獻馬糧於烈祖、歷朝定以爲貢草地、京兆府、世下制章禁侵犯、山中原谷凡可五十、皆古跡也、此記蔽匿數多之古跡、或亦指擬陵地、曰柏原、僉匪徒之欺騙同和州、某便遣人于秦氏後長谷川某、乞貸御草山圖、其家秘惜不出、强請閱之、曖昧罔標、某夾然自失、于昔偶聞山本院秀建者語、遂獲其驗左、傳者道曰、山本院實淨藏之冑、淨藏嘗以業力安法、觀寺塔、天子賞以深草山之地、嗣法相傳、住于龜前堂原、中屬坊宇文書悉付兵火、子孫遂衰、世臣秦某幸之、擅奪賜地、獻諸公所、關原役以功已爲其頭目、遡古谷口全村、本垣陵之守戶、詣今彼家有凶禮闔鄉來會葬事、秦某亦佐執紼、因示以正嘉二年諸陵雜事記一通、中有云柏原下司大進阿闍梨其子永秀、世又稱元祿撿陵時、秦某怖奸詐之露、與里人長三相謀、指點他山爲帝陵、併沒柏原之稱呼、爾後其家崇厲並臻、子孫不祀、餘殃之所延、他人有室者、亦皆死于狂癲癩疾、乞丐原之名果不浮、今也龜前堂原、及山伏冢、變爲野樵鉅竹、只古松數株、財不失舊裝、會泉涌寺土木之功興、山伏冢古松亦所充用、嘗聞伐此樹時、役夫有蒙傷害者、假令不眞陵、一旦神明之

修築

所憑、決不可行凌辱、如右、蓋深草木幡、或仁和寺諸地之陵墓被剝蝕也、由於伏見聚樂之營築、至此上來之諸說一一脗合、龜前堂之爲桓陵、山本院之爲守司、又秦氏及長三等之爲隸屬、判然而定、竟乃多日之疑朦瀹洗、斷乎自得、因不自揣、恭欲作聖蹟圖志一編、以頒告四方、成稿有日、續當繕寫進呈、嗚乎汙陵者之病癩、秦氏之絕祖饗、實天誅灼々者、可不憚畏哉、今夫傭夫臺奴、逢佳時令日、猶獲上墓望壠布香火陳酒菓、以慰其先於地下、赫々皇祖、橫遭犯濫、失威靈之所託、某恒念之痛息慨嘆、殆忘起臥、方今財路日繁、蠲租之地需貢賦、封外之土羅金穀、其下不堪誅求、罪逆非理、往々而出焉、陵墓之墜實根乎此、犯者固雖不容於誅、上之人重設共恪之章、誰敢穢之侮之、仰望閣下傷陵所湮鬱、如彼恕愚忠質直如此、指摘典故、參畫公卿、併與閣下向來所自考定、仔細收錄、輸送大朝、載之簡冊、納之秘府、設必依舊制、不許所告訴、先簡扳眞陵顯著者、宣喻國俟邑主、厚行奉護、又其罹穢辱者、覆土石、禁芻牧、柵堺皆如初、以竢異日之裁命、其小國無租廨及係寺觀之封內者、所轄官署、便宜共給吏者、常以歲時按部、專察奸民不法、且後村上後龜山二陵、本在擯斥中、請從今列之于諸陵、速喻其郡國同加葺理、承者苟有人心、皆聽欣順旨、若夫寬平之於仁和寺、弘仁之於大覺寺、兆域崇侈、時籛不闕、幷非今日考問之例也、但有司錄之巡視勿失其時、則長免可傷之患今也中外多事、度支告急之時、雖然閣下少回慮、以計事宜、則不至多耗錢穀勞吏民矣、在古承應帝〇後光明之崩也、賈人魚屋某、盡傷天子火葬之違祖制、感奮鳴志有司、廟廊善之、葬禮遂復古典、又河尻氏吏五條日、加禮管內之山陵、令民知其可敬畏、以垂千載不遷之法、後以善政多、改任松前、嘗請造巨艦、攻山丹、其忠勇凡如此、時人錄其著者、傳之乎世、惟修陵一事、遺而不載、爲可深惜、況公侯有土之君、於封地之陵墓闕其崇禮而可邪、願閣下襲茲嘉謀、服茲令聞、聽某上稟、則天下大幸也、狂胃至愚、不知所置、惟閣下寬其罪、某誠恐以聞、

安政二年二月十七日（翁之上、此書時乙卯春、官長即淺野中書君也、）

〔延喜式二十一凡諸陵墓者、每年二月十日、差遣官人巡撿、仍當月一日錄名申省、其兆域垣溝若有損

壞者、令守戸修理、專當官人巡加撿校、

〔續日本紀一文武〕三年十月甲午、詔赦天下有罪者、但十惡强竊二盜不在赦限、爲欲營造越智〇齊明山科智天二山陵也、辛丑、遣淨廣肆衣縫王、直大壹當麻眞人國見、直廣參土師宿禰根麻呂、直大肆田中朝臣法麻呂、判官四人、主典二人、大工二人於越智山陵、淨廣肆大石王、直大貳粟田朝臣眞人、直廣參土師宿禰馬手、直廣肆小治田朝臣當麻、判官四人、主典二人、大工二人於山科山陵、分功修造焉、

〔續日本紀十聖武〕天平六年四月戊戌、地大震、壞天下百姓廬舍、戊申、詔曰、今月七日、地震殊常、恐動山陵、宜遣諸王眞人、副土師宿禰一人、撿看諫所八處、及有功王之墓、

〔續日本紀考證五諫所〕蓋謂山陵歟、八處亦未詳其所指言、

〔續日本紀十四聖武〕天平十四年五月癸丑、越智山陵〇齊明崩壞、長一十一丈、廣五丈二尺、丙辰、遣知太政官事正三位鈴鹿王等十人、率雜工修緝之、又遣采女女孺等供奉其事、

〔文德實錄一〕嘉祥三年四月乙丑、先是深草陵〇仁明宰堵婆所藏陀羅尼自發落地、遣參議伴宿禰善男就加安置、

〔親長卿記〕文明十七年十一月十三日、今日舊院〇後花園山作所、悲田院寺内、本堂北御葬所、椿木生長了、廻垣破裂、可被造直、民部卿與予可見廻云々、仍罷向了、凡如意見了、

〔安樂壽院由緒書〕無寺務本寺眞言宗、山城國紀伊郡竹田安樂壽院、〇中略一當院儀者、鳥羽法皇城南離宮御院地之御佛殿也、保延三年御造營、御奉行藤中納言家成卿、同十月十五日御供養、御導師白河院第四宮覺法法親王、勅會舞樂之曼荼羅供被行之、其後年久敷相成及破壞候處、建武二年九月廿二日、仰前左馬佐令修造給、又天文十七年回祿仕候ニ付、同十一月三十日、忝再建之御綸旨賜之候、然シ年ヲ經候儀ニ而、其餘之輿廢分明ニ難相知、當時有之候諸堂坊舍ハ、多ク慶長頃修造仕候假建ニ御座候、

一本御塔ト申候者、往古ハ三重之塔ニ而、本尊ハ坐像等身之阿彌陀如來、塔面東向ニ御座候、是又法皇御造營、御奉行藤中納言家成卿、保延五年二月廿二日、法皇崩御、依御遺詔、御尊骸ヲ此御塔之下ニ奉葬、則此御塔内ニ法皇御宸影奉安置、本願尊儀ト奉仰候、此御塔モ又天文十七年回祿仕候故、慶長十七年九月、建立仕候假堂ニ御座候、當御塔ニ六口之禪衆ヲ被爲置、則當時現存仕候、本御塔六ヶ院ハ、其遺跡ニ御座候、

一新御塔ト申者、是又法皇之叡慮ニ而、美福門院御藏骨ノ御爲ニ、二重之多寶塔御建立、本尊ハ坐像等身之阿彌陀如來、塔面東向、御奉行少納言入道信西、保元二年十二月二日、御供養御導師、鳥羽院第五宮覺性法親王、當御塔モ又本御塔ニ准ジ、淨侶六口被爲置之、則當時現存仕候、新御塔六ヶ院是其遺跡ニ御座候、然ルニ美福門院薨去之節、御遺命ニ而、御骨ハ高野山ニ被爲納候ヘ共、御骨如被爲在可奉供養旨蒙綸命候由ニ御座候、其後長寬元年十一月廿八日、近衞院御骨ヲ當御塔之下ニ奉納候由ニ御座候、當御塔ハ天文中回祿之變無之、往古之儘ニ有之候處、慶長元年閏七月十二日夜之大地震ニ顚倒仕候、同十一年五月、豐臣秀頼公、如往古多寶塔御建立、奉行片桐東市正且元ニ御座候、

〔儼塾集〕恭惟吾朝天孫之正統、自神武至今上一百十四世、二千三百五十餘年、皇胤相繼、寶祚永保、可謂功德過於三五矣、所恨綿邈之間、陵墓或失其地、舊史所錄難推求焉、吾朝古先哲王、邦有大事、必告祖考山陵、事之如生祭之如在、遣使奉幣、置陵戸守之、每年修理其兆域垣溝、故明德昭々、峻極于天、夫神武天皇開吾大八洲、殄盡兇徒、創造洪基、其功德巍々、萬世仰之、宜敬其廟嚴、其祭光被威靈於億兆者也、夫上報本追遠之典未全、則下亦效之有甚焉者、在昔平清盛當祭其所出桓武天皇子葛原親王、而何致敬嚴島明神、源賴朝當祭其所出清和天皇子桃園親王、而何厚信鶴岡八幡、噫二子不學之失、延及後世、不辨尊始祖之道、不及藤原氏奉崇春日談岑之爲得道也遠矣、且應神天皇者、自宇佐託宣、

禦醜類之窺窬、爾後置宇佐使、奉承神勅、其功可與天智天皇討賊撥亂同奉稱者歟、而源頼信及義家、仰以爲軍神、未詳其義、若論軍神、在古軍師道臣命、及大將軍日本武尊耳、凡厥流弊因襲不改、蓋以其初尊祖之教有所未備歟、願神武天皇神殿宏麗盡美、而又修天智天皇廟、侔壯大於應神天皇宮、可謂盛德大業其至者矣、世人知拜神祖天照大神、而不知拜帝祖神武天皇、知敬近世之陵墓、而不知敬先王之山陵、夫繼絕興廢聖賢所褒、伏望追尊太祖、祭其所祭、追求諸陵修其可修、示孝於萬世、知報本之道、垂教於不朽、致追遠之誠、謹言、

○按ズルニ、本文ハ水戸藩士森尚謙ガ幕府ニ建言セント欲シテ草スル所ナレドモ、故アリテ果ザリシト云フ、

〔蠶尻四〕前王舊陵

元祿十年、和州所在の前王舊陵、吏をして其圖方境を記さしめ、柳營の御府に奉らしめたまふ、其圖鴨の祠官梨本家にあり

〔諸陵周垣成就記序〕我兄芝山先生、名知名、字孟寅、嘗大和國郡山にすみたまへり、古の帝都なれば諸陵こかしこにおはします、世くだりて土民攀躋り、もしくは發きなどして、おさまりきことを深くなげき、其國に君たる人、其所に合たる者の、世々を重ねて心なきことをかなしみおそれ給へども、力に及ばぬ事なればと打過したまひしが、元祿十年の春、知愼がもとへ書をよせたまふ、よみて見れば、和州においはせし時、おもひ給ひしことどもかいつらねて、今聖代にあたりて絶たるを繼廢たるを興し給ふ、爾がつかふる主〇柳澤氏、は當世の柱梁として、わきて神祠佛寺修造の事を司りたまふ、又幸になんぢ其事をあづかりうけたまはるなれば、時ありて此事を聞え上てんや、萬乙此事成就せば、いかなる御いのり御造立にも躋なんなど有、知愼かゝることを申出んは、品をこえて其恐すくなからねど、かばかりの大善事をいかでやむべきやとおもひて、事のついでに申

出侍りぬ、其秋我兄の一子世をはやうせり、又我兄も大にやまひつき給ふ、其折ふし我主知愼に命じて、帝陵の御在所を考へしめ、まさに諸陵に事わらんの御わらはしなれば、いそぎ我兄にかくと告奉りぬ、我兄やまひの床にありて手をわなゝかし、聖君あり、賢佐有、時なる哉、知名死すとも骨朽ざらんと感涙をおとし給ふ、又先考先妣を拜して、其教誨によりて、此心をけふにたもちて、此時にあへりと大によろこび給ふ、知愼心におもふ、此大善事をなす人いかで福壽を得ざらん、疾病平安日をさしてうたがふべからず、且又子孫も出來て必繁茂せんと、心肝に銘じてたのもしかりしに、いく日ならず、八月朔日四十二歳にてうせ給ふ、嗣子さへなくていふかひなき事ぞもなり、翌年寅の八月に、知愼主命により禁廷にのぼりぬ、爰かしこ帝陵を見奉れば、皆艸の周垣を新に作れり、人にとへば東武の尊命有てかくのごとし、世に有がたき御事也、國家の御祈禱、又此上有べからず、昨日今日ならでも、土人等登臨の處として、牛馬に草かひ侍りぬ、まことに今おもへば淺ましき事なりしといふ、さてこそかくやと思ひて、有難きに涙とゞめらざりし、又翌年卯五月、我主君知愼をして、此一冊幷一紙をかゝせ給ひて、是なんぢ兄弟のまゝ心より出てかく事ゆきぬ、爾も一通を寫して家につたへよ、又我家乘にも書載せよと宣ひぬ、我兄世にまし〳〵ばと思へばとゞめらぬ涙也、さるによりて一通を繕寫して、まづ我兄の牌前に供へ、且又我子孫に傳へて此美を殘さんと欲す、夫匹夫の志をおこして百王の寢陵におよぶ事、誠に有がたきためしなれども、もろこしにて陵墓を修せし事、蕭統の文選にのせ、又宋の帝の陵を修補せし胡元の時趙人有、されどもそれは例もかはり、わづかに一二帝のみなりしをだに、萬世に傳へて美譚とせり、我兄子孫わらまし、かばと思ふもはてしなき慨や、今年大和の國宇多の住人我同僚と成侍る、九月廿七日その人のがりまうでけるに語ていへらく、をとゞし帝陵の御たづね有て某も役にさゝれ、大和路の舊蹟悉く巡り侍りしが、神武天皇の陵、畝傍山の東北におはします、田の中にてゑる人〳〵

なかりし所の民ぶぶの田とよび侍りき、神武を傳へあやなるとみえたり、京兆の命をうけて、土を重ね垣をゆひて、土民近づく事を得ず、其外あまたの陵も皆かくの如し、誠に昭代の御政おほき中にも、是等こそ唐土までも聞えて目出度御事なめりといふ、知愼心の中におもひ合せ侍りぬ、されどことに出すべきことならねばげにもとのみ云てやみぬ、かくて曉ちかきころ夢に我兄を見侍るに、其よはひ三十にたらぬほどに見えて、容貌ことにうれしげにうち笑ひ給ふが、忽然として見え給はず、夢心地にまことに世をさり給ひし人也とおもはしく悲しかりしが、又おもばし有て同じさまに見え給ふが夢に見奉るとはおぼけれども、かくうるはしくよろこばしき有様は侍らず、まさしく是はきのふのくれ、帝陵の御事をも申侍りしを悦給ふならむとおもふに、なつかしき事も又やるかたなし、

元祿十二己卯歳九月廿八日雨そぼ降日、淺草の鄉如意菴の南の窓のもとに識す、

細井知愼

〔常憲院殿御實紀三十九〕元祿十二年四月廿九日、こゝに本朝元弘建武の大亂以後、古帝王の寢陵荒廢して、其ありかたしかならず、樵牧雉兎の蹊徑となりき、然るを數百年をへて修治する事もなし、是一大闕典といふべし、さかるを當代感じ思召旨ありて、この年頃御料は代官、私領は領主に仰ごと下り、あまねく古跡を搜索せしめ、藩籬をまうけ、樵采を禁せられしに、この月その事成功せるよし、京職松平紀伊守信庸より注進す、〇略中すべて神武天皇より後花園院まで百三代、重祚二代〇稱齊明德と安德天皇を除きて外、崇神仁賢繼體欽明陽成宇多村上花山一條三條後一條後朱雀後冷泉後三條堀河二條六條後深草伏見後伏見崇光稱光の廿二陵は、湮沒して其跡もさだかならず、現存七十八陵のうち、十二陵は舊垣あり、六十六陵はこたびあらたに表章せられぬ、此外阿波國麻殖郡木屋平山、同國三好郡白地村雲透寺は、後龜山院の御陵なりと申傳へたり、又同

郡勢力村天皇屋形山、同國板野郡大寺村金泉寺、同郡里村、淡路國三原郡中島村、津名郡柳澤村ともに七所は、山陵のよしまうし傳ふるといへども、何帝の陵なる事たしかならず、もしくは南朝の陵にもあるべければ、これも垣墻をまうけしむとなり、

〔二老略傳〕柳澤氏、廣澤〇細井知愼先生に武備を任ず、〇略中添るに天下の寺社の事を司らしむ、天下大小となく柳澤氏に歸す故なり、時に朝廷上古の諸陵、亂世を經し故やらん大に廢し、其處を失ひ、其號名をも失ひ、破たる御陵なぞを鬼陵なぞゝ號し、農民穢すもの多し、廣澤先生其兄細井甚藏芝山の號是を歎じ、廣澤先生をして公に告て、此時より初めて諸陵周垣の絕たるを繼廢たるを起したる事擧て數ふべからず、諸陵周垣の記あり、九皐先生〇知愼子知文家藏なり、

〔先哲叢談後編三〕細井廣澤

名知愼字公謹、號廣澤、〇略中通稱次郎大夫、遠江人、仕于河越侯松平美濃守吉保後給仕于幕府、〇略中廣澤仕二于河越一二年、進爲鐵砲隊長、步卒二十人屬之領下、兼掌海內神社佛閣勘合條制之事、故廣澤能知其舊貫班格該管隷屬等之故、嘗歎保元以降六百年、累帝諸陵、屢經兵燹、失其所在、既不知其陵者二十五、告之侯建議據古史紀傳所錄、搜索其不可知者、果皆得其所在、而後修葺其屋宇、或造石垣、三年諸陵全成焉、實可謂繼廢興絕也、故當時命諸臣、修撰歷代諸陵修垣實記五十卷、其事皆本於廣澤所建議矣云、

〔實山外志〕二條陵、在船岡東北一町、元祿戊寅、公府修陵、地頭天瑞

〔實石類書百二十葬〕御代々御陵

八十一帝陵場所　八十二ヶ所內嵯峨　淳和　冷泉　後鳥羽　土御門　龜山

右六帝葬所藏所、或車ロト申傳テ、二ヶ所有之、

嵯峨　土御門　後嵯峨　後光嚴　後圓融

右五帝、陵三ヶ所一圍ニ有、

崇神　天武　持統　一條

一ヶ所文武　二ヶ所　二ヶ所

景行　欽明　堀川　後朱雀　後冷泉

一ヶ所　一ヶ所　後堀川（御骨後ニ納ルノヨシ）

二條　近衞　後伏見（御骨仁明御塔ニ納ノヨシ）

右十四帝、陵七ヶ所難レ一決、或ハ一所ニ御骨ヲ藏ムト申傳テ不レ分明、

一九帝、陵所圍有、仁明（鳥井垣有）　後白川（法住寺堂圍アリ）　花園（徽笑菴堂中ニ有築地アリ）　四條（總構石垣唐門ノ中ニアリ）　後土御門（同）　後柏原（同）　後奈良（同）　正親町（同）

右圍有來ニ付、不及結垣、

一十二帝　仁賢　陽成　宇多　村上　花山　後一條　後三條　後深草　伏見　崇光　稱光

六條

右陵所不知

陵八十二ヶ所、結垣出來、

九ヶ所、圍出來、不及結垣

十三ヶ所難相知

右ハ松平紀伊守（信庸）京都所司代中、蒙關東御命、吟味之帳面ヲ以テ被レ書之、此外ニ陵地面之屬有之云云、其後有德院殿之時、又有御吟味云云、先王廟記ノ中ヘ以朱書入置了、

〔翁草三十八〕陵之事

近世の天子は、洛東泉涌寺に陵赫々たれば、汙穢不淨の論なし、其餘は所々散在して、或は曠野山林の間、或は荒廢の寺院の內なるに僅に存して、雜人土人の爲に犯し穢さるゝ類多し、又上古の陵には、四維に壘して小丘を攝、其營嚴に數千載の後迄方境最分明なるも有、其類は土人妄に穿つ事も不能、和州畝傍の邊にある陵は凡如此、それだに石棺を穿ちあばきて、內に詰たる朱を奪偷も有し也、斯陵の傾壞するを閣るべきに非とて、享保三四年の頃、其御沙汰有て、京師兩廳の與力石崎喜右衞門、入江安右衞門に被レ命、畿內近國に在處の陵を點檢させられ、各陵圖に寫して、玉垣石垣等の修理を積、又安定ならぬ事は、其邊の領主の方、幷地下人へ尋、土地に隨て修理の品を被レ究、然れ共百餘皇の陵、其上往古の事なれば、分明ならぬ事數多有て、年を超て不成、後年同與力加納武助、飯沼助左衞門是を繼て、其遺るを補ひ稍改畢て、陵每に制札を建、或は玉垣、或は石垣等を修營し、後年破損に及ばゝ、所の者より可レ訴旨令して、右兩人打廻りて檢之、後來妄ならざらむ、但適邊國に在陵の分は、京都より不レ指揮、是は其領の者方へ其砌達せられしや未考、（其砌京所司代水野和泉守、町奉行山口安房守、諏訪肥後守なり、○又見二享保年間山陵誌一）

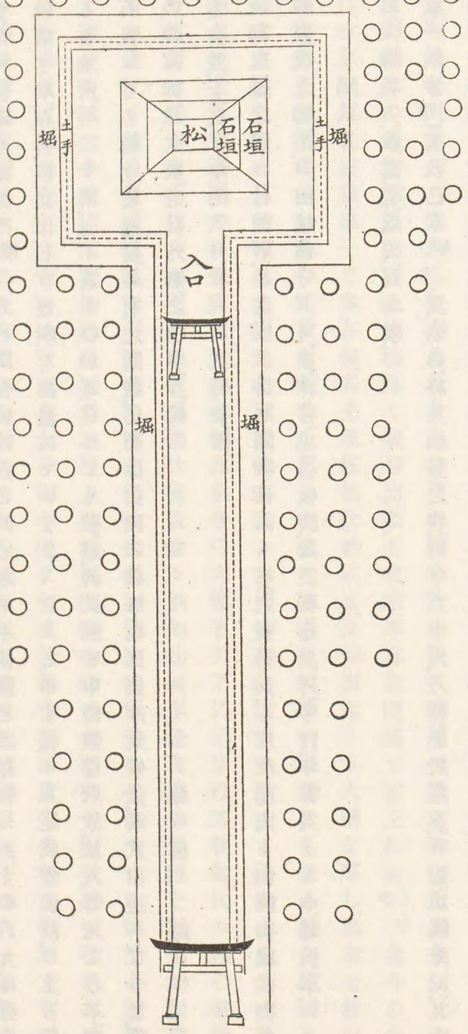
〔烈公行實〕夏四月○天保五年　參府、秋以二太祖（○神武）山陵荒壞、臣民悲慨故、建議于幕府、欲レ及二千五百年期一、（自二太祖辛酉元年一至二天保十一年一、歲數實二千五百年也、）以祈二實祚無窮一、武門昌熾、蓋繼二義公之遺志一也、

〔藤田彪手記〕天保五年甲午は、將軍家世子家慶公の四十二歲に相當せし年にして、世俗忌み嫌ふ所の厄年なれば、其厄拂ひの爲めにする所なりとて、大に感應寺といふ寺觀を建立して、冥福を修むるよし聞えければ、此時こそ山陵興復の機會なれと思ひ立ち、幕府の老中大久保加賀守忠真に書を贈り始めて神武陵修築の議を陳べたるは九月十三日なりき、其建議に曰、拙者如きものにては申も憚多候へ共、御當家御至德之儀は、三分天下有二其二、以服二事殷一と申處には無之、日本國中誰有之、將軍家の御下知を受不申人は一人も無之處、悉く天朝を御尊敬被遊、鎌倉室町等とは格別之御儀に被爲在候故、御武運益御長久にて、二百餘年の太平を被爲保候段、實に偶然ならず

ざる御儀と奉存候、○中略此度感應寺御建立之儀なぞは、西丸樣○家慶御厄年故にも可有之哉、又は御武運御長久之御祈願にも可有之哉と推察いたし候處、其上にも帝皇始祖之御廟御脩被遊候はゞ、ゑす〳〵御至德相顯れ、御武運彌御長久に可有御座と存候間、何とぞ京都へ被仰出、御修復被爲在候樣、不堪至願候、日光、雨山○寛永寺、增上寺、なぞの御儀と違ひ、古制御斟酌之上、御脩被遊候はゞ、格別の御入用も有之間敷哉ト奉存候、夫とも公邊にては御故障も御座候はゞ、拙者より公邊へ相願候ては如何可有之哉、鹿島幷領中大社の御札、追々差上來り、尙又御厄年等の節は、右之外にも伊勢にて御祈禱爲仕差上候類も候へば、爲冥加太祖の山陵御修覆爲御濟にも相成候も、日本史等編修いたし候廉へも相當り、面目無此上事に候、御承知之不經濟、莫大の入費も有之事は、所詮不相叶候へ共、格別之事にも無之候間、何れとか相辨可申候、神武天皇元年より天保五年迄は、二千四百九十四年、來る子年にて二千五百年に相成候處、當年は西丸樣御厄かた〴〵故、當年より取懸り、子の年には御祭にても被遊、此上皇統の無窮、武運の長久御祈願も被爲在候はゞ、實に目出度御事に可有之と存候間、心願之趣有りのまゝ相認申進候、御存分御差圖の上、何れの道なりとも、心願成就いたし候樣、御工風偏に致企望候、御摸樣次第別に書取にいたし、家老御宅へ差出候とも可致候、

〔山海二策上〕一山陵御改之儀は、如此にも相成候はゞ、可然哉と一己○德川齊昭の了簡にて認候、圖面の覺、但し此圖面は、加州は勿論、誰へも未見せ不申、全くの了簡にて置候事故、以後御改にも相成候節は、衆評の上にて、御改に可致事、

本文山陵之義は、故實吟味いたし候はゞ、定て色々の說も出可申、第一には久敷打絕候事にて相分申間敷、又常には右樣の事穿鑿も有憚、又火急の節に至り候ては、吟味も間に合不申なぞいふ事にては、いつとても出來可申時なければ、先づ本文の位にもいたし置候て、追々に古例等御たゞしに相成候はゞ可然哉に被存候、神武皇の陵にてさへ機會をのがし候ては六ヶ敷候へば、猶當禁仙洞なぞの儀は勿論常ニ吟味は六ヶ敷、又火急の節はとても吟味間ニ合不申と申事ニ成行候半故神武皇の山陵を取定メ置候へば、跡々は右ニならひ出來候半と被存候、古例等たとひ分り不申候とも、是は全く申さば上への飾ニて、御手厚くさへ出來候はゞ古例ニ叶不申候とても、先づ不苦樣被存候者也、



○此丸印ハ松也

一山陵ハ下ノ石垣ハ四方十間四方位、高サハ三丈位、中上ノ石垣ハ下ノ石垣ニならひ可然作ル、三段ノ上ヘハ松ヲ植ル、山陵廻リ土手ノ上ヘハ忌垣を可作、入口ト認候處ハ忌垣ヘ門サシテ開

ク様可ゝ作、入口ヨリ内ハ不ゝ殘石ヲ敷可ゝ申、
右山陵之儀ニ付、神道兼職藤田虎之介へ申聞吟味致セ候處、左之通リ也、
山陵之儀、古制ニ御本づき被ゝ遊、石垣堀等ニても御築立被ゝ遊候尊慮と奉ゝ存候處、此間中大和國の
地理ニ拘り候書物類、大抵殘りなく吟味仕候處、何れにも神武陵の地所しかと相決し兼申候、先
日被ゝ仰付候通、七郎衞門〇瀨河方へ問合候間、近日何と歟申來候儀とは存候へ共、十の八九は分り
兼候儀と奉ゝ存候、扨疑はしき地所を推量にていよ〳〵こゝと申す様ニも罷成兼候故、つまる所
疑しき地所一二ヶ所、一ト通りのかこひニても被ゝ遊、神武陵と申傳候場所故、旅人等入こみ不ゝ申
様、石表ニても御立被ゝ遊候外有之間敷、仍而は山陵の御修復は出來兼候故、神武田邊へなりと檀
原の神宮御建立被ゝ遊候外無之様奉ゝ存候、
藤田彪

〔議奏言渡〕文久二年閏八月廿一日武傳被附
山陵御取締之儀ニ付而者、是迄既ニ御取調御世話も有之候得共、今度改而國々山陵御締向御普
請御修復之御用、戸田越前守江可ゝ被ゝ仰付思召候間、此段御達置可ゝ申旨、年寄共より申越候事、

閏八月

右以ニ大御乳人一披露被ゝ返出返却候、

〔陵墓一隅抄〕歟、安政己未〇六年夏、余負ニ終身幽蟄之咎一、時年六十六、乃絕ニ思於塵裏一、日撿ニ山陵筆記一、其中
謀抽ニ繹此書及聖蹟圖志一、以遺ニ于後世一、心獨謂以ニ寫本一囑ニ故舊一、一旦嬰ニ水火一、悉付ニ烏有一、更竊ニ謀ニ銅鐫一、人或
憫之捐ニ貲助一ニ其志一、遂又欲ニ依ニ其人一秘之于竹生島神庫一、以爲ニ身後之頒布一、而未ニ果ニ其事一也、文久壬戌載、宇
都宮矣〇戸田氏請任ニ諸陵修補職一、其族戸田和州代ゝ矣、率ニ大小臣屬一入ニ京、適余輩遭ニ赦免一、罪尋充ニ撿陵參
謀一、朝廷賞下ニ褒章一、抑亦望外之榮也、乙丑〇慶應元年之秋、修陵功成、宇都宮矣及和州以下、重所ニ褒賞一、或勸
云、今也百有餘所之諸陵、崇麗踰ニ越前古一、彌年度日、藉里老士人、遂至不ニ知一ニ昔日荒廢之狀一、況吾子積年

探索之勞、後世有ニ誰亦舉一ニ之於口一、何不ニ發一ニ行囊之銅鐫一、以展ニ喜眉一、偶薩人贈ニ其封內神代三陵圖一、仍併增ニ
修斯書一、以弘ニ四方一、其愚考與ニ戸田氏進奏本一異說者、宜ニ速改一ニ之、但以ニ抱痾累月一、懶ニ事筆硯一、姑存ニ其舊一、覽者
幸勿ニ怪諸一、世稱宇都宮矣之偉効顯績、鎌府以來未ニ見ニ其比一也、實非ニ溢美一矣、嗟也余輩賤陋菲賢、亦何幸
遭ニ遇今日之盛典一、追ニ憶今古盛喜罔一レ已、重誌ニ其由乎簡左一、永矢弗ニ諼一、時慶應二年丙寅之春、津久井清影
跋、

〔嘉永明治年間錄十一〕文久二年閏八月廿九日戸田越前守山陵ノ修補ヲ請フ建白並指令、
此度御國政の儀、不ニ憚忌諱一申上候樣厚く被ニ仰出一、難ニ有次第奉ニ存候一間、謹て言上仕候、〇中略當今の急
務は、士氣振氣仕候儀第一と奉ニ存候一、其土氣振起仕候には、反始報本より人情を厚し、忠孝を養ひ
立候事、眞に強國の基と奉ニ存候一、彼血氣の小勇より起り候強は、粗暴の所業にも至り、眞の強國と
は相成申間敷候、右反始報本は、祖先を不ニ遺忘一、始本より大切に存候、實情の厚より溢出る忠孝の勇
を振立候、士氣盛強國の根元實滿と奉ニ存候一、此忠孝の大節を天下に示され、天朝御代々樣の御陵
多分荒廢相成居候、此儀古來有志の者、憂傷仕候段兼々承知仕候、乍ニ恐萬乘御遺體を被ニ爲納一候處、
荒蕪の儘にて被ニ差置一候儀、誠無ニ勿體一儀恐懼悲傷仕候事に御座候、臣子の分にては一儀安心難ニ仕
儀と奉ニ存候一、誠に今般從ニ天朝一御緣組被ニ爲遊一候上は、猶更御陵御修補の儀御執行被ニ遊候樣奉一存候、
右樣相成候ば、乍ニ恐今上皇帝には巨遠莫大の御孝道に相成、於ニ御當家一は廣大の御忠節相立、官武
御一和の御趣意彌以相顯れ、且官武御一同に、忠節の道を以て御垂教被ニ遊候一へば、海內一般御德
化に浴し、反始報本の情厚く、眞の忠孝の士氣振起可ニ仕、且御陵御修復の事、鎌倉以來數百年來絕
て無ニ御座一候處、御當家に至り御修補相成候へバ、千萬年不朽の御盛功にて、御忠義の道相立候て、
天朝の御氣色に被ニ爲叶一、天下の人民一統感戴仕り、武威も無限に相輝き可ニ申と奉一存候、依之御陵
御修補の儀ハ、御強國の基、則天下無雙の一大成の事と奉ニ存候一間、追て御上洛前に、御修補の儀も

被仰出候へば、必ず御爲筋と奉存候、尤此節柄の儀に御座候へバ、萬一國持衆より、右の儀天朝へ直願の程も難計哉に心痛仕候間、可相成ハ早々被仰出候樣奉存候、今般厚き御沙汰の趣難有奉存候間、愚意の趣此段奉申上候以上、

戸田越前守

別紙　御陵御修補被仰出候へば、私爲冥加右御用相勤申度、全く數代の御高恩を奉報度徹衷に御座候、尤も右御入用筋の儀、公邊御散財不相成樣家來共申付、工夫爲仕度、私儀も元來勝手向不如意には御座候へ共、斯御時節御爲筋に相成候に付、如何樣共力を盡し、家中粥を啜候共、尊敬心切を心掛修補可仕候、尤も公邊御役人御出張にては、彼是御手重に相成、御入費も不少、御陵被爲在候國々村里の者共、自然と迷惑可仕、私へ被仰付候得ば、重役共先立、風雨寒暑にも苦心奔走仕り、謹て修補可仕候、斯奉願候に付、是迄の流弊に習ひ、寸功を以て後賞を心懸候儀に無之、又名聞にも無之、全く國家の御爲を存じ、此度被仰出候、流弊御一洗の一端にも可相成哉と存込候儀に御座候、尤も平常の御用筋にては、兼々必至困窮の勝手、中々難相勤候得共、別紙申上候通り、國家の御爲筋、士氣振起の基と奉存候、亦國持衆へ對し、御譜代の家筋にて、一廉の御爲筋不相勤儀、赤面の次第に付、必至の窮迫を顧みず、奉願候儀に御座候、且攘夷の節に至り候ハヽ、御陵御用中にても早速先途仕り、報國の働き仕度奉存候、微忠の處御賢察被成下、御陵御修補御用被仰付被下置候ハヽ、冥加至極難有仕合奉存候、尤數ヶ國所々の御儀に付、急々修補相整ひ申間敷、積年の丹誠を以て成就仕候樣心掛可申候、此段奉願候以上、

戸田越前守

御附札　山陵御締向御普請等の仕方、見込に御任せ被成候間、國々へ家來差遣し爲仕立候樣可被致候、尤も土地奉行へ可被談候、且又右御普請御入用金の儀、追て御下げ相成候間、御入用高等取調可申聞候、

書付

戸田越前守家老

間瀬和三郎

今度山陵御締向御普請等の御用被仰付候處、是迄御普請其外御手傳の御用被仰付候振合と違ひ、御普請等仕方見込に御任せ相成り、國々へ家來差遣し爲仕立候事にも候間、重役の内、重立引受取扱候者無之候ては、御用辨も立間敷儀に付、右和三郎へ取扱申付、萬端麁畧の儀無之樣、大切に爲取計被申候樣被存候事、

間瀬和三郎義、諸大夫被仰付、戸田家一門の事故、戸田越前守へ、内願の趣達御聽、御機嫌に被思召、今度出張御締向御普請御用被仰付候、右芙蓉間老中列座、周防守〇松平康直申渡之、

前書間瀬和三郎、戸田大和守と改め、追て山陵奉行を命ぜらる、歳俸米二百人扶持、萬石以上格、慶應二丙寅に至り、二百人扶持返上、宇津宮侯高の内七千石、新田三千石、都合一萬石の分地、諸侯の列に入る、

〔戸田忠友家記〕山陵修營ハ、年序ヲ經ズ速成スベク、且戸田和三郎へ奉行仰出サレ候旨御沙汰、國々山陵荒廢ニ及、多年叡慮不安ニ付、御修復ノ儀被仰立候處、去後八月遵奉、御修復御用、戸田越前守へ被申付候旨言上有之、御滿足思召候、右御請ノ上ハ、不經年序、速成就有之度被思召候、頃日越前守家族、戸田和三郎上京ノ旨被聞食候ニ付、於官家夫々御用掛被仰付候、然ル上ハ武邊ノ方奉行無之候テハ御不都合ノ儀被思召、幸ヒ越前守家族ノ儀ニモ候ヘバ、右戸田和三郎へ奉行被仰出候、仍此段達候事、

十月〇文久二年十月廿二日

戸田大和守諸大夫格ヲ命ゼラルヽ、達文久二年十月廿九日

今度山陵御取締奉行被仰付候ニ付テハ、御所向御扱方、諸大夫格今日ヨリ被仰付候事、

十月廿九日

〔實麗卿記〕文久三年二月十八日甲午、○中略頭右大辨長順朝臣來軾、仰宣命趣幷使事、其詞神武帝山陵御荒廢、可被告申御修補之由、宣命使發遣、宣命令作以權中納言藤原朝臣實則爲長宣、權右中辨藤原朝臣爲次宣、廿二日、今日山陵使發遣、

〔忠熙公記〕文久三年二月十四日、長順朝臣ゟ伺、

太政官符大和國

應預奉告令修造神武天皇山陵荒廢事

使從二位行權中納言藤原實則

權右中辨正五位上兼行右衞門權佐藤原博房

右左大臣宣、奉勅爲奉告令修造彼山陵荒廢差件等人宛使發遣如件、國宜承知依宣行之、符到奉行、

正五位上行右少辨藤原朝臣判、從五位上行左大史小槻宿禰判奉

文久三年二月十八日

十六日、長順朝臣ゟ山陵使宣命草ノ草、別紙之通來、

天皇我詔旨良麻止掛畏岐献火山東北陵爾申給波久止申須、高天原爾事始給比志神漏岐神漏美乃命持氏、吾皇御孫尊乃長御代遠御代止天津日嗣乎彌繼繼爾所知食來斯御代中爾波、甚岐世乃亂逆毛有氏、諸陵寮乃官人毛何時志加絕果氏、每年乃巡撿使毛不巡撿成里、御陵守留預人戸人共能不堪守果奴留間爾、御陵波里人乃薪樵流山止雖變里、或波壞知氏畠爾作里、周圍乃堀波埋禮氏水田止左右爾變果去都、遠御代御代乃天皇乃高久嚴岐大御陵毛、穢蕪久微少久荒果爾岐、如此荒果去多流御陵等乃穢惡乎清良爾拂治米、損壞乎廣良爾修堅米志止雖女官位姓名等乎奉出志氏、御陵乃御前爾令告申給幣良久乎、平爾安爾所念食氏、天皇我朝廷遠堅磐爾常磐爾護給幸給幣、又此御事負持氏大陵乃邊爾仕奉良人人乃覺良受犯過事有牟遠、見直聞直坐氏、御心穩爾咎給波志令奉給幣美畏毛申給波久止申、

文久三年二月

〔公卿補任孝明〕文久三年十一月廿八日、神武帝山陵使發遣日時定、依被告山陵修理成功也上卿權大納言、辨勝長、使日野中納言、奉行豐房朝臣、

〔德川禁令考八修復〕文久四元治元甲子年正月

山陵荒頽、就中神武天皇御陵、可及廢絕形勢、多年御恐懼御憂傷之處、先年已來、追々探索、舊冬御修補成功、二千餘年之今日ニ至、盛大復古之儀、第一御追孝相立、加之皇威を四表ニ輝候事、叡感不斜候、右者從往古等閑ニ相成居候處、當大樹朝廷尊奉之志厚、方今國事執掌之半、御修補行届候段、誠忠深宸賞被爲在依之被宣下、

叙位宣下　家茂公

叙從一位

正月　職事清閑寺豐房

〔文久紀事〕於京都申渡候書付

二月十日○元治元年

御刀白鞘、美濃國狼信、代金二十五枚、

戸田越前守名代

秋元但馬守

山陵御修補之御用相勤、今般神武天皇御陵を始、千載を過候御場所、追々御修補御成功相成候段、朝廷御尊崇之御趣意深相辨、公武之御爲厚相心得候より之儀と、一段事ニ被思召候、依之御刀拜領被仰付之、

同文言

神保山城守

右之通於京都申渡候事

神武天皇御陵之儀者、其方知行所内ニ被爲在、今度御修補ニ付、松材數本御用ニ相成、御滿足被思召候、依白銀二十枚御所より賜候旨、傳奏衆被相達候間、此段相達候、尤銀子之儀者、御納戸頭申談、請取頂戴候樣可被致候、

右二月廿七日〇元治元年

〔嘉永明治年間錄十三〕元治元年六月十六日、古來陵墓ノ不審ナルモノハ、決裁ヲ朝廷ニ請ヒ、妄リニ臆斷ヲ以テ定ムル事ヲ禁ズ、

山陵御修補に付、元來御場所未定の分、此節專ら探索方仰出され候處、兼て異論の御場所、爲鑑定穿ち候樣有之哉に相聞候、尊重の御場所、一己の存寄を以て勝手拜見のみならず、右樣所業を以て窺定候儀、恐懼の至に思召候間、以後異論の御場所は、山陵奉行へ申出、同向々に於て一同立會、篤と敬見遂評議候上にて、彌難決候は朝廷へ被相伺、御差圖受候樣可致候、今般先帝爲御尊崇奉行被仰付候儀に付、都て山陵に拘り候御儀は同向へ申出、差圖受候樣可致、一己の存寄を以て、妄に山陵へ手を附候儀は、決て不相成候、御尊崇難相立候間、心得違無之樣可致候、且又國々皇子皇后等の御墓、其外重き身分の墓所々々右樣の類、以後大切相心得、破壞不致樣被仰出候、右之趣末々不洩樣急度可申達事、

右之通京都より被仰出候間、諸國津々浦々に至る迄、不洩樣早々可相觸候、

〔嘉永明治年間錄十五〕慶應二年丙寅三月廿日戸田大和守諸侯ニ列ス

野州宇都宮城主戸田土佐守高の內七千石、新田三千石、都合一萬石、家族戸田大和守へ分地いたし、御奉公爲相勤度、且大和守取來二百人扶持差上度旨、願之通被仰付、席の儀は菊之間緣頬と可被心得候、右於芙蓉之間老中列座、和泉守申渡之、

此は文久二壬戌閏八月、宇都宮侯內願に依て、御陵修補御用命せられ、家老間瀨和三郎、重立是を勤めたるに依て諸大夫被仰付、戸田大和守と改め、其後山陵奉行を命せられ、歲俸米二百人扶持、萬石以上の格、然るに去々子年〇元年水府動亂事件に就き、宇津宮侯減高、且所替を命せられ、其後所替御沙汰止と成たり、之に依て大和守の二百人扶持返上、更に宇津宮侯高の內七千石、新田〇田下恐脫三千石三字都合一萬石を以て分地となし、諸侯の列には爲せり、

〔玉勝間三〕神武天皇の御陵

大和國人に、竹口英齋〇略中此英齋といふ人は、すべて御世々々の天皇の御陵を始め奉りて、皇后皇子皇女たちなどの御墓まで、廣く考へて、陵墓志といふ物を著さんとすとて、かつ〳〵書出たるをも見せたりしは、おのれはた常に深く思ひわたる筋の事なれば、いと〳〵うれしくて、必なしをへられよと、返す〳〵すゝめおきしはいかになりぬらん、其後はえらずなん、

〔曲亭雜記一上〕蒲の花かたみ

抑脩靜庵はもと福田氏、後に其先祖の氏鄉朝臣の族より出たりと聞に及て、氏を蒲生に改めけり、これらのよしは、墓表に具なればこゝに贅せず、名は秀實、一名は夷吾、字は君平、脩靜はその號、下毛州河內郡宇都宮の人なり、〇中略脩靜、九志を編述の志あり、古昔の山陵多く荒廢して、その迹定かならざるもの有と聞こと久しきをもて、まづ山陵志より掇んとて、獨行して京に赴き、南海を越、淡路に渡るに、素より路費の乏しきを憂とせず、嶮を履み、風雪を犯して、六十六國その半を經歷し、あるは里老に問ひ、或は舊圖を考へ、諸陵存亡の趣を目擊したりける、辛苦をその著述の爲に辭せず、月日は旅寢に移れども、其志移すして愈精力を盡しけり、かゝりし程に文化丁卯の年、北虜邊塞を擾るの風聞あり、時に脩靜江戸にあり、かの事を傳へ聞て、憂ひ且憤に堪ず、即不恤緯五編を著し、上書して之を國老の執事に奉りしに、おほんとり上はなかりけり、とかくする程に山陵志一卷やうやく稿を脫て、刻本にせまく欲するに、脩靜素より擔石の儲なければ、同志に告て未刻以前に入銀

を促し、且その友鍵屋靜齋等が資を借て、製本全く成しかば、之を京師に獻り、及關東の搢紳、並に有職の人々にまゐらせけり。○略○中初脩靜が山陵訪求の爲に京に赴きしとき、彼地に絕て識人なし、當時小澤蘆庵は、古學を好みて萬葉風の詠歌に名高く、世にすねたる隱逸なりとかねて傳へ聞しかば、渠が助を借らばやとて、その京に入りし日に、やがて蘆庵が宿所を尋て云云とおとなふ程に、小澤が家僕出迎へて、いづこよりと問ふ、いひよるよしもなきまゝに、脩靜まづ伴りて、某は下野なる宇都宮のほとりにて、蒲生伊三郎と呼るゝ者なり、琴を好み候へども、田舍にはよき師なし、主人の翁は琴の妙手にておはするよし、東野の果までかくれなし、是によりおはん弟子にならまく欲して、遙々と來つるにて候といふ、その僕こゝろを得て奥に赴き、云云と告にけん、蘆庵は聲を高くして、あな無益しき問ごとかな、汝出てしか答へよ、主人は久しう客を辭して交を絕たれば、都の中だにも親しう物せるは稀なり、琴は若かりし時掻鳴したりけるを、わちこちの人に知られて、彼に聽せよ、此に敎よといはるゝがうるさければ、近ごろ打擯きて薪に代たり、かゝれば所望にしたがふべくもあらず、他に行て求めたまへといふ聲の、むし襖一重を隔て定かにぞ聞えける、脩靜は僕が報るに及て、そがしかく〳〵といふをしもまたず、更に又推かへして云、翁のおはん答はこゝにもつばらに漏聞たり、某猶一言あり、願は枉て聞たまへ、吾は下野なる儒者なり、云々の志願あれば、屢江戸に遊學し、こたみ都に上りしかども、相識れる者絕てなし、翁の古學を好みたまふと、その氣質の俗ならぬは、かねて傳聞ものから、いひよるよしのなきまゝに、琴を學ん爲にとて來つるとはいひし也、こは長者を欺くに似たれども、その虛言は已ことを得ざりし實情より出たれば、許されて對面せられば、肝膽を吐き、志願を告て、翁の資を借らんと欲す、かくても意に稱はずば退けられんこと勿論たるべし、今一たび和殿を勞さん、此由執次たまへといふ、蘆庵もこれを洩聞て、さりとは思ひがけざりき、そは奇しき客人なり、對面せずば悔

しきことあらん、こなたへと申せとて、やがて面をあはしけり、脩靜ふかく歡びて、夙くより思ひ起せし志願の由を說示し、山陵志著述の爲に古き御陵を尋んとて、旅寐をしつることの趣云云とかたりいづるに、蘆庵も只管感歎して、足下は得がたき學士なり、さる志ならんには吾庵に杖をとゞめて、こゝらわたりの御陵をしづかに訪求したまへとて、又他事もなくもてなしけり、これにより脩靜は日毎に古陵を尋巡に、ともすれば日暮て歸るを、主人は自ら風呂を焚て浴させぬる老人の心づかひを胸苦しとて辭とも從はず、これ等の事は、只管に客を愛する故のみならず、吾も亦かゝる奇人に宿することの歡しさに、足下の疲勞を愍て、恙なかれと思ふよしは、國の爲に力を竭す人の助にならんとてなり、必辭退したまふなとて、後々までも然かしてけり、

〔陵墓一隅抄序〕戊申○嘉永元年春、余覩花於芳野、過上市村、偶見一古謄本於店頭、引而撿之、乃具載帝陵頗備焉、但不記著人姓名、購歸雜之史籍、他日閱之宿昔疑之、未能質明者、渙然氷釋、其爲喜何如歟、于嗟山陵之頹廢也久矣、彼大和河內之諸地、有其物而名或不正、若我京郊、其物既亡、名亦隨亡、悲哉、繇是前賢往々覃思極力、各就所見樹一家之私議、彼如松下見林廟陵記、蒲生君藏山陵志等、雖頗益後生、務主閎博、一從一違、同異混淆、不免封菲勞采也、顧茲瑣々冊子、未足窺作者全力、然而精鑿的實、較諸前書大有徑庭、余倍珍重、以示之於老友水島永政、永政亦奇之、反覆數回、謂余曰、今熟玩其辭意、非淺者之所能辨、其或成於若宮水枝之手、水枝者、濃國郡上之一祝氏、自少慨山陵及式社之荒凉、著書有數種、嘗與同列不合、逃居京師、終赴和、沒於龍門士神之祠宮、惜哉、天祿不長、名亦不顯、斯書必係其遺筐之物也耶、余深然之、後屢誘永政拜聖蹟、每揷之行囊、苟有所見、輒加私註、題曰陵墓一隅抄、別作圖副之、頃者俱謀更校訂以傳之世、覽者留意於茲一隅、庶幾三隅可以反矣、歟、時嘉永甲寅春正月平安後學津久井清影撰、

帝王部十九

皇后上　皇太后、太皇太后、皇太夫人、女院、准母、准三后、附入

稱呼　一一〇六
立后儀　一一〇八
參賀進獻　一一二四
待遇　一一二五
供給　一一三一
擇貴族　一一三三
皇族爲后　同
前帝養子爲后　一一三五
前后養子爲后　一一三六
大臣養子爲后　一一三七
初爲太子妃後爲后　一一四〇
初爲女御後爲后　一一四二
初爲准后後爲后　一一四六
卽位前立后　一一四七

讓位後立后　一一四七
諒闇立后　四八
幼女爲后　一一五〇

帝王部十九

皇后上

皇太后、太皇太后、皇太夫人、女院、准母、准三宮、〔併入〕

皇后ヲキサキト云フ、上古ハ天皇ノ御寢ニ侍スルモノヲ、汎クキサキト稱シ、其中ニテ嫡妻一人ノミヲ大后（オホキサキ）ト云ヒシガ、漢土ノ制ヲ摸サレテヨリ、后ノ稱ハ嫡后ニ止マリ、御母ヲ皇太后ト云ヒ、御祖母ヲ太皇太后ト云ヒ、以上之ヲ三后又ハ三宮ト稱ス、立后ニハ册命ヲ以テシ、其式極メテ嚴ナリシガ、南北朝ノ比ヨリ、立后ノ典ヲ擧ゲサセ給ハザルノミナラズ、女御ヲ置カセ給フコトモ甚ダ希ニシテ、終ニ全ク廢絕セシガ、後陽成天皇ノ朝ニ、豐臣秀吉、近衞前久ノ女ヲ養ヒテ、掖庭ニ入レテ女御トナシ、後水尾天皇ガ、德川秀忠ノ女ヲ納レテ、中宮ト爲シタマヒシニ至リ、中宮女御復興ル、

三后ハ、各同時ニ二人以上並ビ立ツヲ得ズ、故ニ一條天皇ノ朝ニ、藤原定子ガ中宮タルニ至リ、藤原遵子ノ中宮ヲ改メテ、皇后ト爲シタリ、遵子ハ帝ノ御父ノ中宮タリシカド、帝ノ御生母、皇太后タルヲ以テ、皇太后タル事ヲ得ズシテ、仍ホ中宮ト稱セシナリ、然レドモ是ハ婦姑ノ間ナレバ、其秩序ヲ紊スマデノ事ナリシニ、其後藤原道長ノ女彰子入內シテ、中宮タルニ至リ、定子ノ中宮ヲ改メテ皇后トス、是ニ於テ一帝ニ兩后アリ、是ヨリ此例ヲ逐ヒシコト間間アリテ、中宮ノ勢ハ、反テ皇后ノ右ニ在リ、令ニ據ルニ、中宮ハ三后ノ總稱ナルガ、聖武天皇ノ朝ニ、皇太夫人藤原宮子娘ヲ、中宮ト稱セシヨリ、每ニ皇太夫人ノ稱ト爲レリ、桓武天皇ノ

朝ノ高野新笠、陽成天皇ノ朝ノ藤原高子、宇多天皇ノ朝ノ班子女王、醍醐天皇ノ朝ノ藤原温子ノ如シ、而シテ在位ノ天皇ノ后ヲ中宮ト稱セシコトハ、醍醐天皇ノ皇后藤原穩子ニ昉リ、繼デ村上天皇ノ皇后藤原安子アリ、然レドモ皇后ノ稱ハ、毎ニ贈號ニ用キ、御寢ニ侍セザルモノニモ假スコトアレドモ、中宮ノ稱ハカク汎ク用キシ事ナシ、

皇后ハ、上古ヨリ貴族ヲ擇ビテ冊立スルコトニテ、大寶令制定ノ時ニ至リテハ、妃ヲ內親王ニ限ルコトヽシタレバ、后ハ皇族タルコト勿論ナリ、是蓋シ從前ノ法ナルベシ、故ニ聖武天皇ノ藤原安宿媛ヲ皇后ト爲シタマヒシ時ニハ、縷々數十言ヲ以テ辨疏シタマヘリ、是ヨリ後ニハ、皇后ハ多ク藤原氏ニシテ、以テ外戚擅權ノ端ヲ啓ケリ、然レドモ多クハ大臣ノ女ニシテ、納言以下ナルヲ以テ異例ト爲シタリ、其間ニハ執柄ノ人ニシテ、人ノ女ヲ養ヒテ入內セシムルアリ、天皇讓位ノ後ニ、之ヲ納レテ后ト爲スアリ、又十歲未滿ノ后アリ、皆異例ナリ、其異例ノ尤モ甚キハ、御寢ニ侍セズシテ后ノ稱ヲ得ルアリ、此例ハ堀河天皇ノ朝ニ、皇姉媞子內親王ヲ以テ准母ト爲シ、皇后ト稱セシヲ以テ始トス、但シ內親王ニ限ル、サテ后位ニ進ムニハ、皇太子ノ妃ヨリスルアリ、女御ヨリスルアリ、准后ヨリスルアリ、或ハ直ニ后位ニ昇ルモノアリ、或ハ其勢ナキニ由リテ、中宮ヨリ皇后トナルアリ、

皇后ハ內政ヲ理シ給フモノニシテ、大夫以下ノ職員アリテ之ニ屬シ、元日等ノ朝儀ニハ、天皇ト共ニ、皇太子以下ノ拜ヲ受ケ、其禮遇殆ド天皇ト均シキコト多クシテ、國忌山陵ヲ置ク等ノ事アリ、上古ハ其物故ヲ薨ト云ヒシガ、後ニハ是モ崩ト云ヘリ、而シテ其他ニ行キ給フヲ行啓ト云ヒ、臣庶ヨリ皇后ニ白スヲ啓ト云ヒ、其上啓ニハ殿下ト稱スルガ如キ、一ニ皇太子ノ例ニ同ジ、

皇太后ハ、皇后中宮ヨリ進ムアリ、女御ヨリ進ムアリ、准后ヨリ進ムアリ、剃髮後ナルアリ、女

院トナリテ後ニ陞ルアリ、多クハ所生ノ天皇ノ御卽位ニ由ルナリ、

太皇太后ハ、皇太后ヨリ陞ルヲ以テ常トスレドモ、皇后中宮ヨリ直ニ進ムモノアリ、然レドモ女院ノ稱ノ起リテヨリ後ハ、此位ニ居ルモノ少ナシ、

皇太夫人ハ、天皇ノ御生母ナル夫人女御ヲ稱スルナリ、是ヲ中宮ト稱セシコトハ上ニ云ヘガル如シ、皇太夫人ノ稱ハ、後ニ亡ビテ復聞エズ、又皇太妃アリ、令ニハ載セタレドモ、歷史上ニハ、續日本紀、文武天皇大寶元年七月ノ下ニ、繞ニ一見スルノミ、

贈號ノ事ヲ言ヘバ、皇后ノ稱ハ、妃准后ニ贈リシ例アリ、皇太后ハ、皇后ニ贈ルアリ、直ニ女御等ニ贈ルアリ、女院ニ贈ルアルナリ、太皇太后ハ、贈皇太后ニ、更ニ贈リシ外ニ例ナシ、

女院ハ太上天皇ニ准ズルモノナリ、其所屬ノ職員等、概ネ太上天皇ニ同ジ、一條天皇ノ朝ニ、皇太后藤原詮子ヲ東三條院ト稱セシヲ以テ、女院ノ始トス、次ニ太皇太后藤原彰子アリ、後朱雀天皇ノ朝ニ女院トナリ、上東門院ト稱ス、門院ノ號此ニ始マル、是ニ於テ女院ノ稱ハ、單ニ某院ト云フモノト、某門院ト云フモノトノ二種トナリテ、後世之ヲ遵用セリ、此兩女院ハ、皆國母ニシテ剃髮シタルモノナレバ、國母ハ女院タルヲ以テ例ト爲セドモ、國母ニアラザル女院モ亦頗ル多シ、若シ后位ニ居ラザルモノヽ女院タルニハ、必ズ一タビ准后ヲ經ルヲ以テ例トス、

女院ノ稱ハ、其住處ヨリ起リシガ、後ニハ徒ニ禁門ノ名、地ノ名ヲ取ルアリ、或ハ門ニモ地ニモ由ラザルアリ、或ハ前女院ノ號ニ、後ノ字新ノ字ヲ加フルアリ、後高松院、新待賢門院ノ如キ是ナリ、要スルニ、女院ハ生前ノ號ナレド、希ニハ歿後ニ追稱スルモノアリ、後京極院ノ如キ是ナリ、

准母ハ帝母ニ准ズルモノニテ、女院タルハ常ノ事ナレドモ、或ハ皇后ト稱スルアリ、又剃髮

稱呼

後ノ准母アリ、此准母ハ多クハ内親王ナレド、希ニハ中宮等ニシテ准母タルアリ、

准三宮ハ、准三后トモ准后トモ稱ス、三皇后ニ准ズルノ謂ナリ、是ハ女子ニ限ラズ、親王、法親王、大臣等、毎ニ此ニ居ル、蓋シ文德天皇ノ朝ニ、藤原良房、三宮ニ准ジテ、年官ヲ賜ヒシヨリ起リシガ、後ニハ一ノ職名ノ如クナレリ、而シテ后位ニ昇ラズシテ女院タルモノハ、必ズ之ヲ經由スルヲ例トス、サテ此篇ニ就キテハ、女御、女院出家、山陵、外戚等ノ諸篇及官位部ノ中宮職、院司等ノ篇ヲ參看スベシ、

〔新撰字鏡〕妃（以之以爲二反、妃也、支佐支、

〔字鏡集十一〕后（コウキサキ

〔令義解七公式〕皇后、謂天子之嫡妻也、

〔西宮記臨時五〕皇后行啓、（略）中宮、妻、長秋宮、或說、長秋者后宮摠名云々、皇后摠名也、但后宮四人御坐之時、皇后宮職可被置歟云々、

〔拾芥抄中本官位唐名〕后宮（長秋宮　關省　長信宮　關殿　燒母門　玉堂　後宮　後庭　掖庭　椒房　皇后宮　秋宮　中宮（長秋宮　陰教　三千人　內則　芳苑　椒房　關唯之德　掖庭　椒樓木之歌　椒掖　昭陽殿　鹿苑之美　椒風　葛覃之詠　三千人

〔古今和歌集一春上〕寬平御時、きさいの宮の歌合のうた、（略）歌

〔榮花物語三十七煙の後〕七月七日、（天喜五年）中宮の御なへに、前栽にむらごの糸をひきて、いろ〳〵のたまをつらぬきたり、（略）中女房、

　ぞらつゆも玉をみがきて千代ふべき秋のみやにはつきせざりけり

〔八雲御抄三異名〕后　むらさきの雲　ぞりへのみや

〔漢官舊儀下〕皇后稱中宮、

〔唐六典四禮部〕外命婦朝中宮、爲皇后稱臣妾獻壽、

〔九成宮醴泉銘〕上及中宮、歷覽臺觀、

〔後漢書十上鄧皇后〕會有司奏建長秋宮、帝曰、皇后之尊與朕同體、承宗廟母天下、豈易哉、

〔古事記傳二十〕大后は字のまゝに、意富岐佐岐と訓べし、後世の皇后なり、古は天皇の大御妻等を后と申て、其中の最上なる一柱を、殊に尊みて大后とは申ぞしこと、上卷八千矛神段（傳十一の三十葉）に云るが如し、大は、大臣大連などの大と同じくて、尊みて云稱なり、されど猶疑あらむ人の爲に、其證どもを擧て、なほつばらに云む、先古に后とは一柱に限らず、後に妃夫人なども申す班までを幾柱にても申せり、（今世女童の詞に、十二人の御后といふなるは、愚なるに似たれども、かへりて古に近し、）倭建命、段に、弟橘比賣命を、其后とありて又次に坐倭后等云々とあるは、橘比賣をも坐倭をも、共に后と申せるなり、（後建命は、萬を天皇に准へて申せる例なり、）又等と云るを以ても、一柱に限らざることを知べし、されば書紀反正卷に、皇夫人、また夫人敏達卷にも夫人、これらを伎佐伎と訓るは古にかなへる訓なり、字鏡にも、嬪妃也、支佐支と訓る處もあるは心得ず、又妃夫人嬪女御などを多くは美あり、又書紀に、夫人をば、意富刀自と訓る處も、始奉て、夫人嬪などの列までも通ひて申すべければ、后を、ぞと訓り、そも〳〵御ぞとは、皇后をば此訓は惡からず、但神武卷に、尊正妃爲皇后、とある、正妃を、文字に就ては、然も訓べけれども、當時の實の稱には叶ふべくも非ず、牟加比賣、皇后を伎佐伎と訓る、こは牟加比賣とは、皇后を申すべく、又伎佐伎とは、妃なども、たる稱なれば、されば、こは正妃を伎佐伎、皇后を意富伎佐伎と訓べきなり、伎佐伎と訓て宜し、凡て、いづこにもわたるも、妃夫人なども、伎佐伎、皇后は意富伎佐伎と訓べきなり、

さて其后等の中の第一なるを、大后と申せし證は此處を始として、玉垣宮（仁德垂仁）段に、其大后比婆須比賣命と見え、訶志比宮（仲哀）段に息長足比賣命を大后と申し、高津宮（仁德）段に、大后石之日賣命と見え、又遠飛鳥宮（雄略）段なども、同く大后と申せり、又書紀天智卷に、天皇御病甚重くならせ給へる時に、天武天皇の儲君に坐けるが、後事を辭申給へる御言に、請奉洪業付屬大后云々、とある大后も、皇后倭姬王を申たまへるなり（凡て書紀の例は、上代の事を記されたるも、後世の如く漢國の定めに隨ひて、當代の大后をこそ、皇太后とこそは書れたるに、此ほ其例に違ひて、たま〳〵當時の實の稱のまゝに、當代の大后とは書れたるなり、此餘にも、かくとりはづしては、凡ての漢樣の例に違ひて、古の稱のまゝに書れたる事もまゐ見え、たり、御子をば皇子皇女と書るが、凡ての例なるに、なり〳〵は、玉とも書れたる例なり、）又萬

葉二に、近江大津宮御宇天皇〇天智躬不豫之時大后奉御歌、また天皇大殯之時、大后御歌、また明日香清御原宮御宇天皇〇天武崩之時、大后御作歌なぞ見え、又伊豫國風土記に、天皇等於湯幸行降坐五度也、以大帶日子天皇〇景行與大后八坂入姫命二軆爲一度也、以帶中日子天皇〇仲哀與大后息長足姫命二軆爲一度也云々とある是らなり、さて上件の如く、古に大后と申せしは、當御代の第一なる御妻なり、然るを萬の御制、漢國のにならひ賜ふ御代となりては、正しき文書なぞには、當代の名をば皇后、先代のをば大后と書るゝことゝなれり、されど口に言語、又打とけたる文なぞには、奈良のころまでも、猶古のまゝに當代のをば大后、先御代のをば大御祖と申せるを、されば書紀などに、皇太后、皇太夫人などいふは、然なり、まこさに大御母に坐を、伎佐伎美賣などいふは申まおき理なり、然るを書紀清寧卷に、皇太夫人を意富伊伎佐伎と訓るは、古に叶はず、皇極卷に、天皇の御母吉備姫王を、吉備嶋皇祖母命とある、此ず古の稱なる、又繼紀九に、藤原夫人を、宣二文則皇太夫人一、語則大御祖一、その詔のあるを思ふべし、皇后にまれ、夫人にまれ、大の字を加へて御母の事とするは漢國の定めにこそあれ、皇國の古にはさることなし、故文には漢樣を用ひながら、語にはなほ古のまゝに申されしなり、いまだ漢籍を取用ひらざりしかば、大后にまれ、凡て大后たちにまれ、御母の御世には太妃太夫人などゝ云品の差別はひられざりし前の御母なり、坐ては凡て大御祖とぞ申さん、孝徳紀に、皇極天皇を皇祖母尊と、御號奉らるゝに差別ばなかりしこと見えたるこは天皇に坐すら猶如是申せるを以て、后も夫人も大御祖母と書れたるはいかにさ疑ふ人あらん、さるべし、さて又こは御母と申すことなるに、故に、御母なる事を知らしめむ爲に、母の字をも添られたるものなり、〇中略其後遂に常の語にも、當代の嫡后をば、たゞ后と申し、大御母を大后と申すことにはなれるぞかし、凡て何事もへのみ變りはていに、古樣をよく辨知るなすめり、師の萬葉考にすら、彼二卷なる大后を疑ひて、天皇いまだ崩坐ざるほどになれば、大后とあるは誤なりとて、皇后と書改めたるなど中々にみな誤りなり、

立后儀

〔儀式五〕立皇后儀

前一日、太政官召式部省、仰可令集會刀禰之狀、當日早朝中務省、置宣命版於尋常版北、式部丞錄率史生省掌等、於建禮門前庭、東西相分列立刀禰、于時閤内大臣喚舍人、如常、親王以下應召左右相分

參入、〔五位已上在承明門内、式部錄稱容止、如常、〕五位已下在同門外、大命乎親王等百官人等天下公民衆聞食止宣、食國天下政波獨知倍物爾不有、必毋斯理倍乃政有倍之、自古行來留事皇后定天之闇中乃政波成物止毛奈常毛所聞看行須、故是以其色其位某乎皇后止定賜布、故此狀乎悟而供奉止勅天皇御命乎衆聞食止宣、訖各退出、後日早朝、外記召式部省、仰可令集會刀禰之狀、時刻親王以下參入、〔五位以上在北中門外、六位以下稍退在後、〕于時内侍一人進宣云、五位以上六位以下稱唯、拜舞退出、

〔新儀式五臨時下〕冊命皇后事

前一日大臣奉勅、令外記召式部省、仰明日可令集會刀禰之狀、又召内記令作宣命、當日早旦、大臣參弓場、以宣命草付藏人、令奏之、覽訖返給復座、令清書重奏覽返給候之、所司裝束南殿、〔延喜廿三年、懸二御簾一、立二御扉風一、供二大床子一基、南廂第三間、追立二床子一基、即在二東面御簾前一、〕時刻出御、左右近仗即陣、〔階下、内侍伏服、中儀式、近仗服、〕内侍臨二東檻一喚二大臣一、大臣參上著二兀子一、次開門、闈司相分、座二承明門左右腋一、中務丞入置二版位一、次大臣喚二舍人一、少納言參入就版、大臣仰可召二大夫等之狀一、稱唯退出、次親王以下五位以上、參入列二立庭中一、六位以下在二承明門之外一、大臣喚二中納言一人一、稱唯東度昇自二東階一就二大臣後一、進受宣命退下、大臣起座下、〔殿就二庭中本位一、此間承詔者候二東軒廊北邊一、〕次宣命大夫進就二版宣制曰、現神止大八洲所知須和根子天皇詔旨止、〔萬葉廿、〕勅命乎親王王公百寮人等天下公民衆聞食止宣、群官稱唯再拜、訖更宣云、食國天下政波獨知倍物爾不有、必之毛後乃政有倍之、自古行來留事爾皇后定氐闇中乃政波成物止毛奈常毛所聞志行須、故是以某乎皇后止定賜布、故此狀悟而供奉止勅布天皇命乎衆聞食止宣、群官供稱唯再拜、此間宣命大夫就二本位一、訖親王以下退出、〔以還御、大臣依召參上、有除目儀、任中宮職司一也、延喜二十三年例也、〕事訖退下、大臣又參二射殿一、令奏除目清書、

〔北山抄四〕立后事

前一日、大臣奉勅仰外記、令誡所司、大臣奏宣命、〔奏草及清書一如常、返給内記、令候陣座、〕訖御南殿、〔懸御簾、〕近仗陣階下、〔立陣王

卿出、外辨大臣著靴、取副件宣命於笏、進立軒廊（西一間、不必著）内侍召人、即參上著南廂第二間（西柱下）兀子（北面）次開門、闈司著座、大臣喚舍人、刀禰參入儀如常、（延喜四年、依天長承和例、不召舍人、少納言引列云云、是違式也）舍人召大臣（任大臣日授宣命、讓國式云、執宣命文、乃定堪宣命者定云云、近例更不奏、於陣座示之、）大臣召中納言一人（任參議）受之下殿、立軒廊西第一間北邊（或立二間、出二間云々）大臣退下就庭中、標宣命使出（自東二間就宣命版、内裏儀式、開門儀式立標之次預置之、前例又如此）宣制一段、群臣再拜、又一段、訖拜舞（内裏儀式、再拜云々、而儀式讓國儀拜舞者、其立則立后太子儀、准讓位可有拜舞歟、仍撿舊例、多用再拜、但延長三年立太子日、拜舞由見此文、然東部王記、今按如叙位任官、皆有親族拜舞立、后太子等日、何無此儀乎、任大臣無拜舞也）宣命使經列西復本位（或從東逸、或從東復）王卿退出、主上還御、次令藏人召大臣（攝政於直廬行申候由、上宣令候之）大臣於陣後着靴、取副宣命於笏進立軒廊、内侍臨檻、内辨參上著南廂兀子（裝束記文、新儀式等同東方三間、東柱側、西宮四條抄等曰、東第二間開門、閤門開承明門、建禮門、不開掖門、但多依後說）闈司著座、大臣召舍人（二音）大舍人稱唯、少納言着版、大臣宣刀禰召（出自列前入軒廊東二間、於東階下立、執經東階下歸向、揖立軒廊西第一間北邊、或二間同四年任大臣日、師氏卿立二間、同天德二年任大臣日、雅信卿立一間）大臣給宣命、給之退、（於東階下歸向、揖立軒廊西第一間北邊、或二間同四年任大臣日、師氏卿立二間、同天德二年任大臣日、雅信卿立一間）大臣退下、（於東階下歸向、揖、自東二間出、又與宣命就庭中

（標、經大臣與納言列間、立上）宣命使著版、（自東二間出、每二間曲折、揖如常、）宣制一段、（群臣再拜）又一段、訖（再拜）又一段、訖（群臣再拜、北山抄曰、拜舞云云、是依新儀式讓國儀、並延喜三年立太子日記、並叙立時親族拜而六年之例多再拜也）歟、宣命使經列西復本位（或從東逸、或從東復）王卿退出、主上還御、次令藏人召大臣（攝政於直廬行執筆、）參議大臣先候殿上、依重召經簀子敷著御前圓座、次召五位藏人令進紙筆、如恒、大臣依仰書宮司除目、事訖退下、於陣令參議清書（用折紙、公卿一枚、非參議一枚、）次奏聞如恒、次召式部（給之、外記三度申如恒、丞立小庭、上卿召曰、末字古丞取文返立、又仰萬（當若）計、若被加任武官一者亦同其儀）先是清書被奏之後、職司公卿幷亮等奏慶弓場殿（拜舞、次參彼宮令奏慶再拜、了各行事、此間勅使次將參本宮申宣命由、先敷座（帖茵）令著之、公卿一人執女裝束給之、（長暦元年三月春宮權大夫取之、永承六年二月十三日大夫取之、使下地再拜退）藏人令持御椅子一脚（紫檀地螺鈿、白地紫文綾毯代鎮子四枚）大床子二脚（塵蒔螺鈿變繪高麗疊加圓座一枚）師子形二、御挿鞋一足（盛柳筥、或加御膳具銀器、並御奩盤等、）其儀如前（公卿一人、小舍人執女裝束給之、又給小舍人綠絹二匹）藏人下地再拜、退立御椅子、（撤御帳南面茵帖等、不撤唐匣等、）即立於晝御座跡、御挿鞋（置鏡臺下）師子形（立御帳南面座右方）修理職時簡、御膳棚、（以上立於圓座一枚、）炬火屋（立於庭中）炬火（次第仰之、先左右近將、次左右兵衛佐、次左右衛門佐、或先是奉仕之宮司一人引道、可令奉仕、）供御膳（采女六人、經簀子自階次間供之、到御簾下付女蔵人、傳取之、供大床子前、御臺盤有臺、）六府各率官人（本所上膳女房爲陪膳、）以下一員、近衛等十人參彼宮、（○中略）神祇官奉仕大殿祭、皇后經御帳後御大床子、立御箸入御、次撤之、（羽林要秘抄云、立后（繼脱蒔繪劔、相具綾盧舫籃臨期卷纓、或自里亭卷纓、或懸纓隨身壺垂纓、）名謁奏、時近代例不定、）被補御匣殿宣旨内侍、（以上大夫仰亮、告知其人、）補侍職事以下女房、衝重所所屯食、時刻渡御南殿、（或不渡御、）左右近衛陣階下（下立胡床、帶弓箭著靴或浅沓、）内辨著堂上召舍人、外辨公卿列立、宣命使宣制、諸卿退下、次將退下、（自上萬退、左近左廻、右近右廻、未事終退者、左近右廻、以後垂纓撤弓箭、）次宮司除目比、差近衛次將一人、被申册命由本宮、（除日大夫參宮後可參著、）申事由、依召昇自中門、著座、賜禄降地再拜、出中門、退、被仰六府將佐可候啓陣、由、上卿著陣敷加軾一枚、先召左右次將、垂纓緩帯劔取笏淺沓、入宣仁門、著軾、（經柱外、上卿云、其宮啓陣仁候、微音稱唯退下、（左廻經衛門兵衛又如此、）參彼宮之時、卷纓緩帯劔壺胡籙著中門廊座、（不必然、）敷、六

府將佐各一人、

本宮儀略不記、三ヶ日參入裝束如先、至第三日、著中門廊座有盃酌、其後給祿退出、木ノ俣

〔續日本紀十聖武〕天平元年八月戊辰、詔立正三位藤原夫人爲皇后、〇皇后聖武壬午、喚入五位及諸司長官于內裏、而知太政官事一品舍人親王宣勅曰、天皇大命乎麻親王等、又汝王、臣等語賜皆止勅久、皇朕高御座爾坐初由今年爾至麻氏六年爾成奴、此乃間爾天都位爾嗣坐倍次止爲氏皇太子侍互、由是其婆婆止在須藤原夫人乎皇后止定賜、加久定賜者皇朕御身毛年月積奴、天下君坐而年緒長久皇后不坐事母一豆乃善有良努行爾在、又於天下政置而獨知倍伎物不有、必母斯理幣能政有倍之、此者事立爾不有天爾日月在如、地爾山川有如、並坐而可有止言事者汝等王臣等明見所知在、然此位乎遲定米豆良久波、刀比止麻爾母已我夜氣授留人波乎一日二日止擇比十日廿日止試定止斯、伊波婆許貴太斯伎意保伎天下乃事乎多夜須久行止所念坐而、此乃六年乃內乎擇賜試賜而、今日今時眼當乘乎喚賜而細事乃狀語賜布止詔勅聞宣、賀久詔者挂畏支於此宮坐氏現神大八洲國所知倭根子天皇我王祖母天皇乃始斯皇后乎朕賜日爾勅豆良久、女止云波婆等夜、我加久云其父侍大臣乃皇我朝乎助奉輔奉氏頂伎恐美供奉乍夜半曉時止休息無久淨伎明心乎持氏波々刀比供奉乎所見賜者、其人乃宇武何志伎事緣事乎送不得忘、我兒我王過无罪無有者捨麻須忘奈負賜宣賜志大命依而、加爾加久爾年乃六年乎試賜使賜氏此皇后位乎授賜、然毛朕時乃爾波不有、難波高津宮御宇大鷦鷯天皇、〇仁德葛城曾豆比古女子伊波乃比賣命皇后止御相坐而食國天下之政治賜家利、今米豆良可爾新伎政者不有、本由理行來迹事曾止詔勅聞宣、既而中納言從三位阿倍朝臣廣庭更宣、勅曰天皇詔旨今勅御事法者、常事爾不有武都事止思坐故猶在伎物爾有禮夜、思行之氏、大御物賜久宣止賜親王純三百疋、大納言二百疋、中納言一百疋、三位八十疋、四位三十疋、五位二十疋、六位五疋、內親王一百疋、內命婦三位六十疋、四位一十五疋、五位一十疋、

〔日本後紀二十嵯峨四〕弘仁六年七月壬午、立夫人從三位橘朝臣諱嘉智子爲皇后、參議宮內卿正四位下藤原朝臣緒嗣、進就閤門、宣命、其詞曰、天皇大命乎麻止勅豆良久、女止云波婆等夜、我加久云其父侍大臣乃皇我朝乎助奉輔奉氏頂伎食止宣、食國天下政波婆獨知倍伎物爾波不有、必母斯理弊乃政有倍之、自古行來曾事、皇后定氏志圖中乃波婆成物止奈毛常毛所聞看行須、故是以從三位橘夫人乎皇后止定賜布、故此狀乎悟而供奉止勅布天皇御命乎衆聞食止宣、贈皇后父正五位下橘朝臣淨友從三位云云、從四位上藤原朝臣貞繼爲皇后宮大夫、從五位下紀朝臣繼足爲亮、

〔小右記〕天元五年三月五日丁酉、殿下〇藤原頼忠被命云、皇后〇圓融后子、頼忠女、遵事未承其旨、今日吉日若可然者、令蒙慥仰定申可立皇后之日、如此之事、若及迫事定難成歟、以之爲思、早參內以此旨可洩奏者、參內此趣被仰云、事既一定、早可奏立后之日者、參式殿下被參式〇式ハ申ニ此由、即著給朝服召御前、親執給祿女裝束一襲、織物綠、被奏云、〇云一本作之、年來頻蒙朝恩、已昇高位、日夕之思〇思一本作恩難報、重及今日更戴此仰、載悅之深不知所爲、朝恩餘身前後不覺者、給祿纏頭、下庭中再拜、此間大相府、歸參內奏、此由、即大相府參射場殿、以余〇藤原實賓、頼忠姪、被奏慶由、被仰聞食之由、著劒傳綸旨、舞踏了、參上殿上、被仰趣如前被仰云、須召御前仰、此由而亂間不能召御前者、大相府退下被仰云、以弘徽殿息所可立給皇后、供奉所司、且可誡仰之由可仰左大臣、至于卅命之日、追可仰者、左大臣依直物事候左仗、即以綸旨仰了、候陣公卿等參弘徽殿被申皇后慶、〇略今夜於式被定立后雜事、又以光榮朝臣被勘申立后日時也、勘申云、來十一日癸卯、時酉二點、〇略中十一日癸卯、參殿次參內、今日以女御從四位下藤原遵子立皇后、其儀南殿御裝束、略如相樸召合儀、垂御簾被奏云、可奏宣命草、依內裏式文可有歟、將可有鈴、〇一本作論詞歟者、被仰云、依前例可載鈴詞者、左大臣參射場殿、以余被奏宣命草、御覽了返給、此間大相國被參式、依召參入、以余被書出中宮職司等、大進正五位下源輔成、少進正六位上藤原正信、大屬正六位上肥田維延、大夫

亮不注其人、即書一紙加封被奏云、宮下司〇一本作如此、至大夫可在勅定者、以下官可爲亮之由、以
右中辨被奏也、被仰云、大夫事猶以定申者、此間天皇出御南殿、時酉一點内侍喚入、左大臣著靴參上著座、
諸衛開門、内辨召舍人二聲、稱唯少納言師衛代參、内辨云、召刀禰者、稱唯退還、大納言爲光以下諸大
夫參入、内辨召中納言文範、民部卿稱唯參上、給宣命、立東軒廊、其間内辨大臣起座加列、宣命使加列、宣
制如式、群臣拜如式、拜了左大臣以下出、自承明門、諸衛門閉門、天皇還御、大相府被參、被候殿上奏云、
皇后宣命慶、前後不覺、頻戴朝恩、不知所爲、被仰云、夜依深更、不召御前者、唯被仰聞食由、大相府被奏
云、右大將藤原朝臣、濟時中納言朝臣、保光共是可堪仕者也、濟時者、爲氏公卿之内、又爲上臈、保光者
爲無口口上且爲榜親、此間可在御定者、仰云、猶可定申者、被奏云、又如初奏、仰云、右大將藤原朝臣爲
上臈、以彼可爲大夫者、大相府被退出、〔被參中宮〕云云、仰云、依例壁口等可令參中宮者、即仰左大臣、傳聞召
諸衛佐於膝突座御、仰云云、〔無佐之時、以外記令仰云云、〕召左大臣於御前、被定中宮職司、〔大夫右大將濟時、權亮下
進爲政、正信、大圖式部大錄肥田維延兼、〕頃之退下、其後參射殿、〔被參中宮〕云云、仰云、依例壁口等可令參中宮者、即仰左大臣、傳聞召
大將下官、於射殿以藏人宣孝令奏慶由、〔依無近衛府、以藏人令奏、〕下官即改註名所於殿上簡大夫下、〇中略今夜奉
令旨、以藤詮子爲宣旨、〔是皇后大夫妻、中宮姉、〕以藤原淑子爲御匣殿別當、〔參議佐理妻〕以藤原近子爲内侍、〔信濃守陳忠妻〕以
下官及右中辨懷遠爲侍所別當、大進輔成朝臣奉令旨、男女房簡今夜始書、宣旨内侍著簡、依無先例、
不著、御匣殿別當少將乳母〔真峯美子〕同著簡、下官、右中辨侍所長藤原長忠、同望弘等同著簡而以四人付
籍、頗有詞忌、仍加阿波守公任朝臣侍所長、今夜被下令旨理御髮、典侍泰〇泰一本作恭子有給物云云、慥不
知色目、或說云、絹云云、可尋問之、今日午時許、召侍從公任朝臣、爲中使被奉中宮、有給祿女裝束、十
二日甲辰、參殿令申慶、次參宮令申北御方、〇〔頼忠妻〕皇后母今日勸學院學生等參入於宮、先下令旨於啓陣、
入學生、令大進輔成朝臣令啓慶由、傳内侍令啓、仰聞食由、奉拜了給匹絹、〔或時給饗、或時事依倉卒不
赤絹、口口大六位或取祿給之、〕畢又致拜禮云云、少將乳母從昨日祗候、今日給平綾六匹、絹十匹、納通筥、陪從女中給

絹十匹、少貳兵衛命婦等候之、不知給物、可尋記、入夜罷出、參大夫殿、爲令申慶、依被參宮罷出、十三
日乙巳、參左府令申慶由、依御出空以罷出、次參東宮令啓慶由、拜了付殿上簡、頃之參中宮、今日召著
諸衛佐等於侍所給祿、判官以下直給、〔但例第四日早朝給之、明日依當御衰日、今日給、今夜祗候、明日可罷出之由、令仰之、〕女房等給祿有差、又
宮主裝束史官掌史生等同給、所所饗饌如昨、給祿色目所所有別紙、今日初啓時刻、又有名謁、入
夜參内、簡候御物忌、十五日丁未、參中宮、大夫同被參、被定所所別當預下部等、又定女房局遠侍者、
大番侍者藏人等侍所名簿等同下給、與福寺僧等參入、賜祿有差、廿三日乙卯、參中宮、今日始聽事、
申時宮司等相率始行請印政、〔件印以書博士可令書其文、而透行以直講賀陽穀明、令書中宮職印者、給内匠寮令鑄櫃子同寮奉仕、〕廳座儲酒饌、大夫不
著於便所、大夫相共定遷御大裏之雜事、待所女房簡、今日始之、女房日給女史奉之、入夜退私、

〔權記〕長保二年二月廿五日癸酉、此日立后、丞相命云、今日御使前々給親昵人云云、〔天德二年據德公、天祿四年閑院大
納言、天元元年右衛督、皆后兄弟、〕亦大床子師子形等、宣命了即可給者、參内、一條院南殿裝束准紫宸殿供奉、但間數
減二間、然而御簾西間、立内辨几子、如例、被仰先
先行事、亦申御使可遣之事、依仰遣召權中將〔成信〕頃之參入、又暫之左大臣被參、宣命刻限酉二刻也
先之右大臣被參、有召參書御座、仰云、以皇后爲皇太后、以〔〇圓融后遵子〕爲皇太后宣歟、亦被仰先
刻右仗仰右大臣、右大臣移南座、召官人、令置膝突、令召内記、即大内記宣義朝臣參、奉仰以草覽大臣、
參御所、〔殿上小板敷戶外〕令余奏之、仰云、依草、〔件草依左府命、豫仰之、次出御、次右大臣於便所亦被奏、清書、此度宣義朝臣令書儲之、〕
母屋御簾下、〔不開門、四中可被付侍歟、〕返給之後、近仗陣階下、内侍臨檻、大臣參上、闇司出、〔不開門、四中自開也、〕大臣召舍人、〔二音大舍人
於中門外稱唯、少納言藤原朝臣朝典代就版、大臣宣刀禰召、朝典稱唯出中門外、召大納言源時仲卿、
藤原道綱卿、權大納言同懷忠卿、中納言平惟仲卿、藤原時光卿、參議藤原誠信卿、同公任朝臣、同忠輔
朝臣、齊信朝臣、源俊賢朝臣等、參入就標下、〔四位以下不列入、〕大臣召中納言平朝臣、〔詞云、中納言物申、司乃平朝臣、其爲長宜者、不召上字、
仍只召公卿乃、而令稱司乃、總案也、〕平朝臣稱唯、揖而離列、斜行經南殿西南渡殿昇殿、立大臣左方長押下、大臣給宣命、

左手給之納言揖笏進寄給之右廻下殿侍大臣下自殿就列然後就宣命版宣制一段群卿再拜又宣制一段群卿又再拜納言右廻就本位大臣以下退出此間仰藏人則隆差出納言奉中宮大床子二脚師子形二頭挿鞋一足天皇還御本殿先是右大臣命云今日依當衰日不可候除目之由可申左大臣者即申案內了于時左大臣令權中將成信密告源大納言參中宮若依不可堪除目歟有召參御前仰云可有除目召右大將藤原朝臣予奉勅召藏人所嘗圓座一枚鋪南之庇（但不垂簾）于時殿司供燼主上出御召人大藏卿正光參入依仰召大將（此間大臣奉遺經房中將於中宮可立大床子置中師子形並可立倚子事畢召入也）次召紙筆（左大臣令書上之也）除目訖大將退下大夫源時中兼權大夫藤原齊信兼亮藤原正光兼權亮源則忠兼大進大江清通兼權大進源高雅兼少進橘忠範兼藤原陳泰兼大屬丸部兼善兼少屬飛鳥戸光正兼權少屬左大臣被奏云以橘朝臣良藝子（院辨命婦）爲宮內侍奏聞了亦被仰六衞啓陣依例可令遣之由仰右大臣大將暫立壁後大臣召仰諸衞退出之後可著陣令清書也此間申左大臣參中宮（大臣以下清書之後可參中宮也）因御消息相過藤三位（理髮事彼奉仕可宜之由內內相示也）中宮御寢殿東對南放出四間母屋南北行東西對座鋪高麗端土敷上鋪圓座一爲參議以上座（並北上親王著東座鋪錦端疊大臣著西座及納言以下參議以上座用高麗端）南廊鋪紫端疊爲五位侍從座皆豫備俎上饌東孫廂儲殿上人座（予仰春宮屬錦理令奉仕）頃之諸卿被參西中門令亮正光朝臣啓事由（拜賀侍從相從）訖次第著座次彈正尹太宰帥兩親王著座事了召於御前又砌下召管絃者于時鶏吻頻飛鳳管數鳴萬春之樂未央一夜之漏將曙事了賜祿有差與藤中將同車歸宅皇后宮爲皇太后宮職中宮職爲皇后宮新皇后爲中宮

〔中右記〕永久六年正月廿六日己酉今日女御立后也（略）中以藏人辨實光被仰下云云女御從三位藤原朝臣璋子可爲中宮（羽）后由可令載宣命者（頭辨今日依本宮沙汰仍被仰下也）右府（源雅實）召大內記永實仰件趣則進草入右府以件草被見人々予取之披見之處入新后御名也申云草案不入后名清書之時可入之由見舊記如何（永承元年被擬事也）但別當被申云或有入之時者予以下不見早可返奏之由右府被示予返上了付藏人辨令內覽殿下令候御前給故歟則返給又被奏仰云令清書則召內記返給令進清書如初以藏人辨令內覽後又奏覽右府召大外記被問諸司具否右大將（藤原家忠）已下向外辨此間陰雲俄掩小雨間灑可用雨儀之由人々議定（略）中此間主上出御畫御座（御直衣）殿下（藤原忠實）令候給（數圓座二枚如女叙位時）依御出告右府入從殿上上戸經年中行事御障子北並簀子敷入從御座間著圓座（數圓座之間也）依御氣色召男共藏人辨參仰硯續紙可持參之由則入柳筥入從執筆座南間置大臣座前依仰被任宮司等（宣命ニハ皇后ト雖書除目ニハ被書中宮職也又太政官職也）〔玉海〕承安二年二月十日己酉此日有冊命皇后（高倉）事（女御德子平清盛女爲中宮以皇后宮爲皇后宮以中宮爲皇太后宮）儀（太皇太后不御坐也）下官依遠忌不參仕後聞內辨左大臣（藤原經宗）宣命草並清書乍在陣座被奏之（頭辨）云云宣命使別當成親卿（永久別當忠教仕之例云々）外辨上首左大將（藤原師長）云々宣制了退出之時左大臣不被練云々宮司除目之時執筆幷清書上卿（執筆左大臣清書上中納言）許被召直廬寬治五年立后幼之時也之時大臣以下豫參直廬仍今度人々存其旨之間無召立可尋事也宮司等拜了則參本宮先是宣制之後勅使賴實朝臣參本宮而大夫除目以後參入被相待彼之間數刻候云々下除目並仰啓陣事左大臣被譲源中納言左大臣以下參本宮出內裏之間有出立事云々（以二條町爲陽明門代北南門幔差去東引之而□出立之朝撤件前幔云々）于時左大臣不居陣降自中門入々相率少納言辨外記史以下在左衞門陣代內（官掌召使等進出大臣被留之時相代可參之故也）出門之後大臣被留之相代召使前行追如常至二條町左大臣將以下雁行路北大將追首路東面立仍以下重立（或第一人顏倚北東面其以下顏左ヌガカヒテ坤方ザマニ雁行云々）大臣立還揖歸出了其後人々次第乘車主上御簾中本宮儀先宮司申慶次勅使被召大夫取祿大褂（攝政著一襲攝政左大將）次勅使藏人參入（櫳大夫取祿女裝束）次左大臣進前庭再拜（攝政不被立拜）次上卿著座（攝政著一襲攝政左大臣三襲源大納言大夫永久一襲上臈二人被取之尙不心得事也尙一襲大夫權大夫可取之也然而代々不定仍今度被逐永久例云々打出款冬匂云々四位侍

從座在二南庇一、五位侍從座在二中門廊一、如二去仁安儀一云々、以傳說所記也、

宮司

大夫權大納言藤原朝臣隆季

亮左馬頭平重衡

大進勘解由次官平基親

權大進前伯耆守藤原宗頼

權少進正六位上源兼綱〔頼行子、頼政養子、女御之時勾當也、〕

御遊召人

琵琶左大將拍子宗家卿箏衆雅笛成親和琴忠親篳篥定能朝臣笙降房朝臣付歌實宗朝臣、維盛、

年預右衛門志檢非違使資成

權大納言平朝臣時忠

權亮右中將平維盛重盛卿男

權大進左兵衛佐藤原光憲

少進佐渡守藤原重頼

曲

呂　安名尊二反　鳥破　席田二反

律　伊勢海　萬歳樂此間侍從給レ祿三臺急數反

此間公卿給レ祿、〔先宰相、次中納言、次大納言、次大臣、〕十一日庚戌、今日立后之處第二日也、左大臣左大將以下濟々參入云々、又御書使、〔泰通朝臣、件御書紅薄樣、有二上裏一薄樣云々、永久第三日有二此事一、今度依二日次一宜一今日有レ之、〕十二日辛亥、此日未刻參レ獻〇獻恐殿誤、中宮、〔院女院同居〕人々未レ參、仍參二院御方一、殿上隆季卿獨候之、暫言談、申刻又々參集、次下官及隆季等著座、〇中略次左大臣內大臣參上、左大臣著端、內大臣著奥、便宜頗惡、仍下官移レ奥、內府著端居替了、

今日座體、對代南面三箇間對座、敷高麗端疊、〔有二弘鑓差鑓等一〕立二赤木机一、備二饗饌一、〔大臣頼、不レ爲二公卿座一、同レ飯也、〕庇同レ鑓敷二紫端疊二枚一、立二黒柿机一、備二饗饌一、爲二殿上人座一、〔東上一行〕中門廊副二西壁一、敷二紫端疊三枚一、爲二啓陣座一、〔北上一行、但臨レ期數レ之、〕

先一獻亮重衡朝臣、〔瓶子地下五位〕二獻左大辨實綱、〔瓶子殿上五位、次居二版居一、飯、手長四位也、經家朝臣勤レ之、殿上人也、〕次居レ汁、〔手長不レ起レ座、待二

居了一後起一、〕申上下、〔箸又居レ汁、申上下、〕箸如レ恒、次三獻、〔權大夫時忠卿、瓶子殿上五位、〕次居二菓子一、次欲レ著二薯蕷粥一、而左大臣云、可レ略レ之、仍不レ居レ之、殿上人座一獻、〔大進基親、瓶子次五位、〕二獻、〔權大夫光範、瓶子同、〕三獻、〔權大夫宗頼、瓶子同、〕次殿上人起座了、此間敷二啓陣座一、又立二黒柿机一、不レ居レ飯遲々也、次大夫仰云、啓陣將召、〔或曰、啓陣將可レ尋也、〕亮退下、次啓陣將佐、左近中將定能朝臣、右近少將隆房朝臣、右衛門權佐光雅、左兵衛佐光範、右兵衛佐兼能等著座、〔各蒔繪劍、壺胡籙也、〕次欲レ居レ飯、爰大夫怒仰云、先可レ居レ者、兼可レ居レ之、不レ然者二獻之後可レ居、甚以奇怪、即進歸了、〔尤可レ然、〕行事基親失錯歟、次一獻、〔權亮維盛、雖二年少一、作法優美、人々感歎、瓶子次五位、〕次二獻、〔權大進基親、瓶子同、〕次三獻、〔權大進光憲、起二啓陣座一勤レ之、瓶子同、〕次給レ祿、〔四位可レ給二大褂一云、而皆畢重也、〕宮司等取レ之、將佐取レ祿退出了、次余退出、此後事不二見及一、依レ爲二他氏一、〇藤原氏ナラヌ云フ御寺氏院等參賀不レ可レ有云々、又有二八幡奉幣定云々、其事大夫可レ行也云々、打出歟冬匂也、

〔明月記〕嘉祿二年七月廿九日壬午、皇后冊命日也、〇中略申刻內裏事始、中宮〇後堀河后藤原有子爲二皇后宮一、從三位長子〇後堀河后藤原氏爲二中宮一、左大臣、內辨內大臣、大納言忠房、雅親、中納言家良、家嗣、通方、經通、實基、具實、賴資、參議伊平、經高、隆親、盛兼、爲家、家光、〔四位宰相、在二三位中納言後一、如レ例、〕列立了、召二賴資卿一、放列參二進東階一、揖昇立二北欄下一、階揖、於二西第二間一揖、宣命使出同間、自二簀下一東行、下レ東一間砌歩出、歷二大臣後一、如レ例、宣命使歩出、當二日華北扉一揖、西折練去、宣命版五尺許立、宣制訖左廻、至二于四位宰相前程一揖、其邊懷中宣命、經二四位宰相前一加二本列一、內辨以下退出、〔左廻、內辨二丈許、練、練樣、袂、替歟、〕內府以下不レ練、經二下簀前一、通方卿經高卿左廻、經二下簀後一、〔於二北御門內裏一、有二此儀一云々、具由各陳之云々、〕具實卿右廻、經二下簀後一、〔後日云、我左廻了、家光朝臣又左廻云々、引陣將、左資季、資俊、實光、實清、〕右實忠、有教、〇〇宮司大夫兼經、〔無二參內一、〕權大夫實基、亮範輔、權亮定雅、〔入道右大臣子、侍從、〕大進光俊、權大進範頼、少進經氏、〔經高子、〕六位、〔佐清子、〕大屬資朝、〇〇四位侍從、〔宣經、實忠、實俊、顯平、賴隆、資俊、五位、時綱、伊成、賴行伊、忠能定啓將定平、有教、信時、信成、親氏、顯氏、召仰上卿、〔通方卿、〕於二本宮一列立庭中、拜後昇中門、各退出、于時及二夜半一、依レ座狹不

ゝ可ニ著座一、大辨外大略退出、冊命勅使師季朝臣、取ニ祿人一（大夫）被レ渡ニ御調度一、藏人（忠時）殿上人隨ニ其役一、外辨內府、忠房、雅親、家良、通方、伊平、經高、少納言爲綱、辨有親、伶人殿下、（室）左府（拍子）家嗣、（和琴）經通、（笛）實基、（比巴）盛兼、（篳篥）基平、（箏）宗平、有資、付歌、八月一日、未一點出門、有ニ參內之志一、於ニ東洞院一、平宰相車馳融之間、不ニ參內一、相共參宮、早速事可レ始由被レ催云々、大納言忠房、雅親、大夫殿、中納言家嗣、通方、實基、具實、參議經高、盛兼、爲家、家光著ニ座殿下一（衣冠）令レ著ニ端座一、給ニ（昨日無ニ御著座一）座幷四位侍從座一、偏同一昨日一、殿上人兩頭、（頭中將）（將運參、亮被ニ盃進之間一、追著ニ座四位侍從一所レ也、）宗平、賴隆、定平、信盛、初獻亮、於ニ中門一、方取レ盃、（不レ見ニ其事一）自ニ弘庇一經ニ侍從座上一參進、二獻（此相公撰レ笏）揖立ニ奧座一、經ニ殿上人末一出ニ弘庇一、跪ニ坐末間一、妻戶（南第一間也）西簀子南第二間一進ニ御座北一、（持レ盃）勸杯取ニ續酌一、拔レ笏揖之間、坏及ニ雅親卿一、起經ニ本路之間一、頭中將（納言以下兼居）大辨申上箸下、三獻通方卿大略同、但入ニ殿上人座上妻戶一、（南第一間也）持レ盃不レ揖、不レ取レ杓、經ニ本路一復座、次殿下令レ立給、參議之間經高卿退出了、端兩人（盛兼、）（家光、）次第ニ退テ下ニ簀子一了、殿下自ニ南面簀子一令レ入給之後暫復座、大納言被立之間皆競立、別當具實等不レ揖、迯出之間皆立了、此間舊臣仲家、頻列ニ役諸大夫一云々、昨日忠房卿以下濟々不ニ委聞一、初獻亮、二獻經高、（作法偏同ニ今日一）三獻賴資卿云々、氏院參賀云々、

〔孝亮宿禰記〕寬永元年十一月十四日乙巳、自傳奏西三條大納言、就ニ中宮（後水尾后德川和子）之事一、明日六位史召具可レ來云々、一條殿立中宮依上卿兩局參之、（略）中　廿四日乙亥、就ニ中宮事一參ニ一條殿一、窺申之事等有レ之、參ニ中院中納言一、中宮方宣旨等之事、（封戶官符、從三位中宮職之事、三通文書先日令ニ懸御目一、）今度不レ及ニ御沙汰一之由有レ命、

廿六日丁巳、禁中立后御習禮有レ之、（略）中　廿八日己卯今日立后被レ行ニ片節會一、幷小除目、內辨右大臣、（一條殿兼退公）外辨中御門大納言、（資胤）日野大納言、（資勝）廣橋大納言、（總光）四辻中納言、（季繼）白川宰相、（雅朝）廣橋宰相、（兼賢）柳原宰相、（兼光）西洞院右衞門督、（時直）次將左、水無瀨中將兼俊、中山中將元親、藤谷中將爲賢、北畠親顯、右庭田重秀、下冷泉爲尙、姉小路公景、庭中鳥瓶子不レ置レ之、外辨昇殿無レ之內辨計堂

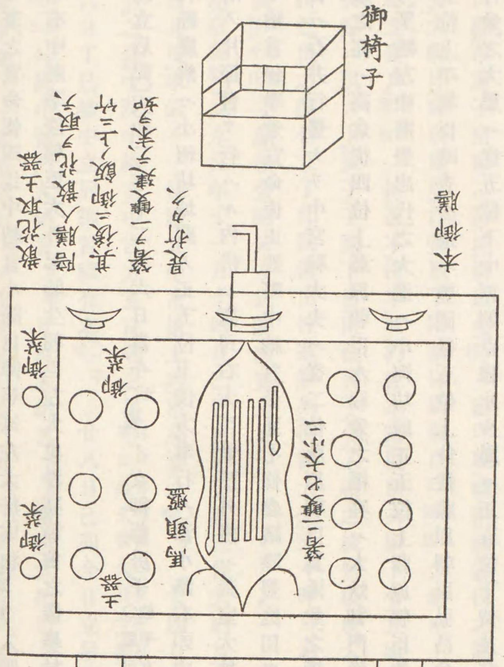
上也、物召等有レ之、著ニ外辨一、參、大中納言參議以上八人、少納言爲レ適、六位外記安倍亮盛、史三方英房、召使等著レ之、宣命使四辻中納言、小除目陣執筆左大辨宰相、（兼賢）入眼上卿中御門大納言（資胤）等也、奉行頭右中將季俊朝臣、大外記師生朝臣、左大史孝亮、節會之儀畢、於ニ中宮御作法有レ之、大殿祭有レ之云云、

〔立坊立后記〕天和二年十二月六日、當今（靈元）ノ女御藤房子（鷹司敎平女）准后宣下アリ、上卿ハ勸修寺大納言經慶、辨ハ小河坊城藏人正五位上俊方、奉行ハ油小路右頭中將隆眞ナリ、同三年二月十四日立后ノ片節會ヲ行ハル、內辨ハ鷹司右大臣兼熙、外辨ハ葉室大納言賴孝、勸修寺大納言經慶、今出川中納言伊季、兼宣命使正親町中納言公通、七條參議隆豐、庭田參議重條、奉行ハ清閑寺辨熙定、少納言ハ石井行豐ナリ、中宮職大夫ハ從二位藤原朝臣實通、兼之、權大夫ハ正三位西園寺中納言兼敦、兼之、亮ハ高倉從四位上藤原朝臣永福、兼之、權亮ハ太炊御門從四位上藤原朝臣信名、兼之、但依ニ所勞一、廣幡左中將豐忠代レ之、大進ハ小河坊城正五位上藤原朝臣俊方、兼之、權大進ハ交野彈正少弼從五位上平朝臣時香、少進ハ豐岡從五位上侍從藤原朝臣弘昌、兼之、權少進慈光寺正六位源朝臣宣仲、兼之、大屬ハ從五位下中原朝臣職永、少屬ハ正五位下賀茂縣主有顯、權少屬ハ從六位下宗岡朝臣信行也、六日辰刻出仕、除目ノ執筆於ニ御前一、鷹司兼熙勤之、陣頭ニテハ庭田重條勤之、硯ハ外記ノ硯ヲ用ユ、墨ヲ磨ルニ故實アリ、末ノ上刻一會事終テ、各中宮ノ殿ヘ參向、東福門院立后ノ節會アリケレドモ、諸式此度ノ如クニハ不レ調、催馬樂ハ、寬永年中、二條行幸ノ時アリケル以後ノ事也、御椅子御履氈代鎭子大床子ノ御膳、幷切臺盤等ハ出納ヨリ調進ナリ、（略）中　催馬樂ノ役人、歌物ハ綾小路俊景、幷持明院基時、琵琶ハ今出川伊季、花園公晴、琴ハ白川雅元、和琴ハ四辻公韶ナリ、地下樂人六人階下ニ候ス、笛ハ上越後、山井近江、笙豐主殿園淡路守、篳篥ハ東儀左衞門、窪甲斐也、三方ヨリ三人宛出座ヲ望申セドモ、二條行幸ノ時ノ樂人ノ位階ニ合セテ、用之給フト聞エシ、庭上ニ

テ賜祿、大褂衣ハ白キ袷ノ如キ物ナリ、關白殿下ヘハ五位人役送シ、ソレヲ家ノ諸大夫ニ遣ス、是ヲ殿下ノ一覽ニ入テ引之ナリ、殿下以下ハ五位役送シテ、直ニ其人ニ渡ス、始メ小袖ノ領ノ方ヲ右ノ方ニシテ出シテ、渡ストキハ左ノ方ニトリナホシ渡ス、直ニ請取、左ノ肩ニカケテ退出ナリ、

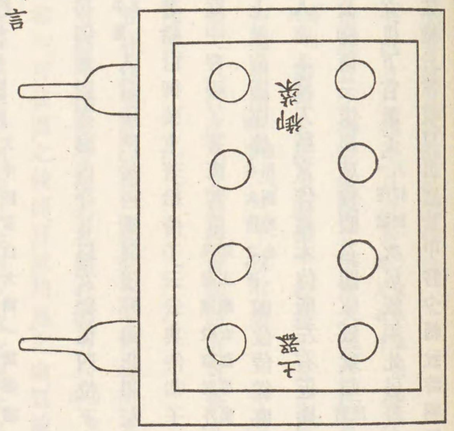
立后次第、委在別冊
本宮次第、委在別冊

○按ズルニ、別冊所載ノ立后次第、本宮次第ハ上文引載ノ江家次第ト粗同ジケレバ略ス、

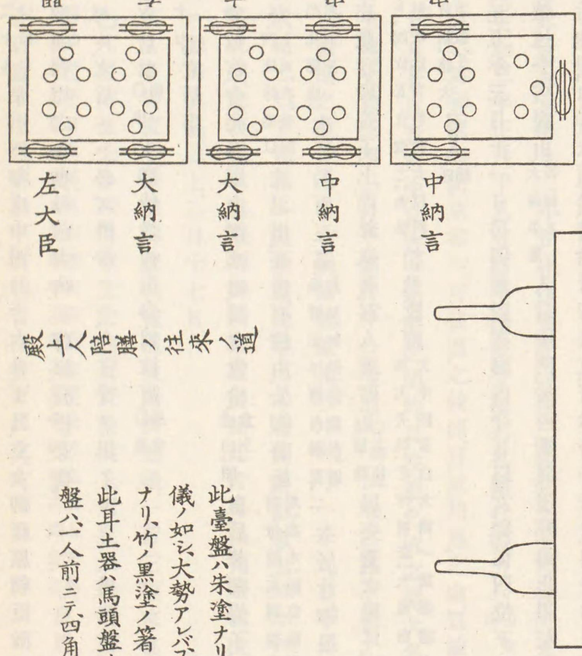


此大床子ノ御膳四脚内ハ■黒塗
連子ノ如クシゲクサンヲ打ツ
緣ハウルミ朱塗、一方ニ獅子ノ如クナル物向合テ居ル、紋二ツ宛アリ、凡紋四角ナルモノハ惣テ菅形ト云、丸キヲ蠻繪ト云、南蠻ノ獸ナドノ蟠ル形ヲ画ヨリ蠻繪ト云カ、此御膳ニアルモ、異國ノ獸螺鈿ニシテアリ、此本膳ハ横ニスエテ常ナリ、二ノ膳ハ竪ニスエ、此供物ハ高橋肥前、并ニ濱島内膳各調進、

敷花取土器
陪膳ハ敷花ヲ取テ、其後ニ御飯ヲ上ル、
置ク物ニアラズ、



御菜ハ汁ノ物ニアラズ、
煮ル物ヲ云、
二ノ御膳



コノ二ツノ膳ノ下ニ毯代ヲ布キ四隅ニ銅ノ獅子ヲ置キ、此ヲ鎮子ト云、毯代ノ押也、凡此打敷ノ上落タル物ハ、又上テ備ノ不苦、

親王ノ陪膳ハ大夫勤之、然ニ此度ハ、近衛家、幼弱故ニ次ノ權大夫勤之、中宮ノ陪膳ハ亮勤之、親王并ニ中宮ハ御簾ノ内ニ豫メ供シテ置、御簾ノ外ヘ内ノ事不知故ニ扇ヲ鳴シ玉フト、入御ト心得御膳ヲ撤スル事也、

此臺盤ハ朱塗ナリ、互ニ向合テ食之陣ノ座ノ儀ノ如シ、大勢アレバ又臺盤ヲ陪ス、參議ハ横座ナリ、竹ノ黒塗ノ箸一雙ヲ耳土器ニ居ヱ置ク、此耳土器ハ馬頭盤ノ形ニシテ、略シタルナリ、切臺盤ハ一人前ニテ四角ナルモノナリ

通ノ往來ノ道
殿上人ノ陪膳ノ座

參賀獻進

〔扶桑略記二十九後冷泉〕治暦四年戊申四月十六日丁巳、立二女御藤原朝臣歡子一爲二皇后宮一、但無二宣命一、以レ宣レ旨立レ之、關白敎通朝臣之女也、母前大納言藤原公任女也、

○按ズルニ、立后ニハ必ズ冊命アリ、今宣旨ヲ以テセシハ異例ナリ、

〔北山抄四〕立后事○中略王卿侍從相引參二賀彼宮一、○后宮

〔江家次第十七〕立后事

公卿相率參二彼宮一、令レ奏二慶由一、歸來曰、聞食悅給、或曰、聞食ツ、皇后著二御倚子一、〔白御挿鞋、先レ是上二御髮一、〕公卿參入列立再拜、〔四位侍從以下可レ在二後列一〕訖退出、亮告二有儲由一、公卿著座、〔對用二赤木一、四位侍從著二南庇座一、西上、東面、五位侍從著二中御門北廊座一、次坏酌兩三巡、〔長曆元年關白勸二獻居飯一、〕次穩座、圓座敷二寢殿簀子一、上達部進著、召人著二砌下一、〔預敷二其座一、〕居突重、次勸坏、〔或公卿取レ之〕次御遊、〔先取出二御遊具一、〕次二獻、次給レ祿、〔殿上、四位五位取レ之、先參議料、次納言料、次大臣料、但執政祿、或大夫執レ之付二前駈一、大臣白大褂一重、〔加二織物一、長一丈二尺、參議同、〕納言白大褂一重、參議白大褂一領、三位四位以下取レ之、〕召人、〔匹絹、〕

〔小右記〕天元五年三月十一日癸卯、參殿、次參內、今日以二女御從四位下藤遵子一立二皇后一、○中參二中宮一、同車以二左中辨懷遠一令レ啓二慶由一、〔大進少進等如レ之、〕入レ自二中門一、於二西對一拜禮、皇后理髮、白御衣白袴、著給倚子云云、典侍恭子理髮云云、上達部參入者、被仰云聞食者、左大臣以下侍從進二庭中一拜禮、了著二西對座一、〔先レ是寢殿御簾外、以二燈臺炬燵一、此間主殿女孺等參入、以二燈爐一供レ之、〕其儀以二東廂一爲二公卿座一、〔東面、廂簾不レ懸、〕敷高麗端疊、其上敷二茵圓座一、〔右大將用二圓座一也、〕四位侍從座在二南庇一、〔敷二紫端疊一、〕五位侍從座在二南廊一、諸大夫座在二本藏人所一、殿上人座本藏人所宮侍座本侍所、左右近衞、左右兵衞在二門內一、左右衞門在二門外一、皆用二平張一、上卿座定レ机、公卿兩三依二座席狹一、假召二圓座一敷二東頭一、〔對座〕大夫濟時勸盃一巡之後、大相府出著座、〔御座、公卿座上東頭、用二菅圓座一、南面、卽立レ机、下官獻レ盃、〔一巡獻二大相國一、〕次居飯、須二先居一粉熟、而不レ儲云云、次右中辨獻レ盃、亦遁勸盃、數巡之後、宮司納二侍從祿於韓櫃一、出二庭前一、中務少輔致時朝臣唱見參、此間公卿給レ祿、〔大將、大納言、二位宰相加二赤絹一、侍從四位白絹、〕大相府御祿、大夫執奉、鶏鳴公卿退出、

〔孝亮宿禰記〕寛永元年十一月廿八日己卯、今日立后、○後水尾后德川和子被行二片節會一并小除目一、○中略廿九日庚辰、參二一條殿一并兩傳奏、令レ申二昨日之御祝儀一、就レ立二中宮之儀一、自二江戶大御所一、○德川秀忠御使吉良少將、御大刀馬代銀千枚、自二大樹一、○德川家光御使大澤少將、銀千枚進上云々、自二甲斐尾張一、○德川義直、紀伊○德川賴宣等中納言殿、銀五十枚宛、自二水戶宰相殿一、○德川賴房三十枚有二進上一、十二月四日甲申、御樽一荷御肴三種、進二上中宮御所一、又杉原十帖、進二權中納言局一、

〔季連宿禰記〕寛永元年十二月五日、自二妻許一三荷三種、進二上中宮御所一、

〔萬天日錄〕天和三年正月十八日、松平讃岐守被レ召也、儲君御方へ○山東春宮、女御御方へ○靈元后藤原房子中宮之宣下有レ之、爲二御祝御使一、京都へ可レ被レ遣之候間、可レ致二用意一之由、筑前守被レ申二渡之一、老中之面々列座也、○中略

〔妙法院日次記〕天和三年二月廿日、昨日注二進之一、依レ之諸大名今日登城、

二月廿日、春宮中宮宣下相濟之間、

〔妙法院日次記〕天和三年二月十四日、今日准后○藤原房子中宮宣下也、十五日、爲二立后御祝儀一、一荷大樽二種こんぶ、被二進之一、禁中へも右同斷被レ獻也、御使坊官十六日、今日行啓始のよし也、○中略十七日、行啓御祝義として、昆布一箱被レ獻、禁中へも右同斷御獻上、御使坊官○中略一從兩傳來口上覺、

明十八日午之刻、東宮樣へ院家衆御禮御座候間、此旨可レ被二仰上一旨ニ御座候也、以上、二月十七日、

廿四日、中宮より御使來、去頃御祝義被二進候一爲二御返禮一、一荷三種來也、

〔令義解六儀制〕凡皇后皇太子以下率土之內、於二天皇太上天皇上一表、同稱二臣妾一名、對揚稱レ名、謂凡臣下面自名者、唯稱二某甲一、不レ言二臣某一、其太皇太后皇后及太皇太后皇后太子、相稱之辭、不見二令條一、待二式處分一之、皇后皇太子上啓、稱二殿下一、自稱者臣妾、對揚稱レ名、

待遇

〔令義解七公式〕太皇太后、太皇太妃、太皇太夫人同、皇太后、皇太妃、皇太夫人同、皇后、
右皆平出、謂平頭抄出、卽擡當時天子及國忌可廢務者其下條闕字亦准此、
中宮、御、謂斥至尊、謂二一人也、三后亦准此、凡明神御宇如此之類、非是斥說一人、
右如此之類並闕字　殿下、
○按ズルニ、此文以下律疏六議ニ至ルマデハ、三后ニ亘レル文ナリ、箇中皇太后宮、太皇太后宮ノ條ニハ、畧シテ載セズ、重復ヲ厭ヒテナリ、
〔令義解七公式〕皇太子令旨式、三后亦准此式、
令旨云々
年　月　日
奉令旨如右、令到奉行、
大夫位姓名
亮位姓名
右受令人宣送春宮坊、春宮坊覆啓訖、留畫日爲案、謂准勅旨式、或送太政官、亦須印署也、更寫一通施行、謂或下被管諸司、
啓式、三后亦准此式、
春宮坊啓
其事云々謹啓
年　月　日
大夫位姓名
亮位姓名
奉令依啓、若不依啓者、卽云、令處分云々、

亮位姓
右春宮坊啓式、奉令後、注啓官位姓、
〔令集解二十八儀制〕釋云、名例律云、稱乘輿車駕及御者、太皇太后、皇太后四等以上親、太皇太后者、皇帝祖母也、皇太后者、皇帝母也、皇后三等以上親、
〔律疏六議〕
一曰議親、謂皇親、及皇帝五等以上親、及太皇太后、皇太后四等以上親、
〔律疏名例〕凡六議者、犯死罪、皆條所坐及應議之狀、先奏請議、議定奏裁、此名議章、六議人犯死罪者、皆依令、於官集議、議定奏裁、議者原情議罪、稱定刑之律、而不正決之、原情議罪者、謂原其本情、議其犯罪、稱定刑之律、而不正決之者、謂奏狀之內、唯云准犯依律合死、不言正決之、故云不正決之、流罪以下減一等、其犯流罪以下、犯狀既輕、所司減訖、自依常斷、其犯八虐者、不用此律、流罪以下、不得減罪、故云不用此律、
〔儀式六〕元正朝賀儀〇略中
辰一刻、乘輿出自建禮門、御大極殿後房、少時皇后亦入後房、自此以下可書注、
將曹府生各一人、近衞各卅人、左右兵衞尉已上各一人、率將監已上各一人、率志府生各一人、兵衞各卅人、更還、自此以下皆可書注、
後注後供奉、訖女孺十八人執翳三行、就戶前座、以南爲上、褰帳內親王二人、威儀命婦四人、各著禮服、相分以次就座、〇中略皇帝服冕服、就高御座、命婦四人以內親之、上爲之、服色同威儀、
定引還、更供奉皇后御前、干時殿下擊鉦三下、皇后服禮服、服禮服分在御前、至御座下立、御座後注後供奉、
〔儀式六〕元日御豐樂院儀〇略中
掃部寮敷御座於高御座、殿西第二間南面設皇后座、〇略中內膳司預辦供皇帝皇后御饌、主膳監供皇太子饌、大膳職設次侍從以上饌、〇略中皇帝受群臣賀訖還御清暑堂、少時御豐樂殿、皇后出御亦如常儀、諸衞服上儀、

〔儀式六〕正月二日朝拜皇后儀

當日早朝、掃部寮、設式部省輔已下座於縫殿寮東道、〇略　中巳刻省丞已下列立於寮南道、南面上于時史生執簿唱列五位以上、隨唱稱唯、列立同道南邊、先是參議已上、在玄暉門西廊、省掌趨進云、大夫等參進二聲、五位已上以次參入、錄立朝平門內、稱客止、列立玄暉門外、南面上次丞錄率六位已下刀禰、入列立五位之後、會掌且稱容止、次彈正忠已下在式部次、立定時典儀云、再拜、賛者承傳、親王已下再拜、訖職大夫出就版位、賀壽者進、自列南向稱壽詞、見元日儀式、復列、職大夫參入、令內侍啓、即參入、奉令旨、退出傳宣、大夫退出、就位宣令旨、親王及群臣稱唯拜、訖大夫參入、典儀曰、再拜、賛者承傳、王公百官再拜、訖以次退出、

〔延喜式十中宮二日〇正月受皇太子朝賀

其日早朝、職官設皇太子版位於常寧殿□西面□南、差退設司賓位、又南退設司賛位、□□□□司賓引太子入、立定司賛唱再拜、太子再拜、司賓引太子到東階、太子昇自□□□□賀訖俛伏興、引降復位、內侍進承令、降詣太子前、東面稱令旨、太子再拜、宣命訖又再拜、司賛唱再拜、太子又再拜、司賓引太子出、事見儀式

〔延喜式十中宮三日〇正月同日二日早朝受群臣朝賀

同日早朝、所司鋪設於玄暉門外西廊、親王以下諸王五位於廊上、諸臣五位於廊下、南面、式部置典儀位於同門東、差東北退設、贊者位、並西面南上、設職大夫位於門西南面、依時剋式部引五位以上六位以下、列於同門外南面、典儀曰再拜、贊者承傳、群官俱再拜、職大夫出就位、爲首者進南向跪稱賀詞、訖復位、群官俱再拜、職大夫入申內侍、內侍奉令旨傳宣、大夫奉令旨退出、就位南面傳宣、群官稱唯再拜、訖退出、但中務輔引次侍從以上著座、于時內侍一人率女藏人三人、納祿物於櫃二合、令持、職舍人四人置廊下上東、自親王座東去一許丈、綿六百屯、受大藏省置廊下、掃部察設座、亮進屬各一人、史生二人、侍賜祿所、所司設座、事訖賜祿、親王以下大納言以上各白褂衣一襲、夫人內親王各白褂衣一領、三位以上妻四幅被一條、四位以下妻衣一領、六位四幅被一條、五位衣一領、非參議三位幷四位參議褂衣一領、四位小褂衣一領、五位綿一連、亮唱四位五位名賜之、參議已上令女藏人賜之、若亮有闕、臨時權任、事見儀式同日早朝、中務省召職司、給次侍從已上見參、卽別錄四位已上名簿進內侍、爲令辨備祿物

〔延喜式十中宮二日〇正月同日二日受女官朝賀

其日內侍仰闈司、置版位於殿上及殿庭、版位十枚、方五寸、厚一寸、內親王以下女官命婦以上、以次入立於殿上、闈司引六位以下、以次入立於庭、爲首者當御前跪賀、內侍進承令退、隨便而立、稱令旨再拜訖退出、先是內侍令諸司鋪座立臺盤、女御以上先著座、次尙侍以下四位以上、次內外命婦北面次闈司引六位以下北面列座、昇殿者留著座、不昇殿者退出、饗宴訖賜祿、妃以上白褂衣一襲、夫人內親王各白褂衣一領、三位以上妻四幅被一條、四位以下妻衣一領、六位四幅被一條、五位衣一領、

〔延喜式四伊勢大神宮〕凡王臣以下不得輒供大神幣帛、其三后皇太子若有應供者、臨時奏聞、

〔續日本紀四桓武〕延曆九年閏三月丙子、有勅度二百人出家、又左右京五畿內、高年鰥寡孤獨疹疾不能自存者、普加賑恤、並爲皇后崩、丁丑、天皇移御近衛府、以從二位藤原朝臣乙牟漏不豫也、是日皇后崩、

繼繩、正四位上神王、從四位下當麻王、從五位上氣多王、從五位下廣上王、正四位上紀朝臣古佐美、從四位下石上朝臣家成、藤原朝臣雄友、藤原朝臣黑麻呂、桑原公足床、阿部朝臣廣津麻呂、外從五位下高篠連廣浪、中臣栗原連子公爲御葬司、六位已下官八人、正三位藤原朝臣小黑麻呂、正四位下壹志濃王、從五位下大庭王、從四位下藤原朝臣菅繼、文室眞人高嶋、正五位下文室眞人八多麻呂、藤原朝臣眞友、從五位下文室眞人八嶋、藤原朝臣眞鷲爲山作司、六位已下官十二人、從五位下多智比眞人賀智、外從五位下林連浦海爲養民司、六位已下官五人、從五位下巨勢朝臣嶋人、丹比宿禰眞淨爲作路司、六位已下官三人差遣左右京五畿內近江丹波等國役夫、令京畿七道自今月十八日始素服擧哀、以晦日爲限、〇略　甲午、參議左大辨正四位上紀朝臣古佐美、奉誄人奉誄、誄曰天之高藤廣宗照姬之尊、是日葬於長岡山陵、

〔三代實錄三十陽成〕元慶元年二月廿二日甲子、掌侍從五位下春澄朝臣高子、改二名給子一、以レ觸二中宮一也、○中略閏二月七日己卯、正五位下安倍朝臣高子、改二名基子一、外從五位下葛木宿禰高子、改二名賀美子一、以レ觸二中宮諱一也、

〔續世繼一倉〕中宮、○後朱雀后藤原嬉子、中略、又のとしもおなじやうにまかり出させ給て、丹後守ゆきたふのぬしの家にて、長曆三年八月十九日、猶女宮○禄子うみ奉り給て、おなじき廿八日にうせ給にき、御年廿四、あさましくあはれなる事かぎりなし、いとゞ秋のあはれそひて、有明の月のかげも心をいたましむるいろ、ゆふべの露のしげきも涙を催すつまなるべし、かくて九月九日にうちより故中宮の御爲に、七寺にみす經せさせ給ふ、みかど○後朱雀御ぶく奉りて、廢朝とて清涼殿のみすおろしこめられ、日のおもの參るも、こゑたてゝそうしなどすることもせず、よろづ忌めりたるまにはゆふべのはたるをもあはれとながめさせ給、秋のともし火かゝげつくさせ給つゝ、心くるしき折ふしなりけるに、廿日ぞ解陣とかいひて、よろづれいざまにて、御殿のみすなどもまきあげられ、すこしはるゝけしきなりけれど、なほ御けしきはつきせずぞみえさせ給ける、神無月もすぎぬれば、御いみ末になりて、かのうせ給にし宮にて御佛事あり、○中略さも月の七日ぞ、内にははじめてまつりごとせさせ給、○中略又のとし○長元元年の七月七日關白殿○嬉子養父藤原賴通にうちより御せうそこありて、

こぞのけふわかれし星もあひぬなりこゝろいとかたじけなくなさけおほくおはしましける御事かなとうけたまはりしか、

〔台記〕天養二年八月廿二日乙未、酉剋待賢門院○鳥羽后藤原璋子崩、三條高倉第上皇○鳥羽先之坐同所、病急告二法皇一、卽幸臨終、法皇打靜哭泣、然後群臣哭、廿三日丙申、待賢門院先入棺、次幸二仁和寺三味堂一、其儀如二生存一、但群臣皆步行、卽安二置石穴一云云、廿七日庚子、傳聞法皇著二服其色黑一、

〔德川禁令考二公家〕享保五庚子年二月十四日ノ令、女院○東山后幸子女王崩御ニ付、鳴物三日停止、普請ハ不レ苦、

〔令義解四祿〕凡食封者、○略中宮湯沐二千戶、

〔續日本紀二十二淳仁〕天平寶字四年六月乙丑、天平應眞仁正皇太后○聖武后崩、姓藤原氏、○略中天平元年、尊二太夫人一、○太夫人誤爲二皇后一、湯沐之外更加二別封一千戶、

〔日本紀略五冷泉〕康保四年九月廿三日戊申、今日充二中宮○昌子一御封千五百戶、

〔榮花物語三浦々の別〕宮の御前○一條后定子の御内參りのこと、そゝのかし啓しつるにぞ、思したゝせ給へる、明順道順よろづにそゝぎ奉る、國々の御封などめし物すれど、ものすかやかに辨へ申人もなければ、さるべき御莊などぞ、絹奉らせんなど、案内申人ありければ、きぬめしてよろづにいそがせ給ふ、○中略中宮には、三月ばかりにぞ御子生れ給べき程なれば、御愼みをよろづに思せど、殊に御封などすがゝしう辨まへ申人なし、内藏づかさより例のさまゝの御具どもはこび、女院などよりも、萬おぼしはからひ聞えさせ給へば、それにて何事もいそがせ給ふ、

〔續三宮傳〕新清和院○光格帝寬政六年三月七日、立二皇后一同日御領三千石被二定進一、○略節供給

〔延喜式十三宮〕凡每月晦日、進二錦鞋三兩一、但雜給料臨時定レ之、

〔延喜式十四縫殿〕中宮

春季

正月料、二月三月亦同袍十領、白一領、作目白五十石、白樣九領、白五十石、料白絹四疋一丈、別二丈五尺絲一兩一分、別錄三背子十領、白一領、白樣九領、白料絹五疋、別三錄一兩一分、別錄三單衣十領、白一領、韓紅二領、蘇芳二領、藍二領、料絹二疋五尺、別一丈二尺五寸絲三分二銖

別二錄領巾四條、料紗三丈六尺、別九尺絲四錄、別一錄表袷裙二腰、白一腰、夾纈非作目一腰、料絹二疋一丈、別一疋五尺絲一分二錄、別一錄下裙二腰、白料絹二疋一丈、別一疋五尺絲二錄、別一錄同腰料絹一丈、別一疋五尺絲一分二錄、別四錄同腰料絹一丈、別一疋五尺絲二錄、別一錄下袴二腰、白料絹二疋一丈、別一疋五尺絲一分二錄、別四錄同腰料絹一丈、別一疋五尺絲二錄、別一錄下裙二腰、白料絹二疋

之名、嗟夫可〻不愼歟、請立手白香皇女、納爲皇后、遣神祇伯等、敬祭神祇、求天皇息允答民望、天皇曰、可矣、三月庚申朔、詔曰、神祇不可无主、宇宙不可無君、天生黎庶、樹以元首、使司助養、令全性命、大連憂朕無息、披誠款以國家、世々盡忠、豈唯朕日歟、宜備禮儀、奉迎手白香皇女、　甲子、立皇后手白香皇女、

〔日本書紀十八閑〕元年三月戊子、有司爲天皇、納采億計天皇女、春日山田皇女爲皇后、更名山田赤見皇女

〔一代要記一宣化〕後宮

皇后橘仲皇女仁賢女、天皇元年三月己酉立、

〔水鏡中敏達〕つぎの御門敏達天皇と申き、欽明天皇第二の御子、御母宣化天皇御女、石姫皇后也、

〔日本書紀二十敏達〕四年正月甲子、立息長眞手王女廣姫爲皇后、十一月、皇后廣姫薨、五年三月戊子、有司請立皇后、詔立豐御食炊屋姫皇女欽明爲皇后、

〔日本書紀二十一用明〕元年正月壬子朔、立穴穗部間人皇女爲皇后、

〔日本書紀二十三舒明〕二年正月戊寅、立寶皇女大兄皇子敏達皇子、押坂彦人皇子、茅渟王女、爲皇后、

〔日本書紀二十五孝徳〕大化元年七月戊辰、立息長足日廣額天皇舒明女、間人皇女爲皇后、

〔日本書紀二十七天智〕七年二月戊寅、立古人大兄皇子女倭姫王爲皇后、

〔續日本紀三十光仁〕寶龜元年十一月甲子、詔曰、現神大八洲所知倭根子天皇詔旨止宣詔旨乎親王王臣百官人等天下公民衆聞食宣、朕以幼弱身忝鴻業氏恐利畏進毛不知爾退毛不知爾所念波、慶伎御命自獨能昧受給武止所念氏奈法能麻爾麻爾〇中略以井上內親王定皇后止宣天皇御命衆聞食宣、

〔三代實錄三十陽成〕五元慶三年三月廿三日癸丑、淳和太皇太后崩、〇中略太后諱正子、嵯峨太上天皇之長女、與仁明天皇同產也、母太皇太后橘氏、后美姿顏、貞婉有禮度、存母儀之德、中表則之、太上天皇太皇太后甚鍾愛之、淳和天皇備禮娉之、納於掖庭、寵敬兼人、天長四年二月立爲皇后、八年冗旱爲災、帝深

前帝養子爲后

憂之、走幣群神、祈請百端、后勸帝、錄囚徒、慶作役、未及終朝、澍雨晦合、帝益加愛焉云々、

〔十三代要略一後朱雀〕皇后禎子內親王、三條院第三女、母皇太后娍子、萬壽四年三月廿二日入太子宮、長元十年二月十三日爲皇后、

〔扶桑略記二十九後冷泉〕永承元年七月十日戊子、章子內親王立中宮、後一條天皇長女、母前中宮藤原威子也、

〔續世繼四藤涅〕馨子の內親王と申も、又おなじ〇威子御はらにおはします、長元四年に加茂のいつきにて、同九年に出させ給ひて、永承六年十一月、後三條院東宮におはしまし、女御に參らせたまひき、御年二十三、延久元年七月廿三日、皇后にたち給、

〔續世繼三虫の音〕永治元年十一月にや侍けん、かのとのとりのとし、又ひめ宮〇鳥羽皇女姝子六條殿にてうみ奉り給へりし、二條のみかど春宮と聞えさせし時、保元二年の頃、みやす所ときこえさせ給て、みかど〇二條につかせ給しかば、平治元年二月廿一日、〇原作十二月廿六日、今改、中宮ときこえさせ給しに、永曆元年八月十九日御なやみとて、御ぐしおろさせ給、

〔女院小傳〕宣政門院憧子院〇光嚴后、後醍醐女、母京極院、

〔續三宮傳〕承秋門院東山幸子后有栖川一品兵部卿幸仁親王御女、元祿十年二月廿五日、入內、十六同日女御宣下、寶永四年五月三日准三宮、同月十八日、內親王宣下、同五年二月廿六日、中宮宣下、〇節略

〔執次詰所記〕欣子內親王、〇後桃園皇女、光格后、

安永八年正月廿四日降誕、號女一宮、〇中略寬政三年六月卅日、依先帝遺詔可被立皇后被仰出、同十二月四日、御齒黑始、同五年十二月廿四日、准后宣下、陣同六年三月一日、入內、十六歲同六日、御退去于仙洞、同七日、立后奉稱中宮、被行節會宮司除目等、本宮仙洞被假用自今稱中宮、

〔愚管抄四〕鳥羽院位のはじめに后だちあるべきに、知足院殿〇藤原忠實のむすめをゑらせよと仰ありけるを、かたく宏してゑらせられざりけり、人これを心得ずおもひけり、これを推するに、

鳥羽院はをさなくおはしましける時、ひわひてなをせさせ給ふと人もしりけるを恐れ給ひけるにやなをぞ人は申ぬる、又公實のむすめ璋子を御子にしてもたせ給たりけるをば、法性寺殿〇藤原忠通をむことらんとおぼしめして、すでにそのさたありける程に、日なみなをえらばるゝに及びたりけるが、去かるべくてさはりおほくいできいでしていまだとげられざりける程に、あたに御はらだちて、待賢門院をば、法性寺殿の儀をあらためて、やがて入内ありけるとぞ、鳥羽院はあやにくにおとなしくならせおはしましては、殊にめでたき御心ばへの君におひなりてこそはおはしましけれ、さて白河院はかの公實のむすめをとりて、御子にしてもたせ給へりけるを、鳥羽院に入内立后してぞおはします、待賢門院と申はこれなり、

〔玉海〕承安元年十二月十四日甲寅、此日院姫君入内也、〇中略女御〔其衣裏濃蘇芳云、女房衣色云云、〕入道相國〇平清盛女、法皇〇後白河御養子、永久例云々、但彼者自誕生之昔撫育之禮隨又主上御孫也、仍於儀無妨、今度已可爲姉妹歟、尤以有忌如何、二年二月十日己酉、此日有冊命皇后事〔女御德子爲中宮〕

〔中右記〕寛治五年十月十九日、殿下〇藤原忠實初令參陽明門院〇後朱雀后給、是依女御入内之事也、廿五日庚辰、有三品篤子内親王〇鳥羽后入内之事、〔是後三條院第四女、母贈太后藤茂子、太上皇先有御使、右近少將藤顯實朝臣〇中略及亥剋寄御車、糸毛、女房車十輛、檳榔毛女房十八人、童女二人、合廿人、前駈殿上人皆參、〇中略其後公卿殿上人有饗饌之事、〇中略

今夜女房御使、掌侍源盛子〔源顯綱朝臣姫也、〕有祿、女裝束、御衾役殿下北政所、凡入内之儀、一事以上關白殿令御沙汰也、〇中略

十一月二日丙戌、女御入内之後、有三夜餅事、件餅民部卿所被調進也、

〔帝王編年記十九堀河〕中宮篤子内親王〔後三條院第四皇女、寛治七年三月廿二日立后、〕

前后養子爲后

〔五代帝王物語〕同年〔弘長元年〕六月十四日、左大臣〔公相公、今出川の大相國〕の女〔今出川院〕女御にまゐり給ふ、御歳九なり、大宮院〇後嵯峨后姞子御子にせさせ給ふ、御母は德大寺の大相國〔實基公〕の女なり、八月廿日立后、

〔續世繼一初春〕む月〇長暦元年の七日、關白左のおとゞ〇藤原頼通とて、宇治のおはきおとゞおはしまし、女御たてまつらせ給、みかど〇後朱雀の御おにゝおはしまし、〇後一條三のみこにてこのみかど〇後朱雀ふたりみだうのむすめの御はらにおはせしを、關白殿御子にえたてまつりきつかせ給へるなり、かの一條院の皇后宮〇定子のうみたてまつり給へりし一の御子におはしませば、春宮にもたち給べかりしを、御うしろみおはしまさずとて、二のみこにてせむだいはしませば、春宮にもたち給べかりしを、御うしろみおはしまさずとて、二のみこにてせむだいおはしまし、事ぐもにおもはしなげかせ給て、御さまかへさせ給へりしのちに式部卿の御子をうみ奉らせたまへるなり、〇中略その式部卿〇藤原伊周の、つくしにひにあたらせ給へり、かくてやよひのついたちに、きさきにたゝせ給ぬ、

〔愚管抄四〕この敦康親王の母は、道隆關白の女にて、たゞの親王にて、位は思ひもよらず、されど御前は又具平親王の御女にてありければ、宇治殿〇藤原頼通の北政所をば、高倉の北政所と申にや、あさましく命ながくて孫までおはしけり、この北政所の弟にて、この敦康の御前にておはしければ、其御女にて姫子の中宮はおはしますによりて、宇治殿の子にして、姓も藤原氏の中宮にて、入内立后も有けるなり、

〔扶桑略記二十九後三條〕延久三年三月九日甲午、左大臣藤原師實朝臣、取左兵衛督源顯房卿息女〇賢子爲養子、令入皇太子〇白河宮、

〔扶桑略記三十白河〕延久六年〇承保元年六月廿日丙子、女御藤原賢子册爲中宮、右大臣藤原朝臣師實之猶

大臣養子爲后

子、實是大納言源顯房女也、

〔愚管抄〕四、（吉殿○藤原東）は、年八十に成て、宇治にこもりゐて、御子の京極の大殿の左大臣○藤原師實とておはしけるを、内裏へ日々參せよ、さしたる事なくとも日をかゝず參りて、奉公をつとむべきぞと敎へ申されければ、其まゝ參りて殿上に候ていで〳〵せられけるに、主上○後三條は常に藏人を召て、殿上に誰々か候々と日に二三度もとはせおはしましけるに、度毎に左大臣候と申て日比月比になりける程に、或日の夕に御尋有けるに、又左大臣と申けるを、是へといへと仰の有ければ、藏人參りて御前の召し候と申ければ、めづらしき事かな、何事を仰あらんずるにかと思して、心づくろひせられて、御裝束引つくろひて參られたりければ、近くそれへと仰られて、何となき世の御物語ぞもありて、夜もやう〳〵更行ける終つかたに、みむすめやもたれたると仰出されたりければ、ことやうに候女○賢子のわらは候と申されけり、我むすめにはなかりけるを、師房の大臣の子の、顯房のむすめを乳のうちより子にしてもたせ給へりけるなり、略○中これをきこしめしてさやうのむすめもたらば、とく〳〵東宮へ參らせらるべきなりと仰られけるを、うけ給はりかしこまりて御前を立て、世間もおぼつかなかりつるに、今はひしと世は落居ぬると、いそぎ宇治殿にきかせ參らせんとおぼして、内裏より夜更てやがて宇治へ參られければ、略○中いかにも事ありとおぼして、いかに〳〵何事ぞと仰られければ、日比仰のごとく、參内日をかゝずつかうまつり候つるほどに、略○中むすめわらば東宮へ參らせよといふ勅定を、眼前にうけ給はり候つれば、急ぎ參りて申候也と申されければ、是を聞せ給ひて、宇治殿はさうなくはら〳〵と涙を落して、世の中のおぼつかなかりつるに、わはれ猶此君はめでたき君かな、とく〳〵出立て參らせられよとて、ひし〳〵とさたあり、東宮○申白河院なり、東宮の女御にまゐらせられにけり、位につかせ給ひては中宮と申、立后ありて今に賢子の中宮とて堀河院の御母是なり、

〔百練抄〕七近衛、久安六年正月十日、左大臣○藤原賴長女○多子入内、實權中納言公能女、

〔續世繼〕五師大刀、ふけの入道○藤原忠實おとゞの御子は、法性寺のおほきおとゞ○忠通つぎには宇治の左のおとゞ賴長ときこえ給へりし、略○中この左のおとゞは、このゑのみかどの御時、女御たてまつり給へりき、おほいのみかどの右大臣公能のおとゞの三君を御子にし給ひて、たてまつり給て、皇后宮多子とぞ申ゑゝ、その左のおとゞの北方○幸子は、大炊御門のおとゞの御いもうとなれば、そのゆかりに御子にゑ給へるなるべし、

〔續世繼〕五つかひあはせ近衛のみかどの御時の中宮呈子と申しも、太政大臣伊通のおとゞの御むすめを、この法性寺殿○藤原忠通の御子とてぞ奉り給へる、此比九條院と申なるべし、まことの御子ならねども、院號も關白の御子とてはべるとかや、

〔女院小傳〕九條院、藤原呈子近衛后、太政大臣伊通公女、法性寺關白○藤原忠通爲子、母權中納言顯隆女、久安六、二、十六、叙從三位、十九四月廿八爲女御、六月廿二爲中宮、

〔續世繼〕三なゝめの袖二條のみかどゝ申すは、この院○後白河のみこにおはしましき、略○中その御はゝ、左大臣有仁のおとゞの御むすめ、○后懿子、後白河まことの御おやはつねざねの大納言におはす、

〔皇胤紹運錄〕六條院

母中宮○二條后○育子忠通公女、實大藏大輔伊岐善盛女、

〔增鏡〕一おぐろの下いまの御門○土御門の御いむすめ、さいしやうの君○後鳥羽后在子とてつかうまつられけるほどに、この御門むまれさせ給ひて、ずゑには承明門院と聞えき、このおとゞの北のかたのちには内大臣通親の御子になり給ひ、はらにておはしければ、もとよりのちのおやなるに、御さいはひさへひきいで給ひしかば、まことの御むすめにかはらず、この御門も、やがてかの殿にぞやしなひたてまつらせ給ひける、

〔神皇正統記 後醍醐〕諱は尊治。〇中略御母は談天門院藤原忠子、内大臣師繼の女、實は入道參議忠繼の女なり、

〔歷代皇紀〕稱光天皇、諱躬仁、改實仁、後小松院第一皇子、母光範門院、儀同三司資敎女、實贈左大臣資國女、

〔宣胤卿記別記〕文明十三年七月廿六日己亥、今日當今〇後土御門爲二猶子一、其後故保家朝臣猶子、後又故大炊御門入道前内大臣信宗公十三回云々、段々被レ聞二叡感一、廿日太政大臣宣下、依二當今母儀一也、〇下略

〔御湯殿の上の日記〕天正十四年十二月十六日、このへぐの〇藤原ひめぎみ〇前久前吉臣秀やうしに參られて、女御〇後陽成に御參り、御たる十かう十か參る、御くしあげ御さたありて、つねの御所にて三ごん參る、ゑよこんはうそう、二こんかへに御ひら、三ごんふな、御はいせん、すけ殿ながはし、いよ殿、女御はいせん、女中御とをりあり、

〔日本書紀 安閑〕元年三月戊子、有司爲二天皇一納二采儥一、計天皇女、春日山田皇女爲二皇后一、

〔日本書紀 持統〕高天原廣野姫天皇、少名鷕野讃良皇女、〇略天豐財重日足姫天皇三年、適二天淳中原瀛眞人天皇一、〇天爲レ妃、〇中天淳中原瀛眞人天皇元年六月、從二天淳中瀛眞人天皇一避二難東國一、〇略二年立爲二皇后一、

〔續日本紀 淳仁〕二天平寶字四年六月乙丑、天平應眞仁正皇太后〇聖武光明子崩、姓藤原氏、近江朝大織冠内大臣鎌足之孫、平城朝贈正一位太政大臣不比等之女也、母曰二贈正一位縣犬養橘宿禰三千代一、皇太后幼而聰慧、早播二聲譽一、勝寶感神聖武皇帝儲貳之日、納以爲レ妃、時年十六、攝引乘御、皆盡二其歡一、雅閑二禮訓一、敦崇二佛道一、神龜元年、聖武皇帝卽レ位、授二正一位一、〇正一位、從三位、授、爲二太夫人一、生二高野天皇及皇太子一、其皇太子者、誕而三月立爲二皇太子一、神龜五年夭而薨焉、時年二、天平元年尊二太夫人一爲二皇太夫人一、〇續日本紀考證 淳仁 授二正一位一爲二太夫人一、按神龜元年、授二正一位一爲二太夫人一者、聖武天皇母宮子姫、而非二光明皇后一也、光明皇后、神龜四年十一月紀、天平元年八月紀、並書二夫人一、而爲二夫人一史不レ載、年月無レ所レ考、蓋宮子姫、光明皇后、俱爲二文武夫人一、一爲二聖武夫人一、事蹟相涉、致二此混淆一耳、尊二太夫人一爲二皇后一、天平元年八月紀云、詔立二正三位藤原夫人一爲二皇后一、此亦混二宮子姫事一、云レ尊二太夫人一、誤、

〔續日本紀 桓武〕十延曆九年閏三月丙子、是日皇后崩、〇略中甲午、〇中略皇后姓藤原氏、諱乙牟漏、贈内大臣從一位良繼之女也、母尚侍贈從一位阿部朝臣古美奈、后性柔婉、美二姿儀一、閑二於女則一、有二母儀之德一焉、今上之在二儲宮一也、納以爲レ妃、生二皇太子一、〇城平賀美能親王、〇峻高志内親王、及於二卽位一、立爲二皇后一、

〔村上天皇宸記〕應和四年四月廿九日、辰刻使二藏人文利一問二中宮一、兼令二問二産養否之由一、還來申、伊尹朝臣令申云、自今曉寅刻許、氣息雖二纔通一、不可二敢存一坐、更不レ可レ行二他事一、〇略中又遣二文利一問二中宮一、巳刻崩、文利還來申云、中宮已崩、加持僧等皆退下、皇后是前右大臣師輔朝臣第一女、諱安子、母故出羽守藤原經邦之女盛子也、予〇村上在二藩之時一、以二天慶三年四月一配合、爲二儲貳之後一、同八年正月、以二太弟妃一授二從五位上一、及レ于登二帝位一爲二女御一、授二從四位下一、厥後頻進級、又授二從三位一、天曆四年五月生二男子一、以二同年七月一立爲二皇太子一、太子初謁見之日、又授二從二位一、至二天德二年一策命爲二皇后一、以二應和四年四月廿四日一、於二主殿寮廳一誕生女兒、今日巳刻終レ于同寮、時年三十八、在二后位七載一、

〔日本紀略 一條〕寬弘元年十一月廿七日丁丑、以二正四位下藤原妍子一爲二尚侍一、左大臣第二御息女、〇略中七年二月廿日庚子、尚侍藤原朝臣妍子初入二東宮一、〇三條

〔日本紀略 三條〕寬弘八年八月廿三日甲子、召二右大辨道方下一女御二人宣旨一、一人尚侍從二位藤原妍子、〇略中長和元年二月十四日壬子、宣命、尊二皇太后一〇圓融后遵子爲二太皇太后一、中宮〇一條后彰子爲二皇太后一、女御正二位藤原朝臣妍子爲二中宮一、

〔十三代要略 後冷泉〕後宮

皇太后章子内親王（後一條院長女、母中宮威子、）

長曆年中入二太子一（○冷泉）（後宮、）永承元年七月十日爲二中宮一、治曆四年四月十二日皇太后、（略）○節

〔扶桑略記二十九（後三條）〕延久三年三月九日甲午、左大臣藤原師實朝臣、取二左兵衛督源顯房卿息女一（賢子、）爲二養子一、令レ入二皇太子一（○白河）宮、

〔扶桑略記三十（白河）〕延久六年六月廿日丙子、女御藤原賢子卅爲二中宮一、

〔玉蘂〕承元三年三月廿三日、此日故攝政前太政大臣（○藤原長女、）有二入宮事一、（名立子、生年十八、與レ余同腹、母權中納言能保卿女、）

陽明門院（○後朱雀后禎子）四月廿三日入レ宮、賢子中宮（○白河后）三月九日入レ宮、日月叶二萬壽例一、支干同二延久跡一、可レ

吉祥耳、（○略）廿六日、早旦著二直衣一參二東宮一（○順德）御方一、卽參二御息所御方一、卽退出歸二一條亭一、今日以下每

夜御息所昇給也、但無二女房來召一、幷覆衾之儀、今日以後有二御朝餉一云々、

〔百練抄十二（順德）〕建曆元年正月廿二日、有二立后事一、（以二藤原立子一爲二中宮一、）

〔女院小傳〕後京極院（禧子）入道大相國實兼三女、（□□）入二太子一（○後醍醐）宮、文保二、四、廿從三位、七月廿八爲二

女御一、元應元、八、七爲二中宮一、

〔扶桑略記二十四（醍醐）〕延喜廿三年四月廿六日癸酉、女御藤原穩子立二皇后一、

〔日本紀略四（村上）〕天德二年十月廿七日甲辰、策立女御從三位藤原朝臣安子一爲二皇后一、卽日任二宮司一、

○按ズルニ、穩子ハ、日本紀略、帝王編年記ニ、皇后藤安子云々、號二中宮一ト記ス、是レ當時中宮皇后相通ジテ

稱セシナリ、

〔榮花物語二（花山）〕其冬（○天元年）關白（○藤原賴忠）殿の姬君（○遵子）うちに參らせ給ふ、世の一の所におは

しまさせば、いみじうめでたきうちに、殿の御ありさまなども奥深く心にくゝおはします、（略）○中只

今の御有樣に上（○圖）もきたがはせ給へば、おろかならず思ひ聞えさせ給なるべし、（略）○中かゝる

程にことゞは天元五年になりぬ、三月十一日中宮たち給はんとて、おほきおとゞ急ぎさわがせ

給、これにつけても右のおとゞ、あさましうのみ萬きこしめさるゝ程に、さきたゝせ給ひぬ、い

へばおろかにめでたし、大きおとゞのきこえ給ふもことわりなり、帝の御心おきてを、世人も目もあ

やに淺ましき事に申思へり、一のみこおはする女御（○詮子）をおきながら、かくみこもおはせぬ女

御（○遵子）の后にゐ給ひぬるを安からぬ事に世人なやみ申て、すばらの后とぞつけ奉りたりける、

〔榮花物語三（樣々の悅）〕今年をば正曆元年といふ、正月五日內（○一條）の御元服せさせ給ふ、（略）○中二月に

は內大臣殿（○藤原道隆）の大姬君、（○定子）內へ參らせ給有さまいみじうのゝしらせ給へり、（略）○中やがて

其夜のうちに女御にならせ給ひぬ、（略）○中かゝる程に大殿（○藤原兼家）の御心ちなやましうおぼした

れば、（略）○中五月八日出家せさせ給、この日攝政の宣旨內大臣殿かうぶらせ給、（略）○中攝政殿御けし

き給はりて、まづ此女御、后にすゑ奉らんの騷ぎをせさせ給ふ、（略）○中六月一日后にたゝせ給ひぬ、

〔後二條關白記〕寬治七年正月廿三日辛丑、未刻民部卿來臨相逢、參二高陽院一之由相語云、中納言□□

著冠直衣、殿下（○藤原師實）御使參二女御一、（○堀河后內親王篤）告申立后事、廿五日癸卯、未刻參二高陽院一、殿下參六

條院給候御共、自二院御方一參二新院一、給、殿下御二坐殿上一、卽參二院御前一、頃之殿出、自二御前一、御二坐殿上一、自懷中執

出一紙一、下二給別當（權大納言雅實）一、給了殿下參內、其後被レ始二殿上飮食一、二獻（頭辨季仲）三獻（右大辨通俊）黃昏程事了、引二上

達部等參內、（左大臣不參、右大臣留二於新院一、）頭辨勅使敷座、殿下圓座也、（勅使殿下東、）西、源大納言取二女裝束一、給二勅使一、殿歸給於

座、頭辨於庭再拜、了簀子敷燈臺立、召二陰陽師道時朝臣一、令レ擇二立后日時一、付二行家一奉レ之、召二行家一令レ書二定文一、

如常、事了被レ召、日時（件勘文者、今夜出御日時也、）廿七日乙巳、女御御二出高陽院一、其後今日有二勘文一云云、勅使延引

之由有聞云云、二月十三日己未、戌刻於二女御有一勅使事一、如恒、鹿嶋使文覽、予開見、卽下云云、廿一

日戊辰、參二高陽院一、南庇二階之立樣所一、被二沙汰一、二階立二西御屏風一、面東面也、其前立二二階一、如常、有二立后宣

旨一、有二一兩日一、今日依二主上御衰日一、已以延引、左大臣、民部卿、左大辨等被二申定一、當日早旦可レ被レ行之者也、

卽召頭辨季仲仰其旨了、申刻上達部分散、廿二日己巳、殿下、余、著冠參內、寢殿御裝束了、透垣、邊曳幔幕云云、未曳以前罷出、延久元年有立后事、用件日記云云、有別記、

〔玉海〕文治五年四月三日癸亥、○中略今日戌刻、自天王寺定能卿傳院宣、余女子○任子入內事聞食了、假雖他人令申、如是令申上不可及異議、況無他人申事、早可致沙汰、又有宸筆勅報、其趣惟同、歡喜之思、千廻萬廻也、○中略　六年正月十一日丙寅、此日攝政太政大臣○實長女、從三位任子有入內事、生年十八、余四十二、蓋依長保永久例行之、○中略　十六日辛未、取御挿鞋納余辛櫃、又取御衾納御辛櫃、此日御書使、主上渡御、女御宣旨、女官祿等也、先女房等著裝束紅梅白參之、○中略　四月十四日、此日立后兼宣旨也、○後鳥羽后勅使成經朝臣、余自取祿、○中略　廿六日己酉、此日冊命立后也、以女御從三位任子爲中宮職、子細在別記、　廿七日庚戌、立后第二日也、盃酌如常、　廿八日辛亥、立后第三日也、又御書使、實明朝臣啓陣還祿氏院參賀、　廿九日壬子、今日雖可撤御裝束、依日次不宜、明日可撤之、

〔增鏡三藤衣〕寬喜元年になりぬ、此ほどは光明峰寺殿道家又關白にておはす、この御むすめ、○後堀河后藻子　女御にまゐり給ふ、世の中めでたくはなやかなり、○中略　やがて后立あり、○寬喜二年二月十六日藤つぼわたりいとめかしく住なし給へり、○中略　おなじ三年七月、關白をば御太郎敎實のおとゝにゆづりて、わが御身は大殿とて、后宮の御おやなれば、思なしもやむごとなきに、御子どもさへいと聞え給て、みどうさかへ給さまなどめでたしなきほどなり、

〔平戶記〕仁治三年八月九日己未、早旦頭辨來問今日事、今日女御○後嵯峨后姞子、前右大臣實氏公女、有立后事、○後嵯峨后姞子内辨大納言具實卿、宣命使左衞門督顯親卿云々、節會了於御前被行宮司除目、內辨候執筆云々、藏人方事、左衞門權佐經俊奉行、本宮事右少辨時繼奉行、晚頭頭辨來訪宮司間之故實、不經程歸了、

宮司除目

中宮大夫藤公相兼　權大夫藤實藤兼

亮平時高兼　權亮源顯房兼

大進平時繼兼　權大進藤資定兼

權少進藤　大屬安倍資高

入夜節會始云々、其後諸卿率參本宮、夜未曙及事之終頭云々、

〔五代帝王物語〕主上○後深草は建長五年正月三日御元服あり、女御は大宮院○後嵯峨后姞子の御妹○公子參らせ給ふ、もとは大宮院に候はせ給て、御熊野詣の時も御參ありしを、圓明寺殿○實經藤原を聟にとるべしとて日限まで定りたりけるを、院○後嵯峨の御はからひにて俄に參らせ給へば、引かへ目出度事にてぞ有ける、康元元年十一月に女御に參りて、同二年二月に立后あり、御年はるかの御おねにてぞおはします、

〔五代帝王物語〕正嘉二年八月七日、院の第六の皇子、恒仁親王、○龜山春宮にたゝせ給ふ、御年十歲、是も大宮院の御腹なり、正元元年八月廿六日御元服、同十一月廿六日、春宮位につかせ給ふ、御年十一、十二月廿八日卽位の儀あり、○中略　新帝の女御には、右大臣實雄公山科左府の女、○京極院文應元年十一月廿一日御禊の女御代に供奉して、同十二月廿二日入內、御年十六なり、同二年二月立后ありて候給ふ、

〔仁部記〕弘長元年八月廿日庚戌、今日女御○藤原嬉子有立后○龜山中宮事、節會可參仕之由、先日爲藏人次官奉行、被仰下之間、雖申領狀、此間痢病所勞更發之間不出仕、傳聞本宮事藏人佐賴親奉行云々、宮司除目

大夫源雅忠　權大夫藤隆顯

大進藤賴親　權大進同高朝

權少進藤定世　大屬安倍資國

前中宮○藤原信子今夜卽介轉皇后宮給云云、宮司□□次第被轉上之由、被宣下之、不被載除目之由、奉

亮藤隆保　權亮藤公孝

同俊定　少進平資兼

少屬中原職成　少屬中原國民

行職事勾勘、後日所㆓相談㆒也、於㆓先例者㆒不㆓分明㆒云々、

〔增鏡十一今日の日陸〕西園寺大納言〇藤原實兼子、中略、六月二日〇正應元年入內あり、八日御とぢめあらはしとて、女御の君は〇中略かくて八月廿日后に立給、

〔歷代皇紀後二條〕中宮藤忻子　前太政大臣公孝女、母內大臣公親女、乾元元、八、廿八、爲㆓女御㆒、嘉元元、九、廿四、冊立、

初爲准后後爲后

〔續三宮傳〕東福門院〔後水尾皇后和子〕　德川將軍太政大臣秀忠公御女、〇略中　元和六年六月十八日入內、十六歲同日女御宣下、寬永元年十一月十八日皇后宣下、

〔扶桑略記二十九後冷泉〕永承六年六月廿四日、右大臣藤原朝臣敎通三女女御歎子准㆓三宮㆒、賜㆓年官年爵封戶千戶㆒、一云、七月十日准㆓三宮㆒云々、〇中　治曆四年四月十六日丁巳、立㆓女御藤原歎子爲㆓皇后宮㆒、

〔歷代皇紀後冷泉〕皇后藤歎子　敎通三女、准㆓三宮㆒、後皇后希代例也、

〔女院記〕高陽院〔泰子〕　知足院殿〇藤原忠實御女、母從三位源師子、〇略中　長承二年六月廿九日、太上天皇鳥羽マヰル、年卅九、女御ト申、准㆓三后㆒、欣子內親王〇光格后　寅剋著㆓束帶㆒早參、職事頭中將已下參集、

〔均光卿記〕寬政六年三月七日甲午、可㆓有立后日也㆒、年十四

立后次第〇略中

宣命大內記長親作㆓進之㆒

現神止大八洲國所知須倭根子天皇我詔旨止萬宣布大命、遠親王諸王諸臣百官人等天下公民衆聞食止宣布、人倫正計禮天下和皷、婚姻時乎以波、須禮怨女曠夫無止奈常所聞行奈利、故爾好逑乎得氏、王化哀成萬久願欲邊利、愛爾准㆓三宮㆒欣子內親王者、誠莊婉婉乃德備利奴、依氏皇后止定賜布、此儀乎悟氏隨法爾供奉止勅布天皇我御命乎衆聞食止宣、

即位前立后

〔日本紀略五冷泉〕康保四年九月四日己丑、以㆓三品昌子內親王㆒爲㆓皇后㆒、故朱雀院皇女、〇略中　十月十一日丙寅、天皇於㆓紫宸殿㆒卽位、

譲位後立后

〔長秋記〕長承三年三月二日壬子、以㆓院〇鳥羽女御〇藤原勳子叙從四位下㆒、有㆓准三宮宣旨㆒、來八日可㆓立后㆒兼宣旨、十九日可㆓有宣命事云々、〇中略　大內記令明朝臣、勅旨可㆓用何例哉㆒、太上皇以㆓夫人㆒立㆓后例未聞者、隨仰可㆓令左右㆒、上卿以㆓內記令申㆒關白、〇藤原忠通云、且前大相國仕㆓三代朝㆒、奉公尤高、仍以㆓娘子准㆓后之由例載何事候哉㆒、大相國可㆓然之由答給云々、十九日己巳、院立從四位下勳子爲㆓皇后宮㆒、後日源大納言光臨次談云、未時參內、〇中略　大納言入門間、藏人資信待向、傳勅云、皇后宮傳上、以㆓今后可㆓爲㆒皇后宮㆒也、而本皇后宮付㆓可㆒傳上㆒、可㆓爲㆒太皇太后宮㆒歟、件事可㆓量申㆒者、超令㆓昇㆒太皇太后宮事、外記官共申㆓無例之由㆒、但於㆓明法者㆒、以㆓帝祖母可㆒爲㆓太皇太后宮㆒由見㆓令文㆒者、皇后宮准㆓上皇母儀㆒立后也、爲㆓當今祖母㆒、有㆓何憚㆒哉申云々、大納言被㆓申云、前例之條無㆓指證文之時儀也㆒、如㆓法家申者㆒、令文既顯然也、不㆓可㆒依㆓例之有無㆒、就中立后之後准㆓母儀㆒、超㆓中宮爲㆓皇后宮㆒、且爲㆓太皇太后宮㆒有㆓何難哉㆒、內大臣民部卿被申云、此旨云々、此後良久資信仰左大臣云、以㆓皇后宮〇鳥羽准母令子㆒爲㆓太皇太后宮㆒、以㆓從四位下泰子㆒爲㆓皇后宮㆒之宣命可㆒令㆓奏者㆒、件人本名勳子也、而依㆓衆難㆒被㆓改泰字㆒叶㆓愚意㆒、

〔一代要記五崇德〕後宮

皇后宮藤原朝臣得子〔鳥羽院后美福門院、故權中納言太宰權帥長實卿女、太上天皇〕

〔續世繼三男山院〇鳥羽〕には、いづかたにもうときやうにてのみおはしまして、やゝあさまつりごとも、おこたらせ給ふさまにて、夜がれさせ給ふ事なかるべし、いとやむごとなきゝはにはあらねども、中納言〇藤原長實にて、御おやはおはしける、に、母きたのかたは、源氏のほり川のおとゞのむすめにおはしけるうへに、たぐひなくかしづき